兵庫県文化財調査報告　第 507 冊

姫路市

豆腐町遺跡Ⅲ・駅前町遺跡

－　姫路駅周辺地区総合整備事業（キャスティ 21）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書　－

平成 31（2019）年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

兵庫県文化財調査報告　第507冊

姫路市

豆腐町遺跡Ⅲ・駅前町遺跡

－姫路駅周辺地区総合整備事業(キャスティ21)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成31(2019)年 3 月

兵庫県教育委員会

豆腐町遺跡・駅前町遺跡　遠景（南上空から）

播磨国総社と姫路城（南上空から）

豆腐町遺跡　全景（上空から）

豆腐町遺跡　SE03 井戸枠（西から）

豆腐町遺跡　SE08 井戸枠（南から）

豆腐町遺跡　SE08 刀子･土師器出土状況（南から）

豆腐町遺跡　SE07 井戸枠（北から）

豆腐町遺跡　SE14 土器出土状況（西から）

豆腐町遺跡　SE05 出土土器集合写真

豆腐町遺跡　SE09 出土土器集合写真

豆腐町遺跡　墨書土器集合写真

豆腐町遺跡　漆付着土器集合写真

豆腐町遺跡　短頸壺（221）内面漆付着状況

豆腐町遺跡　短頸壺（221）

駅前町遺跡　全景（上空から）

例　言

1　本書は、姫路市豆腐町･南駅前町に所在する豆腐町遺跡･駅前町遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は、姫路駅周辺地区総合整備事業（キャスティ21）に伴うもので、姫路市の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。

3　調査の推移は以下のとおりである。

（発掘作業）

確認調査　　平成23年5月9日

　　実施機関：姫路市教育委員会

確認調査　　平成24年6月6日～8月10日

　　実施機関：姫路市教育委員会

本発掘調査　平成25年11月5日～平成26年2月28日

　　実施機関：（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

　　工事請負：栄伸工業

本発掘調査　平成26年6月2日～平成26年9月1日

　　実施機関：（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

　　工事請負：第一興産

（出土品整理作業）

　　平成26年4月1日～平成27年3月31日

　　実施機関：（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

　　平成27年5月1日～平成28年3月31日

　　実施機関：（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

　　平成28年5月1日～平成29年3月31日

　　実施機関：（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

　　平成29年5月1日～平成30年3月31日

　　実施機関：（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

　　平成30年5月1日～平成31年3月31日

　　実施機関：（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

4　空中写真測量は、株式会社大設に委託し、実施した。

5　調査成果の測量は、3級基準点No.21-16、街区多角点40A59･40A66･40A67を使用し、3級基準点を設置した。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第Ⅴ系に属する。

6　本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。

7　出土品の自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。

8　本書の編集は、（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　大本朋弥が整理技術嘱託員の補助のもと行った。

9　本書の執筆について以下に担当を示す。なお、特に明記がない箇所については大本が担当した。

第３章　第４節　１ 土器　―菱田淳子（（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部）
第４章　駅前町遺跡の調査　―渡瀬健太（兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財課）
第５章　豆腐町遺跡の自然科学分析　―株式会社パレオ･ラボ
第６章　第１節　―菱田淳子（（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部）

10　遺物写真撮影は、地域文化財株式会社に委託して行った。なお、一部の写真については、（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部整理保存課　深江英憲が撮影した。

11　本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

12　発掘調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々からの御指導・ご教示をいただいた。記して感謝する次第です。

大谷輝彦･岡田章一･加藤雄太･鈴木敬二･関　梓･中川猛･松下正和･森　恒裕(五十音順、敬称略)

凡　例

1　遺物には通し番号を付けている。ただし、木製品･石製品･金属製品には、その頭にそれぞれＷ・Ｓ・Ｍを付けて土器と区別している。

2　土器の実測図は、種別ごとに以下のように断面の表現を区別している。
白抜き：弥生土器・土師器・竈・製塩土器・瓦・土製品/黒塗り：須恵器/網掛け（薄）：瓦質土器・陶器/網掛け（濃）：磁器

3　遺構には通し番号を付し、その頭に遺構の種類を表記した。遺構の種類は次の略称を用いた。
ＳＥ：井戸/ＳＫ：土坑/ＳＰ：柱穴/ＳＤ：溝/ＳＲ：流路/ＳＸ：特殊遺構など

4　土層等の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版　標準土色帖』1992版を使用した。

本文目次

例言

第１章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境…… 1
第２節　歴史的環境…… 2
第３節　周辺の既往調査…… 5

第２章　調査の経過
第１節　調査に至る経緯…… 8
第２節　試掘・確認調査…… 8
第３節　本発掘調査…… 10
第４節　整理事業…… 12

第３章　豆腐町遺跡の調査
第１節　調査区の概要…… 14
第２節　周辺の微地形と基本層序…… 14
第３節　遺構…… 15
第４節　遺物…… 30

第４章　駅前町遺跡の調査
第１節　調査区の概要…… 47
第２節　基本層序…… 47
第３節　遺構…… 47
第４節　遺物…… 48

第５章　自然科学分析
第１節　豆腐町遺跡出土木製品の樹種同定…… 53
第２節　豆腐町遺跡出土動物遺体の同定…… 61
第３節　豆腐町遺跡出土炭化種実の同定…… 64
第４節　豆腐町遺跡出土昆虫遺体の同定…… 66

第６章　まとめ
第１節　豆腐町遺跡…… 69
第２節　駅前町遺跡…… 73
第３節　総括…… 73

巻　頭　図　版　目　次

巻頭図版1　豆腐町遺跡･駅前町遺跡　遠景(南上空から)

播磨国総社と姫路城(南上空から)

巻頭図版2　豆腐町遺跡　全景(上空から)

豆腐町遺跡　SE03井戸枠(西から)

巻頭図版3　豆腐町遺跡　SE08井戸枠(南から)

豆腐町遺跡　SE08刀子･土師器出土状況（南から）

巻頭図版4　豆腐町遺跡　SE07井戸枠(北から)

豆腐町遺跡　SE14土器出土状況(西から)

巻頭図版5　豆腐町遺跡　SE05出土土器集合写真

豆腐町遺跡　SE09出土土器集合写真

巻頭図版6　豆腐町遺跡　墨書土器集合写真

豆腐町遺跡　漆付着土器集合写真

巻頭図版7　豆腐町遺跡　短頸壺(221）内面漆付着状況

豆腐町遺跡　短頸壺(221)

巻頭図版8　駅前町遺跡　全景(上空から)

挿　図　目　次

第１図　豆腐町遺跡・駅前町遺跡の位置 …… 1

第２図　周辺の遺跡（１/30,000） …… 3

第３図　既往の調査区（１/4,000）…… 6

第４図　確認調査位置図（１/1,500）…… 9

第５図　豆腐町遺跡１区遺構検出 …… 10

第６図　豆腐町遺跡１区SE03の調査 …… 11

第７図　現地指導 …… 11

第８図　現地説明会 …… 11

第９図　豆腐町遺跡３区機械掘削 …… 12

第10図　豆腐町遺跡３区SE14の調査 …… 12

第11図　下層の堆積状況 …… 14

第12図　SX06出土遺物…… 27

第13図　出土木材の光学顕微鏡写真（１）…… 58

第14図　出土木材の光学顕微鏡写真（２）…… 59

第15図　出土木材の光学顕微鏡写真（３）…… 60

第16図　出土動物遺体（１）…… 62

第17図　出土動物遺体（２） …… 63

第18図　出土炭化種実 …… 65

第19図　出土昆虫遺体の顕微鏡写真 …… 68

第20図　供膳具の口径と器高 …… 69

第21図　古代の遺構 …… 72

表　目　次

第１表　兵庫県教育委員会による本発掘調査一覧 … 7

第２表　試掘・確認調査一覧 …… 8

第３表　時期別の樹種構成 …… 53

第４表　器種別の樹種同定結果（奈良時代）…… 55

第５表　器種別の樹種同定結果（江戸時代）…… 55

第６表　樹種同定結果一覧 …… 57

第７表　豆腐町遺跡から出土した動物遺体…… 62

第８表　豆腐町遺跡から出土した炭化種実 …… 64

第９表　古代の井戸 …… 70

図　版　目　次

豆腐町遺跡

図版１　調査区遺構平面図（１/750）
図版２　調査区西壁土層断面図
図版３　調査区北壁土層断面図
図版４　遺構群Ａ平面図（１/200）
図版５　遺構群Ｂ平面図（１/200）
図版６　遺構群Ｃ平面図（１/200）
図版７　遺構群Ｄ平面図（１/200）
図版８　SE01　平面図・断面図
図版９　SE03・SK01　平面図・断面図・立面図
図版10　SE05　平面図・断面図
図版11　SE07　平面図・立面図
図版12　SE08　平面図・立面図
図版13　SE09　平面図・立面図
　　SE13　平面図・立面図
図版14　SE14　平面図・立面図
図版15　SK12－１　平面図・断面図
図版16　SE04　平面図・立面図
図版17　SE06　平面図・立面図
図版18　SE10　平面図・断面図
図版19　SE11　平面図・立面図
図版20　SK11・SK12－２・SK19　平面図・断面図
図版21　SK03・SK07・SK08・SK22・SK30・SK37・SX60　断面図
図版22　出土土器（SE01）
図版23　出土土器（SE01）
図版24　出土土器（SE03）
図版25　出土土器（SE05）
図版26　出土土器（SE05）
図版27　出土土器（SE07・SE08）
図版28　出土土器・石製品（SE08）
図版29　出土土器（SE09）
図版30　出土土器（SE13・SE14）
図版31　出土土器（SE14）
図版32　出土土器（SK01・SK12－１・SK20・SP05・SP11・SP12）
図版33　出土土器（粘土採掘坑埋土）
図版34　出土土器（粘土採掘坑埋土）
図版35　出土土器（粘土採掘坑埋土）
図版36　出土土器（粘土採掘坑埋土）
図版37　出土土器（粘土採掘坑埋土）
図版38　出土土器（SE04・SE06・SE10・SE11・SE12）
図版39　出土土器・土製品（土坑・粘土採掘坑）
図版40　出土土器（SX55・SX65）
図版41　出土木製品（SE03 井戸枠）
図版42　出土木製品（SE03 井戸枠）
図版43　出土木製品（SE03 井戸枠）
図版44　出土木製品（SE03・SE05・SE09）
図版45　出土木製品（SE07 井戸枠）
図版46　出土木製品（SE07 井戸枠）
図版47　出土木製品（SE08 井戸枠）
図版48　出土木製品（SE08 井戸枠）
図版49　出土木製品（SE08 井戸枠）
図版50　出土木製品（SE08）
図版51　出土木製品（SE04）
図版52　出土木製品（SE04）
図版53　出土木製品（SK12－２・SX65）
図版54　出土石製品
図版55　出土金属製品

駅前町遺跡

図版56　調査区平面図（１/250）
図版57　１区西壁・北壁断面図
図版58　２区西壁・北壁断面図
図版59　SD01　平面図・断面図
図版60　SD02・SR02　平面図・断面図
図版61　SR01　平面図・断面図
図版62　出土土器（SR01）
図版63　出土土器（SR02・SD01・SD02）・出土石器・出土金属製品

写 真 図 版 目 次

豆腐町遺跡

写真図版１　１区・２区調査前状況（西から）
　　１区全景（北西から）
写真図版２　１区・２区全景（北西から）
　　１区・２区全景（北東から）
写真図版３　３区遠景（北東上空から）
　　３区全景（西から）
写真図版４　１区北壁土層断面（南から）
　　１区・２区西壁土層断面（北東から）
　　２区西壁土層断面（東から）
写真図版５　SE01　検出状況（西から）
　　SE01　土層断面（西から）
　　SE01　井戸枠出土状況（南から）
写真図版６　SE03　井戸枠（南西から）
　　SE03　土層断面（西から）
　　SE03　井戸枠部材出土状況（東から）
　　SE03　完掘（西から）
　　SE03・SK01　出土状況（西から）
写真図版７　SE05　土層断面（西から）
　　SE05　上層土器出土状況（西から）
　　SE05　下層土器出土状況（西から）
写真図版８　SE07　検出状況（北から）
　　SE07　土層断面（北から）
　　SE07　完掘状況（北から）
写真図版９　SE08　土層断面（南から）
　　SE08　刀子・墨書土器出土状況（南から）
　　SE08　完掘状況（南から）
　　SE08　井戸枠　枘・楔組合せ状況
写真図版10　SE09　土層断面（西から）
　　SE09　井戸枠内土器・木器出土状況（西から）
　　SE09　井戸枠（西から）
写真図版11　SE09　井戸枠（北から）
　　SE09　集水施設　曲物検出状況（北から）
　　SE09　完掘状況（北から）
写真図版12　SE13 井戸枠曲物及び桟（西から）
　　SE13 土層断面（西から）
　　SE13 桟組み（南から）
　　SE13 井戸枠内　土師器出土状況（北から）
　　SE13 断割り（西から）
写真図版13　SE14 完掘状況（西から）
　　SE14 検出状況（西から）
　　SE14 断割り（西から）
　　SE14 井戸枠南東隅　拡大
　　SE14 井戸枠板材の加工
写真図版14　SK11・SK12－２・SK19 全景（南から）
　　SK12－２ 土器・木器出土状況（東から）
　　SK11 集石出土状況（西から）
　　SK19 土器出土状況（西から）
　　SK11・SK12－１・SK12－２・
　　SK19 土層断面（南西から）
写真図版15　SK01 集石出土状況（西から）
　　２－９Ｆ区 柱穴群（南から）
写真図版16　SE04 漆器椀出土状況（東から）
　　SE04 漆器椀出土状況（東から）
　　SE04 断割り（東から）
写真図版17　SE06 断割り（東から）
　　SE10 完掘状況（西から）
　　SE11 断割り（北から）
写真図版18　SE02 完掘状況（南から）
　　SK03 集石（西から）
　　SK37 集石（東から）
写真図版19　１区西部 粘土採掘坑群（北から）
　　粘土採掘坑土層断面（東から）
　　SX12 土器出土状況（西から）
　　SX60 集石出土状況（西から）
　　SX60 土層断面（北から）
写真図版20　１区東部 粘土採掘坑群（北から）
　　１区・２区中央部 粘土採掘坑群（北東から）

粘土採掘坑土層断面（南から）
粘土採掘坑土層断面（南から）
粘土採掘坑（南から）
下層確認トレンチ土層断面（南西から）
写真図版21　SE01 出土須恵器
写真図版22　SE01 出土須恵器・土師器
写真図版23　SE01 出土竈・製塩土器・瓦
写真図版24　SE03 出土須恵器・土師器
写真図版25　SE03 出土製塩土器・須恵器・土師器
写真図版26　SE05 出土須恵器
写真図版27　SE05 出土土師器 1
写真図版28　SE05 出土土師器 2
写真図版29　SE05 出土竈
写真図版30　SE07 出土須恵器・土師器・製塩土器
写真図版31　SE08 出土須恵器・墨書土器・瓦・石製品
写真図版32　SE08 出土須恵器・土師器・墨書土器・竈
写真図版33　SE08 出土製塩土器
写真図版34　SE09 出土須恵器・土師器
写真図版35　SE09 出土須恵器・土師器
SE09 出土製塩土器
写真図版36　SE13 出土土師器
SE14 出土土師器
写真図版37　SE14 出土土師器
SE14 出土製塩土器
写真図版38　SE14 出土瓦
写真図版39　SK01 出土須恵器
SK01 出土竈
写真図版40　SK12-1 出土土器
写真図版41　SK20 出土土器
SP11・SP12 出土土器
写真図版42　粘土採掘坑群出土土器 1
写真図版43　粘土採掘坑群出土土器 2
写真図版44　粘土採掘坑群出土土器 3
写真図版45　粘土採掘坑群出土土器 4
写真図版46　粘土採掘坑群出土土器 5
写真図版47　粘土採掘坑群出土土器 6
写真図版48　粘土採掘坑群出土土器 7
写真図版49　SE04 出土土器
SE11 出土瓦
SE12 出土土器
写真図版50　SE06 出土土器
SE10 出土土器
SE04 出土土器
写真図版51　粘土採掘坑群出土土器 1・土製品
写真図版52　粘土採掘坑群出土土器 2
写真図版53　粘土採掘坑群出土土器 3
写真図版54　SE03 出土井戸枠 1
写真図版55　SE03 出土井戸枠 2
写真図版56　SE03 出土井戸枠 3・木製品
SE05 出土木器
写真図版57　SE07 出土井戸枠 1
写真図版58　SE07 出土井戸枠 2
写真図版59　SE07 出土木器
SE08 出土井戸枠 1
写真図版60　SE08 出土井戸枠 2
写真図版61　SE08 出土井戸枠 3
写真図版62　SE08 出土井戸枠 4
写真図版63　SE09 出土木器
SK12-2 出土木器
SX65 出土木器
写真図版64　SE04 出土木器 1
写真図版65　SE04 出土木器 2
写真図版66　SE04 出土木器 3
写真図版67　SE04 出土木器 4
写真図版68　出土石製品
写真図版69　SE08 出土刀子
SE09 出土和同開珎処理前
SE09 出土和同開珎X線透過
SE09 出土和同開珎処理後
写真図版70　出土金属器（近世）

駅前町遺跡 1 区

写真図版71　調査地遠景（北上空から）

調査区近景（北西上空から）
調査区近景（東から）
写真図版72　調査前状況（南から）
調査区全景（南から）
写真図版73　調査区北半全景（南東から）
調査区南半全景（東から）
調査区西壁土層断面（南東から）
写真図版74　下層確認トレンチ土層断面（南東から）
下層確認トレンチ土層断面（北東から）
SD01 全景（南西から）
写真図版75　SD01 北側土層断面（南から）
SD01 南側土層断面（南から）
SD02 全景（南西から）
写真図版76　SD02 土層断面（南西から）
SR01 全景（東から）
SR01 北端土層断面（南から）
写真図版77　SR01 中央部西半土層断面（南から）
SR01 中央部東半土層断面（北から）
SR01 東側土層断面（南東から）
写真図版78　SR01 西側土層断面（西から）
SR01 西端部土層断面（東から）
SR01 弥生土器出土状況（南から）
写真図版79　SR01 土師器出土状況（南から）
SR01 須恵器出土状況（北から）
SR02 全景（南から）
写真図版80　SR02 土層断面（西から）
鋤溝 2 （南から）
鋤溝 3 （西から）

駅前町遺跡 2 区

写真図版81　調査前状況（西から）
調査区全景（南から）
調査区全景（南西から）
写真図版82　調査区北壁土層断面（南西から）
調査区西壁土層断面（南東から）
調査区西壁土層断面詳細（東から）
写真図版83　調査区周辺の状況（東から）
機械掘削状況（北東から）
人力掘削状況（東から）
写真図版84　流路掘削状況（南から）
遺物検出状況（南から）
写真撮影状況（東から）
写真図版85　出土土器 1
写真図版86　出土土器 2
写真図版87　出土土器 3
写真図版88　出土土器 4 ・石器・金属製品

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

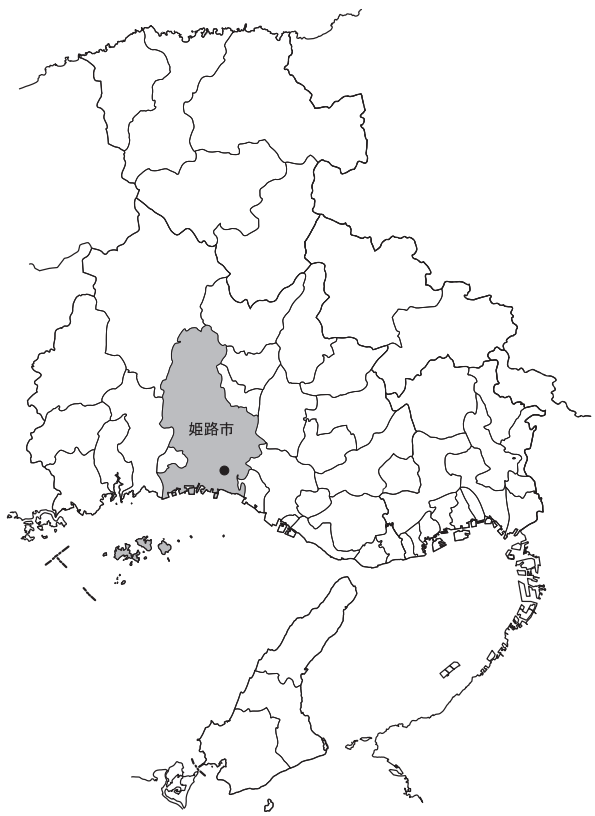
豆腐町遺跡・駅前町遺跡は兵庫県姫路市豆腐町・南駅前町に所在する。姫路市は兵庫県の南西部、播磨平野（姫路平野・播州平野）のほぼ中央に位置する中核都市であり、人口は53万1526人（平成30年４月時点）と兵庫県第２の人口規模である。

奈良時代に播磨国府・播磨国分寺が置かれ、旧播磨国の中心地として発展し、江戸時代には姫路城の城下町として都市が形成された。これにより、姫路の街は城下町とその周辺部に集落が点在する姿をしていたが、大正期以降、市街地は急速に拡大し、昭和に入ると広畑・飾磨などの臨海部にて住宅化・工業化が促進された。太平洋戦争では２度の空襲を受けたが、戦災復興土地区画整理により市街地の道路網が新たに整備され、現在の市街地の骨格が形成されている。

その後、平成18年（2006）には隣接する旧神崎郡香寺町・旧飾磨郡夢前町・旧宍粟郡安富町・旧飾磨郡家島町の４町と合併し、現在の市域となっている。

姫路市の地形を見てみると、市域の北部は中国山地から派生する不連続山地で占められており、増位山・広嶺山・書写山・雪彦山などの山々が連なる。その山間を市川・夢前川・揖保川などの中国山地を源とする河川が南流し、これにより市街地のある沖積平野が形成されている。そして、市域南部は瀬戸内海に面し、海上には家島諸島が位置している。

平野部は沖積層と大阪層群からなる。河川沿いの低地は主として礫・砂からなる沖積層で、下流に向かうほど泥・砂が多くなる。大阪層群は主として市域東北部の市川沿いの地域や東部の段丘に存在する。



第１図　豆腐町遺跡･駅前町遺跡の位置

豆腐町遺跡・駅前町遺跡は姫路城城下町の南、姫路駅の北西に位置しており、遺跡の東側には三左衛門堀川が南流している。三左衛門堀川は一時期の市川本流と考えられ、現在の市川は姫路城城下町が成立して以降のものである。

第２節　歴史的環境

1）旧石器時代～縄文時代

姫路市内における旧石器時代は遺跡数が少なく遊離資料が中心である。市川東岸の国分寺台地遺跡（32）・御着城跡・北春日遺跡があり、市川西岸では手柄山北丘遺跡が挙げられるのみである。サヌカイト製の尖頭器が多いが、手柄山北丘遺跡では旧石器時代末～縄文時代草創期の黒曜石製の尖頭器が表採されている。

縄文時代に遺跡数はやや増加するが、早期～前期の遺跡は島嶼部ないし山間部に限られる。香寺町平尻遺跡で早期末葉と前期の土器片が、家島町東オドモ遺跡では前期末～後期までの土器片が採集されている。平野部で遺跡が出現するのは中期以降であり、辻井遺跡では戦前に人骨の埋葬された中期の土壙墓と犬骨の埋葬された袋状ピットが確認されている。この他の事例は乏しく、八反長遺跡、八代深田遺跡（47）で遺物の出土はあるものの、遺構は希薄である。

後晩期に遺跡数は増加傾向を見せるが、その内容については遺物の包含層出土例が中心で、六角遺跡で晩期の住居跡が見つかっているのみである。豆腐町遺跡（１）においても過去の調査でわずかながら流路より土器片が出土しており、今回の駅前町遺跡（２）でも流路下層より晩期の土器小片が出土している。

2）弥生時代

弥生時代になると遺跡数は大幅に増加し、特に市川西岸の姫路平野低地に立地する遺跡の多くから弥生前期の土器が出土している。このうち今宿丁田遺跡・丁柳ケ瀬遺跡で出土している前期中段階の土器が最も古く、前期後葉から遺跡数が増加しはじめる。周辺では豆腐町遺跡（１）、市之郷遺跡（11）、辻井遺跡で土坑、流路がわずかに検出されるにすぎず、包含層出土資料が中心である。

姫路城南東部では豆腐町遺跡・駅前町遺跡をはじめとして神屋町遺跡（３）・朝日町遺跡（４）・豊沢遺跡（９）・北条遺跡（10）・市之郷遺跡（11）・阿保遺跡第２地点（13）が東西に帯状に連なっている。このうち北条遺跡・朝日町遺跡・神屋町遺跡・市之郷遺跡・豆腐町遺跡では前期の遺構が発見されている。北条遺跡では中期と後期の竪穴住居も検出されており、貨泉が採集されている点も注目される。市之郷遺跡・神屋町遺跡・阿保遺跡第２地点でも中期の住居跡がある。これらの遺跡は微高地上に立地しており、周囲の低地を水田として利用していた可能性がある。また、全ての遺跡が古墳時代にも営まれている点も指摘しうる。今回の駅前町遺跡の調査でも流路より前期の土器小片及び中期の土器が出土している。

姫路城南西部は特に遺跡数が多く、現在の野田川、船場川及び水尾川流域に橋詰遺跡（53）・石ヶ坪遺跡など25遺跡が帯状に連なって集中して存在している。前期後半から始まる遺跡には橋詰遺跡・千代田遺跡（49）・八反長遺跡などがある。中期以降は畑田遺跡で中期後半以降の竪穴住居が25棟発見され、後期の円形周溝墓も調査されている。

姫路城北西部では矢代深田遺跡（47）で中期土器が多数出土した他、辻井遺跡で中期の竪穴住居跡、岩端町遺跡（48）で中期の溝が検出されている。名古山遺跡・今宿丁田遺跡では銅鐸鋳型が出土しており、銅鐸生産の可能性がある。

市川東岸では国分寺台地遺跡（32）で中期後半の方形周溝墓・円形周溝墓が、兼田遺跡では後期の竪穴住居が見つかっているが、その他の遺跡は丘陵端や丘陵上に立地する小規模なものである。

NO.	遺跡名	時期	NO.	遺跡名	時期	NO.	遺跡名	時期
1	豆腐町遺跡	弥生～平安	21	オヘラ南麓古墳	古墳	41	阿保百穴群集墳	古墳
2	駅前町遺跡	弥生～近世	22	小川廃寺	奈良	42	東光寺山古墳	古墳
3	神屋町遺跡	弥生～平安	23	高木遺跡	奈良	43	大歳神社前遺跡	古墳
4	朝日町遺跡	弥生～奈良	24	長谷遺跡	古墳	44	富士才遺跡	弥生
5	本町遺跡	奈良	25	宮ノ浦遺跡	古墳～平安	45	御茶屋町遺跡	弥生
6	姫路城跡	近世	26	上原田廃寺	奈良	46	男山東山焼窯跡	近世
7	姫路城城下町跡	近世	27	小婦方遺跡	古墳	47	八代深田遺跡	弥生
8	野里門下層遺跡	縄文～弥生	28	播磨国分尼寺跡	奈良～平安	48	岩端町遺跡	弥生
9	豊沢遺跡	弥生	29	播磨国分尼寺周辺遺跡	奈良～中世	49	千代田遺跡	縄文～弥生
10	北条遺跡	弥生～古墳	30	山之越古墳	古墳	50	南畝町遺跡	弥生
11	市之郷遺跡	弥生～中世	31	壇場山古墳	古墳	51	君田遺跡	弥生
12	市之郷廃寺	奈良	32	国分寺台地遺跡	旧石器～弥生	52	村淵遺跡	弥生
13	阿保遺跡第2地点	弥生～中世	33	播磨国分寺跡	奈良	53	橋詰遺跡	縄文～古墳
14	阿保遺跡第1地点	平安～中世	34	八重鉾山構跡	中世	54	黒表遺跡	弥生～古墳
15	阿保構跡	中世	35	坂元山古墳群	古墳	55	小山遺跡	弥生～古墳
16	市之郷長堤遺跡	平安	36	宮山古墳	古墳	56	浜田遺跡	弥生
17	阿保下長、永河原遺跡	平安～中世	37	上鈴山古墳	古墳	57	古屋敷遺跡	弥生～古墳
18	石積山城跡	中世	38	中鈴山古墳	古墳	58	竹の前遺跡	弥生～古墳
19	石積山古墳群	古墳	39	坂元山南麓遺跡	弥生	59	三宅遺跡	奈良
20	トンノク谷古墳群	古墳	40	坂元山遺跡	古墳			

第２図　周辺の遺跡（ 1/30,000 ）

3）古墳時代

古墳時代はじめの古墳は横山７号墳（30m）と丁瓢塚古墳（98m）がある。バチ型前方後円墳で箸墓古墳との関連が窺われる。中期には周濠を有する首長墳として145mの前方後円墳である壇上山古墳（31）と一辺60m前後の方墳である山之越古墳（30）が築かれる。一方、長径約30mで楕円形の宮山古墳（36）では竪穴式石室や副葬品、埋葬方法に至るまで朝鮮半島南部地域の色彩が強い。

後期古墳はトンノク谷古墳群（20）や坂元山古墳群（35）や阿保百穴群集墳（41）など平野周辺部の山塊・山麓に分布している。

集落は弥生時代の遺跡が集中した範囲を中心に分布している。市之郷遺跡（11）では韓式系土器が一括で出土した竪穴住居が調査されており、宮山古墳との関係についても視野に入れる必要がある。この他、畑田遺跡・国分寺台地遺跡などで竪穴住居跡や掘立柱建物跡が調査されている。

4）古代

奈良時代には本町遺跡（５）一帯に播磨国府が置かれ、周辺の遺跡では国府に関連すると思われる遺構・遺物が見つかっている。北条遺跡（10）では７世紀末～８世紀初頭の掘立柱建物の柱穴列・溝・素掘り井戸等が検出され、布目瓦・円面硯等が出土している。豆腐町遺跡でも過去の調査で道路跡や木組み井戸などの遺構と多数の墨書土器・漆付着土器・転用硯・漆紙文書等が発見されている。この他に三宅遺跡（59）・上原田遺跡は官衙跡と考えられている。

播磨国分寺跡（33）・播磨国分尼寺跡（28）をはじめとした寺院も数多く存在しており、市之郷廃寺（12）・辻井廃寺・見野廃寺は白鳳時代創建の寺院跡である。市之郷廃寺では金堂跡と考えられる仏堂基壇跡や築地跡を検出するとともに多数の瓦・鴟尾と水煙が出土している。奈良時代の寺院跡は他に上原田廃寺（26）・平野廃寺・白国廃寺・豊国廃寺・小川廃寺（22）があるが、実態については明らかではない。阿保遺跡第２地点（13）では掘立柱建物跡や井戸・土坑等の遺構と蹄脚硯・風字硯・円面硯・緑釉陶器・石帯等が出土しており、市之郷廃寺との関係が推定されている。

5）中世

平安時代後期から室町時代の遺構・遺物は阿保構跡（15）・阿保遺跡第２地点（13）・駅前町遺跡（２）・神屋町遺跡（３）・北条遺跡（10）・市之郷遺跡（11）などで検出されている。阿保構跡では鎌倉時代から室町時代の溝・井戸などが見つかっている。神屋町遺跡では平安時代後期の掘立柱建物跡・溝、北条遺跡では多数の柱穴群を検出している。市之郷遺跡では、掘立柱建物群と墓、４基の梵鐘鋳造遺構が調査され、多数の鋳型片が出土している。

6）近世

姫路城は池田輝政によって慶長６年（1601年）から築かれた平山城であり、天守群が位置する姫山を中心に内曲輪・中曲輪・外曲輪と展開している。姫路城跡（６）・姫路城城下町跡（７）の調査は継続的に実施されており、内曲輪の三の丸跡では桜門から菱の門にいたる主要通路、御居城に通じる通路の番所や遺構が検出されている。県立歴史博物館建設に伴う調査では、江戸時代の遺構面が３面にわたって検出され、道路・道路側溝・雨落ち溝・石積み井戸・建物跡・門跡などの遺構が見つかっている。

外曲輪では近年の調査で町割りの基準線にかかる成果が相次いでおり、城下町の整備を考えるうえで必要な成果が蓄積されつつある。また、姫路城南部を中心に外堀が確認されており、石垣や江戸時代に崩壊した箇所の修繕状況も明らかになっている。

7）近代

明治維新後、内・中曲輪の武家屋敷は撤去され、明治29年（1896）には旧陸軍の第10師団が置かれる。

明治21年（1888）には山陽鉄道会社が設立され、11月には兵庫－明石間、12月には明石－姫路間が開業した。翌

22年（1889）年には官設鉄道の新橋－神戸間が開業し、これに山陽鉄道兵庫－神戸間が開業することで幹線鉄道と連絡することとなった。明治28年（1895）には生野鉱山と飾磨港を結ぶ播但鉄道（のちの播但線）が開業し、34年（1901）年には神戸－下関間での開業も果たした。豆腐町遺跡では姫路駅に伴う遺構・遺物が見つかっており、なかでも２基の転車台は注目される。また、明治９年（1876）には生野と飾磨港を結ぶ馬車道が整備され、この一部が駅前町遺跡の確認調査で見つかっている。

第３節　周辺の既往調査

今回の調査区周辺では姫路市教育委員会および兵庫県教育委員会により、過去複数次にわたる発掘調査が実施されている。

１）姫路市教育委員会による調査

姫路市教育委員会は姫路駅周辺の土地区画整理事業に伴って、９ヶ年にわたって豆腐町遺跡・駅前町遺跡それぞれで発掘調査を実施している（第３図）。駅前町遺跡（第３図１）からは今回の調査区北側に隣接する地点で古墳時代後期の流路、平安時代後半の木組み井戸と近世城下町南端を画する石組み溝が検出されている。木組み井戸からは白磁皿・土師器皿とともに呪符木簡、井戸の廃絶に際して「息抜き」を行ったと考えられる竹筒などが出土している。

石組み溝は裏込めから出土した土器から17世紀中頃まで遡ることが明らかとなっており、姫路城外堀が作られたと考えられる17世紀初頭とは若干の時期差がある。また、石組み溝の一部には水量調節を目的とした会所がつくられ、越水防止と見られる木杭や板等も設置されている。溝の南では素掘り溝や埋桶をはじめとした田畑の耕作痕跡が見つかっており、一面田畑が広がっている状況が明らかになっている。

豆腐町遺跡では９カ所で発掘調査が行われており、今回の調査地点は豆腐町遺跡の東北端に位置している。

遺跡西側では、平成19年度調査区（第３図７）より奈良三彩が出土した井戸や土坑・流路跡が見つかっており、平成13年度調査区（第３図４）では飾磨街道に併行する掘立柱建物跡が見つかっている。この建物跡の向きについては兵庫県教育委員会の発掘調査（第３図F）でも同様のものが検出されている。

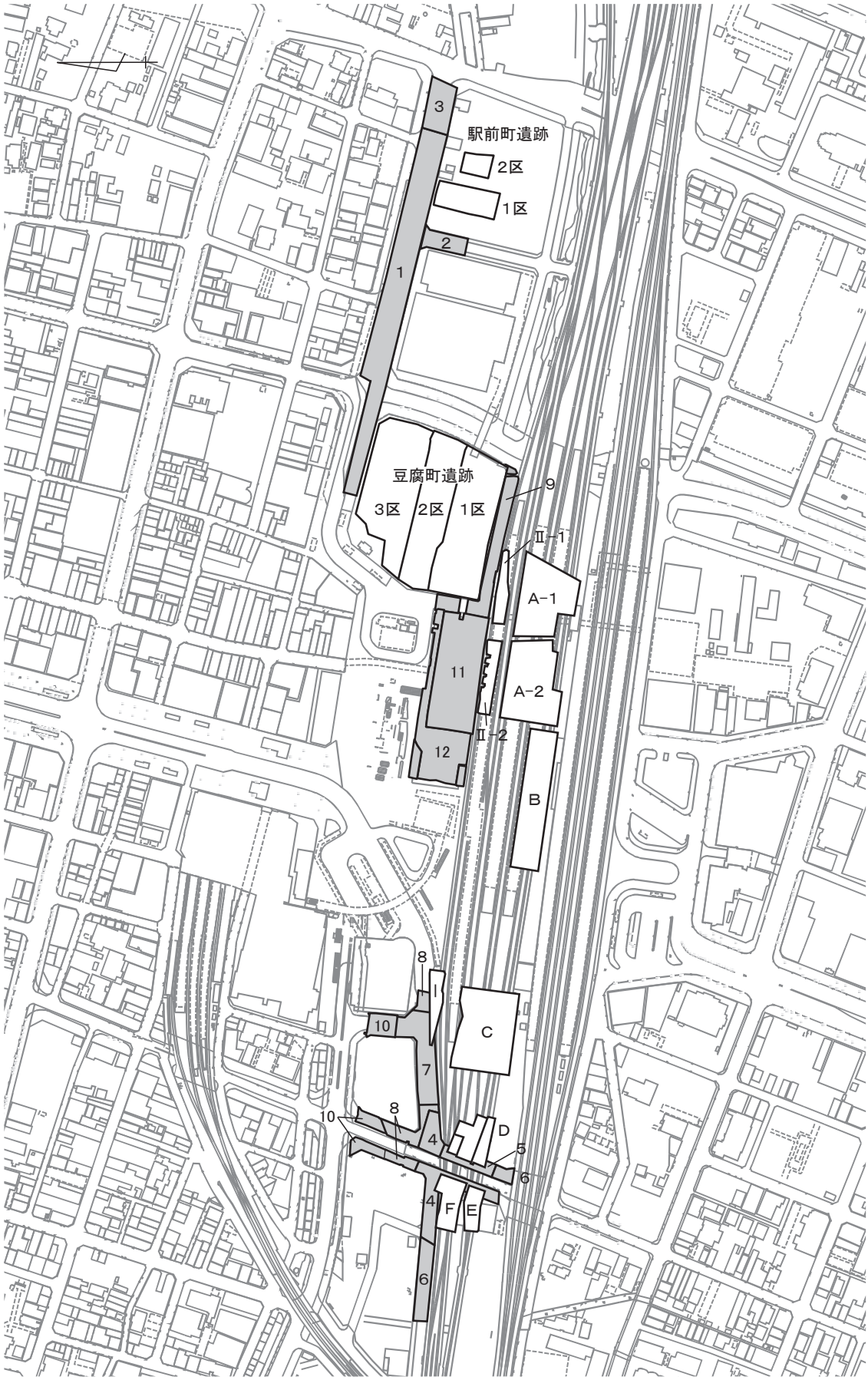
東側では特に重要な成果が上がっている。姫路駅ビル「piole」地点の調査（第３図11・12）では東西に併行して延びる２本の溝が検出されており、古代の道路跡と考えられる。溝間は5.8mで、その南北に東西棟の掘立柱建物跡が整然と並んで見つかっている。この他、井戸からは斎串や横櫛が出土している。また、今回の調査区南に隣接する調査区（第３図９）では、掘立柱建物跡と井戸３基が見つかっている。このうちの１基から多数の土器とともに漆紙文書が、別の井戸からは和同開珎と萬年通寶が出土している。

これまでの調査では、竈などの煮炊具、墨書土器や転用硯、製塩土器と合わせて漆付着土器や鞴の羽口などの遺物が多数見つかっており、漆紙文書は漆工をはじめとした工房の存在を強く印象付ける資料といえる。

２）兵庫県教育委員会による調査

兵庫県教育委員会はJR山陽本線の高架事業に伴って、５ヶ年にわたって豆腐町遺跡の本発掘調査を実施している。その調査成果については『豆腐町遺跡Ⅰ』、『豆腐町遺跡Ⅱ』の２冊の報告書にまとめられ、遺跡の形成が縄文時代に遡り、弥生時代から近代にいたるまで連綿と土地利用がなされていたことがわかっている（第３図・第１表）。縄文時代～古墳時代の遺構は乏しいが、流路より土器等の遺物が出土している。

奈良・平安時代には官衙的な遺跡が営まれ、今回の調査区南側に近接するⅡ－１区では、掘立柱建物跡２棟・柵跡２列・井戸３基などが見つかっており、墨書土器・転用硯・稜碗・竈・土馬・斎串・鳥形・馬形等の遺物が多数出土している。その南に隣接するA-１区では、調査区を北西から南東に横切る流路（SR01）東側に掘立柱建物１



第３図　既往の発掘調査（ 1 /4,000 ）

棟と井戸２基が見つかり、二彩壺・墨書土器・漆付着土器・製塩土器・瓦などの遺物が出土している。これらの遺構埋土には炭や焼土が多く含まれていることから、周辺で火力を使用した作業、特に炊飯・供膳を主とした厨房施設にあたると予想されている。

遺跡西側のC区・D区・E区・F区においても掘立柱建物跡・井戸・土坑などの遺構とともに、墨書土器・漆付着土器が出土している。中でも、D区では包含層からではあるが神功開寶が出土している点、F区の掘立柱建物はA区やⅡ区で検出した掘立柱建物跡が正方位をとるのに対し、N20°Eの条里の方位に沿って建てられている等、注意すべき内容がある。

中世・近世以降も掘立柱建物などの遺構は検出されており、継続して土地利用がなされていたことが分かっている。明治維新後、姫路駅が整備されるがC区とⅠ区では転車台が発見されており、その実態に迫る資料として注目される。

第1表　兵庫県教育委員会による本発掘調査一覧

No.	調査年度	時期	内　容
A	H11	弥生	SR01より後期の土器が出土。このころから埋没はじまる。
		古墳	SR01第11層より滑石性勾玉出土。
		奈良	SR01東側に掘立柱建物1棟とピット群、2基の井戸、7基の土坑、2条の溝が検出。二彩壺･墨書土器･漆付着土器･製塩土器･竈･瓦等の遺物が出土。
		近世	掘立柱建物1棟といくつかのピット、土坑と溝を検出。遺構埋土からは奈良時代の土器が出土している。
B	H10	縄文	縄文後期の深鉢1点。
		弥生	弥生時代中期後半～後期の土器･紡錘車が出土。平安時代には埋没している。
		奈良	溝SD05を検出。
		中世	約100基のピット、溝2条、井戸の可能性のある焼土坑を検出。
		近代	杭列を検出。
		近世	ほぼ南北方向の畝をもつ水田面を検出(17C～明治20年)
C	H11	弥生	西側微高地に土坑1基。自然流路状の窪み(平安時代に埋没)に中期の土器が含まれる。微高地とこの間に3条の溝。
		奈良･平安	西側微高地上に柱穴50基。建物規模は不明。漆付着土器等が出土。
		近代	転車台、機関庫、引き込み線が検出される。
D	H12･13	弥生	西側礫層上で7基の土坑を検出。埋土からは小型土器が出土。
		奈良	井戸1基、溝5条、埋甕1基、土坑7基が西半部に集中。包含層より神功開寶が出土。墨書土器･稜碗あり。
		中世	掘立柱建物1基、池跡、土坑2基を検出。
E	H12	奈良	井戸1基(墨書土器出土)、土坑4基、溝1基。
F	H12	弥生	土坑1基を検出。
		奈良	主軸N20°Eの掘立柱建物2棟、溝2条、土坑3基。墨書土器が出土。
		中世	掘立柱建物3棟、土坑9基、溝2条。
Ⅰ	H18	弥生	C区で検出されたものに連続する溝2条(前期～)検出。
		近代	転車台。
Ⅱ	H18	奈良	掘立柱建物2棟、柵跡2基、井戸3基とそれに伴う石敷遺構2基、土坑4基以上、溝5条。建物、溝は正方位。 墨書土器･転用硯･稜碗･竈･土馬･斎串･鳥形･馬形が出土。

参考・引用文献

姫路市教育委員会　2000『TSUBOHORI　平成10年度（1998）姫路市埋蔵文化財調査略報』

姫路市教育委員会　2001『TSUBOHORI　平成11年度（1999）姫路市埋蔵文化財調査略報』

姫路市教育委員会　2015『TSUBOHORI　2015―姫路市埋蔵文化財調査略報―』

山田清朝　2005「地理的環境」『市之郷遺跡―JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書Ⅰ―』兵庫県文化財調査報告 第286冊　兵庫県教育委員会

岸本一宏　2013「地理的環境」『市之郷遺跡Ⅴ　ものづくり大学校整備事業に伴う市之郷遺跡・市之郷廃寺発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告 第454冊　兵庫県教育委員会

岸本一宏　2013「歴史的環境」『市之郷遺跡Ⅴ　ものづくり大学校整備事業に伴う市之郷遺跡・市之郷廃寺発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告 第454冊　兵庫県教育委員会

第２章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

姫路市はJR姫路駅周辺において鉄道高架事業・基盤整備事業および施設整備事業を一体的に実施する「姫路駅周辺地区総合整備事業（キャスティ21）」を進めている。このなかで姫路駅東側の鉄道高架事業によって生じる広大な貨物ヤード跡地は、官民連携による都市基盤および施設整備が実施される「コアゾーン」として位置付けられ、商業施設やホテル、高等教育機関などの機能をもつ新規街区として整備する計画になっている。西よりコアゾーンA、コアゾーンB、コアゾーンCの３区画に分けられている。

このうち、事業対象地（コアゾーンＡ）の北半は周知の遺跡である「駅前町遺跡（遺跡番号020464）」の範囲に、南西の一角は「豆腐町遺跡（遺跡番号020459）」の範囲に該当している。豆腐町遺跡では姫路市教育委員会による隣接地点の本発掘調査（豆腐町第５次～７次）で、奈良時代の道路跡・多数の掘立柱建物跡・井戸などの遺構が見つかっている。今回の調査範囲はこの道路跡の延長線上にあることから、遺跡が連続している事が強く予想された。

また、コアゾーンB・コアゾーンCについても駅前町遺跡の範囲に該当しており、姫路市教育委員会による隣接地の本発掘調査で遺構・遺物の広がりが確認されている。

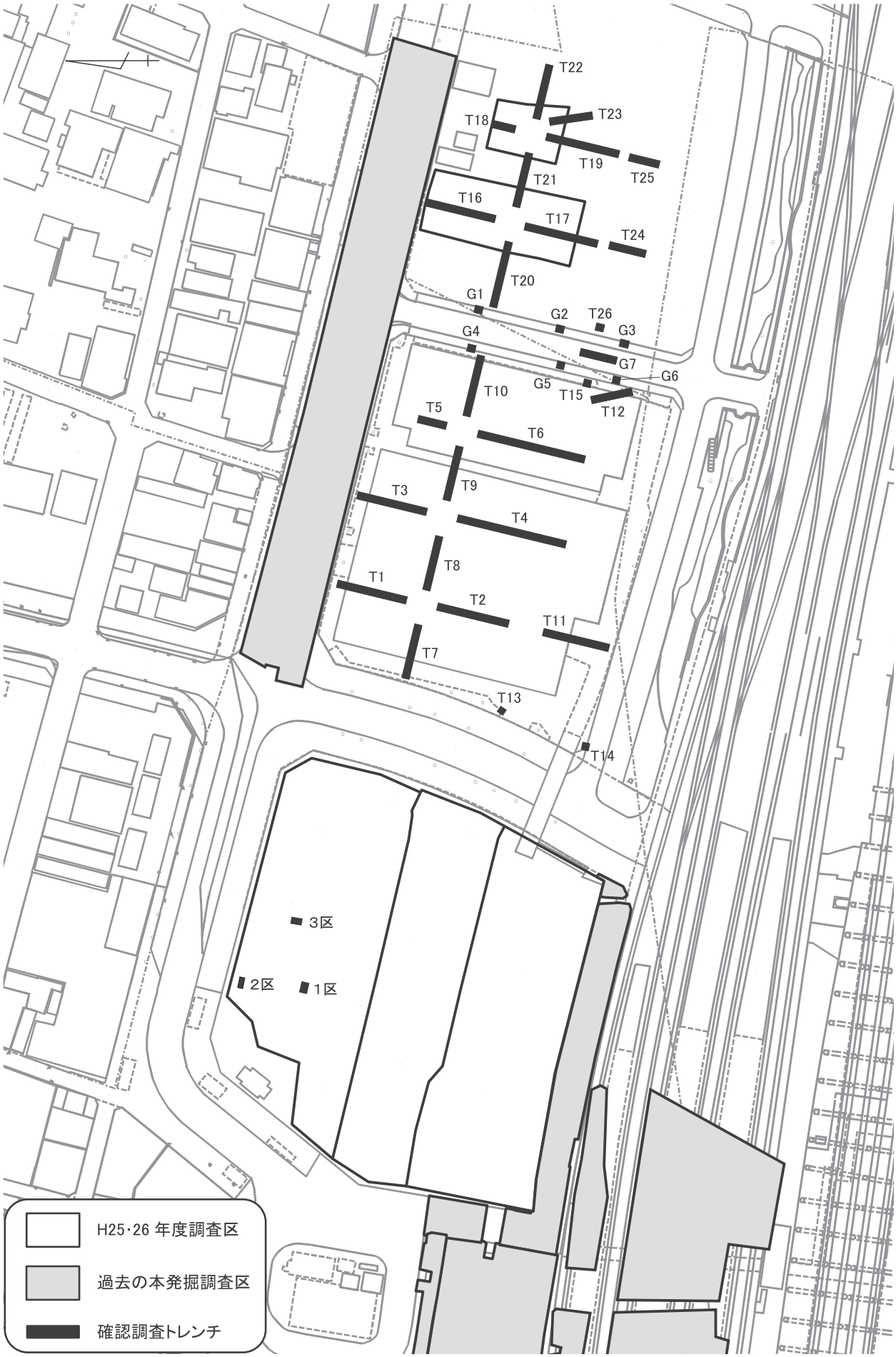
以上のことから、コアゾーンＡ～Ｃの範囲で試掘・確認調査を実施する必要があると判断された。

第２節　試掘・確認調査

事業地内の試掘・確認調査は平成23年度・24年度に姫路市教育委員会が主体となって実施している（第４図・第２表）。調査の結果、コアゾーンＡについては、遺物は出土していないが現地表下145㎝で基盤層を掘り込む

第2表　試掘・確認調査一覧

調査期間	No.	遺構	遺物	時期	備考
H23	1	土坑	なし	不明	
	2		なし		
	3		なし		削平
H23	G1	旧河道		～古墳時代前期	
	G2	旧河道		～古墳時代前期	
	G3				
	G4				
	G5	旧河道		～古墳時代前期	
	G6	旧河道		～古墳時代前期	
	G7	旧河道		～古墳時代前期	
H24	T1	土取り穴		近世以降	削平
	T2				攪乱多数
	T3	土取り穴		近世以降	攪乱多数
	T4	旧河道	なし	～古墳時代前期	北側は攪乱
	T5		なし		削平？
	T6	旧河道・煉瓦積構造物	土師器細片	～古墳時代前期	
	T7				削平
	T8				削平
	T9				削平
	T10				削平
	T11	旧河道・土取り穴	須恵器甕	遺物は奈良～平安・近世	遺物は土取り穴埋戻しの混入
	T12	旧河道		～古墳時代前期	馬車道（明治期）の痕跡
	T13				攪乱多数
	T14				
	T15	旧河道		～古墳時代前期	
	T16		須恵器片・土師器片		
	T17	溝・旧河道	甕	遺物は弥生後期	馬車道の痕跡
	T18				
	T19	馬車道		明治6～9年	
	T20	ピット・旧河道	高	古墳時代前期	
	T21	ピット、流路	縄文土器・須恵器杯身	縄文後期～晩期、須恵器はTK23－TK47	縄文土器はピット埋土から、須恵器は流路より出土。
	T22				削平
	T23	溝、馬車道		溝は江戸時代	一部攪乱
	T24				
	T25				
	T26			明治時代	馬車道の可能性。



第４図　確認調査位置図（ 1 /1,500 ）

土坑を検出している。コアゾーンBでは、古墳時代～古代の土器を含む旧河道を検出したが、近世以降の土取りや攪乱によって広い範囲が削平されている。コアゾーンCにおいても同様の攪乱は広い範囲で確認されたが、北西部で弥生時代後期の溝と古墳時代中期の流路を検出している。なお、明治6～9年に構築された馬車道についても検出しているが、保存状態については良好ではなかった。

以上の試掘・確認調査の結果、コアゾーンAで8893㎡、コアゾーンCで931㎡の範囲で本発掘調査が必要と判断された。

第３節　本発掘調査

姫路駅周辺地区総合整備事業（キャスティ21）に係る埋蔵文化財本発掘調査については兵庫県教育委員会と姫路市が平成25年８月23日付で発掘調査協定書を締結している。これに基づき姫路市から依頼（平成25年８月29日付および平成26年４月17日付）を受けた兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会より委託を受けた（公財）兵庫県まちづくり技術センターが平成25年、26年に本発掘調査を実施した。なお、発掘調査に際しては、上記協定に基づき姫路市教育委員会による人的支援を受けている事を明記しておく。

発掘調査の際、調査地区が遺跡をまたいで大きく２ヵ所に分かれており、コアゾーンAの調査区を豆腐町遺跡１区～３区、コアゾーンCの調査区を駅前町遺跡１区・２区と呼び分けていた。実際の遺跡範囲からすれば、コアゾーンAは南西部が豆腐町遺跡、北半が駅前町遺跡であり、２遺跡にまたがっているが、調査区としては一体であることから本報告では調査時の名称を踏襲し、コアゾーンAの調査区を「豆腐町遺跡」、コアゾーンCの調査区を「駅前町遺跡」として報告する。

平成25年度はコアゾーンAの南半5525㎡を対象に11月５日～２月28日の期間で豆腐町遺跡１区・２区の本発掘調査（遺跡調査番号2013121）を実施した。調査対象範囲は南北約55m、南辺92m、北辺107mの略台形を呈するが、調査区南側において市道の工事が計画されていたことから調査区を南半部（１区）と北半部（２区）に分割し、１区から２区の順に作業を実施した。

翌26年度は前年度調査区（豆腐町１・２区）北側に接する豆腐町３区（3368㎡、遺跡調査番号2014009）、そしてその約150m東に位置する駅前町遺跡１区、２区（計931㎡、遺跡調査番号2014010）の本調査を行った。

調査の体制と経過については以下のとおりである。

平成25年度　（遺跡調査番号2013121）

調査主体　　兵庫県教育委員会

調査担当者　（公財）兵庫県まちづくり技術センター　埋蔵文化財調査部

　　調査第２課　　中川　渉、大本朋弥

　　姫路市教育委員会　　関　梓

現場事務員　藤田由美・米井　緑

現場補助員　小谷義男・白髭香奈

調査期間　　平成25年11月５日～平成26年２月28日

【調査の経過】

10月22日（火）―調査担当者による現地立会協議。

11月５日（火）―汚染土壌除去業者（セーフティアイランド）と施工方法協議。

11月６日（水）―残土置場立会。

第５図　豆腐町遺跡１区遺構検出

11月11日（月）―１区南西端より機械掘削開始。
11月12日（火）―１区南西端より人力掘削開始。包含層（近世以降の土取穴）を掘削し、遺構検出。
11月15日（金）―詰所建上げ立会い。
11月20日（水）―井戸SE01検出。１区北壁（１区・２区境界）土層断面写真・図化を順次実施。
11月25日（月）―２区機械掘削開始。
12月９日（月）―SE08より木柄付刀子・完形土師器杯出土。２区人力掘削開始。
12月10日（火）―１区北壁土層断面記録作業完了。SE07～09の掘削・記録作業。
調査区西壁土層の記録作業に着手。
12月24日（火）―１区空中写真測量。１区足場写真撮影。
１月８日（水）―１区中間検査。
１月28日（火）―２区足場写真撮影。
１月29日（水）―２区空中写真測量。
２月３日（月）―近大姫路大学松下正和氏による現地指導。
２月10日（月）―２区中間検査。
２月12日（水）―記者発表。
２月15日（土）―現地説明会を実施。延べ110名来場。
２月18日（火）―調査区下層確認トレンチを機械掘削。
土層断面写真及び図化作業を実施。
２月20日（木）―SE11・13の完掘・記録作成をし、現場での調査終了。
２月28日（金）―現場撤収。

第６図　豆腐町遺跡１区SE03の調査

第７図　現地指導

第８図　現地説明会

平成26年度　（遺跡調査番号2014009・2014010）
調査主体　兵庫県教育委員会
調査担当者　（公財）兵庫県まちづくり技術センター　埋蔵文化財調査部
調査第２課　中川　渉、渡瀬健太
姫路市教育委員会　関　梓
現場事務員　藤田由美・米井　緑
現場補助員　小谷義男・白髭香奈・山本公太
調査期間　平成26年６月２日～平成26年９月１日

【調査の経過】
５月29日（木）―豆腐町遺跡３区、駅前町遺跡の事前現地協議。
６月２日（月）―豆腐町３区コンクリートガラ搬出作業。駅前町１区北東端より機械掘削による表土除去を開始。
６月９日（月）―駅前町１区人力掘削および遺構検出作業を開始。

６月10日（火）―SR01を検出。サブトレンチ掘削後、遺構掘削。駅前町２区北端より機械掘削開始。
６月13日（金）―駅前町１区北壁土層断面写真撮影ののち、断面図作成に着手。
６月24日（火）―SR01完掘。遺構全景の足場写真撮影。
６月27日（金）―駅前町１区遺構掘削作業終了。駅前町２区人力掘削作業着手。
７月１日（火）―豆腐町３区西端部より機械掘削開始。駅前町１区西壁土層断面写真および調査区全景足場写真の撮影。

第９図　豆腐町遺跡３区機械掘削

７月２日（水）―駅前町空中写真測量実施および調査区全景の足場写真撮影。のち、西壁土層断面図作成。
７月８日（火）―豆腐町３区人力掘削開始。近世以降の土取りによる多数の攪乱については遺構検出をせずに完掘。
７月23日（水）―豆腐町３区にてSE14を検出。半截して記録。
８月５日（火）―駅前町１区・２区中間検査。翌日下層確認のため断割作業をしたのち、８日埋戻し。
８月18日（月）―豆腐町３区北壁の記録作成。
８月20日（水）―豆腐町３区西壁の記録作成。
８月21日（木）―豆腐町３区空中写真測量および調査区全景の足場写真撮影。
８月26日（火）―発掘調査成果を記者発表。
８月28日（木）―SE14を完掘し、現場での調査を終了。
８月29日（金）―豆腐町３区中間検査。
９月１日（月）―現場撤収。

第10図　豆腐町遺跡３区ＳＥ14の調査

第４節　整理作業

豆腐町遺跡からは奈良時代を中心に墨書土器・漆付着土器・製塩土器などの土器・陶磁器の他、柄付刀子・和同開珎などの金属製品、井戸枠などの大型木製品が多く出土している。このため、出土品整理作業は平成26年度から30年度の５ヶ年で実施した。各年度の作業内容及び体制は以下のとおりである。

１．平成26年度

整理概要　土器・木器の水洗い、ネーミング作業を行った。

整理体制　（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
整理保存課　菱田淳子・岡本一秀
調査第１課　中川　渉・渡瀬健太・大本朋弥
嘱　託　員　Ａ作業：荻野麻衣・島村順子・嶺岡美見・上田沙耶香・上西順子・平宮可奈子・小野潤子・藤池かづさ・石田典子・沼田真奈美

２．平成27年度

整理概要　接合・補強、金属器の保存処理作業を行った。

整理体制　（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課　長濱誠司・岡本一秀

調　査　課　渡瀬健太

嘱　託　員　Ａ 作 業：荻野麻衣・島村順子・上田沙耶香・上西順子・小野潤子・藤池かづさ・石田典子・沼田真奈美

保存処理：桂　昭子・佐々木愛・梶原奈津子

３．平成28年度

整理概要　実測・拓本、復元、写真撮影、写真整理、図面補正の作業を行った。

整理体制　（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課　菱田淳子

調　査　課　大本朋弥・渡瀬健太

嘱　託　員　Ａ作業：嶺岡美見・小野潤子・佐々木愛・沼田真奈美

Ｂ作業：栗山美奈・古谷章子・森本貴子・八木和子・河合たみ・佐伯純子・寺西梨紗

４．平成29年度

整理概要　遺構・遺物のトレース作業を行った。

整理体制　（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課　深江英憲・大本朋弥

嘱　託　員　Ｂ作業：柏原美音・佐伯純子・前田陽子・尾鷲都美子・寺西梨紗・平宮可奈子

５．平成30年度

整理概要　レイアウト、木器の保存処理作業を行い、報告書を印刷刊行した。

整理体制　（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課　菱田淳子・深江英憲・大本朋弥

嘱　託　員　Ｂ 作 業：柏原美音・古谷章子・宮田麻子・尾鷲都美子・寺西梨紗

保存処理：大前篤子・桂　昭子・太田泉穂・児玉昌子・香山玲子

県立考古博物館

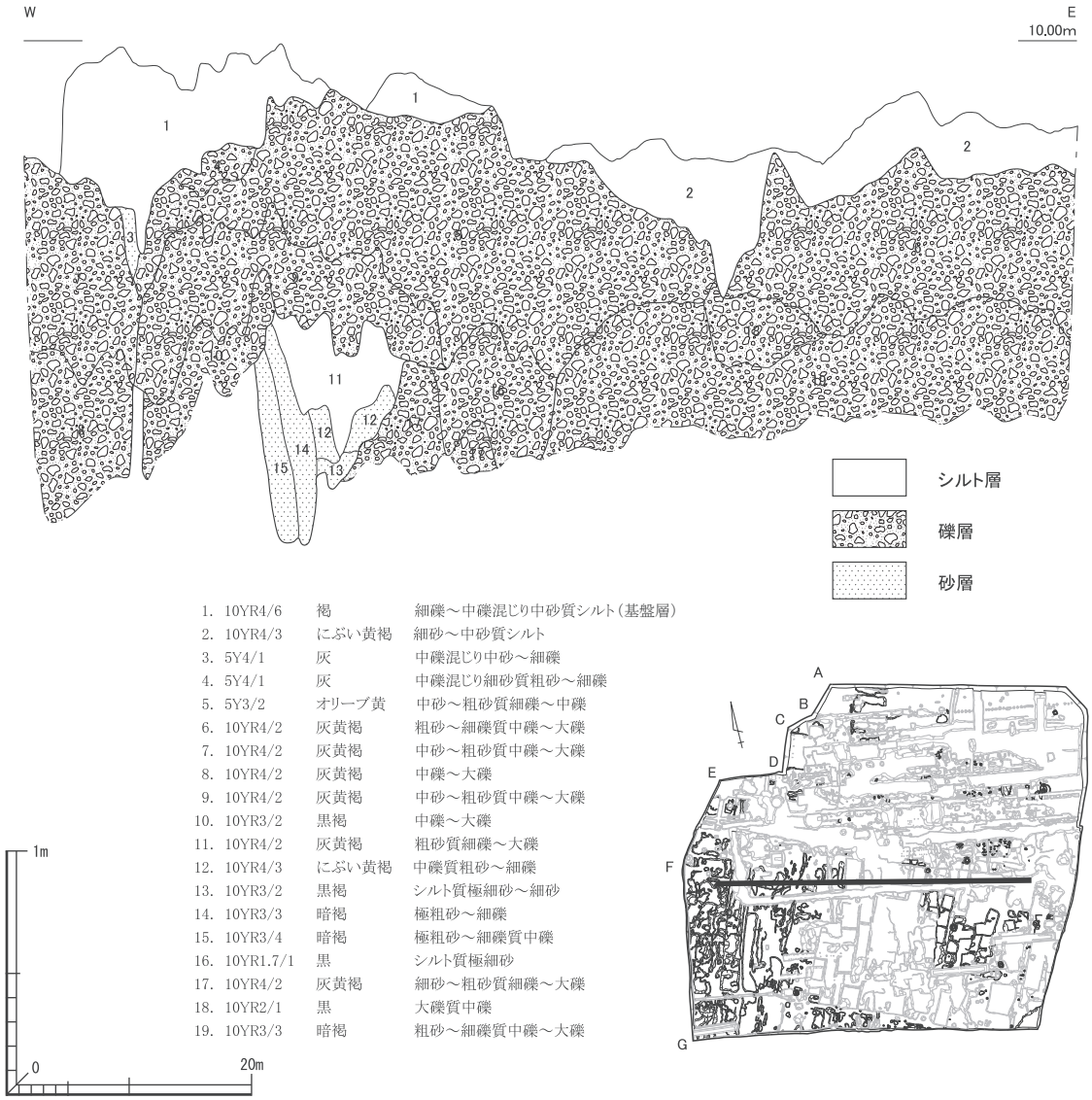
埋蔵文化財課　　中川　渉・渡瀬健太

第３章　豆腐町遺跡の調査

第１節　調査区の概要

本発掘調査区は南を豆腐町遺跡、北を駅前町遺跡にまたがっており、最大長で東西約110m、南北約95mを測る。遺物の取上げのため、10m方眼で西端より１～11、南端よりＡ～Ｊの地区を割り振って調査を行った（図版１）。

豆腐町遺跡は周辺の調査成果により播磨国府に関連する工房跡と考えらえており、隣接する調査区では古代の道路跡や多数の掘立柱建物、井戸などの遺構が検出されている。このため、その延長線上にある本調査区でも同様の遺構発見が期待された。しかし、調査区の大部分は近世以降の粘土採掘坑や近現代の攪乱によって古代の遺構面が削平されており、井戸のような掘方の深い遺構と、削平を免れたごく一部の範囲で柱穴群を検出したにとどまった。ただ、粘土採掘坑や攪乱の埋戻土内からは奈良時代の遺物が多数出土しており、当該期の遺構面がほぼ全面に広がっていたことが予想される。



第11図　下層の堆積状況

第２節　周辺の微地形と基本層序

調査区はかつて播但線のホームとして使われており、高架後は整地されヤードとなっていたため現況はほとんど平坦である。また、周辺は古くから市街化が進んでいたため旧地形をとらえることは困難であるが、現地表面の標高をみると調査区北東隅で11.7m～11.8m、南西隅で11.0mであり、北東から南西に向けてわずかに傾斜していることがわかる。『豆腐町遺跡Ⅰ』（岡田・森内ほか2007）において、姫路市基本地形図（１/2500）をもとに現地表面の微地形が復元されており、これを参照すると、本調査区は北東から南西へのびる張り出しの上に位置することがわかる。この微高地は礫層で構成される扇状地性の堆積物からなり、基盤層下層には礫層が厚く堆積している（第11図）。また、調査区西側は小規模な谷地形が観察でき、これに対応すると思われる埋没流路についても下層で確認している。

調査区の基本層序は上から盛土（100～140㎝）、旧耕土（10～20㎝）、10YR４/６褐色～10YR５/６黄褐色シルト（基盤層）が堆積している（図版２・３ 写真図版４）。このシルト層上面より古代の遺構及び近世の遺構が掘り込まれて遺構面となっているが、大部分は近世以降の粘土採掘による削平ないし近代の攪乱を受けている。実際、攪乱を免れた箇所の標高は10.5m～10.6mと周囲より50㎝以上高くなっており、いかに激しく改変を受けているか知ることができる。

近世の粘土採掘坑埋土は10YR４/２褐色～５Y４/１灰色のシルト質極細砂であり、均質な土質が広範囲に続くことから当初古代の遺物包含層として掘削をはじめた。しかし、範囲が広がるにつれて掘削後の遺構面が不整形な凹凸を呈し、出土する遺物も多数の古代の土器に混じって近世の陶磁器片が散見されるようになった。そして、調査区西側においては不整形な凹凸であった掘形は、東側では略長方形のものとなって多数検出された。以上の特徴から、この土層は古代の遺物包含層ではなく、近世以降に掘削された粘土採掘坑の埋戻土であると判断した。

基盤となるシルト層の下には細礫～大礫からなる礫層が堆積しており、それより下層には砂礫層が堆積している（第11図）。後述する古代の井戸は礫層上面まで、近世の井戸については礫層下部あるいは砂礫層に至る深さまで掘削しており、地下水位も年代によって変化していたようである。

第３節　遺構

1. 古代

上述のとおり、豆腐町遺跡では広い範囲で近世以降に粘土採掘坑が掘削されている。このため古代の遺構面も大部分が削り取られており、検出した遺構は井戸９基、柱穴60基程度にとどまった。柱穴については攪乱を免れたごく限られた範囲（６A～７A・９F・８G～９G・８H～９Hの一部）でしか検出できなかったものの、その密度は比較的高いといえる。このため、当初は周辺の調査と同程度には掘立柱建物が並んでいたものと思われる。ただし、掘立柱建物として復元できたものはなかった。

1)井戸

奈良時代の井戸は９基を検出している。素掘り、木組み、曲物積みの３種類があり、木組みのものは複数の型式がある。

SE01（図版４・８、写真図版５）

概　要　１区１Dより検出した縦板組で隅柱をもつ井戸である。一段下げした段階で隅柱と思われる６㎝×８㎝の木材と多数の川原石が出土したことから、木組み井戸を人為的に埋め戻したものと判断して調査を進めた。なお、

周囲は近世の粘土採掘坑により削平されており、上屋構造については確認できなかった。

形状・規模　長径186㎝、短径158㎝、楕円形の平面プランである。検出面から27㎝までは緩やかな傾斜だが、ここから下は垂直に掘り込まれている。検出面から底までの深さは81㎝で、掘形はシルト層を掘りぬいて基盤層の礫層上部まで達している。周囲は近世の粘土採掘坑が重複しており、遺構上面が削り取られているため、当初はさらに数10㎝の深さがあったと考える。

構　造　井戸枠は方形縦板組である。西辺で長さ45㎝、幅９㎝、厚さ２㎝の縦板２枚と、北東で隅柱が１本立った状態で出土している。隅柱と縦板はほぼ原位置を保っており、井戸枠の内法は１辺70㎝程度であったと考えられる。この他の部材は廃棄時に抜き取られたのであろう。

隅柱の下部には正方形の枘穴が穿たれるが、これが組立式の井戸枠だったことによるものか、転用材を使用したためであるかは判断しがたい。掘形と井戸枠との間はシルトで埋められており、井戸枠抜き取り後、径20㎝程度の円礫とともに埋め戻されている。

出土遺物　須恵器杯蓋・杯Ａ・杯Ｂ・稜椀・壺・甕・平瓶、土師器の甕・鍋・竈、製塩土器、瓦が出土している（図版22・23）。須恵器の杯底面に「大□」と書かれた墨書土器がある。

SE03（図版４・９、写真図版６）

概　要　１区４Ｂより出土した木組井戸で、SK01と切合関係にあり、これを切っている。周囲は攪乱を受けており、上屋構造については確認できなかった。

形状・規模　南北150㎝、東西152㎝の不整円形の平面プランで、検出面からの深さは153㎝である。基盤層下の砂礫層上部まで掘り込んでおり、断面形は袋状を呈する。底面より10㎝程度上方には拳大～人頭大の円礫が敷きつめられており、浄水施設と判断される。

構　造　井戸枠部材の多くは抜き取られているが、北辺に横板１枚、南辺に縦板３枚が残されていることから、横板組と立板組を併用し隅柱と横桟でこれを支持する構造と考えられる。東西辺の板材及び南西の柱は残っていないが、各部材はほぼ原位置を保っていることから、内法は一辺110㎝程度である。

抜き取りに際して北東の隅柱は桟との接続部分において切断されており、直線的な切断面形状から鋸を使用したものと考えられる。南辺についても縦板が原位置にあったのは２枚のみで、縦板の背後からは板材および桟と思われる棒材が出土している。

北辺では横板が１枚遺存している他、井戸枠内より角に桟を差し込むための枘穴を持つ部材が転倒して出土している。一部の隅柱・桟・板が原位置に近い状態で出土している一方で、井戸枠内および裏込めより部材が出土する状況から、井戸枠の一部が抜き取られて埋め戻されていると考えられる。袋状の掘形については抜取時のものであろう。

出土遺物　須恵器杯Ａ・杯Ｂ、土師器杯・高杯・甕、製塩土器、瓦器？の耳皿、井戸枠内より斎串が出土している。この他に最下層埋土より昆虫遺体（シロテンハナムグリ）が出土している。

SE05（図版５・10、写真図版７）

概　要　１区５Ａ・５Ｂにて検出した素掘り井戸であり、近世の粘土採掘坑によって掘形上面は削平されている。上層（第２層下部～第３層上部）・中層（第４層）では須恵器及び土師器がまとまって出土し、下層（第５層）において完形の土師器甕が出土している。付近で柱穴を２基検出しているが、周囲が近世の粘土採掘坑で削平されているため、上屋構造に伴うものか判断できなかった。

形状・規模　平面形は東西140㎝、南北94㎝の楕円形である。断面はほぼ垂直に掘り込まれており、検出面からの

深さは122cmを測る。

埋没状況　遺構埋土は総じて還元を受けてグライ化しており、上から５GY５／１オリーブ灰色シルト（第１層）、2.5Y４／１黄灰色中礫混じりシルト（第２層）、2.5Y４／１灰色粘土～シルト（第３層）、2.5Y４／１黄灰色粘土質シルト（第４層）、５GY６／１オリーブ灰色大礫質シルト（第５層）、7.5Y５／１灰色シルト（第６層）の順に堆積している。第１層～第５層は掘形中央に向けて均一に堆積しているのに対し、第６層は掘形南側のみに二段掘り状に堆積しており、井戸が一度埋没したのちに掘りなおされた可能性がある。また、第１層～第５層は多数の遺物を含み、埋土にベース土のブロックを含んでいることから人為的に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物　上層・中層・下層において土師器・須恵器が出土している。

上層からは土師器杯Ａ（60・61・63）、須恵器杯Ｂ（54）・漆の付着した杯Ａ（55）、が出土している。土層観察のための半截後に検出したため、出土は東側に偏っている。ただし、西側より出土したものは少ないため、全体の傾向は同じである。斜めに傾いたものや立った状態で出土したものが多い。

中層からは土師器杯Ｃ（68）、口縁部に漆の付着した杯Ｂが北側に偏って、折り重なった状態で出土している。

下層からは井戸底中心部から土師器甕（図版25　72）がほぼ完形で出土している。

SE07（図版６・11、写真図版８）

概　要　１区８Ｃで検出した縦板組横桟どめの井戸である。遺構検出時に南側の井戸枠（縦板）の一部が地表に露出していたため、木組み井戸と認識して調査を進めた。なお、周囲が粘土採掘坑で削平されており、上屋構造については確認できなかった。

形状・規模　平面形は東西105cm、南北120cmのやや歪な円形である。断面形はフラスコ状を呈し、検出面からの深さは80cmを測る。

構　造　四辺とも幅約30cm、長さ80cm前後、厚さ３cmの縦板を２枚ずつ立て並べ、その中ほどで幅10cm、長さ45cm程度の桟を組み合わせている。井戸枠内法は約60cm四方であり、井戸底部分で砂礫層に到達している。

埋没状況　裏込めは上から炭化物と基盤層のブロックを含む５Ｙ４／１灰色シルト（第１層）、2.5Y４／１　黄灰色シルト（第２層）、グライ化した基盤層ブロックを含む2.5Y４／１黄灰色シルト（第３層）がほぼ水平に堆積している。

井戸枠内については上から順に10YR４／６褐色シルト（厚さ13cm）、炭化物を含む10YR４／１褐灰色中礫～大礫混じり粘土～シルト（厚さ約25cm）、グライ化した基盤層ブロックを含む2.5Y４／１黄灰色粘土～シルト（厚さ約20cm）、2.5Y４／１黄灰色中礫混じり中砂～粗砂質シルト（厚さ約10cm）、５Ｙ４／１灰色中礫混じり粗砂～細礫（厚さ約10cm）が堆積している。井戸枠内埋土のうち、上部の４層は井戸廃棄時に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物　須恵器杯・皿類、土師器杯・皿類と甕、製塩土器などの土器類と動物遺体（マダイ上顎骨）が出土している。

SE08（図版６・12、写真図版９）

概　要　１区９Ｃで検出した横板組隅柱横桟どめの井戸である。周囲は粘土採掘坑で削平されているが、井戸周辺のみ島状に掘り残されていた。検出時に隅柱上部が出土したため、木組み井戸と判断して調査を進めた。

形状・規模　平面形は東西142cm、南北167cmの隅丸方形である。断面形はフラスコ状で、基盤層の砂礫層上面まで掘削しており、検出面からの深さは86cmを測る。

構　造　井戸枠は組立て式の横板組隅柱型であり、内法はおよそ80cm四方である。長さ75～80cm、幅約20cm、厚さ１～２cmの横板が下から２段分出土した。隅柱は下部において２つの部材を組み合わせる継手がされているもので、

北東のものは仕口とともに残っていたが、北西は継手を残して抜き取られていた。土井桁は見られないが、各隅柱の下部には木組みで桟が通されており、同様の機能を有していたものと思われる。このため、構築手順としては①柱を四隅に立て、②それを結ぶ桟を枘で組んだのち、③内側に横板を積み上げるという手順をとっている。

南の隅柱については、桟の枘を両端で切断して抜き取られている。ただし、隅柱の側面には横板を落とし込んで固定するための溝が無く、横板には相欠き仕口などの加工はされていないにも関わらず、横板は隅柱の内側に積み上げられている。このため、隅柱と横板の固定方法は不明である。

埋没状況　裏込めにはブロックを多く含む５Ｙ４／１灰色シルトが詰まっており、南東・南西隅では柱の抜き取り穴を検出している。井戸枠内には下層に10Ｙ５／１～10Ｙ６／１中礫混じり灰色シルトが約40㎝堆積しており、その上は土器片・礫等を多く含む５Ｙ４／１灰色極細砂混じりシルト、炭化物を多く含む10YR４／２灰黄褐色シルトが堆積している。これらの埋土は総じて埋戻し時のものであると考えられる。

出土遺物　須恵器杯Ｂ蓋・杯Ｂ、土師器杯Ａ、甕、竈と石製品（台石）、金属製品（刀子）、木製品（曲物・挽物皿・鳥形）が出土している。須恵器には「大」の墨書、土師器には「郡」？の墨書と墨点のあるもの、刻書のあるものが含まれている。

このうち、底部に墨点のある土師器杯（93）と刀子（Ｍ１）が井戸枠内から出土している。曲物（Ｗ44）は裏込めより出土した。

SE09（図版６・13、写真図版10・11）

概　要　１区10Dにて検出した横板組隅柱横桟型の木組み井戸である。ただし、井戸枠の大部分は腐食あるいは抜き取りによって残っていなかった。近世の集石土坑SK08、SK07に切られている。

形状・規模　堀形平面形は東西159㎝、南北160㎝の略円形である。断面はほぼ垂直に基盤砂礫層の上面まで掘りこまれており、検出面からの深さは143㎝を測る。

構　造　井戸枠の大部分は腐食ないし抜き取りにより残っていなかったが、北東隅で腐食した柱の痕跡と北辺で横板の痕跡が確認でき、残りの３辺には桟の一部が残っていた。このため、横板組隅柱横桟型の井戸枠であった可能性が高い。井戸底は径62㎝の曲物が一部残っており、集水施設となっているが、平面的位置が井戸枠からやや西にズレている。

埋没状況　上から2.5Ｙ５／２暗灰黄色ブロック混じり細砂～中砂質シルト（第１層）、2.5Ｙ４／１黄灰色大礫質シルト（第２層）、2.5Ｙ４／１黄灰色シルト（第３層）、2.5Ｙ５／２暗灰黄色極細砂～細砂質シルト（第４層）、2.5Ｙ６／４にぶい黄色シルト（第５層）、7.5Ｙ５／１灰色シルト（第６層）、炭化物を含む５Ｙ４／１灰色シルト（第７層）、10YR４／１灰黄褐色粗砂～細礫質中礫～大礫（第８層）が堆積している。

このうち、第４層～第７層が井戸枠の裏込めであり、第８層は湧水層である砂礫層を60㎝程度掘り込んで集水施設およびその保護を目的として曲物を設置したのちに埋め戻されたものである。第１層～第３層は土器や木製品などとともに人頭大の円礫～亜円礫を多数含んでおり、井戸廃棄時の埋戻し土と考えられる。

出土遺物　須恵器杯蓋（109・110）・杯Ｂ（112～114）、土師器杯（115・116）・皿（117～119）・甕（120・121）、製塩土器（122～128）、土錘（129）、曲物（W12・W19・W21）・櫛（W20）等の木製品、曲物に付着した和同開珎（Ｍ２）が出土している。

SE13（図版７・13、写真図版12）

概　要　２区10Fにて検出した曲物積みの井戸である。

形状・規模　平面形は東西73㎝、南北65㎝の略円形である。断面はほぼ垂直に砂礫層まで掘り込まれ、検出面から

の深さは72cmを測る。

構　造　１段目に径45cmの曲物を据え、その上に径41cmの一回り小さい曲物を積み上げる。このため、１段目の上に幅３～４cm、長さ35～40cmの薄板を方形に組み、さらにその四隅に板を斜交いに渡すことで２段目の土台としている。

埋没状況　裏込めには10YR４/３にぶい黄褐色中砂質粗砂～極粗砂（第１層）、2.5Y５/２暗灰黄色粗砂混じりシルト質極細砂～細砂（第２層）、井戸底には10YR４/２灰黄褐色中礫混じり極細砂～細礫（第３層）が堆積していた。これらは井戸構築時のものである。

井戸枠内には第３層より上に約60cmの厚さで10YR４/３にぶい黄褐色粗砂～極粗砂が堆積しており、中から完形の土師器杯２点が出土している。そして、この砂層上面に径15～25cm程度の礫とともに多数の土器片が詰められており、10YR４/１褐灰色の炭化物を５％程度含むシルト質極細砂が堆積している。井戸枠内に堆積しているこれらの埋土及び遺物は井戸廃棄時の埋め戻しによるものと考えられる。

出土遺物　須恵器杯Ａ・壺、土師器杯・甕、竈が出土している。

SE14（図版７・14、写真図版13）

概　要　３区11Ｊにおいて検出した横板組の井戸である。周囲では基盤シルト層が全て削平されており、基盤下層の礫層中にて検出していることから、かなりの部分が削平されていると考えられる。

形状・規模　平面形は東西110cm、南北113cmの隅丸方形である。検出面からの深さは68cmを測り、井戸底部分を１段深く掘り込んでいる。

構　造　横板組で、井戸枠内法はおよそ70cm四方である。側板は２段残存しており、上下の板材の間には薄い桟木が用いられている。側板の隅の部分は、仕口で組み合わされているようだが、板材の遺存状況が悪く不明瞭であった。

埋没状況　裏込めには10YR５/２灰黄褐色極粗砂～中砂（第４層）が堆積しており、井戸構築時のものと考えられる。

集水施設には土器片をわずかに含む2.5Y４/２にぶい黄褐色中砂～粗砂（第２層）、10YR５/４にぶい黄褐色細礫～中礫混じり中砂～粗砂（第３層）が堆積している。両者とも全体に酸化鉄が沈着しており、比較的淘汰が良いことから、井戸の使用期間中に自然堆積したものと考えられる。

井戸枠内には上から7.5YR４/２灰褐色中礫混じりシルト質極細砂～中砂、炭化物を多く含む7.5YR４/３褐色シルト～中砂、10YR４/２灰黄褐色シルト～細砂、５Ｙ４/１灰色シルト～中砂（第１層）の順に堆積している。このうち上２層については礫とともに瓦片が、下２層については土器数点と部材が出土している。これらの部材について井戸枠を壊したものを廃棄したものかは不明であるが、上記の埋土については井戸廃棄時の埋戻し土と見て大過ないと考える。

出土遺物　井戸枠内埋土上層より瓦数点、下層より須恵器杯Ｂ蓋・杯Ｂ、土師器杯・甕・鉢、竈が出土している。このうち底面に「井」と墨書された土師器皿（142）が１点含まれる。

SE15（図版４）

概　要　１区２Ａ・３Ａで検出した。平成20年に姫路市教育委員会による第５次調査で検出された井戸の一部であり、この時に調査区を一部拡張して井戸全体が調査されている。多数の土器と漆紙文書、木簡、斎串が出土している。なかでも漆紙文書は姫路市域初出土例であり、記載内容から天平勝宝９歳（757）以降に書かれたものである。

調査後に真砂によって埋め戻されており、今回の調査では調査区にかかる部分について平面のみ再検出を行った。

形状・規模　東西約140cm、南北は一部が調査区外に続くためおよそ70cmの範囲で検出している。平面形は楕円形

ないし略円形と見られる。

出土遺物　今回の調査では遺物は出土していない。

２）土坑

奈良時代の土坑は３基を検出している。

SK01（図版４・９、写真図版６・15）

概　要　１区４Ｂで検出した集石土坑である。SE03と切り合い関係にあり、SE03に切られている他、南東の一部を攪乱によって削平されている。

形状・規模　N65°Wに主軸を持ち、平面形は長径228㎝、短径約100㎝の楕円形である。断面形は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは18㎝を測る。

埋没状況　底面には拳大～人頭大の円礫が多数集められており、それらを2.5Y４／１黄灰色極細砂混じりシルトが被覆している。

出土遺物　礫の間に噛んだ状態で須恵器杯Ｂ蓋・杯Ｂ・盤、竈が出土している。

SK12－１（図版７・15、写真図版14）

概　要　３区10Hで検出している。近世の土坑SK12-２が上層に平面的に重複している。

形状・規模　平面形は東西126㎝、南北110㎝の楕円形である。断面は緩やかな弧状を呈し、検出面からの深さは12㎝を測る。

埋没状況　10YR４／２細礫～大礫混じりシルト質極細砂～細砂が堆積しており、炭化物・焼土が含まれていた。

出土遺物　拳大の礫に噛んだ状態で須恵器杯Ｂ蓋・杯B、土師器杯・高杯・甕・竈が出土している。

SK20（図版７）

概　要　３区10Gで検出している。

形状・規模　東西約2.5m、北端および南端は削平により失われているため、本来の南北幅は2.3m以上である。検出面からの深さは約60㎝を測る。

埋没状況　埋土上層には焼土塊が含まれていた。

出土遺物　須恵器杯B、土師器高杯が出土している。

３）柱穴

柱穴は後世の削平を免れたわずかな範囲でのみ検出した。ただし、比較的まとまって柱穴を検出した２区９Ｆでは、東西約10m、南北約５ｍの範囲に47基もの柱穴が密集していた。このことから、本来調査区の広い範囲に柱穴が広がっていたものと考えられる。

ただし、建物跡として復元できるものはなかったため、時期を特定しうる遺物が出土した柱穴を中心に報告する。

SP05（図版６）

概　要　１区８Ｃ、SE07の東で検出している。一部、近世の粘土採掘坑に切られている。

形状・規模　平面形は東西50㎝、南北42㎝の楕円形である。断面形は弧状を呈し、検出面からの深さは10㎝である。

埋没状況　2.5Y４／１黄灰色シルト質極細砂が堆積している。柱痕は見られない。

出土遺物　土師器甕（176）が出土している。

SP11（図版６）

概　要　１区９Ａ・10Ａで検出している。

形状・規模　平面形は東西73㎝、南北62㎝の略円形である。断面形はＵ字状を呈し、検出面からの深さは54㎝である。

埋没状況　柱痕部分には10YR７／３にぶい黄橙色シルト、裏込め土には10YR６／６明黄褐色シルト、10YR７／２にぶい黄褐色シルトが堆積している。柱の抜取痕跡は見られない。

出土遺物　土師器杯（177）・竈（178）が出土している。

SP12（図版６）

概　要　１区10Ｂで検出している。近世の粘土採掘坑に半分程度切られている。

形状・規模　平面形は東西40㎝、南北の残存長20㎝の半円形である。断面形はＵ字状を呈し、検出面からの深さは23㎝である。

埋没状況　柱痕部分には2.5Ｙ５／２暗灰黄色シルト質極細砂、裏込めには10YR４／１褐灰色シルト質極細砂が堆積している。

出土遺物　鍋（179）と土師器甕の小片が出土している。

SP19（図版７、写真図版15）

概　要　２区９Ｆで検出している。

形状・規模　平面形は径30㎝の円形である。断面形は弧状を呈し、検出面からの深さは23㎝である。

埋没状況　柱痕部分には炭化物を含む10YR４／２灰黄褐色中砂混じりシルト質極細砂、裏込めには10YR４／３にぶい黄褐色中砂～粗砂質極細砂が堆積している。

出土遺物　杯Ｂ蓋が出土しているが、小片のため図化していない。

SP23（図版６）

概　要　１区10Ｂで検出している。

形状・規模　平面形は径42㎝の円形である。断面形はＵ字状を呈し、検出面からの深さは23㎝である。

埋没状況　柱痕部分には炭化物を含む10YR４／１褐灰色シルト質極細砂、裏込めにはブロックを含む10YR４／１褐灰色シルト質極細砂が堆積している。

出土遺物　土師器甕が出土しているが、小片のため図化していない。

SP24（図版５）

概　要　１区７Ａで検出している。

形状・規模　平面形は一辺42㎝の方形である。断面形も箱型を呈し、検出面からの深さは20㎝である。

埋没状況　底面には長径28㎝の川原石を礎板として据え、この上に柱痕部分の堆積が見られる。柱痕部分は2.5Y 4/1黄灰シルトが、裏込め土は10YR4/1褐灰色シルト質極細砂が堆積している。

出土遺物　遺物は出土していない。

SP30（図版７、写真図版15）

概　要　２区９Ｆで検出している。

形状・規模　平面形は一辺36cmの方形である。断面形も箱型を呈し、検出面からの深さは16cmである。

埋没状況　上から10YR５／２灰黄褐色中砂～粗砂質極細砂、10YR４／２灰黄褐色シルト質極細砂が堆積している。柱痕は残っていない。

出土遺物　杯Ｂ蓋が出土しているが、小片のため図化していない。

SP65（図版７）

概　要　２区９Ｆで検出している。埋土の状況から杭痕の可能性がある。

形状・規模　平面形は一辺25cmの方形である。断面形はＵ字状を呈し、検出面からの深さは24cmである。

埋没状況　柱痕部分は10YR４／２灰黄褐色シルト質極細砂が堆積しているが、掘形下端がＶ字になっており杭痕の可能性がある。裏込めには10YR５／２灰黄褐色中砂～粗砂質極細砂が堆積している。

出土遺物　遺物は出土していない。

2.近世の遺構

1）井戸

近世の井戸は6基を検出しており、素掘りと石積みの2型式がある。

SE02（図版４、写真図版18）

概　要　１区２Ｂで検出した溜め井である。西側の一部は粘土採掘坑に切られている。

形状・規模　平面形は径約120cmの円形であり、検出面からの深さは44cmを測る。掘形断面は直に掘り込まれているが、砂礫層まで到達していない。

構　造　堀形中央よりやや西に偏って井戸枠として径約100cmの曲物が据えられていたが、北西部の４分の１は残っておらず、粘土採掘坑による攪乱で失われていると考えられる。この曲物は基盤シルト層の上に据えられていることから溜め井であると考えられる。

埋没状況　裏込めにはＮ６／０灰色ブロック混じりシルト、井戸枠内にはＮ５／０灰色シルトが堆積している。

出土遺物　奈良時代の土師器が出土しているが、小片のため図化していない。

SE04（図版５・16、写真図版16）

概　要　１区６Ａで検出した石組みの井戸である。

形状・規模　掘形平面形は約160cm四方の隅丸方形であり、断面は垂直に掘り込まれている。検出面からの深さは170cmを測り、基盤層下の砂礫層を110cm程度掘り込む。

構　造　長さ約80cm、太さ８cm程度の丸太材を使用して方形の土居桁を組み、その上に20cm～30cmの川原石が積み上げられている。底部内寸径は約70cm、上部内寸径は約60cmであり、持ち送りの形状を呈している。

埋没状況　裏込めには2.5Y４／３オリーブ褐色細礫質細砂～粗砂（第１層）が詰められている。井戸枠内の埋土は作業スペースが狭いため分層出来なかったが、埋戻し土である中礫～大礫混じりシルトが堆積している。

出土遺物　炮烙、唐津焼、京焼系陶器、擂鉢などの土器（275～285）と、櫛・漆器・下駄・馬形・曲物などの木製品（Ｗ49～Ｗ70）が出土している。この他にニホンイタチ・カエル・サザエの動物遺体が出土している。

SE06（図版６・17、写真図版17）

概　要　１区８Ｄで検出した石組みの井戸である。

形状・規模　掘形平面形は東西187㎝、南北210㎝の楕円形であり、断面は検出面より80㎝はやや斜めに、それ以下は垂直に掘り込まれている。検出面からの深さは191㎝を測り、基盤層下の砂礫層を100㎝程度掘り込む。

構　造　長さ約100㎝、太さ10㎝程度の丸太材を使用して方形の土居桁を組み、その上に15㎝～35㎝の川原石が積み上げられている。底部内寸径は82㎝、上部内寸径は約70㎝であり、持ち送りながら積み上げられる。

埋没状況　裏込めには上から10YR４／１褐灰色シルト質中礫～大礫（第１層）、10YR５／４にぶい黄褐色中礫混じりシルト質極細砂（第２層）、2.5Y５／３黄褐色シルト質極細砂（第３層）、10YR４／１褐灰色中礫質中砂～細礫（第４層）が堆積している。いずれもしまりが良く、水平に突き固められている。

井戸枠内の埋土は作業スペースの関係で検出面より１ｍ程度しか分層できなかった。上から10YR５／６黄褐色中礫混じりシルト質極細砂（厚さ５㎝）、10YR４／１灰黄褐色中礫～大礫混じり中砂質極細砂（厚さ20㎝）、2.5Y４／１黄灰色中礫混じりシルト質極細砂（厚さ30㎝）、５Y４／１灰色大礫混じり中砂～粗砂質シルト～極細砂（厚さ40㎝）が堆積している。これらは井戸廃棄時の埋戻し土である。

出土遺物　明石焼擂鉢（286）、波佐見焼茶碗（287）の他、イヌ・サザエ・アカニシの動物遺存体が出土している。

イヌの骨格は肋骨・椎骨の一部を除いてほぼ全身が検出面より120㎝の深さからまとまって出土した。解体痕は見られないため、埋戻し途中で投棄されたものと考えられる。

SE10（図版５・18、写真図版17）

概　要　２区７Ｅで検出した素掘りの井戸である。

形状・規模　平面形は径約160㎝の円形であり、断面はほぼ垂直に掘り込まれている。検出面からの深さは194㎝を測り、基盤層下の砂礫層を110㎝程度掘り込んでいる。井戸底には径約80㎝の集水施設を有する。

出土遺物　明石焼擂鉢（288）、唐津焼碗（289）とサザエの動物遺体が出土している。

SE11（図版６・７・19、写真図版17）

概　要　１区８Ｆで検出した石組みの井戸である。

形状・規模　掘形平面形は東西180㎝、南北195㎝の隅丸方形である。断面は検出面より100㎝程度はほぼ垂直に、それ以下は幅を狭めて深さ70㎝程度の集水施設を掘り込む。全体の深さは検出面より210㎝を測り、基盤層下の砂礫層を150㎝程度掘り込む。

構　造　長さ約100㎝、太さ８㎝の丸太材を使用して方形の土居桁を組み、その上に20㎝～40㎝の川原石が積み上げられている。底部内寸径は82㎝、上部内寸径は約70㎝であり、持ち送りながら積み上げられる。

埋没状況　裏込めには上から10YR４／１褐灰色シルト質中礫～大礫（第１層）、10YR５／４にぶい黄褐色中礫混じりシルト質極細砂（第２層）、2.5Y５／３黄褐色シルト質極細砂（第３層）、10YR４／１褐灰色中礫質中砂～細礫（第４層）が堆積している。いずれもしまりが良く、水平に突き固められている。

出土遺物　軒丸瓦（290）が出土している。

SE12（図版７）

概　要　１区８Ｆで検出した素掘り井戸である。北半分は攪乱により深さ30㎝程度が削平されている。

形状・規模　掘形平面形は東西190㎝、南北159㎝の不整円形である。断面は検出面より90㎝程度はほぼ垂直に掘削され、中央には内径70㎝、深さ50㎝程度の集水施設がつくられる。全体の深さは検出面より170㎝を測り、基盤層

下の砂礫層まで掘り込む。

構　造　素掘り井戸であり、集水施設のみ縦板を堀形に沿って円形に並べて保護している。

出土遺物　東山焼の焜炉蓋（291）が出土している。

2）土坑

SK03（図版５・21、写真図版18）

概　要　１区５Ａで古代の井戸SE05に近接して検出した集石土坑である。東西の一部は粘土採掘坑と切り合っているが、前後関係については明らかにすることができなかった。ほぼ全体が残っていると考えられる。

形状・規模　平面は東西50cm、南北120cmの楕円形である。断面形は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは７cmを測る。

埋没状況　10YR４/１褐灰色極細砂質シルトとともに、掘形中央部に長径10～13cmの川原石が詰められている。

出土遺物　古代の須恵器・土師器が礫に噛んで出土しているが、その中に混じって波佐見焼くらわんか茶碗と丹波焼甕の破片が出土している。ただし、小片のため図化していない。

SK07（図版６・21）

概　要　１区10DでSK08に近接して検出した土坑である。古代の井戸SE09と切り合い関係にあり、SE09を切っているが、SK08との前後関係は不明である。粘土採掘坑である。

形状・規模　平面は東西125cm、南北140cmの楕円形である。断面形は緩やかな弧状を呈し、検出面からの深さは19cmを測る。

埋没状況　上層に10YR５/６黄褐色シルト質極細砂、下層に10YR４/２灰黄褐色細砂～中砂質極細砂が堆積している。下層には中礫と大礫が25％、炭化物粒が７％含まれている。これらの層相から粘土採掘坑掘削時に出た礫を廃棄しながら埋め戻されているものと考えられる。

出土遺物　古代の須恵器・土師器が礫に噛んで出土しているが、いずれも小片で図化できなかった。

SK08（図版６・21）

概　要　１区10DでSK07に近接して検出した土坑である。SE09と切り合い関係にあり、SE09を切っているが、SK07との前後関係は不明である。

形状・規模　平面形は東西50cm、南北87cmの楕円形である。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは18cmを測る。

埋没状況　上層に10YR５/４にぶい黄褐色中礫～大礫混じり中砂～粗砂質細砂、下層に５Ｙ５/１灰色中礫混じりシルト質極細砂が堆積している。上層は10cm～15cmの中礫15％を含み、下層は中礫を５％含む。これらの礫は基盤層下層に多くあるが、その深さまでは掘削されていないことから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物　古代の須恵器・土師器が出土しているが、いずれも小片で図化できなかった。

SK11（図版７・20、写真図版14）

概　要　３区10Hで検出した集石土坑である。SK12-２、SP72と切り合い関係にあり、前者を切り、後者に切られている。

形状・規模　平面は径約80cmの円形であり、検出面からの深さは26cmを測る。

埋没状況　上から10YR４/２灰黄褐色シルト質極細砂（第１層）、2.5Y４/１黄灰色シルト質極細砂～細砂（第２層）が堆積している。第１層には拳大の礫が多数詰め込まれているが、第２層には入っていない。

出土遺物　遺物は出土していない。

SK12－２（図版７・20、写真図版14）

概　要　３区10Hで検出した集石土坑で、SK11・SK19・SP72に切られている。奈良時代の土坑SK12－１と平面的に重複している。

形状・規模　東西285cm、南北は削平により両端を失っているものの約250cm残存しており、平面形は歪な半円形である。断面形は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは15cm前後である。

埋没状況　上から、旧耕土及び基盤層のブロックが混じる2.5Y５／２暗灰黄色シルト質極細砂～細砂（第３層）、旧耕土に近い性状の2.5Y4.7/1.7暗灰黄色極細砂～細砂（第４層）、基盤層ブロックが混じる10YR４／４褐色シルト混じり細砂～中砂（第５層）が堆積している。

出土遺物　樽底板（W71）が出土している。

SK19（図版７・20、写真図版14）

概　要　３区10Hで検出した土坑であり、SK12-２を切っている。

形状・規模　平面形は歪な楕円形であり、東西90cm、南北は削平により南側を失っているものの57cmの範囲が残存している。断面形は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは15cm前後である。

埋没状況　2.5Y６／２灰黄色極細砂～細砂が堆積しており、埋土中には旧耕作土をブロック状に含んでいる。

出土遺物　古代の須恵器が出土しているが、小片のため図化していない。近世の遺物については出土していない。

SK22（図版７・21）

概　要　３区９G・９Hで検出した土坑である。南北が近代以降の攪乱を受けているため、全形は明らかでない。

形状・規模　最大幅2.8m、長さ３ｍ以上の規模の土坑である、断面形はゆるやかな弧状を呈し、検出面からの深さは84cmを測る。

埋没状況　上から、焼土を含む10YR５／４にぶい黄褐色シルト質極細砂～細砂、焼土・基盤層ブロックをわずかに含む10YR４／３にぶい黄褐色シルト～極細砂、10YR５／３にぶい黄褐色シルト～細砂が堆積している。

出土遺物　遺物は出土していない。

SK30（図版21）

概　要　３区６Gで検出した集石土坑である。南西の一部のみ近代以降の攪乱を受けているが、ほぼ全体が残っている。

形状・規模　平面形は東西52cm、南北84cmの楕円形である。断面形はゆるやかな弧状を呈し、検出面からの深さは15cmを測る。

埋没状況　2.5YR４／１黄灰色シルト質極細砂とともに、掘形中央部に長径５～15cmの川原石が詰められている。基盤下層の礫層まで掘り込まれていないことから、周囲の粘土採掘坑掘削時に出た礫を集めたものと考えられる。

出土遺物　遺物は出土していない。

SK37（図版21、写真図版18）

概　要　３区７Gで検出した集石土坑である。北側の半分以上が近代以降の攪乱を受けている。

形状・規模　東西57cm、南北は62cmが残っており、平面形は楕円形と考えられる。掘形は極めて浅く、検出面からの深さは６cmを測る。

埋没状況　2.5YR４／１黄灰色シルト質極細砂とともに、掘形中央部に長径５～10㎝の川原石が詰められている。基盤下層の礫層まで掘り込まれていないことから、周囲の粘土採掘坑掘削時に出た礫を集めたものと考えられる。
出土遺物　遺物は出土していない。

３）粘土採掘坑

豆腐町遺跡の調査では、調査区の大部分で近世～近代の粘土採掘坑が多数見つかっている。この粘土採掘坑は古代の遺構を削平しているため、その埋土には多数の土師器・須恵器や竈などの古代の遺物が多く含まれているが、わずかに陶磁器片や煉瓦などが含まれていることから、近世～近代のものである。

調査の結果、粘土採掘坑は掘形の規格性および掘削深度によって２種類に大別できることがわかった。以下に分類を示し、各類型の代表的なものについていくつか報告することとする。

粘土採掘坑Ⅰ

掘形の規格性が低く、隣り合うもの同士が不規則に切り合っているもの。平面形は不正円形や、直線ないし矩形の溝状など多様である。断面形は緩やかな弧状を呈し、掘削深度も20～30㎝前後と浅い傾向にある。調査区西半及び南端に分布しており、17世紀前半～19世紀の遺物が出土している。

粘土採掘坑Ⅱ

掘形の規格性が高く、N27°Eを主軸にして切り合うことなく規則正しく並ぶもの。平面形は幅３ｍ前後、長さ4～9ｍの長方形をしている。断面形は箱型で、掘削深度は50㎝以上と深いものが多く、基盤層下層の礫層付近まで掘り込んでいるものもある。調査区中央から東半にかけて広がっており、18世紀後半～19世紀の遺物や煉瓦等が出土している。

粘土採掘坑の間は畦畔が残されており、小区画ごとの畦畔は幅20～30㎝である。この他、20m程度の間隔で大区画が設けられ、そこでは幅80㎝程度の畦畔も見られる。これらは採掘した粘土を運搬する際の通路として遺されたものと考えられる。

SX01（図版４）

概　要　１区１Ａで検出した粘土採掘坑であり、粘土採掘坑Ⅰに分類される。
形状・規模　E27°Nに主軸を持ち、平面形は幅２ｍ、長さ４ｍの溝状を呈する。断面形は緩やかな弧状を呈し、検出面からの深さは25㎝を測る。
埋没状況　2.5Y４／１黄灰色シルト質極細砂が堆積している。埋土中には基盤層のブロックが多く含まれており、全体に還元を受け変色している。
出土遺物　古代の土器とともに12世紀後半～13世紀前半の白磁碗（292）が出土している。

SX03（図版４）

概　要　１区１Ｂで検出した粘土採掘坑であり、粘土採掘坑Ⅰに分類される。
形状・規模　平面形は東西１ｍ、南北1.2mの不整円形で、断面形は緩やかな弧状を呈する。検出面からの深さは10㎝である。
埋没状況　2.5Y４／１黄灰色シルト質極細砂が堆積している。埋土中には基盤層のブロックが多く含まれており、全体に還元を受け変色している。
出土遺物　古代の土器とともに19世紀前半の京焼系陶器碗（301）が出土している。

SX06（図版４、写真図版19）

概　要　１区２B～２Dにかけて検出した粘土採掘坑である。複数の粘土採掘坑が複雑に切り合っており、粘土採掘坑Ⅰに分類される。

形状・規模　N19°Eに主軸を持ち、平面形は幅3.3m、長さ26mの直線的な溝状である。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは35cmを測る。

埋没状況　2.5Y４/１黄灰色シルト質極細砂が堆積している。埋土中には基盤層のブロックが多く含まれており、全体に還元を受け変色している。

出土遺物　古代の土器とともに17世紀前半の志野焼向付（第12図343）の小片が出土している。

第12図　SX06出土遺物

SX11（図版４、写真図版19）

概　要　１区２B～２Dにかけて検出した粘土採掘坑である。粘土採掘坑Ⅰに分類される。

形状・規模　N19°Eに主軸を持ち、平面形は幅2.5m～3.0m、長さ21.7mの直線的な溝状である。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。

埋没状況　2.5Y４/１黄灰色シルト質極細砂が堆積している。埋土中には基盤層のブロックが多く含まれており、全体に還元を受け変色している。

出土遺物　古代の土器とともに19世紀の丹波焼擂鉢（297）が出土している。

SX20（図版５）

概　要　１区４A～４Bにかけて検出した粘土採掘坑である。粘土採掘坑Ⅰに分類される。

形状・規模　N31°Eに主軸を持ち、平面形は幅2.5m、長さ約６mの直線的な溝状である。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは21cmを測る。

埋没状況　2.5Y４/１黄灰色シルト質極細砂が堆積している。埋土中には基盤層のブロックが多く含まれており、全体に還元を受け変色している。

SX55（図版６）

概　要　２区９D～10Dで検出した粘土採掘坑である。粘土採掘坑Ⅱに分類される。

形状・規模　平面形は３m四方の方形であり、他のⅡ類の粘土採掘坑と異なり主軸をやや西に振っている。断面形は箱型を呈し、検出面からの深さは50cmを測る。

埋没状況　上から基盤層ブロックを含んだ10YR５/４にぶい黄褐色中礫混じりシルト（図版３第32層）、2.5Y５/４暗灰黄色中礫混じりシルト質極細砂（第33層）が堆積している。下層には基盤層由来の中礫が１％含まれている。

出土遺物　古代の土器とともに桟瓦の未成品、割れた煉瓦が出土している。

SX60（図版５・21、写真図版19）

概　要　２区５E～５Fで検出した粘土採掘坑である。粘土採掘坑Ⅰに分類され、SX58より続く長方形掘形の粘

土採掘坑Ⅱに切られている。

形状・規模　20° NEに主軸を持ち、平面形は幅1.2m、長さ８ｍの矩形の溝状である。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは35cmを測る。

埋没状況　2.5Y４／１黄灰色細礫～大礫混じり粗砂質極細砂が堆積しており、掘削の際に出た基盤層由来の礫層が含まれている。

出土遺物　奈良時代の土器が出土している。

SX64（図版６）

概　要　２区８Ｄ・８Ｅで検出した粘土採掘坑である。粘土採掘坑Ⅱに分類される。幅10cm程度の畦畔を挟んでSX41の北に隣接しており、東側には幅1.3mの畦畔が南北に走っている。

形状・規模　N27° Eに主軸を持ち、平面形は幅3.1m、長さ3.9mの長方形である。断面形は箱型を呈し、検出面からの深さは65cmを測る。

埋没状況　10YR３／１黒褐色極粗砂質細礫～大礫が堆積している。これらの礫については土取りの際に到達した基盤層下の礫層由来のものと考えられる。

出土遺物　古代の土器とともに美濃焼大皿（300）、窯道具（304・305）、煉瓦が出土している。

SX65－３（図版５）

概　要　２区７Ｆで検出した粘土採掘坑である。粘土採掘坑Ⅱに分類される。

形状・規模　Ｗ４°Ｎに主軸を持ち、平面形は幅1.6m、長さ2.1mの長方形である。断面形は箱型を呈し、検出面からの深さは50cmを測る。

埋没状況　2.5YR４／１黄灰色シルト質極細砂とともに、掘形中央部に長径５～10cmの川原石が詰められている。基盤下層の礫層まで掘り込まれていないことから、周囲の粘土採掘坑掘削時に出た礫を集めたものと考えられる。

出土遺物　古代の土器とともに窯道具（306）、丹波焼甕（311）、漆器椀（Ｗ72）が出土している。

SX66（図版６）

概　要　２区７Ｅ・８Ｅで検出した粘土採掘坑である。粘土採掘坑Ⅱに分類される。

形状・規模　N30° Eに主軸を持ち、平面形は幅2.5m、長さ3.8mの長方形である。断面形は箱型を呈し、検出面からの深さは59cmを測る。

埋没状況　2.5YR４／１黄灰色シルト質極細砂とともに、掘形中央部に長径５～10cmの川原石が詰められている。基盤下層の礫層まで掘り込まれていないことから、周囲の粘土採掘坑掘削時に出た礫を集めたものと考えられる。

出土遺物　古代の土器とともに19世紀前半の京焼系陶器の鍋蓋（299）が出土している。

SX67（図版６）

概　要　２区８Ｄ・８Ｅで検出した粘土採掘坑であり、粘土採掘坑Ⅱに分類される。SX67の西には幅1.3mの大畦畔が27° NEで南北に走っており、この畦畔を挟んでSX64がある。

形状・規模　北側の一部が攪乱を受けているため、平面形は幅2.6m、長さ５ｍ以上の長方形である。断面形は箱型を呈し、検出面からの深さは51cmを測る。

埋没状況　10YR３／１黒褐色極粗砂質細礫～大礫が堆積している。これらの礫については土取りの際に到達した基盤層下の礫層由来のものと考えられる。

出土遺物　古代の土器とともに瓦質土器（296）が出土している。

SX77（図版１）

概　要　３区３Ｈ・３Ｉ・４Ｈ・４Ｉにまたがる粘土採掘坑である。粘土採掘坑Ⅱに分類される。

形状・規模　西側は調査区外に続いており、東側は攪乱を受けていることから全容は明らかでないが、東西５ｍ以上、南北9.8mの規模を持っている。掘形は側壁を垂直に掘削し、底面は緩やかな弧状を呈する。検出面からの深さは80cmを測る。

埋没状況　10YR４／２灰黄褐色小礫～中礫混じりシルト～中砂が堆積している。

出土遺物　古代の土器とともに炮烙（294・295）が出土している。

SX83（図版１）

概　要　３区６Ｊの北壁沿いで検出した粘土採掘坑である。

形状・規模　大部分が調査区外に続いているため、全形は明らかでないが、平面形は弧状を呈する。断面形は緩やかな弧状を呈し、検出面からの深さは36cmを測る。

埋没状況　上から10YR４／４褐色シルト～中砂、10YR４／３にぶい黄褐色シルト質極細砂～中砂が堆積している。

出土遺物　古代の土器とともに唐津焼碗（298）が出土している。

第４節　遺物

１）土器･土製品

SE01（図版22・23、写真図版22・23）

須恵器杯蓋・杯Ａ・杯Ｂ・稜椀・壺（13）・甕・平瓶、土師器の甕・鍋・竈、製塩土器、瓦が出土している。須恵器の杯底面に「大□」と書かれた墨書土器がある。時期は８世紀前半か。

須恵器

１～３・７・８は杯蓋である。１・２は天井部の頂部が平らな笠形を呈し、３は天井部がほぼ平坦である。１は口径14cmで扁平な宝珠形のつまみをもつ。２の口径は12.8cm。３は口径20.8cm。内面から口縁部外面にかけて濃い色の漆が付着している。７・８は天井部がほぼ平坦で、口縁部近くで屈曲する。７の口径は21cm。径7.7cmの環状つまみが付き、杯Ｌ（稜椀）の蓋であろう。８は口径20.6cm。内面に薄く墨が付着している。

４・５は杯Ｂである。４・５とも口径13cm以下、高さ4.5cm程度で、口縁の外傾度も似通っている。４は高台内側に爪形文がみられる。

６は杯Ａである。口径13.2cm　高さ4.3cmで、杯Ｂと類似した口径である。底面が厚い。

９は杯Ｌすなわち稜椀である。口径20.6cmとやや大型である。体部の稜線は比較的下にあり、稜線以下は丁寧なヘラケズリ後、ヘラミガキを施している。

10・11は細長い口頸部と肩が張り稜角を呈する体部から成る長頸壺（壺Ｋ）である。平底で高台を付すタイプである。

12は甕である。口縁端部は上方につまみあげる。体部に平行タタキを施す。

14は平瓶である。口縁端部と把手（提梁）を欠く。把手は破片から断面長方形であったと思われる。

土師器

15～20は甕である。肩部から胴部かけては余り膨らまず、口縁部が大きく外反する形状である。胴部外面は概ね縦方向のハケメを施し、内面はナデまたは指オサエを残す。

21・22は把手である。21は鍋の把手で内面は全面にやや濃く煤が付着し、把手の下面は赤変している。22は竈もしくは甑の把手で内面は上半分に薄く煤が付着している。

竈

23～25は竈の焚口部、26は曲庇の頂部の破片である。

製塩土器

27～30は砲弾形、31・32は甕形の製塩土器である。27～29は厚手で深い鉢形である。30はやや薄手のつくりである。27は内面に指ナデの痕が残る。28は口縁端部に棒状の圧痕が残る。

32は31に比べて薄手で外面に粗いハケ状の調整が残る。いずれも胎土に大きめの砂粒が残るよく似た胎土で、27・29・31・32は橙色を呈するが、28・30は焼成により灰色を呈している。

瓦

33は平瓦で、凸面に縄タタキを施している。

SE03（図版24、写真図版24・25）

須恵器杯Ａ・杯Ｂ、土師器杯・高杯・甕、製塩土器、瓦器？の耳皿がある。８世紀の前半に属する遺物が多い中で、平安時代以降に見られる耳皿は後世の混入か。

須恵器

34・35・37は杯Ａである。34は底面に「郡」の墨書がある。36は口縁部内面に漆が付着している。

38は口径25.8㎝の大型の杯Ｂもしくは皿Ｂである。内面に漆が付着している。

土師器

39は杯Ａで内面には一段の斜放射暗文と螺旋暗文がみられ、外面は横方向のヘラミガキである。口縁端部に巻き込みはない。40は底部で外面に墨書があるが、一画のみで文字は不明である。

41～43は杯または椀である。42は二次焼成を受けている。いわゆる都城型の杯類とは異なるタイプである。43は外面下半に指オサエ痕を多く残す。

44は高杯脚部である。柱部は９面のヘラケズリを行っている。杯部内面は極めて平滑に仕上げられており、破面に螺旋暗文の一部らしきものが認められる。

45は甕である。膨らみのあまりない肩部から口縁部が大きく外反する。口縁端部はカットしてのちつまんでいる。

製塩土器

46～49は砲弾形の製塩土器である。46は灰白色で外面は一部薄く黒灰色に煤けている。内面は器壁の多くの部分が剥離しているが概ねナデで平滑に仕上げられている。外面も概ねナデで平滑に仕上げられ、口縁端部は丸く納めている。47は内面の黄色みが強く、指ナデ痕が残る。口縁端部は狭い平坦面が残る。外面は灰色で調整痕ははっきりしないが一部に指紋が残る。48は全体に灰色で二次焼成により硬く締まっている。口縁端部は面をなすが平坦ではない。内外面とも表面の調整は雑で、内面は粘土の段がナデ消されずに残る。49の口縁端部はつまんだように薄く尖り気味で一部波形に凹む。胎土には雲母を含み、讃岐産か。

瓦器

50は耳皿である。内面は全面をなでているが、外面は口縁部付近のみつまんで横ナデするが、それ以下は指オサエ痕を残し、不調整のままである。破面を観察すると内側は灰白色で外面は黒灰色の瓦質の焼成であるため、瓦器としたが、耳皿は類例を余りみないものである。耳皿は緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器が知られている。

SE05（図版25・26、写真図版26～29）

須恵器の杯類と甕、土師器の杯・皿類と甕・鉢・鍋・竈がある。時期は８世紀半ばか。

須恵器

51は完形の杯蓋である。天井部の頂部が平らな笠形を呈する。

52～54は杯Ｂである。52の内面には漆が付着している。53は内面・54は外面に墨が付着しており、転用硯として使用されている。55は完形の杯Ａで、底面は丁寧なヘラケズリ。口縁端部の一部に筆をしごいたように漆が付着している。

56・57は甕である。56の口縁部は短く外反する。57の口縁部は大きく外反したのち、短く内湾気味に屈曲している。屈曲部には１条、それより下に２条２段の凹線を巡らせている。

土師器

杯・皿類のうち、58～61は17.5～19㎝、深さ4.5㎝の深めの器形である。60の外面は横方向のヘラミガキが残る。暗文が確認されたものはない。口縁端部は内側に小さく巻き込むものが多い。

62～68は浅めの器形の皿で14～16.5㎝、高さ2.75～3.5㎝である。64は煤が付着し、灯明皿として用いられていた。また、65は漆のパレットとして使用されていたらしい。68にも漆が付着している。

69は丸底の小皿である。また、70はいわゆる都城型ではない在地系の椀である。外面は粘土の継ぎ目がナデ消さ

れずに残る。内外面に漆が付着している。

71・72は甕である。71は口径24.15cmの大型の甕である。「く」の字形に外反する口縁を持つ。72は口径16.2cm、器高17.2cmの小型の甕で、球形の胴部に小さく外反する口縁部が付く。口縁部内面に横方向の断続的なハケメを巡らせている。胴部外面は主に縦方向のハケメ、内面は指オサエ痕を残している。

73は注ぎ口のある鉢である。半球形の胴部の外面は主に縦方向のハケメを施し、内面はナデで仕上げている。74は胴部に上方向の舌状把手を付けた浅めの甕である。口径27.8cm。残存高さ23.8cm。外面縦方向のハケメ、内面は粘土紐の継ぎ目がナデ消されずに残る。

竈

75は曲庇付き竈である。受口を断面三角形に肥厚し、強度を高めている。焚き口の側面に把手を貼り付けている。74の甕が載るサイズである（写真図版29下段）。76も別個体の焚口上部の破片である。

SE07（図版27、写真図版30）

須恵器の杯・皿類、土師器の杯・皿類と甕、製塩土器がある。時期は８世紀の中頃か。

須恵器

77は杯蓋である。天井部の頂部が平らな笠形を呈する。

78～80は杯Ａである。78は口縁部が内湾気味に立ち上がる。口径11.4cm、高さ3.75cmとやや深めの器形である。内面に薄く漆が付着している。79・80は直線的に開く器形である。口径は12.6cm、15.4cmと差があるが、高さは2.95cm、2.9cmと近い。80の内面には赤色の文様らしきものがみられる。

81は皿で口径18.8cm、高さ1.9cm。口縁部は直線的に開く。

土師器

82・83は皿である。口径は15.8cm、15.9cmと近いが、深さは2.1cm、3.4cmと開きがある。83の口縁端部は小さく巻き込む。

84～86は甕である。いずれも口縁部が「く」の字状に開き、85は端面をカットしている。胴部は縦方向のハケメで共通しているが、内面の調整はハケメと板ナデと異なっている。84・85は口縁部内面に横方向の断続的なハケメを施している。

製塩土器

87は砲弾形の製塩土器である。器表はほとんど残っていないが、橙色で全体に平滑に仕上げている。口縁端部は平坦面があったようである。

SE08（図版27・28、写真図版31～33）

須恵器の杯類、土師器の杯・皿類と甕、竈、製塩土器、瓦、台石がある。時期には幅があり、８世紀全般に相当する。

須恵器

杯蓋88は天井部がほぼ平坦で、口縁部近くで屈曲する。口径は17.9cmである。

89～91は杯Ｂである。89は口径11.6cm、高さ3.65cm、底径8.7cmで口縁部はかなり外傾している。転用硯か。90の底面には「大」の墨書がある。91は盤と呼ぶべき大型のもので、口径27.1cm、器高5.9cm。外傾度は低い。内面に漆が水玉状に付着している。

土師器

92～95は杯または皿である。92･94の内面には斜放射および螺旋の暗文がみられる。92は口径15.4㎝、高さ2.65㎝。口縁端部は小さく内側に巻き込む。93は完形。底部外面に墨で２つの点が打たれている。口径15.3㎝、器高3.6㎝。口縁部は小さく丸く納める。94は底面に「郡」？の墨書がある。口径14.7㎝、器高3.3㎝。95は底部外面に「大」と思われる刻書がみられる。

96・97は甕の口縁である。口縁部は外反する。いずれも肩部の角度からして、胴部が余り膨らまない器形と思われる。97の外面の胴部は縦方向のハケメ、内面は口縁部・胴部とも横方向のハケメを施す。

竈

98・99は竈の破片である。98は把手である。99は焚口下端の脚である。

製塩土器

100～107は砲弾形の製塩土器である。105は口縁部近くで屈曲するタイプである。内外面とも指ナデ・オサエ調整による凹凸が良く残る。

100の外面は左下がりのナデ、内面は概ね平滑に調整している。101はかなり器壁が厚い。口縁端部は丸く納めている。内外面とも器壁は平滑に仕上げられ、内面は横方向にナデる。102の内面の布目は１㎝あたり縦12本、横14本程度の細かなくっきりしたものである。口縁端には板目もしくは刷毛目状の圧痕が残る。106は内面に板状工具のアタリが残り、口縁端部に圧痕が残る。103は内面に指ナデ痕、外面は部分的にハケメまたは布痕がみられる。104の端部は薄くつまんだように尖る。内面には粘土の溝（しわ）がナデ消されずに残る。107の内面は何らかの工具で右下がりに平滑にナデているが、外面は不調整である。103・107の端部は類似している。

瓦

108は面戸瓦である。凸面は横方向のナデを施している。凹面は側縁に沿ってヘラケズリを施す。

SE09（図版29、写真図版34・35）

須恵器の杯類、土師器の杯・皿類と甕、製塩土器、土錘がある。時期は８世紀半ばから後半に相当する。

須恵器

109・110は杯蓋である。109はつまみ周辺のみの破片である。つまみは扁平である。110は天井部中央がほぼ平坦で、口縁部近くでわずかに屈曲する。口径は15.8㎝である。

111は皿Ａで、底面から口縁部の立ち上がりは丸みを帯びている。底面はヘラケズリを行っている。口径19.65㎝、器高3.7㎝である。

112～114は杯Ｂである。112は口径13.0㎝、器高4.3㎝の小型、113・114は口径18㎝前後、器高６㎝弱の大型で深手のタイプである。

土師器

115～119は杯または皿である。115・116は内面に斜放射暗文が見られる。116の暗文はまばらであり、底部中央を打ち欠いて穿孔している。116の口縁端部は内側に巻き込むが、115・117は細くなって終わる。119は完形品で焼き歪んだ須恵器のように口縁部が歪んでいる。暗文はないが口縁端部直下の内面に１条の凹線を巡らせ、口縁端部を巻き込んだように仕上げている。

120・121は甕である。球形の胴部に外反する口縁が広がる。胴部外面は縦方向のハケメで内面は板ナデ、底部付近は指オサエ痕が残る。

製塩土器

122～128はいずれも砲弾形で、厚手で内面に布目はない。端部の仕上げは細く終わるもの、丸く納めるもの、端面を水平にカットするものなどバリエーションがある。122・124は端面に圧痕による凹凸がある。122は内面に粘土の段がナデ消されずに残る。123は灰色である。125の内面は斜め右下がりの指ナデおよび布目らしきものが観察できる。口縁端部はわずかに平坦面が残る。外面は砂粒およびその剥離痕で観察が困難であるが、かすかに布目らしきものがみられる。126は口縁付近に１㎝以上の大きな長石粒を含む。外面はかすかに布目状の圧痕がみられる。内面は横方向にナデるが、こちらもかすかな布目状の圧痕がみられる。127も口縁端部が平坦で、須恵器に近いほど二次焼成を受けている。外面はほとんど不調整であるが、内面は右下がりに太い棒状の工具で掻き取ったような擦痕が残る。128は端部が外傾する面を持ち、内面はナデ、外面は不調整である。外面に草の茎のような圧痕がある。

土錘

129は紡錘形の土錘である。重さ7.4g。

SE13（図版30、写真図版36）

須恵器の杯・壺、土師器の杯・甕、竈片がある。時期は８世紀後半である。

須恵器

130は杯Ａである。平らな底面から口縁部が直線的に立ち上がる。

131は壺の底部である。高台が付き、体部は直線的に広がる。広口壺か？

土師器

132・133は土師器の杯と考えたが、回転台を使用しており、焼きも須恵器に近い。器形としては古墳時代の椀の系譜を引く在地的なものか。内面はハケまたは板状工具のアタリが残る。口径12㎝前後、器高3.9㎝前後と大きさも類似している。

134の甕は、膨らみの少ない胴部から「く」の字状に口縁が広がる。長胴タイプか。端部は薄く尖って終わる。

竈

135は竈の焚き口下端の脚部である。

SE14（図版30・31、写真図版36～38）

須恵器の杯・皿類、土師器の杯・甕・羽釜・鍋、竈、製塩土器、瓦がある。時期は８世紀前半か。

須恵器

136は須恵器の杯Ｂである。136は口径11.4㎝、器高4.4㎝。137・138の蓋は口径26～27.7㎝と大型で稜椀もしくは皿に伴うものと思われる。138は内面に墨痕があり、転用硯として使用されたものと思われる。

139は皿もしくは高杯の杯部か。底部から丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部は丸く納めている。

土師器

140・141は土師器の杯Ａで、内面に斜放射暗文を施している。140は口縁端部を小さく内側に丸く肥厚している。141は口縁端部に内傾する面をもち薄く尖って終わっており、暗文が密であることも含め、古い様相を示すものか。142は土師器の杯Ｂで、底部外面に「井」の墨書がある。

143～146は甕である。143は小型で球形の胴部に大きく外反して開く口縁が付く。SE09の甕（121）と調整が類

似している。144は球形の胴部に対して口縁部の径は小さくすぼまる器形で、口縁部の立ち上がりの角度も直立に近く余り開かない。145・146は口縁端部に外傾する面でカットされているが、145は下方に拡張し、146は上方につまみあげられている。

147は羽釜である。外反しながら開く口縁部の端部から3.4cm下がった位置に幅３cm程度の下向きの鍔が付く。口径27.1cm。胎土は茶褐色で雲母を含む。搬入されたものか。

148は鍋である。半球形の胴部に外傾する口縁部を伴う。口径41cmとかなり大型である。

竈

149は竈の受口部付近の破片である。端部はカット後横ナデしており、対面は縦方向のハケメが良く残る。

製塩土器

150～153は製塩土器である。150は逆円錐形の体部で、内面は右下がりの指ナデ痕が顕著に残る。口縁端部は凹凸が著しい。また、赤みの強い色調である。151は口縁部に外傾する面をもち、内面にごく細かい布痕らしきものがみられる。また大きめの雲母片を含む。外面に沈線状の傷が残る。152は口縁部付近が内面で２cm、外面で１cm、薄く煤けて変色している。口縁端部は内傾する平坦面を持つ。外面は軽いナデにより概ね平滑で、内面は表面が濡れているときにナデた痕跡や不明瞭な布痕もしくは擦痕が残る。153は外面が指オサエによる凹凸が著しい。口縁端部は概ね平坦な面をなす。

瓦

154～156は平瓦である。凸面の調整をみると、154は斜格子タタキ後縦方向のケズリ、155は長方形の斜格子タタキ、156は細めの縄タタキである。154の凹面の布目ははっきりしており、縦横ともほぼ10本/cm程度である。155は瓦質で、凹面の布目はごく一部で、斜め方向の水挽き痕がみられる。156は凹面の布目の一部しか確認できず、横方向に削っている。154・155の側面は２面にヘラケズリを行っており、154はさらに凹面側を面取り的に削っている。156の側面は１面であるが、凹面の端を薄く削っている。

SK01（図版32、写真図版39）

須恵器の杯・皿類と盤・甕、竈がある。時期は８世紀半ばか。

須恵器

157・159は蓋で、つまみを欠く。157は丸みを帯びた笠形を呈し、口径は13.2cmで杯Ｂに伴うものである。159は天井部中央がほぼ平坦で、口縁部近くで屈曲する。口径22.3cmで稜椀に伴うものと思われる。

158は杯Ｂの底部である。

160は盤である。平底からほぼ直線的に広がる口縁部を伴う。口縁端部は部分により異なるが外傾する面をもち内側に肥厚する。

161は平底の甕の底部である。外面に平行タタキを施し、その上から一部ヘラケズリを行っている。内面下半部は横方向の粗い指ナデもしくは板ナデ、上半部はミガキに似た調整を行っている。

竈

162は竈である。受口は断面三角形に肥厚するタイプである。庇の最上部近くが残っている。

SK12－１（図版32、写真図版40）

須恵器の杯・皿類、土師器の杯・高杯・甕、竈がある。時期は８世紀半ばから後半で若干の幅がみられる。

須恵器

163・164は蓋で、つまみを欠く。天井部中央がほぼ平坦で、164は口縁部近くで屈曲する。口径は13.8cmと17.7cmである。

165・166は杯Ｂである。166は口径13.3cm、器高4.0cm。

土師器

167は土師器の杯Ａである。口径16.2cm、器高3.5cm。口縁部上半をはさんで強く横ナデしている。

168は高杯脚部である。杯部との接合面で剥離している。摩滅のため不確かであるがヘラで11面の面取りを行っている。脚内面には粘土紐の継ぎ目が残る。

169・170は甕である。いずれも肩部が張らない胴部に大きく広がる口縁が付く。169の口縁端部は丸く納めているが、170は端をカットし、端面に横ナデしている。

竈

171・172は竈の受口部近くの破片である。172は端部を大きく外側に肥厚している。173は焚口下端の脚部である。

SK20（図版32、写真図版41）

須恵器の杯、土師器の高杯がある。時期は８世紀半ばか。

須恵器

174は杯Ｂである。口径13.5cm、器高4.75cm。下半部は生焼けで上半は還元が進んでいる。

土師器

175は高杯の脚柱部である。残存高8.5cmでかなり器高が高いタイプである。外面はヘラで10面の面取りを行い、内面に絞り目を残す。

柱穴（図版32、写真図版41）

SP05からは176の甕が出土している。「く」の字状に口縁部が開き、端部は細く丸めて終わる。外面は右下がりの縦ハケ、内面はナデまたは板ナデである。

SP11からは177の土師器の杯と178の竈が出土している。177は体部の中程で外側に屈曲している。化粧土を使用している。178は竈の受口部近くの破片である。端部は断面三角形に肥厚した後、ヘラで面取り状に削っている。

SP12からは179の鍋または甑の把手が出土している。やや厚めの舌状である。

粘土採掘坑埋土（図版33～37、写真図版42～48）

須恵器

180～188は杯蓋である。口径10.7～20.0cm。180・181・187は天井部が丸みを帯びた笠形、183・185は頂部が平らな笠形である。188は口縁端部付近で屈曲する。182・184・186はほぼ扁平である。183は中央が突出した宝珠形のつまみである。184・186のつまみはかなり扁平になっているが宝珠形の名残を残す。180～182は中央部が凹む扁平なボタン状のつまみである。

189～200は杯Ｂである。口径9.8～17cm、器高3.8～6.0cmとバリエーションに富む。192は内面に漆が付着している。198は底面に墨書がある。二画のみで文字は不明である。

201～209は杯Ａまたは皿Ａである。202は口縁部が内湾し、椀に近い器形であるが、他は比較的直線的に広がる

口縁部を持つ。201は底部外面に線刻がある。202・204・208・209は内面に漆が付着している（写真図版45）。203は外面に付着物がある。

210は皿に角状の把手を付けた形態で、例の少ない器形である。

211・212は稜椀に伴うと考えられる直径20cmを越える大型の蓋である。211は扁平で、212は笠状を示す。いずれも口縁端部近くで屈曲しないタイプである。

213～215は稜椀である。口径17.2～20.8cm、器高4.9～5.6cm。213のように口縁端部近くで外反するもの、214・215のようにほぼ直線的に開くものがある。前者の方が稜がシャープである。

216は高杯脚部である。残存高8.0cmと高い。

217は壺蓋である。天井部は平坦でほぼ直角に曲がる。端面はカットされ、わずかに外側に肥厚されている。

218・221・223は短頸壺である。218・223は肩の張ったイチジク形の器体に直立する短い口縁部が伴う。218は肩に２条の凹線を巡らせている。223は円孔を穿った三角形の板状の耳を付加している。221は口縁部が外反し、端部は三角形に肥厚する。体部は完存し、肩部の稜の上下に１条ずつ稜線を巡らせる。内面には漆が付着しており、漆入れの小壺として利用されていたようである（巻頭図版７）。

219は高台を伴う壺の底部である。

220・222は長頸壺である。220は口縁端部を三角形に肥厚している。222は頸部に２条の凹線を巡らせる。

224は壺の底部である。平底で内面に漆が付着している（写真図版45）。底部外面はヘラケズリか。

225・226は甕の口縁である。225の口縁部はわずかに外反しながら開く。226は２条の凹線の上に４段の櫛描きの波状文を施す。

227は片口の鉢である。口径に比して器高が高い深い器形である。

土師器

228～231は杯、232は皿である。いずれも内面に暗文はない。230・232の口縁端部は小さく巻き込んでいる。

233は口径8.8cm、器高3.3cmの小皿である。内面に煤が付着しており、灯明皿として用いられていたようである。

234は杯の破片で内面に漆が付着している（写真図版45）。口径17.7～19.7cm、器高2.6～4.0cm。

235は盤である。口径25.0cmと大きく、器高3.5cm。

236・237は高杯の脚柱部である。236は13面、237は11面のヘラケズリによる面取りが施されている。237は朱塗りもしくは化粧土が施されている。

238は鉢である。口縁端部は外傾する面を持ち、外面はハケメ、内面はナデで指オサエや粘土の接合痕が残る。口径19.2cm、残存高さ7.6cmでやや深手の器形である。

239～247は甕である。胴部の形状のわかる破片はいずれもあまり胴部の張らない器形である。胴部外面は縦方向のハケメ、内面は板ナデ、もしくは余り明瞭でないハケメである。口縁部内面に横方向の断続的なハケメを施すものが多い。口縁部は「く」の字状もしくは外反気味に開くものが大多数である。口縁端部の形状は239・246では単純に丸く納めている。240は端部内面に幅の狭い平坦面がめぐる。242は端面を垂直にカットしている。243は口縁部自体が厚く端部をカットしている。244は端部をカットした後、軽くつまみあげ横ナデしている。245の端部は内側に小さく巻き込んでいる。

竈

248～256は竈の一部である。248～251・253・255は受口部で、249・251・253・255は庇の取り付き部も残る。255の内面は横方向の板ナデの工具のアタリが観察できる。

252・254・256は庇の破片である。

製塩土器

257～270は製塩土器である。

270が薄手、259・263・269がやや薄手である他は器壁が厚いものであり、全て内面に布目は確認できなかった。多くは指オサエ、ナデで仕上げているが、一部に板状工具のアタリが観察されるものもある。257がコップ状にほぼ直立している以外は概ね鉢状の器形であるが、261・262・268・269は口縁部近くで屈曲している。また、270は口縁部付近で内湾する。

257はぼってりと全体に厚手の体部で端部は丸く納める。器壁の残りは悪い。258は口縁端部をつまんでざっとナデ、端部を薄く仕上げている。内面は主に横方向のナデ。259は雲母を含み、讃岐のものか。内外とも単位ははっきりしないが、工具で縦方向にナデる。260は端部が内面に拡張しており、二次焼成により硬く締まっている。

261も259に近い胎土である。内面は横方向のナデと指オサエである。262は端部に棒状工具の刺突痕が残る。また内面の屈曲部には粘土の接合痕が残る。外面はオサエによる凹凸が著しい。263は端部が薄く尖る。外面の残りは悪く調整は指オサエ痕が認められる程度である。内面は横方向の指ナデ痕が明瞭に残る。264は端部に面がある。内面に右下がりの指ナデ痕が残る。

265は口縁付近が厚くぼってりとし、丸く納める。内面は指オサエと左下がりの板ナデ。266は口縁部の少し下を断続的につまんで薄く仕上げている。内外面とも粘土の接合痕がナデ消されずに残る箇所があるが、器壁は概ね平滑に仕上げられている。267は口縁端部に平坦面をもち、内面は横方向のナデで平滑に仕上げている。外面も凹凸は少ない。また、底部に近いほど薄く作られている。

268は口縁端部に平坦面があり、一部内面側にせり出している。内面上半部は横方向に板状工具で掻きならした際のアタリが残る。底部に近いほど器壁が薄く、また表面が剥離している。橙色で白色の大きめの砂粒を多く含む。269は内面の剥離が著しいが、それ以外の部分は概ね平滑に仕上げられている。外面は概ね平滑で下半は横方向のナデがみられる。270は薄く端面は内側に拡張し、一部に棒状工具の斜め向きの圧痕が残る。内面上部は平滑で下半は板状工具の擦痕が残る。外面は指オサエ・ナデ痕が残る。器表面の残りは良い。

土錘

271～272は土錘である。271は最大径2.7㎝、高さ5.05㎝の紡錘形。完形で重さは33.4ｇ。272はおそらくほぼ中央当たりで折れており、残存最大径3.6㎝、残存高4.75㎝。重さは36.5ｇである。

緑釉陶器

273は緑釉陶器の碗の底部の破片である。生地は須恵質で黄緑色の釉が薄くかかっている。底部の高台内側には釉はみとめられない。また高台端部は細かく面取り的に削られている。

瓦

274は丸瓦の瓦当である。文様は姫路城にも見られる源氏車紋で第一次榊原時代のものである。

2. 中世～近代

SE04（図版38、写真図版49・50）

275・276は18世紀後半～19世紀前半の型打ち製作による土師器の炮烙である。275は口径25.2㎝、残存高4.8㎝。276はわずかに大きく28.8㎝、最大径29.4㎝。高さ17.85㎝であり、後者の方が低平であることから若干新しい。

277・278は備前焼の擂鉢で16世紀後半の所産である。279は17世紀後半～18世紀前半のハケメ唐津碗である。280は17世紀後半～18世紀前半の唐津焼皿である。灰釉がかけられ、底部外面は一部釉薬が切れている。281は京焼系陶器の鉢である。底部は分厚い蛇の目高台で、体部外面には白泥で文様が描かれる。釉には細かい貫入が見ら

れる。282は18世紀前半の波佐見焼くらわんか茶碗である。外面にはコンニャク印判による施文がされている。283は肥前系色絵磁器である。284は肥前系染付磁器皿である。体部は型打ち整形により、高台は断面三角形状を呈する。先端の釉薬を拭き取る。19世紀前半のものである。285は肥前青磁花瓶である。

SE06（図版38、写真図版50）

286は明石焼の擂鉢である。17世紀後半～18世紀前半に位置付けられる。287は18世紀後半の波佐見焼くらわんか茶碗である。外面には雪持笹が描かれている。

SE10（図版38、写真図版50）

288は明石焼の擂鉢である。17世紀後半～18世紀前半の所産である。289は唐津焼の茶碗であり、灰釉がかけられている。17世紀前半に位置付けられる。

SE11（図版38、写真図版49）

290は右巻き巴紋の軒丸瓦である。

SE12（図版38、写真図版49）

291は柿釉の土師器でできた焜炉窓蓋である。外面に径５～６㎜のＣ字状のスタンプが押されている。19世紀前葉～中葉に位置付けられる。

土坑・粘土採掘坑（図版39・40、写真図版51～53）

中世

292は白磁碗Ⅳ類である。12世紀後半～13世紀前半の所産である。293は16世紀後半の華南産褐釉陶器四耳壺である。

近世

294、295は18世紀後半の型打ち製作による炮烙である。296は鉄釜を模した瓦質土器である。18世紀のものと考えられる。297は丹波焼擂鉢であり、６条１単位の擂り目が密に施される。擂り目は見込み部分にも施される。19世紀の所産である。298は18世紀後半～19世紀前半の唐津焼碗である。299は京焼系陶器の鍋蓋である。天井部外面にはトビガンナ施文がなされ、その下は鉄釉掛けされる。また、２カ所に白泥のイッチン掛けにより文様が描かれている。これらの特徴から、19世紀前半の明石焼と考えられる。300は19世紀前半の美濃焼大皿である。底部は蛇の目高台で釉薬を掻きとる。内面には６個の渦巻きを描いたいわゆる馬の目皿であり、中央には柳と「川阿り　近遠　田阿り　家もあり」という文字の絵付けがされている。301は19世紀前半の京焼系陶器碗である。

302・303は軒丸瓦である。302は左巻き巴紋の廻りに珠紋を置く。303は五七桐紋である。小型であり、棟込み瓦か。池田家の家紋である。

304～306は鼓状を呈する瓦質の窯道具（トチン）である。306はタール状の黒色物が付着している。307は頭部及び脚端を欠損する型合わせ成形の京都産土人形である。310は用途不明品である。311は17世紀前半の丹波焼甕である。体部上半は鉄火鉢を模倣しており、多数の凹線が施文される。黒い釉薬がかけられる。

近代

308・309は汽車土瓶である。308の外面には格子目の中に漢数字が書かれている。左上から縦に「八、三〇/

九二 □ 」、「 九、○○/九、五九/　」、「 一○、○○/一一、○八/午后 □　」、「 一一四○/午后一二、四三/二、○ □ 」、「 午后一二四○/一、四八/三、○□ 」、「 二、二五/三、三三/四、五□ 」、「 三、三○/四、二五/　　」、「 四、一八/五、二二/六、□□ 」、「 □□○/五四八 」と書かれていることから、電車の時刻表であろう。急行のダイヤが見られないため、急行が設定される前の明治21年～25年か、急行が廃止されていた明治29年５月～30年７月の間のものと考えられる。309は外面に「 明石 」と墨書されている。

２）木器・木製品

1. はじめに

前節で述べたとおり、本調査では古代の井戸を９基調査し、うち６基が木組みであり、多数の井戸枠部材が出土している。これらは劣化が著しく取り上げが困難であったものを除き、できる限り持ち帰り木製品として図化している。また、各井戸からは曲物・挽物などの木器も比較的多く出土している。近世の井戸・粘土採掘坑からもわずかながら出土しており、古代のものと近世のものを合わせて72点を図化している。

2. 古代の木器・木製品

SE03（図版41～44、写真図版54～56）

Ｗ１～Ｗ11はSE03から出土した。SE03は隅柱横桟組の木組井戸であり、８世紀前半の土器が出土している。

Ｗ１～Ｗ10は井戸枠の部材であり、多くは建築材を転用したものと考えられる。

Ｗ１～Ｗ４は井戸枠南辺に用いられていた縦板である。Ｗ１とＷ２は板目取りのスギ材で、端部に近い長辺に両端から大きな繰り込みがあることから、確実に転用材といえる。上端部より８cmのところに最大10cmの台形の繰り込みを入れている。両者は接合関係にあり、本来厚さ４cm程度の一枚板を縦割りにしたものである。Ｗ１は幅22.5cm、長さ59.9cm、厚さ2.6cmを測り、Ｗ２は左長側が割れているため幅13.3cm、長さ56.1cm、厚さ1.7cmである。長さが異なる点について、縦割りした後、井戸枠に組む際に鋸で下端を切断したものと思われる。

Ｗ３・Ｗ４は針葉樹板目取り材を用いた縦板で、下端の両角を斜めに落として矢板状に加工している。Ｗ３は長さ101.8cm、幅17.7cm、厚さ1.7cmである。Ｗ４は長さ108.3cm、幅23.4cm、厚さ2.0cmであり、下端辺を片側から斜めに切って打ち込みやすくしている。

Ｗ５・Ｗ６は柱材であり、側面に横桟を差し込む枘穴が穿たれている。Ｗ５は北西の隅柱材でスギの角材が使用されている。上部は焼け焦げて旧態をとどめていない。下端は鋸で直線的に切断されており、側面は手斧様の工具による縦方向の加工痕が残る。南・東に面していた２側面には高さを違えて直交する枘穴が穿たれている。枘穴は低い位置（下端より55cm）のものは平面長方形（縦４cm・横３cm・奥行５cm）で、高い位置（下端より59cm）のものは平面正方形（縦横４cm・奥行５cm）である。後者には横桟（Ｗ７）が差し込まれていた。Ｗ６は針葉樹の角材を用いた北東の隅柱材である。南に面する長側面の下端より50cmのところに縦6.5cm・横3.5cm・奥行６cmの平面長方形の枘穴が穿たれており、ここに横桟（Ｗ８）が差し込まれていた。本来はこの枘穴の上に直交方向の枘穴が穿たれているはずだが、抜き取り時に切断されているため残っていなかった。上下端とも鋸により直線的に切断されている。

Ｗ７は井戸枠西辺、Ｗ８は東辺に設置されていた横桟である。Ｗ７はスギ板目材を用い、長さ91.7cm、幅5.6cm、厚さ4.7cmの角材の両端を四方から斜めに削って枘を作っており、右端がＷ５の枘穴と組み合わさっていた。Ｗ８は長さ91.0cm程度、幅5.8cm、厚さ5.0cmの針葉樹板目材を用いており、手斧を用いて四方から斜めに加工して枘をつくっている。

Ｗ９は井戸枠北辺に組まれていた横板で、長さ107.4cm、幅32.5cm、厚さ3.0cmのスギ追柾目材を用いた重厚な板である。手斧による横方向の加工で全体に平滑に仕上げられている。短側の一方は切断されており、本来はさらに長大な部材であったと考えられる。もう一方にはわずかだが突起が残されていることから、扉材を転用したものかもしれない。

Ｗ10は鋸で切断された長さ5.7cm、4.6cm、厚さ4.9cmのスギ板目材の角材である。右側は大部分を鋸で切断してから折り取られており、そこから１cmの箇所にも鋸による切断痕がある。井戸枠の裏込めから出土しており、その形状と出土状況から横桟を抜き取る際に切り残されたものと考えられる。

Ｗ11はヒノキの追柾目材の細長い板材を用いた斎串である。上端を圭頭状にして下端を剣先状につくり、上端近くの側面の左右２カ所に切込みをいれるＣⅣ型式に分類される。井戸底面より出土しており、井戸の祭祀に伴うものと考えられる。

SE05（図版44、写真図版56）

Ｗ12はSE05から出土した。SE05は素掘り井戸で、８世紀中頃の土器が出土している。

Ｗ12は曲物蓋である。円形の蓋板の縁沿いには径がひと回り小さい側板を当てて樺皮結合している。側板は一部しか残っていないが、蓋板に当たりの痕跡が観察できる。

SE07（図版45・46、写真図版57・58）

Ｗ22～Ｗ28はSE07から出土した井戸枠である。SE07は縦板組横桟どめの井戸で、８世紀中頃の土器が出土している。

Ｗ22～Ｗ24は井戸枠東辺に据えられていた縦板と横桟である。Ｗ22はスギ柾目材を用いた長さ80.8cm、幅34.2cm、厚さ4.3cmの板材である。上半は痩せているが、下半は手斧による縦方向の加工痕が残る。下端より50cmに楕円孔を二つ穿っている。Ｗ23は長さ48.2cm、幅18.8cm、厚さ2.8cmのスギ板目材を用いており、下端より４cmに長方形、５cmのところに円形の穿孔が見られる。また、上端より３～12cmの範囲にはＵ字状に圧痕が残っており、形状から縄掛け痕跡の可能性がある。Ｗ24は長さ42.5cm、幅10.6cm、厚さ3.7cmのスギ柾目材を用いており、上述のＷ22の楕円孔下及びＷ23の圧痕に対応する位置から出土している。板の中軸状には５～６cm間隔で楕円孔が３ヵ所穿たれており、このうち２つがＷ22の楕円孔に対応する位置にある。以上の対応関係とＷ23の圧痕から、縦板と横桟は縄掛けで固定されていたと考えられる。

Ｗ25は井戸枠西辺の横桟である。Ｗ24と同一材で２カ所に楕円孔が穿たれており、中央の楕円孔下は方形に突起がつくり出されている。両短側は方形の仕口状に抉りこんでいる。

Ｗ26・Ｗ27は井戸枠南辺の縦板と横桟である。Ｗ26は長さ86.6cm、幅29.7cm、厚さ4.8cmとＷ22とほぼ同じ規格の板材で、下半を手斧によって加工し、下端は３方向より削り込んで矢板状に作っている。また、下端より52cmのところに楕円孔を二つ穿っている点も共通している。Ｗ27は長さ45.3cm、幅10.2cm、厚さ3.7cmでスギ追柾目材が用いられている。ただ、この２点と異なり楕円孔の位置が揃っておらず、両側を方形の仕口状に抉りこんでいる。

Ｗ28は井戸枠北辺の横桟である。長さ41.5cm、幅8.6cm、厚さ2.7cmで横並びにして３ヵ所に楕円孔が穿たれている。スギ追柾目材が用いられている。

SE08（図版47～50、写真図版59～62）

Ｗ29～Ｗ48はSE08から出土した。SE08は横板組隅柱横桟どめの井戸で、８世紀の土器が出土している。

Ｗ29～Ｗ43は井戸枠に使用されていた部材であり、柱材・横板・横桟・楔がある。柱材はヒノキ、横板はスギ、

横桟・楔はヒノキ材が使用されている。

柱材は２つの部材を組み合わせて横桟を差し込む枘穴を２カ所に穿っている。南東と南西隅のものは抜き取られて残っていなかった。Ｗ29・Ｗ30は北東隅に据えられていた組合せ式の柱材であり、ともにヒノキが使用されている。Ｗ29は長さ81.3㎝、幅9.9㎝、厚さ6.5㎝で、長側面は４面ともヤリガンナあるいは刀子などで平坦に仕上げられている。下端から17㎝は階段状に加工されており、ここにＷ30が組み合う。また、下端より13㎝のところには縦５㎝、横2.5㎝の長方形の枘穴が穿たれている。Ｗ30は側面がＬ字状となる角材であり、側面には手斧による加工痕が残る。上端から5.5㎝を長方形に抉り込んでおり、ここがＷ29の枘穴に対応する。そして、両者を組み合わせることで上述の枘穴に直行する方向の枘穴が作られ、その中には楔が残っていた。

Ｗ31は北西隅に据えられていた組合せ式の柱の部材である。Ｗ30と同じく側面Ｌ字状を呈し、組合せで枘をつくる箇所には横桟を差し込んだ際のアタリが凹みとして残る。また、上方の抉り込みの脇には、もう一方の組合せ部材の枘と対応する箇所を示したと思われる線が墨書きされている。

Ｗ32・Ｗ33は井戸枠北辺に据えられていた桁と横板である。Ｗ32は長さ91.0㎝、幅7.5㎝、厚さ4.8㎝のヒノキを用いており、両端には３方を削って下小根枘がつくられる。枘には木口に鋸目を入れ、そこに楔を打ち込んで仕口を固める「楔締め」の技法がとられている。一方、西の隅柱に組み合う枘は柱材の抜き取り時に切断されている。Ｗ33はスギ板目材を用いた長さ85.1㎝、幅20.4㎝、厚さ2.2㎝の板で、片側の短側両角を斜めに落としている。また、そこから４㎝の中央付近に長方形の穿孔がされている。このことから、建築部材を転用したものと考えられる。

Ｗ34･Ｗ35は井戸枠南辺の桁と横板である。Ｗ34は長さ85.8㎝、幅9.4㎝、厚さ5.7㎝のヒノキ材が用いられており、両側の枘は隅柱抜き取り時に切断されている。Ｗ35は長さ82.1㎝、幅19.0㎝、厚さ1.8㎝のスギ材が使用されている。

Ｗ36･Ｗ37は井戸枠西辺の桁と横板である。Ｗ36は長さ80.2㎝、幅5.6㎝、厚さ5.5㎝のヒノキ材が用いられており、長側は３面にすすが付着している。短側には２方向より削って平枘が作られており、枘の根本付近には刃物痕が２～４本残る。Ｗ37は長さ76.2㎝、幅15.7㎝、厚さ1.5㎝のスギ材が用いられている。

Ｗ38は井戸枠東辺に使用されていた長さ75.1㎝、幅18.6㎝、厚さ1.9㎝の横板である。

Ｗ39～Ｗ43は仕口を固めるために打ち込まれた楔である。長さは2.8㎝～6.5㎝と幅があるが、幅は枘穴に合わせて2.5㎝～3.0㎝に納まる。断面は三角形で、厚さは0.8㎝～1.3㎝である。Ｗ43は長さ7.7㎝、幅3.2㎝、厚さ1.4㎝の長方形の部材と楔が貼り付いた状態で出土したものであり、両者は強固に接着している。この他にも長方形の部材は２点（Ｗ47・Ｗ48）出土しているが、同様の使用法が想定される。

Ｗ44は径13.2㎝のヒノキを用いた円形の曲物である。径12.5㎝の円板を側板の内側にはめ込み、５カ所に木釘を打ち込んで留めている。側板は内面に５㎜程度の間隔で縦方向のケビキが入れられており、約８㎝重ねているが、切目部分でケビキに沿って折れている。前外４段後外１段綴じであるが、樺皮綴じ箇所の口縁部が一部欠損しているため前５段の可能性もある。底板の両面には黒漆が塗られている。

Ｗ46は径23.8㎝の挽物皿である。ヒノキの横木取りで内外面は丁寧に轆轤挽きされており、無数の刃痕をとどめている。

Ｗ45は用途不明品である。ヒノキの柾目材で、両斜辺に平らな段を有する台形状を呈する。下底部が一部折損している他は完存している。

ＳＥ09（図版44、写真図版63）

Ｗ13～Ｗ21はＳＥ09から出土した。ＳＥ09は横板組隅柱横桟型の井戸で、８世紀中葉～後葉の土器が出土している。

Ｗ13・Ｗ14は上部が折損しているため全形は明らかではないが、先端を加工している。W14は栓か。Ｗ15は長方形の板材で、上端部より１㎝の箇所に長辺と直交する直線が刻まれる。Ｗ16は錐による穿孔がされた板材で、上下端を切り込んで山形に整形している。Ｗ17は長さ5.4㎝、幅1.8㎝、厚さ0.6㎝の加工材である。両端部より約１㎝で抉りが入れられている。

Ｗ18は長さ17.1㎝、幅3.3㎝、厚さ0.15㎝の板材である。下端を丸く整え、そこから2.2㎝の箇所に径0.5㎝の孔を、中ほどの左に偏った箇所に0.1㎝の孔が穿たれている。板目取りであるが非常に薄手のヒノキ材である事から、檜扇の可能性がある。

Ｗ20は長方形で肩部が丸みを帯びる横櫛である。長さ4.4㎝、残存幅6.2㎝で、半分程度が残存していると考えられる。厚さ0.7㎝を測る。歯数は３㎝あたり24～25枚であり、この時期のものとしては若干粗い。ツゲ材の板目取りである。

Ｗ19は曲物側板である。下端部は折損しているため高さは定かではないが、復元径は35㎝である。縦方向のケビキが約１㎝間隔で入れられている。同一個体で外面に和同開珎（図版55　Ｍ２）が付着している破片がある。

Ｗ21は復元径21㎝の曲物底板である。側板を結合する木釘穴が２カ所残っている。ヒノキの板目取り。

2.近世

SE04（図版51・52、写真図版64～67）

Ｗ49～Ｗ70はSE04から出土している。SE04は石積井戸で17世紀後半～18世紀前半の土器・陶磁器が出土している。

Ｗ49は半円形の横櫛である。歯はすべて途中で折れており、残存幅も半分強である。歯数は３㎝あたり13～14枚であり、かなり粗い。イスノキ材の板目取りである。

Ｗ50～Ｗ52はトチノキ材横木取りの木胎をもつ漆器椀である。Ｗ50は内面を赤漆、外面を黒漆で仕上げている。Ｗ51は復元径12.3㎝で外面を黒漆、内面を赤漆で仕上げるが、下地の黒色が覗いている。外面には金色の微細粒を混ぜた漆で「丸に花角」紋が描かれる。Ｗ52は内外面とも黒漆で仕上げられる。土圧で全体に変形しており、特に口縁部は外方に大きく開いている。

Ｗ53・Ｗ54はケヤキ材を用いた差歯下駄の歯である。いずれも平面形は台形を呈するが、上辺は湾曲して台部を受ける。Ｗ53は追柾目材を用いており、３ヵ所に枘を作り出す。Ｗ54は板目材で、使用により斜めに擦り減っている。台部は残っていないが、この歯形状から裏面に設けられた溝の中に枘穴を作り、そこに嵌め込まれた歯が台部を貫通して表から見える露卯下駄と思われる。

Ｗ55はタケ亜科を削り出し、扁平な断面に加工しているが、斜めに切断されている。具体的な使用法は不明である。

Ｗ56はマツ属複維管束亜属の板目材を用いた馬形である。鞍の前後輪を突出させ、その間を凹ませたＢⅡ型式のものである。

Ｗ58は桶の榑板と思われる横方向に湾曲したアスナロの板目材で、上側の周縁を面取りしている。下端より1.5～2.5㎝の内面が凹み、外面ではこれに対応する位置とさらに上端から３～４㎝の位置の２カ所が凹んでいる。内面の凹みは底板の位置を示し、外面のそれは箍の痕跡と思われる。この桶の復元径はおよそ20㎝である。

Ｗ57・Ｗ59・Ｗ60は底面及び側面に釘穴・木釘の残る板材である。Ｗ57は上端を面取りしたアスナロの角材で、上端より1.1㎝の左側面に木釘が打たれ、底面には方形の釘穴が残る。Ｗ59はアスナロの板目材で下端の切断面を除く３辺は失われ、両側面は木目に沿って割れている。上端より4.0㎝と下端より2.5㎝の中央に釘穴があり、釘が

一部残っている。W60はアスナロの柾目材を用いている。木釘が側面に４ヵ所、上端より５㎜の中央に１カ所打っており、底面にも釘穴が１カ所残る。下端より1.8㎝の範囲にはわずかに他の部材のアタリが見られる。

W61～W66・W68は曲物である。W61はヒノキ材柾目取りの中央に円孔を穿つ曲物蓋である。平面形は正円ではなく、側面が直線的になる小判型である。内面は側板のアタリで一部凹んでいる。側面から１㎝のところに釘穴があり、右側では中軸から対称に２カ所、左側では中軸状に１カ所ある。後者については孔の内面に鉄が付着している様子が観察できる。また、釘穴の両側に１～２㎝程度離れて円形の凹みが見られる。W62は曲物側板である。樺皮結合の２列前外２段後11段綴じで、外面は樺皮と側板の間に径２㎜、長さ１㎝の丸棒を挟んで綴じている。復元径は18㎝前後であるが、出土状況からW61とW62は同一個体と考えられるため、土圧によって広がっている可能性が高い。W63はヒノキ柾目材の薄板を使用した柄杓である。中央やや下よりに径４㎜の円孔が穿たれ、その両側をそれぞれ３列の樺皮で綴じている。復元径は18㎝であり、円孔の大きさから、柄の先端が内から外へ通っていたと考えられる。W64はヒノキ柾目材を用いた円形の曲物蓋である。径11㎝と小型であり、全体の４分の１が失われているが、この割れ面の中央部分には樺皮が残っている。W65はヒノキ柾目材を用いた曲物蓋で、内外面には黒漆が塗られている。径10.8㎝で中央に１㎝程度の円孔を穿つ。縁より１㎝のところに１㎜強の円孔を２カ所穿っており、ここにW66を通して側板と結合していたものと思われる。W68はアスナロ柾目材の曲物側板である。径16.4㎝で、高さは側板の中程を欠いているものの、ほぼ全体が残っていることから、６㎝程度と考えられる。樺皮結合の２列外４段綴じである。

W67は箸である。わずかに面をもつものの丁寧に断面円形にしており、太さは上下で変化がない。

W69はアスナロ板目材を用いた幅2.3㎝、厚さ５㎜の薄板である。上端は折れているが、下端部は角を丸く落としている。縦方向に中軸に沿ってほぼ一列に円孔が３つ穿たれており、中央では横方向に２カ所木釘が打ち込まれている。W70はモミ属柾目材を用いた部材である。

SK12－２（図版53、写真図版63）

桶底板（W71）が出土している。厚さは約３㎝で復元径は40㎝である。木取りは板目取りでスギを用いており、側面には隣り合う底板と接合する釘穴が２カ所残っている。

SX65（図版53、写真図版63）

ケヤキ横木取り漆器椀（W72）が出土している。口縁部は端部付近が失われているが、口径10.3㎝程度である。内外面は赤漆によって仕上げられている。

3）石製品

石製品は６点を図化した。

1.古代（図版28・写真図版31）

S１はSE08の埋戻し土より出土した台石である。花崗岩製で平面形は長径21.6㎝、短径15.7㎝の楕円形であり、高さは21.1㎝である。

２．近 世

SE04（図版54・写真図版68）

S２・S３はSE04から出土した砥石である。SE04は石積井戸で17世紀後半～18世紀前半の土器・陶磁器が出土

している。

Ｓ２は長さ11.8㎝、幅5.8㎝、厚さ2.1㎝の長方形だが、下端は斜めに折れている。表裏面、上面及び側面の５面に擦痕が残っている。擦痕は表面が溝状で粗く、裏面は縦方向に細かい。側面は粗いものと細かいものが多方向に残っており、上面は細かく一定方向である。

Ｓ３は表面と上面以外は割れており、この両面に横方向の擦痕が残っている。残存長7.2㎝、残存幅6.8㎝、残存厚3.8㎝である。

SE06（図版54、写真図版68）

Ｓ４はSE06から出土した。SE06からは17世紀後半～18世紀前半の土器・陶磁器が出土している。

Ｓ４は長さ9.9㎝、幅5.4㎝、厚さ1.0㎝の長方形だが、下端は斜めに折れている。しかし、この割れ面も含め６面全てを使用している。表面は中央が研ぎ減りして凹んでおり、縦方向の擦痕と複数個所で敲打痕が残っている。上下端付近では使用時の剝離も見られる。この他、下半分程度が煤が付着して黒く変色している。裏面は細かい斜め方向の擦痕とともに、大きく深い溝状の痕跡がいくつもあり荒砥に使用した面と考えられる。

SX11（図版54、写真図版68）

Ｓ５は長さ5.5㎝、幅4.6㎝、厚さ1.8㎝の砥石である。３面を残して他は折損しているが、各面とも使用痕が残る。

SX59（図版54、写真図版68）

Ｓ６は長さ3.8㎝、幅4.5㎝、厚さ0.3㎝の粘板岩製の薄板片である。上面は細かい敲打痕が残っており、面整形をしようとしていた可能性がある。両側面と下面は折損しているため、全形は不明である。表面には横４～５㎜間隔、縦６～８㎜の間隔で、裏面には1.2㎝の間隔で格子目が線刻されている。

４）金属製品

金属製品は8点を図化している。

１．古代

奈良時代の金属製品はそれぞれ井戸から出土しており、出土状況から井戸の祭祀に伴うものと考えられる。

SE08（図版55、写真図版69）

SE08の井戸底面中央に置かれた状態で刀子(M1)が出土した。SE08からは8世紀の土器が出土している。

柄はツバキ属の白木を刳り貫いて装着されているが、刀身を挟んで左右で柄の高さが若干異なっている。刃部は先端が欠損しているが、6.8㎝が残っている。腐食によって傷みが激しい。

SE09（図版55、写真図版69）

Ｍ２はSE09の下層集水施設より出土した。SE09からは８世紀中葉～後葉の土器が出土している。

Ｍ２は和同開珎であり、「珎」部が欠損し、４分の３程度が残存している。W19と同一個体と考えられる曲物片の外面に銭面が接する状態で付着しており、全体を銹化した泥が覆っている。保存処理のため、曲物と分離してクリーニングを行ったが、劣化が著しくこれらを物理的に除去することは困難であったため、X線透過写真による判読によらざるを得なかった。ただし、クリーニングの際に「和」旁部と、泥に圧痕として残った「開」構部については観察できたため記録している。

２．近 世

SE04（図版55、写真図版70）

Ｍ３はSE04から出土した煙管である。SE04は石積井戸で17世紀後半～18世紀前半の土器・陶磁器が出土している。

吸口と雁首がそれぞれ残っており、吸口は長さ7.2cm、径1.0cmである。吸口付近にはわずかに金色をしたメッキが残っている。雁首は長さ7.7cm、径1.0cmで筒内には竹が残っていた。

SE06（図版55、写真図版70）

Ｍ４はSE06から出土した。SE06からは17世紀後半～18世紀前半の土器・陶磁器が出土している。長さ4.1cm、幅0.5cm、厚さ0.5cmの釘であり、下半部は欠損している。

SK12－２（図版55、写真図版70）

Ｍ５・Ｍ６はSK12－２より出土した釘である。Ｍ５は上半部を欠いており、長さ3.0cm、幅0.6cm、厚さ0.5cmを測る。Ｍ６は上下を欠損している。

SK13（図版55、写真図版70）

Ｍ７はSK13より出土した釘である。上半部を欠いており、長さ5.2cm、幅0.6cm、厚さ0.6cmを測る。

３．近 代（図版55、写真図版70）

Ｍ８は明治15年鋳造の１銭硬貨である。

第４章　駅前町遺跡の調査

第１節　調査区の概要

今回の調査区は、かつてJR山陽本線･播但線の線路等が存在した箇所であり、現状ではJR播但線の高架から市道をはさんだ北側に位置する。近世には姫路城城下町外の耕作地として利用されたことが絵図等から判明している。

調査は１区と２区の２箇所に分けて行った（図版56）。西側の１区は東西約16.5m、南北約41.5m、東側の２区は東西約13m、南北約19mの規模をもち、ともに長方形を呈する。なお、１区と２区は間を約10m空けて設定している。

１区では、溝２条、流路２条、土坑１基、鋤溝３条を検出した。出土遺物から、遺構は主に弥生時代から古墳時代にかけてのものと考えられる。なお、鋤溝は近世以降に属するとみられる。２区は明治時代以降の鉄道建設に伴って大規模な削平を受けており、明瞭な遺構は遺存していなかった。

第２節　基本層序

調査区の基本層序は、上から表土、明治時代以降の鉄道に伴う盛土、耕作土、にぶい黄褐色シルト質極細砂層、中礫～大礫を含む扇状地性の砂礫層となる（図版57・58、写真図版73・82）。鉄道に伴う盛土は石炭ガラ等を大量に含み、１区では0.5～0.9m、２区では0.7～1.6mを測る。遺構検出はにぶい黄褐色シルト質極細砂層上面で行った。調査区全面が後世の耕作・鉄道敷設に伴って大きく改変を受けているため、弥生時代～近世までの遺構を同一面で検出している。

第３節　遺構

１）溝

SD01（図版59、写真図版74・75）

概　要　１区北東隅から北東-南西方向に延びる。北端は調査区外へ延び、南端はSR01に合流する。

形状・規模　直線的に延びる溝で、検出長約19mである。幅1.5～2.2m、検出面からの深さ0.3～0.6mを測る。

埋没状況　大きく３層に分層できる。下層はにぶい黄褐色を呈する砂層で、粒度の粗い砂が主体を占める。下層中には黄色シルトブロックや中礫が入る。中層はシルト質極細砂が主体で、有機質が多く入り、淀み状の地形であったことが想定できる。上層は極細砂～細砂でラミナも確認でき、粒径は中層に比べて粗い。

出土遺物　遺物量はわずかであるが、須恵器の壺（339）が出土した。

SD02（図版60、写真図版75・76）

概　要　１区北端で検出した。東北東-西南西方向に延び、両端は調査区外へ続く。SR01埋没後に開削される。

形状・規模　直線的に延び、検出長12.1m、幅1.2～1.6mを測る。検出面からの深さは東側28㎝、西側44㎝である。

埋没状況　埋土は基本的に２層に分かれる。下層はにぶい黄褐色を呈する中砂～中礫で、黄色シルトブロックを含む。北側の一部にはシルト質極細砂～中砂が堆積し、淀み状になっていたとみられる。上層は暗灰黄色を呈する極細砂～極粗砂からなる。北側は砂粒が粗く、南に行くにつれ砂粒が細かくなる。

出土遺物　上層から須恵器の杯（340・341）及び甕（342）が出土した。

2）流路

SR01（図版61、写真図版76～79）

概　要　調査区西端を南北方向に流れる流路で、調査区中央で東西方向に分岐する。姫路市教育委員会による試掘・確認調査で検出された「自然河道」に相当する。

形状・規模　南北方向の本流部の検出長は南北約41.5m、東西約5.7mである。南北方向の流れは西肩部が調査区外となるが、試掘・確認調査成果と合わせると幅24m以上と推定できる。東西方向の支流は幅4.2～5.7mである。検出面からの深さは一定ではなく、南北方向の本流部分は0.5～1.2m、東西方向の支流部分は0.6～1.0mを測る。

埋没状況　長期間にわたって流れが維持されたと考えられ、堆積・浸食を繰り返しており、複雑な堆積状況を示すが、大きく3層に分類できる。上層は灰黄褐色を呈するシルト質極細砂～極粗砂からなる砂がちの土層で、古墳時代中期の土器を含む。中層は黒褐色極細砂質シルトや褐灰色シルト質極細砂等からなる土層で、上層に比べて粒度が細かい。中層からは弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土した。下層は黒色極細砂質シルトや灰色シルト等粒子の細かい土層で、縄文時代後晩期～弥生時代前期の土器を含む。

出土遺物　下層から出土した縄文時代後・晩期や弥生時代前期に位置づけられる土器片はいずれも細片である。磨滅も進んでいることから、上流部から流されてきたものと考えられる。中層からは弥生時代後期から古墳時代前期の壺や甕、高杯（312～322）が出土した。サヌカイト製の石鏃（S7）及び石核もわずかに出土している。上層からは古墳時代中期の須恵器高杯や甕、土師器の甕等（323～335）が出土した。

SR02（図版60、写真図版79・80）

概　要　調査区中央部から西方向に延びる流路で、南北方向のSR01と交わる。SR01下層埋没後に形成され、SR01中層に切られる。調査区中央部より上流側は削平によって消滅し、残存しない。

形状・規模　検出長約11.5m、幅0.5～3.1m、検出面からの深さ56～82cmを測る。西に行くにつれて幅・深さが増す。

埋没状況　大きく4層に分層できる。最下層は砂混じりのシルトで、弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる土器片を含む。下層は粒度が粗くなり、中砂～粗砂が主体となる。砂層中には小礫や黄色シルトブロック等が多く含まれる。中層はシルト質が強く、粒度が細かい。上層は灰黄褐色を呈する砂が主体となり、ラミナも確認できる。

出土遺物　遺物は弥生時代後期の甕（336）や古墳時代前期の土師器甕（337・338）等が出土した。

3）土坑

SK01（図版56）

概　要　1区北端部中央に位置しており、SD02に切られる。

形状・規模　大部分が削平を受けており、全容を伺うことはできないが、残存長2.0m、残存幅0.43m、検出面からの深さ14cmを測る。

埋没状況　にぶい黄褐色極細砂～細砂からなる単層で、黄灰色シルトブロックやマンガン粒を含む。

出土遺物　遺物は出土していない。

4）鋤溝（図版56、写真図版80）

鋤溝1～3の3条を検出した。鋤溝1・3は東西方向、鋤溝2は南北方向に延びる。規模は0.7～1.0m程度で、幅は0.25～0.5mを測る。深く掘削された箇所の一部が遺存したものと考えられる。埋土は黄灰色シルト～極細砂で、炭化物が混じる。遺物は鋤溝2から鉄釘が1点出土した。いずれも近世に属するとみられる。

第４節　遺物

１）土器

1.溝

SD01（図版63、写真図版88）

須恵器

339は壺である。口縁部～頸部上半が残存し、復元口縁部径は15.4cmを測る。頸部は緩く外反し、口縁端部は立ち上がり、端面を形成する。端面の下端には１条の沈線が施される。口縁端部直下の外面には波状文を施し、その下部に１条の断面三角形突帯をつける。調整には内外面ともに回転ナデを施す。胎土には2.5mm以下の白色砂粒をまばらに含む。

SD02（図版63、写真図版88）

須恵器

340は口縁部を欠損するが、杯蓋と考えられる。現状で径は11.6cm、器厚は0.45～0.7cmである。天井部は平坦で、頂部から1.5cmの高さまで回転ヘラケズリ、それ以下には回転ナデを施す。回転ヘラケズリは丁寧に仕上げている。ロクロの回転方向は右回りである。内面は回転ナデを施した後、頂部に一方向のナデを加える。胎土は比較的精良で、石英や白色砂粒をまばらに含む。遺存状態が悪いが、ＴＫ23～ＴＫ47型式併行期に位置づけられる可能性がある。

341は杯身である。口縁部及び底部を欠損するが、扁平な形状であったと推定できる。口縁部径は12.5cm前後であったと考えられる。器厚は0.3～0.4cmである。受け部はわずかに上方に向かってのび、端部を尖らせる。口縁部は欠損しているものの、付け根の状況から若干内傾していたものとみられる。外面調整は受け部から1.9cmまで回転ナデ、それ以下には回転ヘラケズリを施す。内面は回転ナデで仕上げる。胎土は精良で、１mm以下の白色砂粒をわずかに含む。遺存状態が悪く、ＭＴ15～ＴＫ10型式併行期に属する可能性が考えられる。

342は甕であり、胴部下半の約１／４が残る。残存部から復元できる最大径は23.0cmであるが、本来はさらに大きかったものと思われる。器厚は0.5～0.7cmを測る。外面は縦～斜め方向の平行タタキを施した後、横方向のカキメで調整する。内面にはタタキを施した際に生じた同心円文状の当具痕跡が密に残る。外面の一部には自然釉が付着する。胎土は精良で、１mm以下の石英や長石、白色砂粒をわずかに含む。

2.流路

SR01（図版62、写真図版85～87）

弥生土器

312は長頸壺である。口縁部の３／４と胴部の一部を欠損するが、遺存状態は良好で全形を窺うことができる。底部径4.9cm、胴部径18.0cm、器高28.1cmを測る。復元できる口縁部径は11.2cmである。底部は平底で、胴部は最大径が上半にくる。頸部はゆるく外反し、わずかに外傾してのびる。口縁端部は丸く納める。外面の調整は、頸部に縦方向のハケメ、胴部上半に縦方向のハケメ、下半に横方向のハケメの後ヘラミガキを施す。内面には、頸部に横～斜め方向のハケメを施す。頸部～胴部の内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残り、幅1.3～2.0cmの粘土紐を積み重ねて製作していることが分かる。胎土は精良であるが、１～３mm程度の白色砂粒をまばらに含む。内外面ともに浅黄橙色を呈し、底部から胴部下半にかけて黒斑がみられる。中層の砂層から出土しており、弥生時代後期に位置づけられる。

313は甕の口縁部である。復元口径37.1cm、残存高7.4cmを測る。口縁部は短く、外傾する。外面調整は磨滅により不明瞭であるが、口縁部に横ナデを施し、基部には指オサエが明瞭に残る。内面調整は口縁部から胴部上端にか

けて指オサエが認められる。胎土は粗く、2.5㎜程度の石英や長石等を多く含む。

314～316は壺の底部である。314は平底で、胴部がわずかに内湾してのびる。１／３程度残存しており、復元底部径10.6㎝、底部の器厚1.4㎝を測る。外面調整には胴部に縦方向のヘラミガキ、底部にナデを、内面調整には全体にナデを施す。胎土はやや粗く、１～４㎜大の石英や長石、チャート等を含む。外面はにぶい黄橙色を呈し、黒斑が認められる。315は平底で、胴部は外傾して直線的にのびる。３／５程度遺存しており、復元底部径は9.6㎝、底部の器厚は0.8～1.1㎝を測る。外面調整には胴部に縦方向のヘラミガキ、底部にナデを施す。内面調整には底部に指オサエを施した後、全体をナデで仕上げる。胎土はやや粗く、２㎜以下の石英や長石、チャート等を含む。316は復元底部径は12.0㎝、底部の器厚は2.1㎝を測る。磨滅が進んでいるが、外面には縦方向のハケメ状の痕跡が、内面には底部に指オサエが認められる。胎土は粗く、2.5㎜以下の石英、長石、チャート等を多く含む。

317～319は甕の底部である。317の底部径は3.9㎝を測り、外面には縦方向のハケメ、内面にはナデを施す。胎土は比較的精良で、１㎜大の白色砂粒や微小な雲母片等をまばらに含む。中層から出土した。318の底部径は3.85㎝を測り、外面調整は胴部に縦方向のハケメを、底部にナデを施す。内面には筋状の工具痕が残ることから、板ナデを施したと考えられる。胎土はやや粗く、１㎜大の石英や白色砂粒、微小な雲母片を含む。中層から出土した。319の復元底部径は6.3㎝である。磨滅が進んでおり、調整は不明である。胎土はやや粗く、２㎜以下の石英や長石、白色砂粒等を多く含む。下層から出土した。

320～322は高杯である。320は脚部が欠損しており、杯部のみが遺存する。比較的大型品であり、復元口径は23.8㎝を測る。杯部は皿状で、緩く内湾しながら広がり、口縁部が屈曲し立ち上がる。口縁部はわずかに内湾しつつ外傾する。口縁端部は肥厚し、面をもつ。杯部と脚部の結節点、口縁部の屈曲点、口縁端部の外面に沈線が１条ずつ施される。外面調整には口縁部に横方向のナデ、杯部に横方向のヘラミガキを、内面調整には全体に横方向のヘラミガキを施す。内外面ともに灰白色～にぶい黄橙色を呈し、口縁部外面に黒斑がみられる。胎土は精良で、１㎜大の石英・長石等をわずかに含む。中層から出土しており、中期後半に位置づけられる。321は椀型高杯の杯部である。遺存状況は１／４程度で、復元口縁部径は11.8㎝を測る。杯部は内湾し、口縁端部を丸く納める。磨滅が進んでおり、調整は不明瞭であるが、ナデを施したとみられる。胎土はやや粗く、１㎜大の石英やチャートを含む。322は脚部である。杯部及び脚裾部は欠損するが、脚柱部の大部分が遺存する。中空の脚部で、脚柱部から脚裾部への屈曲は緩やかである。磨滅が進み、調整は不明瞭であるが、脚部内面にケズリが認められる。胎土はやや粗く、２㎜以下の石英・チャート・長石を含む。

須恵器

須恵器はいずれも上層の砂層中から出土した。

323は杯蓋である。一部口縁部が欠損するのみで、ほぼ完形で残る。口縁部径は13.2㎝、高さは4.5㎝を測る。天井部はやや扁平である。口縁部はほぼ垂直にのび、稜はほとんど突出しない。口縁端部は明瞭に面取りが行われる。外面調整は天井部から1.6㎝まで回転ヘラケズリを施し、以下は回転ナデを施す。内面は回転ナデによって仕上げる。ロクロの回転方向は右回りである。頂部から側面にかけて、一条のヘラ記号が施される。胎土はやや粗く、１～３㎜大の白色砂粒を含む。ＭＴ15型式併行期に位置づけられる。

324～326は有蓋高杯の蓋である。324はやや丸みを帯びた天井部をもち、頂部に径2.45㎝のつまみがつく。器厚は0.25～0.45㎝を測る。外面は天井頂部から1.6㎝まで回転ヘラケズリを、それ以下は回転ナデを施す。内面は回転ナデによって仕上げる。胎土は精良で、0.5㎜大の石英や長石、白色砂粒を少量含む。325は326と同様の形態であることから有蓋高杯の蓋と判断したが、天井頂部を欠損し、つまみの有無が不明であるため、杯蓋の可能性も考えられる。復元した口縁部径は12.15㎝である。天井部の器厚は0.3～0.45㎝、口縁部の器厚は0.2～0.3㎝を測る。天井部はやや丸みを帯び、口縁部は直立気味にのびる。天井部と口縁部の境には明瞭な稜が入る。口縁端部は面取りを施す。外面調整は回転ヘラ

ケズリと回転ナデを施す。回転ヘラケズリの範囲は天井部から器高１／３に満たないと推定できる。内面は回転ナデによって仕上げる。胎土は精良で、0.5㎜以下の石英や長石をまばらに含む。TK23～ TK47型式併行期に位置づけられる。326は全形が復元でき、口縁部径11.4㎝、器高5.7㎝、天井部の器厚0.35～0.6㎝、口縁部の器厚0.3～0.35㎝を測る。やや丸みを帯びた天井部から口縁部は直立気味にのび、端部には面取りを施す。天井部と口縁部の境には明瞭な稜を設け、天井頂部には中央の凹んだやや高さのあるつまみを貼り付ける。つまみの径は2.75㎝である。外面調整は天井頂部から1.5㎝まで回転ヘラケズリを施した後、全体に回転ナデを加える。内面は回転ナデを施し、天井頂部内面に一方向の仕上げナデを加える。焼成の際に重ね焼きをしたとみられ、天井部外面に変色及び粘土の付着が確認できる。胎土は比較的精良で、１～２㎜大の白色砂粒をまばらに含む。TK23～ TK47型式併行期とみられる。

327・328は有蓋高杯である。327はほぼ完形で、口縁部径10.45㎝、器高8.7㎝を測る。口縁部は外反しつつ内傾して立ち上がり、1.6㎝程度のびる。口縁端部には面取りを施す。受部はわずかに上方を向き、丸く納める。脚部には菱形の透かしを３箇所に施し、端部は稜をもって、やや内側に屈曲する。外面調整には杯部の上２／３及び脚部に回転ナデ、杯部の下１／３に回転ヘラケズリを施す。内面調整は杯部・脚部ともに回転ナデを施す。胎土は精良で、１㎜以下の白色砂粒をまばらに含む。ＴＫ23～ ＴＫ47型式併行期に位置づけられる。328は杯部が１／３程度、脚部がほぼ完形に残る。脚部にやや深めの杯部を接合する。復元できた口縁部径11.6㎝、器高9.5㎝を測る。口縁部は外反気味にわずかに内傾して立ち上がり、端部に面取りを施す。受部はやや反り気味に水平方向にのびる。脚部には台形の透かしを３箇所に施し、端部は稜をもって、内側に屈曲する。杯部の外面調整には下１／３に回転ヘラケズリ後、全体に回転ナデを施す。内面調整は回転ナデを施し、底部に一方向の仕上げナデを加える。脚部の調整は内外面ともに回転ナデである。胎土は精良で、１㎜大の白色砂粒をわずかに含む。ＴＫ23～ ＴＫ47型式併行期に位置づけられる。

329は円孔は残っていないものの、瓿と考えられる。肩部が張り、底部が尖り気味となる。復元した胴部最大径は15.0㎝で、比較的大型であったことが推定できる。胴部の最も張り出す箇所に波状文を施し、その上に１条の沈線が入る。胴部に施された波状文は10条以上で構成される。波状文の上部が沈線によって消されることから、波状文を描いた後に浅い沈線を入れたことが分かる。外面には胴下半部以下には平行タタキが施され、内面底部には直径約２㎝の無文の当具痕が残る。胎土は精良で、焼成も良好である。

土師器

土師器はいずれも上層中から出土した。

330～335は甕である。330はほぼ完形に復元することができ、胴部はいびつな球形で、口縁部が外反してのびる。口縁端部は丸く納める。口縁部径は12.25㎝、器高16.6㎝、胴部最大径15.95㎝を測る。外面調整には、口縁部に横ナデ、胴部に斜めから縦方向のハケメを施す。ハケメは１㎝あたり10条程度の目の細かいものを使用する。内面調整には、口縁部に横ナデ、胴部にナデを施す。作りはやや粗雑で、口縁部の歪みや粘土の継ぎ目が残る。胎土はやや粗く、１㎜大のチャートや白色砂粒を含む。上層の砂層から出土した。331は甕の口縁部～胴部である。胴部は球形とみられ、口縁部が外反してのびる。口縁端部は丸く納める。口縁部径は11.2㎝、胴部最大径は15.75㎝を測る。外面調整には、口縁部に横ナデ、胴部に縦方向のハケメを施す。ハケメは１㎝あたり５条程度の目の粗いものを使用する。内面調整には、口縁部に横ナデ、胴部にハケメの後ナデを施し、肩部内面には指頭圧痕が明瞭に残る。胎土はやや粗く、１～２㎜大のチャートや白色砂粒を含み、微小な角閃石も認められる。

332は胴部～底部である、丸底で、胴部最大径は16.2㎝強である。器厚は0.35～0.6㎝を測る。外面調整には縦方向のハケメ、内面調整には横方向のヘラケズリを施す。ハケメは１㎝あたり４～６条程度の目の粗いものを使用し、密に施す。胎土はやや粗く、１～２㎜大の石英やチャート、白色砂粒を含む。

333～335は口縁部である。333は口径17.7㎝に復元できる。口縁部は外傾してのび、端部を丸く納める。調整は

不明瞭であるが、内外面ともにナデで仕上げる。胎土は粗めで、１㎜大の石英やチャート、白色砂粒を多く含む。334は口径16.1㎝に復元できる。口縁部は外傾してのび、端部を丸く納める。調整は内外面ともに横ナデを施し、肩部内面には指頭圧痕や粘土紐の継ぎ目を残す。胎土は比較的精良で、0.5㎜以下の石英や長石、角閃石をまばらに含む。335は口縁部径12.4㎝に復元できる。口縁部はわずかに外反してのび、端部は外側につまむようにして面を持つ。外面調整には肩部に縦方向のハケメの後ナデ、口縁部に横ナデを施す。内面調整には肩部に横方向の細かいヘラケズリ、口縁部に横ナデを施す。口縁基部の外面及び口縁上部の内面はわずかにくぼんでおり、特に強く横ナデを施したとみられる。胎土はやや粗く、１㎜大の石英や白色砂粒を含む。

SR02（図版63、写真図版88）

弥生土器

336は甕底部である。小型化した平底で、中央部がわずかにくぼむ。底部径は2.95㎝を測る。器厚は薄く、0.3㎝である。外面調整は底部にはナデ、胴部にはタタキの後板ナデを施す。内面は指オサエの後、ハケで仕上げる。胎土は比較的精良であるが、2.5㎜以下の石英・長石・チャート等をやや多く含む。底部から胴部にかけては黒斑がみられる。弥生時代後期のものと考えられる。

土師器

337は甕の口縁部から胴部上半である。１／６程度が残存し、復元口縁部径は15.0㎝を測る。口縁部は外傾して直線的にのび、端部は丸く納める。器壁はやや厚く、0.5～0.6㎝である。外面調整には口縁部に横ナデ、胴部に斜め方向のハケメを施す。内面調整には口縁部に横ナデ、胴部に板ナデ・ハケメを施す。なお、口縁部内面には板状工具によるとみられる筋状の痕跡がわずかに残る。胎土はやや粗く、１㎜以下の石英や白色砂粒を多く含む。338は甕の口縁部である。１／６程度が残存し、復元口縁部径は15.8㎝を測る。口縁部はわずかに外反して外傾し、端部は尖る。外面調整は口縁部～肩部に右上がりの平行タタキを施した後、口縁部上半に横ナデを行う。内面は磨滅のため、不明瞭である。胎土はやや粗く、１～２㎜大の白色砂粒や石英・長石等を多く含む。337・338ともに古墳時代前期のものとみられる。

2）石器

SR01（図版63、写真図版88）

Ｓ７は凹基式の石鏃である。中層の砂層から出土した。先端部及び端部片方をわずかに欠損し、残存長29㎜、残存幅15.5㎜を測る。最大厚5.5㎜で、重量は1.4ｇと小型の石鏃である。サヌカイト製で、肉眼観察から金山産と考えられる。

3）金属器

鋤溝２（図版63、写真図版88）

Ｍ９は断面が方形を呈する角釘である。下端部を欠損するが、残存長は4.07㎝で、小型の鉄釘とみられる。時期は近世に属するものと考えられる。

第５章　自然科学分析

第１節　豆腐町遺跡出土木製品の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

姫路市駅前町に位置する豆腐町遺跡から出土した木製品58点について、樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、奈良時代の井戸SE03、SE05、SE07、SE08、SE09、江戸時代の井戸SE04と土坑SK12-2、粘土採掘坑SX65-2から出土した井戸枠や部材、木製品など計58点である。なお、曲物については枠（W62）と蓋（W61）の両方を分析したため、総数は59点になる。

これらの試料から、剃刀を用いて３断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察および同定、写真撮影を行った。

3. 結果

樹種同定の結果、針葉樹はモミ属とマツ属複維管束亜属、ヒノキ、スギ、アスナロの５分類群、広葉樹はツゲとイスノキ、ケヤキ、トチノキ、ヒサカキ、ツバキ属の６分類群、その他に単子葉類のタケ亜科があり、合計12分類群が確認された。時期別の樹種構成を第３表、結果の一覧を第６表に示す。

第3表　時期別の樹種構成

樹種/時期	奈良	江戸	計
モミ属		1	1
マツ属複維管束亜属		1	1
ヒノキ	19	5	23
スギ	14	1	16
アスナロ		7	7
ツゲ	1		1
イスノキ		1	1
ケヤキ		3	3
トチノキ		3	3
ヒサカキ	1		1
ツバキ属	1		1
タケ亜科		1	1
計	36	23	59

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を写真に示す。

(1)モミ属　*Abies*　マツ科　第13図　1a-1c（W70）

仮道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射組織で数珠状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、１分野に１～４個存在する。

モミ属は暖帯から温帯の山地に生育する常緑高木で、ウラジロモミやシラベ、トドマツなど約５種がある。材は軽軟で加工容易であるが、割れや狂いが出やすく、保存性が低い。

(2)マツ属複維管束亜属　*Pinus subgen. Diploxylon*　マツ科　第13図　2a-2c（W56）

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、靱性は大である。

(3)ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa*（Siebold et Zucc.）Endl.　ヒノキ科　第13図　3a-3c（W31）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩

材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、１分野に２個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性および耐湿性は著しく高く、狂いが少ない。

（４）スギ　*Cryptomeria japonica*（L.f.）D.Don　**ヒノキ科　第13図　４a-４c（W10）**

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、１分野に通常２個並ぶ。

スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、割裂性は大きい。

（５）アスナロ　*Thujopsis dolabrata*（L.f.）Siebold et Zucc.　**ヒノキ科　第13図　５a-５c（W69）**

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。樹脂細胞は晩材部に散在し、放射組織内にも豊富に樹脂を含む。分野壁孔は小型のスギ型～ヒノキ型で、１分野に不揃いに３～４個存在する。

アスナロは温帯に分布する常緑高木である。材は、加工性や割裂性は中庸だが、耐朽性および保存性が高い。

（６）ツゲ　*Buxus microphylla* Siebold et Zucc. var. *japonica*（Müll.Arg. ex Miq.）Rehder et E.H.Wilson　**ツゲ科　第13･14図　６a-６c（W20）**

小型の道管が、ほぼ単独で分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は10～20段の階段状である。放射組織は異性で、１～２列幅である。

ツゲは暖帯に分布する常緑の低木もしくは小高木である。材は非常に緻密で割れにくく、加工困難である。

（７）イスノキ　*Distylium racemosum* Siebold et Zucc.　**マンサク科　第14図　７a-７c（W49）**

小型で角張った道管が、単独あるいは数個複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は20段程度の階段状である。軸方向柔組織は散在もしくは帯状～線状にいびつに配列する。放射組織は１～３列幅の異性で、細胞中に結晶を含む。

イスノキは関東以西の暖帯に分布する常緑高木である。材はきわめて重硬で、切削加工および割裂は困難である。

（８）ケヤキ　*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino　**ニレ科　第14図　８a-８c（W54）**

大型の道管が年輪のはじめに１列に並び、晩材部では小道管が集団をなして接線状から斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は３～５列幅程度の異性で、上下端の細胞に大きな結晶をもつ。

ケヤキは暖帯下部に分布する落葉高木で、肥沃地や渓畔によく生育する。材は重硬だが、加工はそれほど困難ではなく、保存性が高い。

（９）トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　**ムクロジ科　第14図　９a-９c（W52）**

やや小型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列で、すべて平伏細胞で構成される同性である。接線断面において放射組織は層界状に配列する。

トチノキは暖帯から温帯に分布する落葉高木で、やや湿り気のある肥沃な土地の深い谷間や中腹の緩傾斜地によく生育する。材は柔らかく緻密であるが、保存性は低い。

（10）ヒサカキ　*Eurya japonica* Thunb. *var. japonica*　**モッコク科　第14図　10a-10c（W14）**

小径で角張った道管が、ほぼ単独で均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は階段状で、40段以上となる。放射組織は１～４列幅で、上下に直立もしくは方形細胞が数個連なる異性である。

ヒサカキは亜熱帯～暖帯に生育する常緑低木または小高木である。材の強さは中庸で、割裂は困難である。

（11）ツバキ属　*Camellia*　**ツバキ科　第14･15図　11a-11c（M１柄）**

小径の道管がほぼ単独で密に分布する散孔材で、晩材に向けてやや径を減じる。道管の穿孔は10段程度の横棒か

らなる階段状である。放射組織は方形もしくは直立細胞が上下に２～４細胞連なる異性で、１～３列幅程度、多列部が単列部と同じ大きさである。円形に著しくふくれた大型の結晶が単列部に認められる。

ツバキ属は温帯から暖帯に生育する常緑高木もしくは低木である。ヤブツバキやサザンカ、チャノキなどがある。材は重硬および緻密で、切削加工および割裂は困難であるが、強靱で耐朽性は大きい。

（12）タケ亜科　Subfam. *Bambusoideae*　イネ科　第15図　12a（W55）

柔細胞と維管束で構成される単子葉類で、維管束は柔細胞中に散在する。維管束は一対の道管と、それと直行する原生木部間隙と師部で形成され、その周囲を厚膜組織からなる維管束鞘が取り囲む。

タケ・ササの仲間で日本では12属が含まれるが、稈の組織のみから属や種を識別するのは難しい。割裂性が非常に大きい。

4.考察

奈良時代の遺構から出土した木製品は、ヒノキが19点、スギが14点、ツゲとヒサカキ、ツバキ属が各１点であった（第３表）。器種別の樹種同定結果を第４表に示す。針葉樹では、楔と皿、曲物の側板と蓋、斎串、用途不明木製品がヒノキであった。曲物底板と井戸枠、加工材はヒノキとスギであった。スギやヒノキは軽軟で加工が容易である。また、耐水性があるため、水場での利用にも適しており、井戸枠や曲物に多く使用されていたと推測される。広葉樹では、刀子の柄がツバキ属、横櫛がツゲ、加工材（栓？）がヒサカキであった。いずれも重硬で緻密な材である。

第4表　器種別の樹種同定結果（奈良時代）

樹種	刀子（柄）	楔	檜扇？（軸か）	横櫛	皿（挽物）	曲物 側板	曲物 底板	曲物 蓋	栓？	斎串	井戸枠	不明品	板材	加工材	計
ヒノキ		4	1		1	1	2	1		1	6	1		1	19
スギ											11		2	1	14
ツゲ				1											1
ヒサカキ									1						1
ツバキ属	1														1
計	1	4	1	1	1	1	2	1	1	1	17	1	2	2	36

江戸時代の遺構から出土した木製品は、アスナロが７点、ヒノキが５点、ケヤキとトチノキが各３点、モミ属とマツ属複維管束亜属、スギ、イスノキ、タケ亜科が各１点であった。器種別の樹種同定結果を第５表に示す。下駄の歯はケヤキ、横櫛はイスノキ、漆器椀はケヤキとトチノキであった。イスノキは非常に重硬な材で、櫛の素材として一般的である。ケヤキは重硬な材、トチノキは軽軟な材で、どちらも中世以降は漆器の木地としてよく利用されている（伊東・山田編，2012）。そのほかの木製品は針葉樹で、曲物は蓋がヒノキ、側板がヒノキとアスナロであった。柄杓はヒノキであった。桶材と箸はアスナロであった。馬形はマツ属複維管束亜属であった。部材はモミ属、板材は３点ともアスナロであった。用途不明品はタケ亜科であった。タケ類は割裂性が大きく、加工が容易である。

江戸時代の針葉樹の試料は、主にヒノキやアスナロといったヒノキ科であった。

第5表　器種別の樹種同定結果（江戸時代）

樹種	下駄の歯	横櫛	漆椀	曲物 側板	曲物 蓋	柄杓	桶材	箸	馬形	用途不明品	部材	板材	薄板	計
モミ属											1			1
マツ属複維管束亜属									1					1
ヒノキ				1	3	1								5
スギ							1							1
アスナロ				1			1	1				3	1	7
イスノキ		1												1
ケヤキ	2		1											3
トチノキ			3											3
タケ亜科										1				1
計	2	1	4	2	3	1	2	1	1	1	1	3	1	23

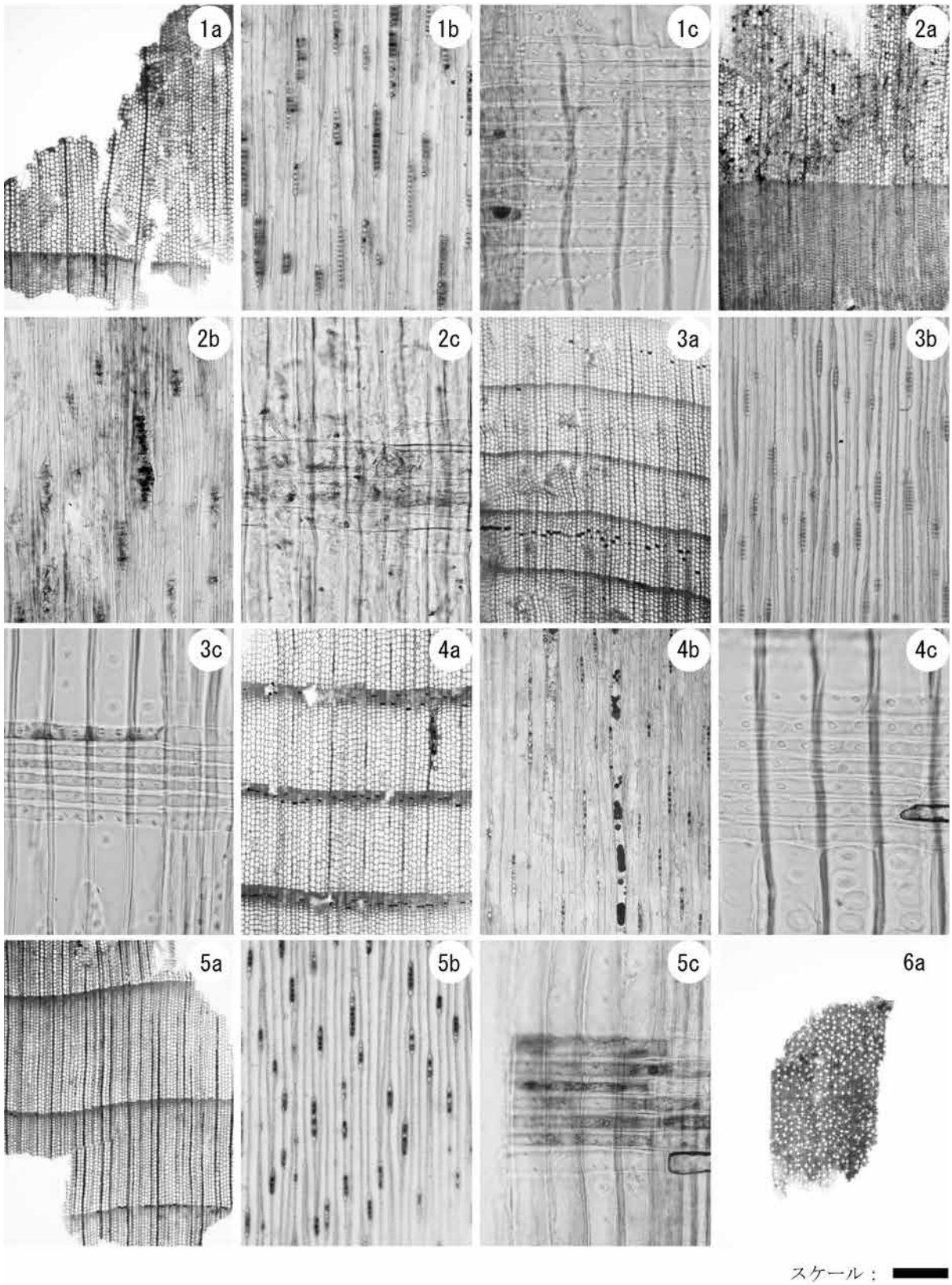
参考・引用文献

平井信二（1996）木の大百科. 394p, 朝倉書店.

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベース－. 449p, 海青社.

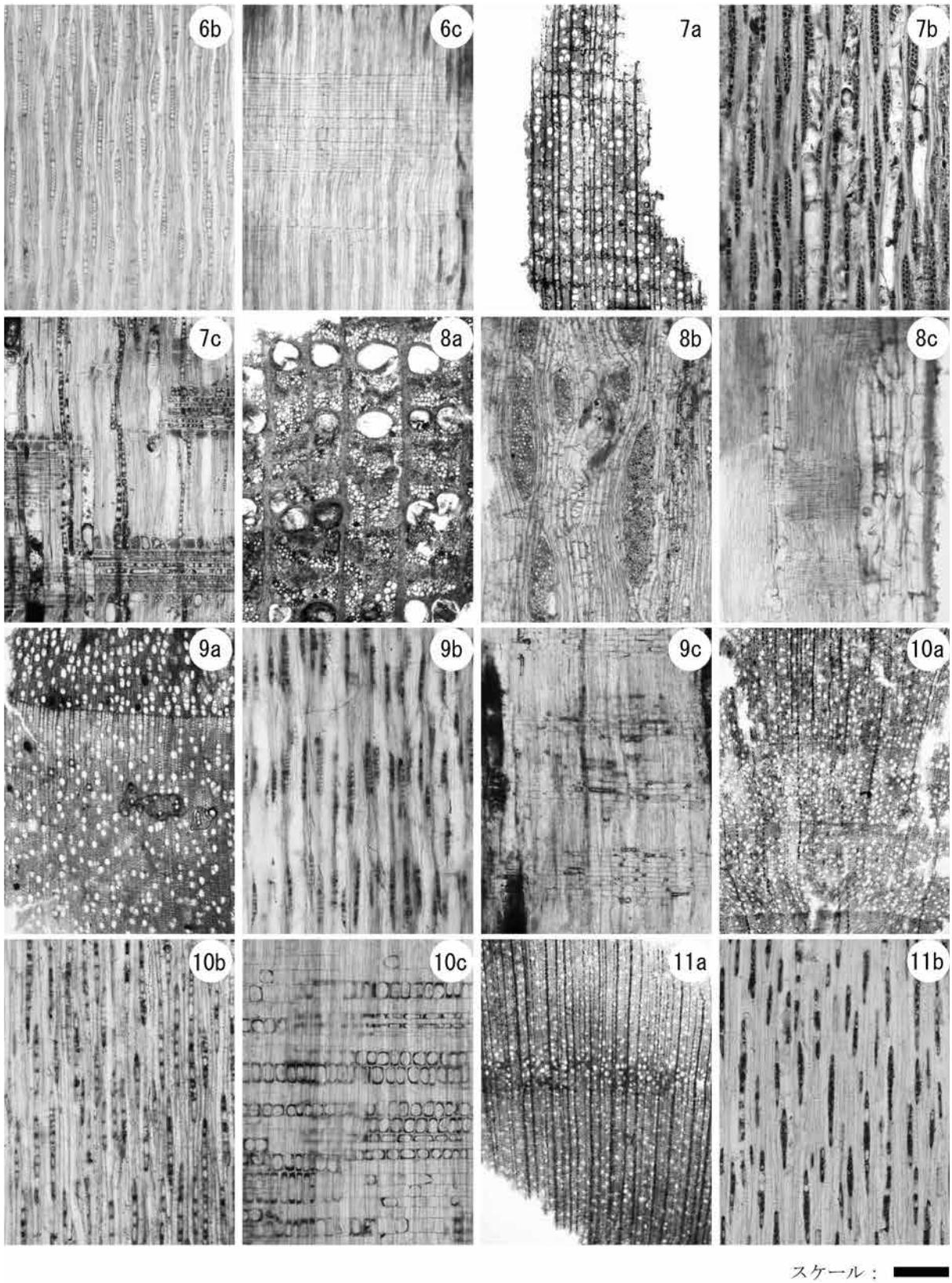
第6表　樹種同定結果一覧

報告番号	器種	出土地区	出土遺構	層位	時期	樹種	木取り
W2	井戸枠k(縦板)	1-4B区	SE03		奈良	スギ	板目
W5	井戸枠d(柱材)	1-4B区	SE03		奈良	スギ	角材
W7	井戸枠f(横桟)	1-4B区	SE03		奈良	スギ	板目
W9	井戸枠c(横板)	1-4B区	SE03		奈良	スギ	追柾目
W10	井戸枠	1-4B区	SE03	裏込め	奈良	スギ	板目
W11	斎串	1-4B区	SE03	最下層	奈良	ヒノキ	追柾目
W12	曲物蓋	1-5A区	SE05	最下層	奈良	ヒノキ	板目
W13	加工材	1-10D区	SE09	井戸枠内	奈良	スギ	板目
W14	加工材(栓？)	1-10D区	SE09	下層井戸枠内	奈良	ヒサカキ	丸木
W15	板材	1-10D区	SE09	下層	奈良	スギ	板目
W16	板材	1-10D区	SE09		奈良	スギ	板目
W17	加工材	1-10D区	SE09	井戸枠内	奈良	ヒノキ	削出
W18	檜扇？	1-10D区	SE09	下層	奈良	ヒノキ	板目
W20	横櫛	1-10D区	SE09	井戸枠内下層	奈良	ツゲ	板目
W21	曲物(底板)	1-10D区	SE09	下層	奈良	ヒノキ	板目
W23	井戸枠j(縦板)	1-8C区	SE07		奈良	スギ	板目
W24	井戸枠a(柱材)	1-8C区	SE07		奈良	スギ	柾目
W29	井戸枠a(柱材)	1-9C区	SE08		奈良	ヒノキ	角材
W30	井戸枠j	1-9C区	SE08		奈良	ヒノキ	角材
W31	井戸枠h	1-9C区	SE08		奈良	ヒノキ	角材
W32	井戸枠e(横桟)	1-9C区	SE08		奈良	ヒノキ	角材
W33	井戸枠d(横板)	1-9C区	SE08		奈良	スギ	板目
W34	井戸枠g(横桟)	1-9C区	SE08		奈良	ヒノキ	角材
W35	井戸枠b(横板)	1-9C区	SE08		奈良	スギ	板目
W36	井戸枠i(横桟)	1-9C区	SE08		奈良	ヒノキ	角材
W37	井戸枠c(横板)	1-9C区	SE08		奈良	スギ	板目
W38	井戸枠f(横板)	1-9C区	SE08		奈良	スギ	板目
W39	楔	1-9C区	SE08		奈良	ヒノキ	角材
W40	楔	1-9C区	SE08		奈良	ヒノキ	角材
W44	曲物(側板)	1-9C区	SE08	北壁ハング部分GL-60	奈良	ヒノキ	板目
W44	曲物(底板)	1-9C区	SE08	北壁ハング部分GL-60	奈良	ヒノキ	追柾目
W45	用途不明品	1-9C区	SE08	掘形	奈良	ヒノキ	柾目
W46	皿(挽物)	1-9C区	SE08	掘形底部	奈良	ヒノキ	横木取り
W47	部材(楔)	1-9C区	SE08		奈良	ヒノキ	角材
W48	部材(楔)	1-9C区	SE08		奈良	ヒノキ	角材
W49	横櫛	1-6A区	SE04		江戸	イスノキ	板目
W50	漆椀	1-6A区	SE04		江戸	トチノキ	横木取り
W51	漆椀	1-6A区	SE04		江戸	トチノキ	横木取り
W52	漆椀	1-6A区	SE04		江戸	トチノキ	横木取り
W53	下駄の歯	1-6A区	SE04		江戸	ケヤキ	追柾目
W54	下駄の歯	1-6A区	SE04		江戸	ケヤキ	板目
W55	用途不明品	1-6A区	SE04		江戸	タケ亜科	削出
W56	馬形	1-6A区	SE04		江戸	マツ属複維管束亜属	板目
W57	板材	1-6A区	SE04		江戸	アスナロ	角材
W58	桶材	1-6A区	SE04		江戸	アスナロ	板目
W59	板材	1-6A区	SE04		江戸	アスナロ	板目
W60	板材	1-6A区	SE04		江戸	アスナロ	柾目
W61	曲物蓋	1-6A区	SE04		江戸	ヒノキ	柾目
W62	曲物(側板)	1-6A区	SE04		江戸	ヒノキ	柾目
W63	柄杓	1-6A区	SE04		江戸	ヒノキ	柾目
W64	曲物蓋	1-6A区	SE04		江戸	ヒノキ	柾目
W65	曲物蓋	1-6A区	SE04		江戸	ヒノキ	柾目
W67	箸	1-6A区	SE04		江戸	アスナロ	削出
W68	曲物(側板)	1-6A区	SE04		江戸	アスナロ	柾目
W69	薄板	1-6A区	SE04		江戸	アスナロ	柾目
W70	部材	1-6A区	SE04		江戸	モミ属	柾目
W71	桶(底板)	3-10H区	SK12-2		江戸	スギ	板目
W72	漆椀	2-7F区	SX65-2		江戸	ケヤキ	横木取り
M1	刀子(柄)	1-9C区	SE08		奈良	ツバキ属	丸木



第13図　出土木材の光学顕微鏡写真(1)

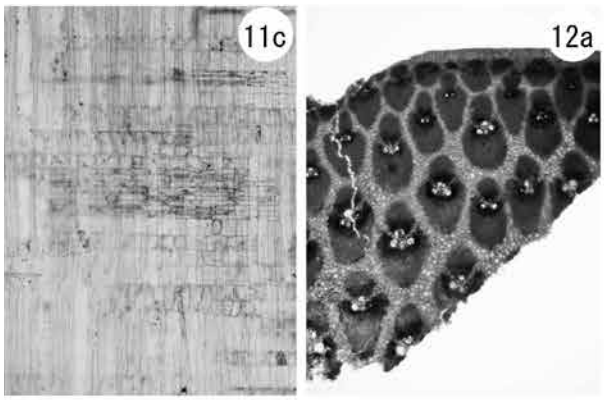
1a-1c．モミ属（W70）、2a-2c．マツ属複維管束亜属（W56）、3a-3c．ヒノキ（W31）、
4a-4c．スギ（W10）、5a-5c．アスナロ（W69）、6a．ツゲ（W20）
a：横断面（スケール=500μm）、b：接線断面（スケール=200μm）、c：放射断面（スケール=50μm）



第14図　出土木材の光学顕微鏡写真(2)

6b-6c．ツゲ（W20）、7a-7c．イスノキ（W49）、8a-8c．ケヤキ（W54）、9a-9c．トチノキ（W52）、10a-10c．ヒサカキ（W14）、11a-11b．ツバキ属（M1）

a：横断面（スケール=500μm）、b：接線断面（スケール=200μm）、c：放射断面（スケール=200μm）



スケール：

第15図　出土木材の光学顕微鏡写真(3)

11c．ツバキ属（M1）、12a．タケ亜科（W55）

a：横断面（スケール=500μm）、b：接線断面（スケール=200μm）、c：放射断面（スケール=200μm）

第２節　豆腐町遺跡出土動物遺体の同定

中村賢太郎（パレオ・ラボ）

1. はじめに

兵庫県姫路市豆腐町・南駅前町に所在する豆腐町遺跡の発掘調査では、奈良時代と江戸時代の遺構が検出され、遺構内から動物遺体が出土した。ここでは、動物遺体の同定結果を報告する。

2. 試料と方法

動物遺体同定の試料は、試２、試３、試４、試５の大きく４つに分けて整理されていた。試２は江戸時代の井戸SE04から出土した７点（2013121-２～８）、試３は江戸時代の井戸SE06から出土した３点（2013121-９～11）、試４は奈良時代の井戸SE07から出土した１点（2013121-12）、試５は江戸時代の井戸SE10から出土した１点（2013121-13）、ＳＸ-１から出土した１点（2013121-14）、ＳＸ-４から出土した１点（2013121-132）を含む。

試料の観察は肉眼で行い、現生標本との比較により分類群と部位を同定した。

3. 結果と考察

奈良時代の試料は、魚類のみが見られ、マダイ亜科（Pagrinae）が同定された。井戸SE07からのマダイ亜科の右前上顎骨１点のみである。マダイ亜科には、マダイおよびチダイが含まれ、いずれも海産で、瀬戸内海にも生息する。

江戸時代の試料は、貝類がアカニシ（*Rapana venosa*）、サザエ（*Turbo sazae*）の２分類群、両生類がカエル類（Anura）の１分類群、哺乳類がイヌ（*Canis lupus familiaris*）、ニホンイタチ（*Mustela itatsi*）、哺乳綱の一種の３分類群、鳥類はニワトリ（*Gallus gallus domesticus*）の可能性がある１分類群が見られた。

貝類のうち、アカニシは内湾の砂泥底、サザエは岩礁に生息する。いずれも瀬戸内海で採取できる。身が食用にされた後、殻が廃棄されたと考えられる。

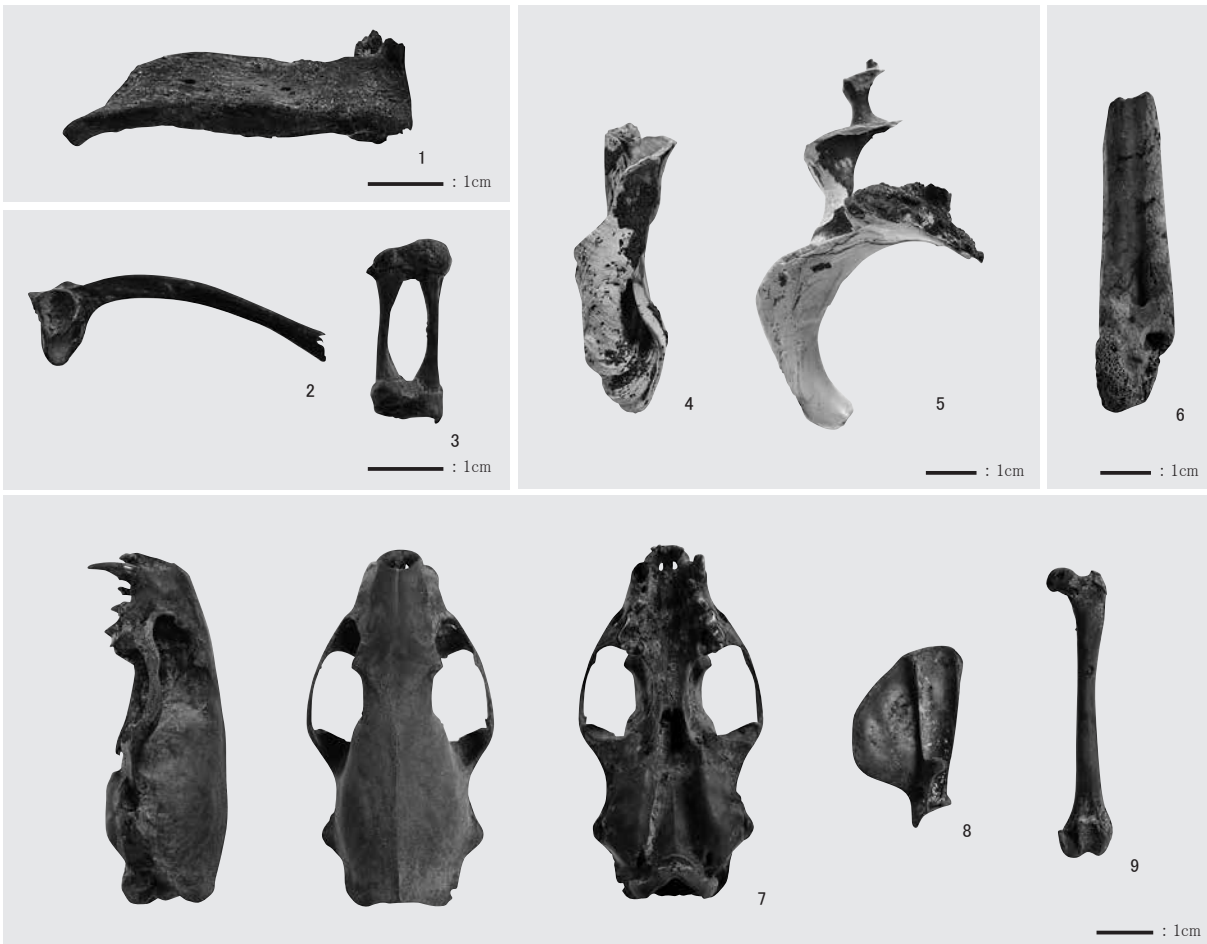
井戸SE06では、サザエ？殻やアカニシ殻と共に、イヌのほぼ全身が出土した。イヌは解体の痕跡を確認できず、ほぼ全身の骨格が揃っているため、イヌ遺体が１頭分丸ごと井戸内に置かれたと考えられる。

また、別の井戸SE04では、ニホンイタチの頭蓋骨、左肩甲骨、左大腿骨が出土した。ニホンイタイチは、肉や皮が利用可能である。また、SE04ではカエル類が２個体分出土しているが、井戸に自然に生息していたカエル類か人により利用されたカエル類かは不明である。

第7表　豆腐町遺跡から出土した動物遺体

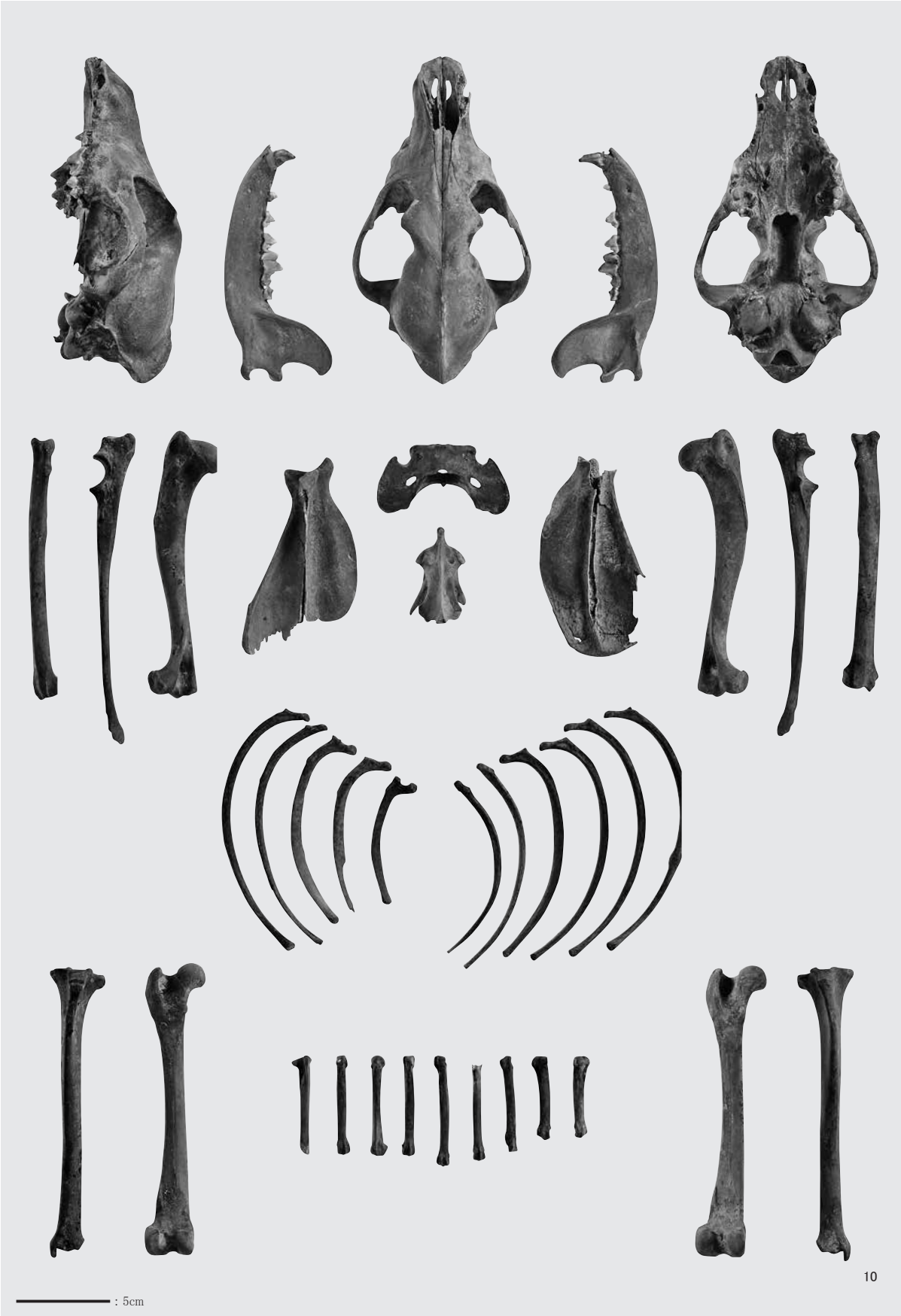
報告番号	ネーミング番号	地区	遺構	層位	時期	分類群	部位	左右	部分･状態	数量	備考
1	2013121-12	1-8B	SE07	掘り方含む	奈良時代	マダイ亜科	前上顎骨	右	3/4残	1	試4
2	2013121-7	1-5A	SE04	-	江戸時代	カエル類	腸骨	右	ほぼ完存	2	試2
3	2013121-2						距骨･踵骨	右	完存	1	試2
4	2013121-11	1-8C	SE06	-	江戸時代	アカニシ	殻	-	殻軸	1	試3
5	2013121-13	2-7D	SE10	水溜青灰色シルト、最下層	江戸時代	サザエ	殻	-	殻軸	1	試5
6	2013121-14	1-1A	SX01	緑灰色ブロック混シルト	江戸時代	ニワトリ？	脛足根骨	右	遠位端	1	試5
7	2013121-8	1-5A	SE04	-	江戸時代	ニホンイタチ	頭蓋骨	-	完存	1	試2
8	2013121-5						肩甲骨	左	完存	1	試2
9	2013121-6						大腿骨	左	完存	1	試2
10	2013121-9	1-8C	SE06	-	江戸時代	イヌ	頭蓋骨	-	ほぼ完存	1	試3　A-Pr:171.0mm
							下顎骨	左	ほぼ完存	1	試3　Id-Goc:122.7mm
							下顎骨	右	ほぼ完存	1	試3　Id-Goc:122.8mm
							環椎	-	完存	1	試3
							軸椎	-	完存	1	試3
							肋骨	左	完存、ほぼ完存	6	試3
							肋骨	右	完存、ほぼ完存	5	試3
							肩甲骨	左	関節部	1	試3
							肩甲骨	右	関節部欠く	1	試3
							上腕骨	左	完存	1	試3
							上腕骨	右	完存	1	試3　GL:139.8mm
							橈骨	左	完存	1	試3　GL:138.8mm
							橈骨	右	完存	1	試3　GL:136.9mm
							尺骨	左	完存	1	試3　GL:164.3mm
							尺骨	右	完存	1	試3　GL:162.0mm
							大腿骨	左	完存	1	試3　GL:154.1mm
							大腿骨	右	完存	1	試3　GL:152.5mm
							脛骨	左	完存	1	試3　GL:153.1mm
							脛骨	右	完存	1	試3　GL:153.6mm
							指骨	不明	完存、ほぼ完存	9	試2
11	2013121-3,4	1-5A	SE04	-	江戸時代	サザエ	殻	-	殻軸	3	試2
12	2013121-10	1-8C	SE06	-	江戸時代	サザエ？	殻	-	殻軸	1	試3
13	2013121-132	1-1B	SX04	緑灰色ブロック混シルト	江戸時代	哺乳綱	不明	不明	破片	1	試5　大型、陸生

第16図 出土動物遺体(1)



1.マダイ亜科右前上顎骨（SE07）　2.カエル類右腸骨（SE04）　3.カエル類右距骨・踵骨（SE04）　4.アカニシ（SE06）　5.サザエ（SE10）
6.ニワトリ？右足脛足根骨（SX01）　7.ニホンイタチ頭蓋骨（SE04）　8.ニホンイタチ左肩甲骨（SE04）　9.ニホンイタチ左大腿骨（SE04）

第17図 出土動物遺体(2)



10.イヌ全身(SE06)

第３節　豆腐町遺跡出土炭化種実の同定

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

1. はじめに

姫路市駅前町に位置する豆腐町遺跡は、奈良時代と江戸時代の遺構が検出された遺跡である。奈良時代には、播磨国府に関連する施設があった場所と推定されている。ここでは、奈良時代の井戸から出土した炭化種実の同定を行い、当時の利用植物について検討した。

2. 試料と方法

試料は、井戸SE14の3層から肉眼で確認・採取された炭化種実1点である。種実の時期は、奈良時代と推定されている。

抽出・同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。

3. 結果

同定の結果、試料は木本植物のイチイガシ炭化子葉の破片であった（第８表）。

次に、炭化種実の記載を示し、図版に写真を掲載して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠した。

（1）イチイガシ　*Quercus gilva* Blume　炭化子葉　ブナ科

半分に割れた個体で、完形ならば楕円体～長楕円体、側面観は俵形。先端の突出はあまりない。縦方向に明瞭な溝が１本確認できた。高さ10.7㎜、幅7.5㎜。

第8表　豆腐町遺跡から出土した炭化種実

	試料番号	試1
		2014009
	遺構	SE14
	層位	3層
	時期	奈良時代
分類群	採取方法	現地取上げ
イチイガシ	炭化子葉	(1)

（括弧内は破片数）

4. 考察

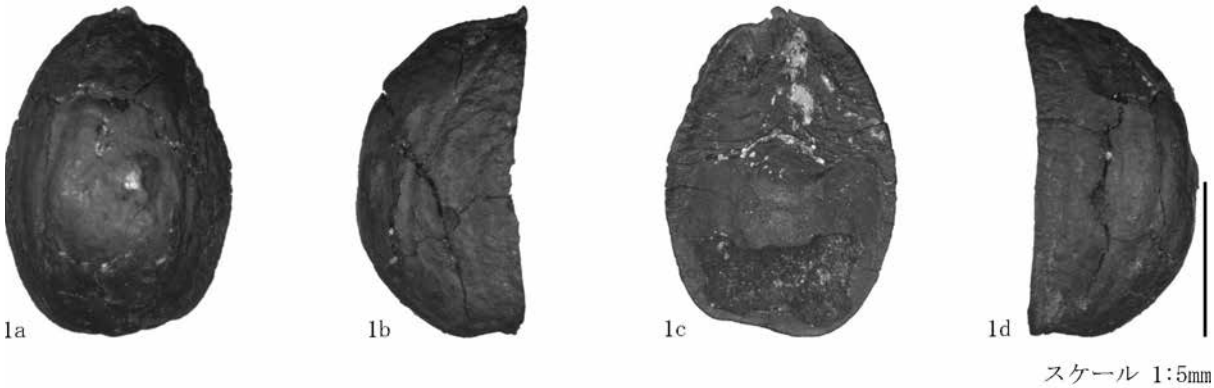
奈良時代の井戸SE14から出土した炭化種実１点を同定した結果、野生植物で落葉高木のイチイガシであった。イチイガシは生食可能なドングリ類であり、常緑広葉樹林帯では最もよく利用されている（小畑，2011）。調査区では漆の容器や製塩土器、カマドといった、生産や調理関係の遺物が目立つため、国府の主要な政庁部分ではなく、役所で使う道具や必要な物資を製作・調達する、工房や厨房のようなエリアであったと考えられている。イチイガシ子葉は食用部位で、炭化しているため、食用にされた後の残滓の可能性がある。

今回検討したのは肉眼で確認され、取り上げられた炭化種実であったが、堅果類が確認され、遺存状態も良好であった。今後、土壌中に含まれている微細な種実もあわせて検討すれば、当時の食生活や周辺の植生について、より具体的に明らかにできると考えられる。

引用文献

小畑弘己（2011）東北アジア古民族植物学と縄文農耕. 309p，同成社.

米倉浩司・梶田　忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス（YList），http://ylist.info



第18図　出土炭化種実

1．イチイガシ炭化子葉（SE14、3層）

第４節　豆腐町遺跡出土昆虫遺体の同定

森　勇一（金城学院大学）・佐々木由香（パレオ・ラボ）

1. はじめに

豆腐町遺跡は、JR姫路駅周辺に展開する、奈良時代を中心に一部江戸時代の遺構を伴う遺跡である。ここでは、井戸から取り上げられた昆虫遺体を同定した。

2. 試料と方法

昆虫遺体は、井戸SE03の埋土最下層より得られており、昆虫が生息した時代は奈良時代（８世紀前半）と考えられている。

昆虫遺体は、水洗されたのちビニール袋の中に入った状態であった。このため、乾燥による変形が進行し、一部に破損が認められた。同定は、実体顕微鏡下で行った。

3. 結果

昆虫遺体は、長さ10.2㎜、最大幅7.5㎜の左上翅上半部である。つやのある赤銅色を呈し、巨大小楯板と接合するための前角湾入部、および肩部の強い張りだしを有する上翅の特徴より、*Protaetia* 属（シロテンハナムグリ属）に分類される甲虫の左上翅であると考えられる。

Protaetia 属に所属する昆虫は、キョウトアオハナムグリ *Prtaetia lenzi*、シロテンハナムグリ *P. orientalis*、シラホシハナムグリ *P. brevitarsis*、リュウキュウツヤハナムグリ *P. pryeri* はじめ計14種がわが国に生息する（岡島・荒谷ほか，2012）。そのうち大部分は琉球列島や離島などに分布する種類であり、また色彩を考慮すると、豆腐町遺跡から出土した昆虫遺体はシロテンハナムグリかシラホシハナムグリのいずれかに限定される。第19図に示すように、上翅表面に点刻が密に配される特徴は、点刻が疎らなシラホシハナムグリと識別され、豆腐町遺跡の試料はシロテンハナムグリの左上翅（上半部）に同定される。

4. 考察

シロテンハナムグリは、体長19.9～26.8㎜、背面は暗銅色、濃緑銅色、赤銅色、黄緑銅色、紫銅色などの変異が認められる。現在、北海道や東北を除く本土では最も普通に見られる *Protaetia* 属で、都市部にも数は多く（酒井・藤岡，2007）、樹液や樹果、花に集まる。成虫は、本土では４月下旬から10月にかけて出現し、南西諸島では冬季の一時期を除いて通年その姿が見られる。クヌギ、コナラ、クサギ、タブノキ、イチョウの樹液や、ノイバラ、イボタノキ、ネズミモチ、ニセアカシアなど各種の花に集まる（岡島・荒谷ほか，2012）とされている。

豆腐町遺跡の奈良時代の井戸の最下層より発見されたシロテンハナムグリの存在は、遺跡が立地した周辺地域にクヌギやコナラをはじめとした樹液を伴う木本類や、ノイバラ・イボタノキなど花の咲く植物が存在したことを示している。

現在、シロテンハナムグリは普通種として知られているが、遺跡からの産出例はきわめて限定的であり、江戸時代後期の山梨県宮沢中村遺跡（森，2000ａ）、同じく江戸時代後期の三重県桑名城下町遺跡（森，2000ｂ）が知られている。したがって、奈良時代に遡る兵庫県豆腐町遺跡のシロテンハナムグリの発見は大変貴重なものといえる。

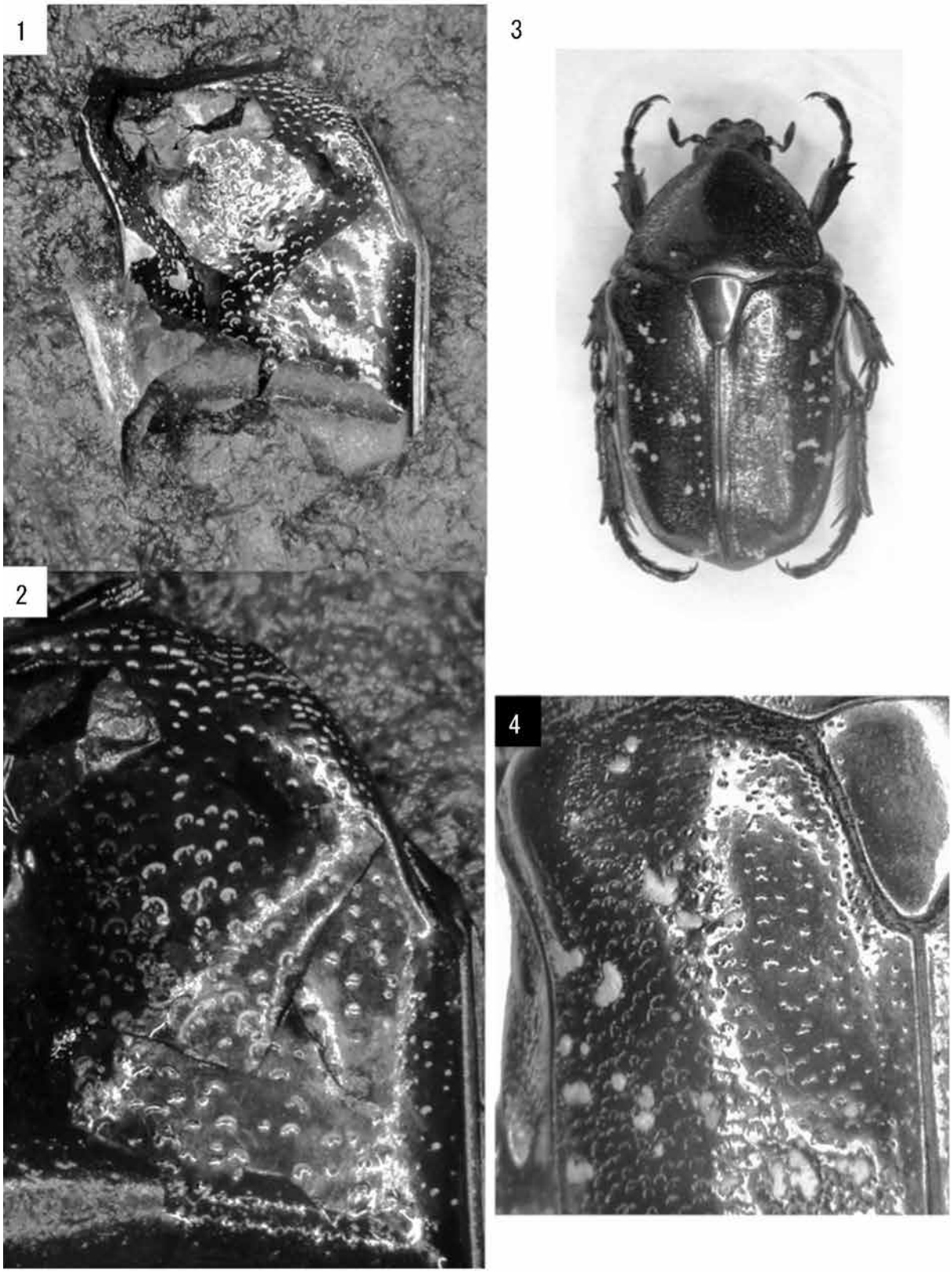
引用文献

岡島秀治・荒谷邦雄・細谷忠嗣・酒井　香ほか(2012)日本産コガネムシ上科標準図鑑. 442p, 学研.

森　勇一(2000a)山梨県宮沢中村遺跡から産出した昆虫化石群集と古環境.山梨県埋蔵文化財センター編「山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第181集　宮沢中村遺跡」:29-33,山梨県教育委員会.

森　勇一(2000b)桑名市桑名城下町遺跡伊賀町69地点から産出した昆虫と古環境.桑名市教育委員会編「桑名城下町遺跡発掘調査報告書−伊賀町69地点−」:25-30,桑名市教育委員会.

酒井　香・藤岡昌介(2007)日本産コガネムシ上科図説(第２巻)食葉群I.173p,昆虫文献六本脚.



第19図　出土昆虫遺体の顕微鏡写真

1. シロテンハナムグリ *Protaetia orientalis* (Burmeiter)の左上翅上半部 長さ10.2mm
2. 同上の左上翅の拡大　コンマ状と一文字状の2タイプの点刻が密に配置されている
3. シロテンハナムグリ *Protaetia orientalis* (Burmeiter)の現生標本　背面の色は黄緑銅色タイプ
4. 同上の拡大

第６章　まとめ

第１節　豆腐町遺跡

1）古代の遺物

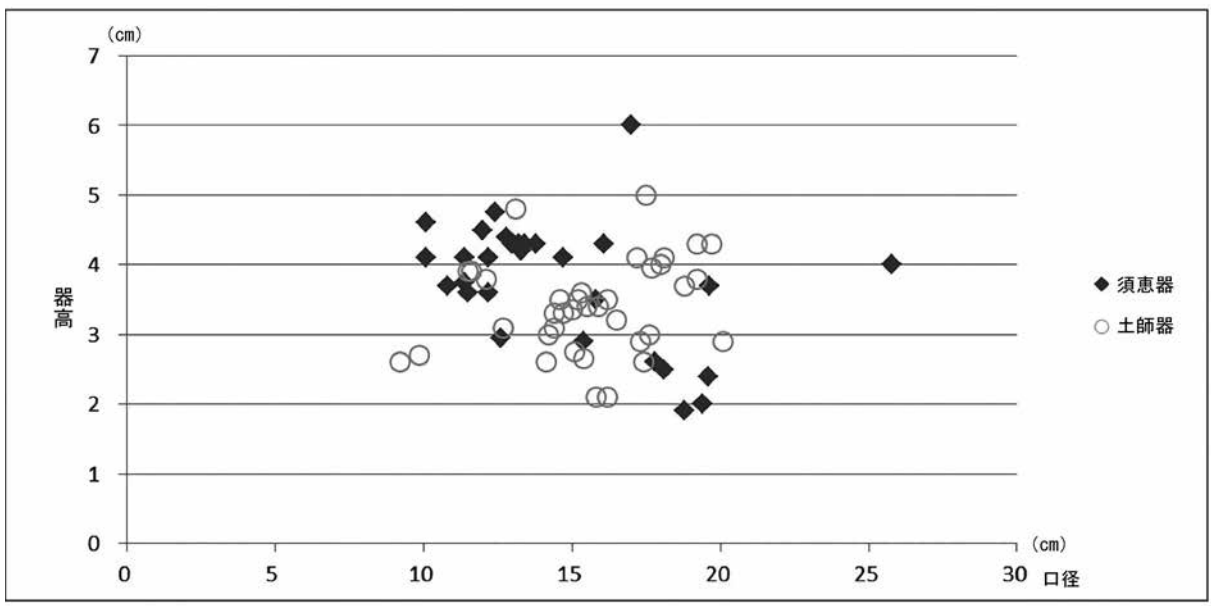
時期および特色

豆腐町遺跡の古代の土器は、概ね奈良時代前半から半ばに至る時期の様相を呈しているが、その具体的な年代比定にあたっては、都城の土器編年との比較検討が必要となる。

杯・皿などの高台を持たない供膳具の器高と口径の関係を第20図に示した。このグラフで見る限り、明瞭な法量分化はみとめられない。これは、播磨に限らず当時の各地域でしばしばみられる現象である。かつて西弘海氏により「律令的土器様式」とされた①法量の規格性、②多様な器種分化、③土師器と須恵器の互換性の確立などの特色をもつ宮都型の食膳具様式は大量の官人に対する給食・宴席などに対応したものであり、周辺地域の官衙遺跡においては厳密に模倣され、土器様式を完全に塗り替えることはなかった。

須恵器杯類では、外傾度が小さいタイプが多い。また、杯蓋は全体の形状が笠型のものが多く、扁平かつ口縁部近くで屈曲するタイプの蓋は環状つまみをもつ稜碗の蓋以外には少ない。以上のような特色は畿内の編年では古い要素とされているが、当地域では時代が下がっても残る可能性も指摘されている。また、土師器杯類では一段の放射状暗文をもつものがあり、口縁端部の形状も都城の土師器を模倣しているが製作技法が都城では見られないものであり、こちらも古相を残すが時期が下がる可能性がある。ただ当遺跡は播磨の同時期の集落遺跡の中では供膳具における土師器の比率がかなり高い部類に入るように思える。

豆腐町遺跡のうち姫路市が調査を行った地区では漆紙文書の内容によって実年代の比定が可能な資料があり、その報告が待たれる。また、消費地のみならず生産地である須恵器窯跡群の資料も合わせて播磨の古代土器の編年が確立されることを期待したい。



第20図　供膳具の口径と器高

墨書・刻書土器

今回の調査では、８点の墨書・刻書土器が出土している。そのほとんどが井戸から出土したものであり、「大□」銘の墨書土器がSE01から、「郡」（34）・「□」（40）がSE03から、「大」（90）・「郡カ」（94）と底部に墨点が付いた土器及び刻書「大カ」（95）がSE08から、「井」（142）がSE14から出土している。

「大」「大□」については、筆運びとこれまでの周辺調査例より「大山」と考えられる。「郡」「郡カ」銘は須恵器杯Ａ、土師器杯に記されており、いずれも胎土は精良で丁寧な調整が施されている。

漆付着土器

漆付着土器は19点が出土しており、このうち11点が古代の井戸より出土している。漆膜が付着し、刷毛塗りした痕跡を有するものもあり、漆塗りをしたものの可能性がある。姫路市教育委員会によって調査され、今回の調査でも掘形の一部を検出した井戸（SE15）から漆紙文書が出土していることからも、この近辺が漆工房に関わることを示す遺物であるといえよう。

2）古代の遺構

井戸の構造

今回の調査で古代の遺構としてまとまった内容を言及することができるのは井戸に限られる。木組み井戸を６基、曲物積み井戸を１基、素掘り井戸を１基調査している（第９表）。木組みの井戸については、隅柱縦板組（SE01）・隅柱横桟縦板横板組（SE03）・縦板組横桟どめ（SE07）・隅柱横板組（SE08）・横板組隅柱横桟型（SE09）・横板組（SE14）と一つとして同じものはない。このことについては、時期的な変遷を反映しているものではなく、井戸構築時において使用可能な材を用いて、構築したことによるものと考える。

上記の井戸からは井戸枠として用いられた板材・柱材・楔が多数出土している。耐水性の優れたスギ材ないしヒノキ材が用いられているが、その量比はヒノキ材が卓越している。Ｗ１・Ｗ２のように切欠き加工された板をさらに分割して縦板として使用していたことから明らかであるように、井戸枠の多くは建築部材を転用したものと考えられる。そして、これらの井戸枠部材については、井戸廃絶時に鋸などによって切断され、さらに再利用がなされている。

第9表　古代の井戸

遺構No.	時期	種別	井戸底出土遺物	備考
SE01	8世紀前半	縦板組（隅柱あり）		板材・柱材の大部分が抜き取られる。
SE03	8世紀前半	縦板・横板組隅柱横桟どめ	斎串	隅柱2本・東西の板材を抜き取り。隅柱には鋸の切断痕。
SE05	8世紀中頃	素掘り	完形甕	
SE07	8世紀中頃	縦板組横桟どめ		井戸枠ほぼ完存。
SE08	8世紀	横板組隅柱横桟どめ	刀子・墨点書き土師器杯	桟との仕口部分で鋸により切断され、隅柱を抜き取り。
SE09	8世紀後半	横板組隅柱横桟どめ	和同開珎	横桟・柱痕跡のみ残る。大部分抜き取られたか。
SE13	8世紀後半	曲物積み	完形土師器杯	井戸枠ほぼ完存するも、曲物の腐食激しい。
SE14	8世紀前半	横板組		井戸枠（集水施設）ほぼ完存するも、部材の腐食激しい。

井戸廃棄時の祭祀関連遺物

上記の井戸からは土器・木製品・金属製品が出土している。これらの遺物の大部分は井戸が埋め戻される際に投棄されたものと考えられるが、出土状況及び遺物の内容から同一に扱いえないものもいくつか見られた。これらの遺物については井戸が使用されなくなり、埋め戻す際の祭祀に伴う可能性があるため、改めて個別に記述する。

SE03

井戸枠内最下層埋土より斎串が出土している。ただし、篩掛けのために採取した土塊を水洗する際に見つかったため、詳細な出土状況については明らかでない。

SE05

井戸底面の中央部より完形の甕が出土した。この甕についてはその法量から釣瓶に使用された可能性もある。

SE08

井戸底面より８㎝の井戸枠ほぼ中央より刀子が刃部を東向きにして出土している。これと同じレベルで井戸枠内やや西よりでは、底部に墨点が２つ書かれた土師器杯がやや傾いた状況で出土している。

SE09

井戸底最下層埋土より和同開珎が曲物側板外面に付着した状態で出土しているが、銹化した泥が表面を覆っていたため調査段階では認識しておらず、詳細な出土状況については明らかでない。

SE13

SE13は上記の井戸とは埋戻し方法から違いが見られる。まず、井戸枠内を均質な粗砂で埋め戻し、その砂層の上面で蓋をするように大礫を据えて土器片とともに粘土で埋めている。この砂層の中ほどより器形・法量とも類似した土師器杯が２点並んで出土した。133は井戸枠中央に伏せられた状態で、132はその脇に接して傾いた状態であった。

SE14

SE14は周囲の基盤層が礫層であったこと、隅柱や横桟が無く、横板を仕口のみで組み合わせる事などから、井戸の大部分が削平され、集水施設のみが残っていた可能性が考えられる。上層は瓦片とともに埋め戻され、下層は板材が置かれた上で土器が出土している。このうちの１点の土師器底部に「井」字の墨書がされている。ただし、詳細な出土状況については明らかでない。

以上、古代の井戸８基のうち６基について、埋戻し時の投棄とは分離して考えるべき内容の出土遺物が確認された。今後、さらに情報を蓄積し、井戸廃棄時の祭祀について考える必要がある。

井戸の配置

奈良時代の井戸はSE14を除き、調査区南半に集中する傾向がある。これについては、調査区北半がより激しい攪乱を受けていることも影響していることを考慮すべきかもしれないが、あえて積極的にその配置について考えてみたい。

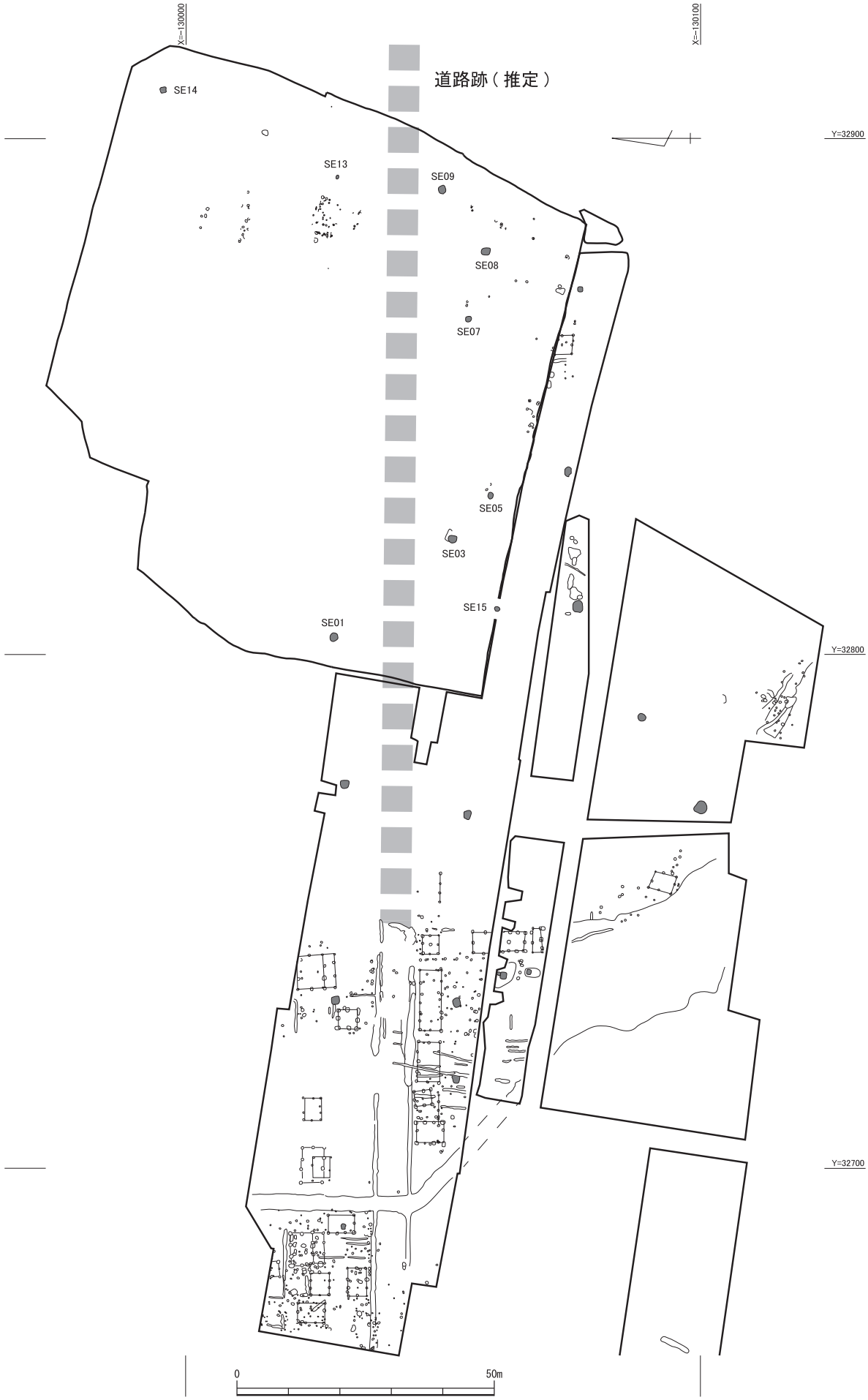
まず、周辺の調査をみてみると、今回の調査結果を含めて21基の井戸が調査されている（第21図網掛け）。それぞれの井戸はⅡ－２区のものを除いて最も近いものと10ｍ以上距離を空けている。

この中で特に注目されるのが姫路市教育委員会による隣接地区の調査結果である。この調査では、東西に並行して延びる２本の溝（道路跡）を挟んで東西棟の掘立柱建物跡が整然と並んでいる。道路より北側では、道路側溝より６ｍと８ｍのところに井戸が配され、相互の距離は43ｍを測る。南側では、掘立柱建物跡を挟んで道路側溝より８ｍ～９ｍの３カ所に井戸が配されている。

道路跡は途中で途切れており、今回の調査でも削平されたためか検出されていない。これがそのまま東へ延長すると仮定した場合、推定ラインより北側に位置するSE01とSE13は側溝より９ｍ程度離れて位置している。これは姫路市調査例と同じくほぼ道路に並行する配置である。

また、推定ラインより南側に位置するSE03は８ｍ、SE07は10ｍ、SE09は５ｍと若干の前後はあるものの、これもほぼ並行していると見る事ができる。その南側では、SE15、SE05、SE08が推定ラインより15ｍ～17ｍ、そのさらに南でも３基の井戸が28ｍ～30ｍ離れた位置でほぼ直線上に並ぶ点も指摘しておきたい。

このことから井戸の配置は東西に延びる道路跡を基準に南北に一定の間隔で配置されていた可能性がある。すなわち、このことは道路跡がそのまま東に延長されるという先の仮定を傍証するものといえよう。


X=-130000
X=-130100
道路跡（推定）
SE14
SE13
SE09
SE08
SE07
SE05
SE03
SE15
SE01
Y=32900
Y=32800
Y=32700
0
50m

第21図　古代の遺構

3）古代の豆腐町遺跡について

今回の調査では攪乱によって古代の遺構の多くは削平されていたが、過去の調査例を総合することで次の点を指摘しうる。まず、奈良時代の井戸は東西に延びる道路を基準にしてある程度規格的に配置されていたといってよい。また、SE13の周辺（２区９Ｆ）を中心に建物跡として復元はできなかったものの、密に柱穴が見つかっている。調査区南半の井戸付近でもいくつか柱穴が検出されていることから、井戸と掘立柱建物跡はセットで配置されていたと考えられる。

次に、これまでの調査結果と同じく、墨書土器・漆付着土器が出土しており、国府関連の工房の一部であったと考えられる。煮炊具（竈・鍋）の他にマダイ亜科の下顎骨が出土していることから、厨屋関係についても改めて考慮する必要があろう。

第２節　駅前町遺跡

駅前町遺跡では１区で古墳時代に位置付けられる溝２条と自然流路が調査された。もっとも多くの遺物が出土したのはSR01であり下層から縄文時代晩期および弥生時代前期の土器小片、中層より弥生時代後期から古墳時代前期の土器とサヌカイト製石鏃、上層より古墳時代中期の須恵器が出土している。SR02からは弥生時代後期の甕と古墳時代前期の土師器甕が出土している。

SD01はSR01とほぼ同時期、SD02はそれより後に開削されたものである。

この他に、W69°ＮとN21°Ｅに主軸をもつ鋤溝が見つかっていることから、北側隣接地点の調査結果と同じく近世以降は耕作地として利用されていた事が明らかになった。

第３節　総括

最後に、豆腐町遺跡・駅前町遺跡の今回の調査結果についてまとめることとする。

①豆腐町遺跡・駅前町遺跡は市川右岸の微高地に立地する遺跡である。

②調査の結果、豆腐町遺跡では奈良時代及び近世の遺構と遺物が、駅前町遺跡では弥生時代～古墳時代の遺構と遺物が明らかとなっている。

③豆腐町遺跡の奈良時代の遺構は井戸・土坑・柱穴があるが、調査区の大部分が攪乱を受けていたため残存状況は不良だった。井戸については隣接の調査で明らかになっている道路跡の延長線上に並行して直線的に並んでいる。

④豆腐町遺跡の近世の遺構は井戸と粘土採掘坑である。粘土採掘坑は調査区南西部に分布する不整形なもの（Ⅰ）と、調査区中央部に分布する長方形のもの（Ⅱ）に分類でき、切り合い関係および出土遺物からⅠがⅡに先行している。

⑤駅前町遺跡の弥生時代の遺構は自然流路に限られ、流路内からはほぼ完形の土器が出土している。古墳時代は自然流路と溝がほぼ同時期に掘り込まれる。

豆腐町遺跡・駅前町遺跡出土土器観察表（1）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)			調整	焼成	残存	胎土粒径	色調	備考	図版	写真図版
						口径	器高	底径								
1	須恵器	杯蓋	豆腐町	1区	SE01	(14.0)	2.1		内面:ナデ 外面:ロクロケズリ→ナデ	良好	口縁部1/3	～1mm	灰白		22	22
2	須恵器	杯蓋	豆腐町	1区	SE01	(12.8)	(2.0)		内面:ナデ 外面:ロクロケズリ、ナデ		口縁部3/5 天井部3/8	～1mm	灰白		22	22
3	須恵器	杯蓋	豆腐町	1区	SE01	(20.8)	(1.3)		内面:ナデ 外面:ロクロケズリ、ナデ		口縁部1/6 天井部1/8	～2mm	灰	漆付着	22	21
4	須恵器	杯B	豆腐町	1区	SE01	(12.8)	4.4	(9.5)	内面:ロクロナデ、ナデ 外面:ヘラ切り→ナデ	良好	口縁部1/10 底部1/2	～1mm	灰白	底部刻み有り	22	21
5	須恵器	杯B	豆腐町	1区	SE01	(12.0)	4.5	(9.1)	内面:ロクロナデ、ナデ 外面:ヘラ切り→ナデ	良好	口縁部1/4	～2mm	灰		22	21
6	須恵器	杯A	豆腐町	1区	SE01	(13.2)	4.3	(10.2)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ		口縁部1/4 底部1/2	～2mm	灰～灰白		22	21
7	須恵器	稜椀(杯L)蓋	豆腐町	1区	SE01	(21.0)	2.9		内面:ロクロナデ、ナデ 外面:ロクロケズリ→ナデ	良好	口縁部2/3	～3mm	灰～灰白		22	21
8	須恵器	稜椀(杯L)蓋	豆腐町	1区	SE01	(20.6)	(1.5)		内面:ロクロナデ、ナデ 外面:ロクロケズリ→ナデ	良好	口縁部1/12	～1mm	灰白	内面墨付着	22	22
9	須恵器	稜椀(杯L)	豆腐町	1区	SE01	(20.6)	(5.5)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ→ナデ、稜下ヘラミガキ	良好	口縁部1/4	～1mm	黄灰		22	22
10	須恵器	壺	豆腐町	1区	SE01		(11.1)	(11.6)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ロクロナデ		体部1/2 底部ほぼ完形	～1mm	灰		22	21
11	須恵器	壺	豆腐町	1区	SE01		(3.9)	(9.7)	内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ→ナデ	良好	底部1/3	～3mm	灰		22	22
12	須恵器	甕	豆腐町	1区	SE01	(22.8)	(7.0)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、タタキ→ナデ	良好	口縁部1/4	～2mm	灰		22	22
13	須恵器	杯	豆腐町	1区	SE01	(3.35)	(0.7)	(3.55)	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ		底部わずか	～1mm	灰白	墨書「大○」	22	21
14	須恵器	平瓶	豆腐町	1区	SE01		(10.5)	14.1	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ		体部1/2 底部7/8	～1mm	灰白		22	21
15	土師器	甕	豆腐町	1区	SE01	(42.0)	(7.9)		内面:ハケ、板ナデ 外面:ハケ→ナデ	良好	口縁部1/8	～2mm	にぶい黄橙		22	22
16	土師器	甕	豆腐町	1区	SE01	(26.2)	(8.2)		内面:板ナデ、ナデ 外面:板ナデ、縦ハケ	良好	口縁部1/4	～3mm	にぶい黄橙		22	22
17	土師器	甕	豆腐町	1区	SE01	(25.6)	(9.0)		内面:板ナデ、ナデ 外面:板ナデ、縦ハケ	良好	口縁部1/8	～3mm	にぶい黄橙		22	22
18	土師器	甕	豆腐町	1区	SE01	(27.7)	(8.2)		内面:板ナデ、ナデ 外面:板ナデ、縦ハケ	良好	口縁部1/4	～5mm	にぶい黄橙		22	22
19	土師器	甕	豆腐町	1区	SE01	(24.8)	(7.6)		内面:ハケ→ナデ 外面:板ナデ、縦ハケ		口縁部1/5	～2mm	褐灰～にぶい黄橙		22	－
20	土師器	甕	豆腐町	1区	SE01	(26.9)	(6.0)		内面:板ナデ、ナデ 外面:板ナデ、縦ハケ		口縁部1/4	～1mm	橙～にぶい黄橙		22	22
21	土師器	把手	豆腐町	1区	SE01		(9.4)		内面:指オサエ、ナデ 外面:縦ハケ		把手のみ	～2mm	にぶい橙		23	23
22	土師器	把手	豆腐町	1区	SE01		(6.0)		内面:ナデ 外面:縦ハケ		把手のみ	～2mm	にぶい橙～灰黄		23	23

豆腐町遺跡・駅前町遺跡出土土器観察表（2）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)			調整	焼成	残存	胎土粒径	色調	備考	図版	写真図版
						口径	器高	底径								
23	土師器	竈	豆腐町	1区	SE01		(7.5)		内面:板ナデ 外面:縦ハケ	良好	焚口部	～2mm	にぶい黄橙		23	23
24	土師器	竈	豆腐町	1区	SE01		(4.9)		内面:板ナデ 外面:縦ハケ		焚口部	～1mm	褐灰～にぶい黄橙		23	23
25	土師器	竈	豆腐町	1区	SE01		(6.7)		内面:板ナデ 外面:縦ハケ		焚口部	～1mm	褐灰～にぶい黄橙		23	23
26	土師器	竈	豆腐町	1区	SE01		(7.3)		内面:ナデ 外面:横ハケ、ナデ		庇部わずか	～2mm	橙～褐灰		23	23
27	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE01	(12.1)	(4.9)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/8	～4mm	にぶい橙		23	23
28	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE01	(12.1)	(4.0)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/9	～3mm	灰		23	23
29	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE01	(12.8)	(4.0)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/8	～3mm	明赤褐		23	23
30	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE01		(4.5)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/14	～2mm	淡橙～灰白		23	23
31	土師器	製塩土器 甕	豆腐町	1区	SE01	(16.0)	(4.1)		内面:横ナデ 外面:横ナデ、ハケ	良好	口縁部1/8	～5mm	にぶい褐		23	23
32	土師器	製塩土器 甕	豆腐町	1区	SE01	(16.3)	(6.2)		内面:横ナデ 外面:横ナデ、ハケ	良好	口縁部1/7	～5mm	にぶい黄橙		23	23
33	瓦	平瓦	豆腐町	1区	SE01	長さ (9.8)	幅 (13.5)	厚み 2.8	凹面:布目痕 凸面:縄タタキ痕		端面･側面欠損	～3mm	灰黄		23	23
34	須恵器	杯A	豆腐町	1区	SE03	(11.4)	4.1	(7.2)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ	良好	口縁部1/16 底部1/5	～1mm	灰～灰白	墨書「郡」	24	24
35	須恵器	杯A	豆腐町	1区	SE03	(13.4)	(4.3)	(10.1)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ	良好	口縁部1/4	～1mm	灰～灰白		24	24
36	須恵器	杯A	豆腐町	1区	SE03	(13.3)	4.2	(9.6)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ	良好	口縁部わずか 底部1/8	～1mm	灰	口縁部内面漆付着	24	25
37	須恵器	杯A	豆腐町	1区	SE03	(15.8)	(3.5)	(11.9)	内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ→ナデ	良好	口縁部1/8 底部1/4	～1mm	灰白		24	25
38	須恵器	杯B	豆腐町	1区	SE03	(25.8)	4.0	(20.6)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ	良好	口縁部1/6	～1mm	灰白	内面漆付着	24	24
39	土師器	杯A	豆腐町	1区	SE03	(15.5)	(3.4)		内面:ヘラミガキ 外面:ヘラミガキ	良好	口縁部1/8	～1mm	にぶい橙～明褐	内面暗文	24	24
40	土師器	底部	豆腐町	1区	SE03	縦 (5.6)	0.7	横 (4.8)	内面:ナデ 外面:ナデ	良好	小片	～1mm	にぶい褐	墨書「？」	24	24
41	土師器	杯or椀	豆腐町	1区	SE03	(14.4)	3.3	(10.1)	内面:ナデ 外面:ナデ		口縁部1/4	～1mm	灰褐～にぶい橙		24	25
42	土師器	杯or椀	豆腐町	1区	SE03	(11.6)	3.9		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/3	～2mm	灰黄	二次焼成	24	24
43	須恵器	杯or椀	豆腐町	1区	SE03	(12.2)	4.1	(9.1)	内面:ナデ 外面:ナデ、指オサエ		口縁部3/8 底部1/4	～2mm	暗灰黄～にぶい黄		24	24
44	土師器	高杯	豆腐町	1区	SE03		(6.7)		内面:ナデ 外面:ヘラケズリ、ナデ	良好	脚柱部のみ	～2mm	にぶい橙	杯部に螺旋暗文か	24	25

豆腐町遺跡・駅前町遺跡出土土器観察表（3）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)			調整	焼成	残存	胎土粒径	色調	備考	図版	写真図版
						口径	器高	底径								
45	土師器	甕	豆腐町	1区	SE03	(23.8)	(6.9)		内面:横ハケ、ナデ 外面:横ハケ、ナデ	良好	口縁部1/5	～2mm	にぶい橙		24	25
46	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE03	(11.3)	(9.1)		内面:ナデ 外面:ナデ、指オサエ	良好	口縁部1/4	～1mm	灰白		24	25
47	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE03	(12.4)	(8.9)		内面:横ナデ 外面:縦ナデ	良好	口縁部1/13 体部1/5	～3mm	黄灰～灰黄		24	25
48	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE03	(13.95)	(7.0)		内面:ナデ 外面:ナデ、指オサエ	良好	口縁部1/6	～3mm	にぶい黄橙～灰白		24	25
49	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE03		(4.3)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/12	～3mm	にぶい褐	讃岐産か	24	25
50	瓦器	耳皿	豆腐町	1区	SE03	短径(7.6) 長径(9.0)	(2.4)		内面:横ナデ 外面:ナデ、指オサエ		口縁部1/4	～1mm	灰		24	25
51	須恵器	杯蓋	豆腐町	1区	SE05	16.5	3.0		内面:ナデ 外面:ロクロケズリ→ナデ	良好	完形	～3mm	灰白		25	26
52	須恵器	杯B	豆腐町	1区	SE05	14.7	4.1	11.0	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ	良好	口縁部7/8	～2mm	灰白	内面漆付着 外面も？	25	26
53	須恵器	杯B (転用硯)	豆腐町	1区	SE05		(1.65)	(11.2)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ	良好	底部1/4	～1mm	灰～灰白	内面使用	25	26
54	須恵器	杯B (転用硯)	豆腐町	1区	SE05		(1.9)	(11.9)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ	良好	底部1/2	～1mm	黄灰	底部外面使用	25	26
55	須恵器	杯A	豆腐町	1区	SE05	10.1	4.6	8.1	内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ→ナデ	良好	ほぼ完形	～1mm	灰白	内外漆付着	25	26
56	須恵器	甕	豆腐町	1区	SE05	(19.6)	(10.9)		内面:ロクロナデ、当具痕 外面:タタキ→カキメ、横ナデ	良好	口縁部1/4 頸部1/2	～4mm	灰白		25	26
57	須恵器	甕	豆腐町	1区	SE05	(43.8)	(13.9)		内面:横ナデ、当具痕 外面:ロクロナデ		口縁部1/4 頸部1/4	～2mm	暗灰黄～灰		25	26
58	土師器	杯A	豆腐町	1区	SE05	(19.2)	4.3		内面:磨滅 外面:ケズリ→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部1/2	～3mm	橙～にぶい黄橙		25	27
59	土師器	杯A	豆腐町	1区	SE05	(19.2)	(3.8)		内面:横ナデ 外面:ヘラケズリ→ナデ、横ナデ	良好	口縁部1/5	～1mm	灰白～淡黄		25	－
60	土師器	杯A	豆腐町	1区	SE05	18.0	4.0	15.6	内面:ヘラミガキ 外面:ヘラミガキ	良好	口縁部3/4 底部3/4	～1mm	浅黄橙		25	27
61	土師器	杯A	豆腐町	1区	SE05	17.5	5.0		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部3/4	～3mm	橙～にぶい黄橙		25	27
62	土師器	杯A	豆腐町	1区	SE05	(15.2)	3.5		内面:ナデ 外面:ヘラケズリ→ナデ、横ナデ	良好	口縁部1/2	～3mm	にぶい黄橙		25	27
63	土師器	杯A	豆腐町	1区	SE05	16.5	3.2		内面:横ナデ 外面:ヘラケズリ→ナデ、横ナデ	良好	口縁部4/5	～2mm	にぶい黄橙～灰白		25	27
64	土師器	灯明皿	豆腐町	1区	SE05	15.1	2.75	12.65	内面:横ナデ、ナデ 外面:ヘラケズリ→ナデ、横ナデ	良好	底部5/6	～1mm	明赤褐	暗文有	25	27
65	土師器	皿A	豆腐町	1区	SE05	(14.15)	2.6	12.75	内面:横ナデ 外面:横ナデ	良好	口縁部1/3 底部1/3	～2mm	橙～灰白	漆パレット	25	27
66	土師器	杯A	豆腐町	1区	SE05	14.2	3.0		内面:横ナデ 外面:ヘラケズリ→ナデ	良好	口縁部7/8	～3mm	橙～灰黄		25	27

豆腐町遺跡・駅前町遺跡出土土器観察表（4）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)			調整	焼成	残存	胎土粒径	色調	備考	図版	写真図版
						口径	器高	底径								
67	土師器	杯A	豆腐町	1区	SE05	17.3	2.9		内面:横ナデ 外面:ヘラケズリ→ナデ	良好	ほぼ完形	～2mm	灰白		25	27
68	土師器	杯A	豆腐町	1区	SE05	17.6	3.0		内面:横ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部9/10	～3mm	橙～にぶい橙	内面漆付着	25	27
69	土師器	小皿	豆腐町	1区	SE05	(9.2)	2.6		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/8	～1mm	灰白～淡黄		25	27
70	土師器	杯	豆腐町	1区	SE05	13.1	4.8		内面:磨滅 外面:磨滅	良好	ほぼ完形	～3mm	にぶい黄橙～灰白	内外漆付着	25	28
71	土師器	甕	豆腐町	1区	SE05	(24.15)	(7.8)		内面:横ナデ、ナデ 外面:横ナデ、縦ハケ	良好	口縁部若干 頸部1/8	～1mm	にぶい褐	内面&口唇漆付着	25	28
72	土師器	甕	豆腐町	1区	SE05	16.2	17.2		内面:横ハケ、横ナデ、指オサエ 外面:ハケ、横ナデ	良好	口縁部3/4	～2mm	橙～灰白		25	28
73	土師器	注口鉢	豆腐町	1区	SE05	22.3	13.4		内面:ナデ 外面:ハケ、横ナデ	良好	完形	～3mm	にぶい橙～浅黄橙		25	28
74	土師器	甕	豆腐町	1区	SE05	(27.8)	(23.8)		内面:ナデ 外面:横ナデ、縦ハケ	良好	口縁部1/3	～2mm	橙～灰白		26	29
75	土師器	竈	豆腐町	1区	SE05	幅 (38.0)	29.1	奥行 25.55	内面:ハケ→ナデ 外面:縦ハケ	良好	受口部･焚口部･ 把手1/4	～3mm	橙～灰白		26	29
76	土師器	竈	豆腐町	1区	SE05		(6.0)		内面:ナデ 外面:ハケ→ナデ		庇部	～2mm	にぶい黄橙		26	－
77	須恵器	杯蓋	豆腐町	1区	SE07	(13.2)	2.7		内面:ロクロナデ、ナデ 外面:ロクロケズリ→ナデ	良好	口縁部1/8	～1mm	灰白		27	30
78	須恵器	杯A	豆腐町	1区	SE07	(11.4)	3.75	(8.3)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ロクロナデ	良好	口縁部1/6	～1mm	灰白	内面底、漆付着	27	30
79	須恵器	杯A	豆腐町	1区	SE07	(12.6)	(2.95)	(9.8)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ロクロナデ	良好	口縁部1/3	～1mm	灰白		27	30
80	須恵器	杯A	豆腐町	1区	SE07	(15.4)	2.9		内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ロクロナデ	良好	口縁部1/3	～2mm	灰黄～灰白	内面赤色の文様？	27	30
81	須恵器	皿	豆腐町	1区	SE07	(18.8)	(1.9)		内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ロクロナデ	良好	口縁部1/6	～1mm	灰		27	30
82	土師器	皿	豆腐町	1区	SE07	(15.8)	(2.1)		内面:横ナデ 外面:横ナデ	良好	口縁部1/10	～2mm	黒褐～橙		27	－
83	土師器	皿	豆腐町	1区	SE07	(15.9)	3.4		内面:横ナデ 外面:横ナデ	良好	口縁部1/8	～1mm	にぶい赤褐～褐灰		27	30
84	土師器	甕	豆腐町	1区	SE07 井戸枠内	(15.8)	(5.7)		内面:横ハケ、ハケ→ナデ 外面:縦ハケ、横ナデ	良好	口縁部1/4	～2mm	にぶい橙		27	30
85	土師器	甕	豆腐町	1区	SE07 井戸枠内	(27.75)	(7.0)		内面:横ハケ、ハケ→ナデ 外面:縦ハケ、横ナデ	良好	口縁部1/5 体部1/5	～1mm	にぶい黄橙		27	30
86	土師器	甕	豆腐町	1区	SE07 井戸枠内		(7.2)		内面:横ハケ、ハケ→ナデ 外面:縦ハケ、横ナデ	良好	口縁部小片	～1mm	にぶい黄橙		27	30
87	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE07 井戸枠内	(10.2)	(7.7)		内面:ナデ、指オサエ 外面:ナデ	良好	口縁部1/3	～4mm	明赤褐～橙		27	30
88	須恵器	杯蓋	豆腐町	1区	SE07 井戸枠内	(17.9)	(2.2)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ、ロクロナデ	良好	口縁部1/10	精良	灰		27	32

豆腐町遺跡・駅前町遺跡出土土器観察表（5）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)			調整	焼成	残存	胎土粒径	色調	備考	図版	写真図版
						口径	器高	底径								
89	須恵器	杯B	豆腐町	1区	SE08	(11.6)	3.65	(8.7)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ロクロナデ	良好	口縁部若干 底部1/2	精良	灰	転用硯？	27	31
90	須恵器	杯B	豆腐町	1区	SE08		(3.25)	(12.0)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ロクロナデ	良好	底部1/4	～1mm	灰	底部墨書「大」	27	32
91	須恵器	杯B	豆腐町	1区	SE08	(27.1)	5.9	(22.55)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ロクロナデ	良好	口縁部1/7	～1mm	灰	内面漆、水玉状に付着	27	31
92	土師器	皿A	豆腐町	1区	SE08	(15.4)	(2.65)	(14.7)	内面:横ナデ、ヘラミガキ 外面:ヘラケズリ、横ナデ	良好	口縁部1/8	～1mm	橙	内面暗文	27	31
93	土師器	杯A	豆腐町	1区	SE08	15.3	3.6	12.15	内面:横ナデ 外面:ケズリ→ヘラミガキ、ナデ	良好	完形	～3mm	橙～にぶい黄橙	底部墨付着	27	31
94	土師器	杯A	豆腐町	1区	SE08	(14.7)	3.3	(12.0)	内面:横ナデ 外面:横ナデ、ヘラケズリ	良好	口縁部若干 底部1/4	精良	橙～にぶい橙	内面暗文 底部墨書「郡」?	27	32
95	土師器	皿A	豆腐町	1区	SE08		(1.05)		内面:横ナデ 外面:横ナデ、ヘラケズリ	良好	口縁部小片	精良	橙～にぶい褐	底部線刻「大」カ	27	32
96	土師器	甕	豆腐町	1区	SE08 井戸枠内	(17.7)	(7.15)		内面:横ナデ 外面:縦ハケ、横ナデ	良好	口縁部若干 頸部1/6	～2mm	にぶい橙		27	32
97	土師器	甕	豆腐町	1区	SE08	(26.9)	(7.0)		内面:横ハケ 外面:横ナデ、縦ハケ	良好	口縁部1/4	～1mm	にぶい黄橙		27	32
98	土師器	竈	豆腐町	1区	SE08 井戸枠内		(8.0)		内面:ナデ 外面:縦ハケ、ナデ	良好	把手部分	～1mm	にぶい黄橙		27	32
99	土師器	竈	豆腐町	1区	SE08 井戸枠内		(11.4)		内面:ナデ 外面:横ハケ、斜めハケ	良好	脚部	～1mm	にぶい黄橙		27	32
100	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE08 井戸枠内	(14.45)	(7.8)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/6	～3mm	橙～黄灰		28	33
101	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE08 井戸枠内	(12.45)	(6.3)		内面:横ナデ、ナデ 外面:ナデ、指オサエ	良好	口縁部1/7	～3mm	橙～灰黄		28	33
102	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE08		(4.35)		内面:布目 外面:ナデ	良好	口縁部小片	～3mm	黒褐	内面布目痕	28	33
103	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE08 井戸枠内		(5.7)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部小片	～4mm	にぶい黄褐～黒褐		28	33
104	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE08 井戸枠内	(13.6)	(6.2)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/6	～4mm	暗灰黄～黒褐		28	33
105	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE08	(12.2)	(5.7)		内面:ナデ 外面:ナデ、指オサエ	良好	口縁部1/9	～2mm	にぶい黄橙～赤橙		28	33
106	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE08 井戸枠内		(6.6)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部小片	～1mm	にぶい橙～灰		28	33
107	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE08 井戸枠内		(5.9)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部小片	～3mm	明赤褐		28	33
108	瓦	面戸瓦	豆腐町	1区	SE08	長さ (12.0)	幅 (8.0)	厚み 1.7	凹面:布目、側縁ヘラケズリ 凸面:板ナデ		2辺イキ	～2mm	灰黄		28	31
109	須恵器	杯蓋	豆腐町	1区	SE09		(1.6)		内面:ナデ 外面:ロクロケズリ	良好	つまみ付近	精良	灰		29	35
110	須恵器	杯蓋	豆腐町	1区	SE09	(15.8)	(1.95)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ	良好	口縁部1/6	精良	灰		29	35

豆腐町遺跡・駅前町遺跡出土土器観察表（6）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)			調整	焼成	残存	胎土粒径	色調	備考	図版	写真図版
						口径	器高	底径								
111	須恵器	皿A	豆腐町	1区	SE09	(19.65)	(3.7)	(17.75)	内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ、ロクロナデ	良好	口縁部1/15 底部1/3	～1mm	灰白		29	35
112	須恵器	杯B	豆腐町	1区	SE09	(13.0)	4.3	(9.3)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り、ロクロナデ		口縁部3/8 底部2/5	～2mm	灰		29	34
113	須恵器	杯B	豆腐町	1区	SE09	(17.75)	5.8	(12.45)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り、ロクロナデ	やや不良	口縁部1/9	～1mm	灰白		29	35
114	須恵器	杯B	豆腐町	1区	SE09	18.6	5.9	13.35	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り、ロクロナデ		ほぼ完形	～2mm	黄灰		29	34
115	土師器	杯A	豆腐町	1区	SE09	(12.7)	3.1		内面:横ナデ 外面:ケズリ、横ナデ	良好	口縁部1/2	精良	浅黄橙～灰白	内面暗文	29	34
116	土師器	杯A	豆腐町	1区	SE09	15.0	3.35	11.1	内面:横ナデ 外面:ヘラケズリ→横ナデ	良好	口縁部5/6 底部ほぼ完形	～2mm	橙～灰白	中央部に穿孔 内面暗文	29	34
117	土師器	皿A	豆腐町	1区	SE09	20.1	2.9	16.2	内面:横ナデ 外面:ヘラケズリ→横ナデ	良好	口縁部1/2 底部ほぼ完形	～1mm	浅黄橙～にぶい橙		29	34
118	土師器	皿	豆腐町	1区	SE09	(16.2)	2.1		内面:横ナデ 外面:ヘラケズリ→横ナデ		口縁部1/7 底部1/5	～2mm	橙～灰白		29	35
119	土師器	杯	豆腐町	1区	SE09 井戸枠内	9.85	2.7		内面:横ナデ 外面:横ナデ	良好	完形	精良	にぶい橙～浅黄橙	口縁部ゆがみ	29	34
120	土師器	甕	豆腐町	1区	SE09	(13.8)	(10.7)		内面:板ナデ→ナデ 外面:横ナデ、縦ハケ	良好	口縁部2/4 体部1/4	～1mm	橙～浅黄橙	不接破片あり	29	34
121	土師器	甕	豆腐町	1区	SE09	16.0	14.1	16.6	内面:ナデ、指オサエ 外面:横ナデ、縦ハケ		口縁部2/3 体部7/8	～2mm	褐灰～灰白		29	34
122	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE09	(11.0)	(6.05)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/12	～4mm	灰黄～にぶい橙		29	35
123	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE09	(13.4)	(4.5)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/9	～3mm	灰		29	35
124	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE09	(8.25)	(4.7)		内面:剝離 外面:ナデ	良好	口縁部1/6	～2mm	にぶい黄橙～橙		29	35
125	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE09		(5.9)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部小片	～3mm	灰白		29	35
126	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE09		(5.3)		内面:ナデ 外面:ナデ		口縁部小片	～3mm	橙～灰黄		29	35
127	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE09		(6.1)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部小片	～3mm	灰褐～橙		29	35
128	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE09		(5.3)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部小片	～2mm	橙		29	35
129	土製品	土錘	豆腐町	1区	SE09	長さ 4.5	幅 1.25	厚み 1.25	内面:- 外面:ナデ		完形	～1mm	黄灰～灰白	重量7.4g	29	35
130	須恵器	杯A	豆腐町	2区	SE13 西半	11.5	3.6	7.8	内面:ロクロナデ 外面:ヘラケズリ→ロクロナデ	良好	口縁部1/2	～2mm	黄灰～灰白		30	36
131	須恵器	壺	豆腐町	2区	SE13 西半		(9.6)	(12.0)	内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ→ナデ	良好	1/6	～5mm	暗灰		30	36
132	土師器	杯	豆腐町	2区	SE13	11.5	3.9		内面:板ナデ 外面:ナデ	良好	完形	～2mm	淡黄		30	36

豆腐町遺跡・駅前町遺跡出土土器観察表（７）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)			調整	焼成	残存	胎土粒径	色調	備考	図版	写真図版
						口径	器高	底径								
133	土師器	杯	豆腐町	2区	SE13	12.1	3.8		内面:板ナデ 外面:ナデ	良好	ほぼ完形	～2mm	灰黄	一部煤付着	30	36
134	土師器	甕	豆腐町	2区	SE13 西半	(29.6)	(8.4)		内面:ナデ 外面:横ナデ、縦ハケ	良好	口縁部若干 頸部1/8	～2mm	にぶい黄橙		30	36
135	土師器	竈	豆腐町	2区	SE13 西半		(10.6)		内面:指オサエ 外面:ハケ、ナデ	良好	脚先端	～2mm	灰黄褐～灰白		30	36
136	須恵器	杯B	豆腐町	3区	SE14	(11.4)	4.4	(8.0)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ロクロナデ	良好	口縁部1/16 底部1/2	～5mm	にぶい黄橙～灰		30	36
137	須恵器	稜椀or皿の蓋	豆腐町	3区	SE14	(26.0)	(1.75)		内面:ロクロナデ 外面:回転ヘラ切り、ナデ	良好	口縁部1/10	～1mm	灰白		30	36
138	須恵器	稜椀or皿の蓋 (転用硯)	豆腐町	3区	SE14	(27.7)	(1.9)		内面:ロクロナデ 外面:回転ヘラ切り、ナデ	良好	口縁部1/9 天井部1/4	～1mm	灰白～灰	内面墨痕	30	36
139	須恵器	皿or高杯	豆腐町	3区	SE14	(19.4)	(2.0)		内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部1/8	～4mm	灰		30	36
140	土師器	杯A	豆腐町	3区	SE14	(14.4)	3.1		内面:ナデ 外面:ヘラケズリ→ナデ	良好	口縁部1/4	～3mm	橙	内面暗文	30	37
141	土師器	杯A	豆腐町	3区	SE14	(17.2)	(4.1)	(14.2)	内面:横ナデ 外面:ヘラケズリ、ヘラミガキ	良好	口縁部1/4	～1mm	橙	内面暗文	30	36
142	土師器	杯B？	豆腐町	3区	SE14		(1.5)	(10.6)	内面:横ナデ 外面:ヘラケズリ→横ナデ	良好	底部1/3	～2mm	橙	底部墨書「井」	30	36
143	土師器	甕	豆腐町	3区	SE14	16.5	13.6	16.1	内面:板ナデ、横ハケ 外面:横ナデ、縦ハケ	良好	口縁部1/3	～2mm	にぶい橙		30	36
144	土師器	甕	豆腐町	3区	SE14	(17.0)	(6.0)		内面:横ハケ、ナデ 外面:横ナデ、縦ハケ	良好	口縁部1/8	～2mm	にぶい橙		30	37
145	土師器	甕	豆腐町	3区	SE14		(5.8)		内面:ハケ 外面:ハケ→横ナデ、縦ハケ	良好	口縁部1/16	～2mm	にぶい褐		30	37
146	土師器	甕	豆腐町	3区	SE14	(12.1)	(4.4)		内面:横ハケ、板ナデ 外面:横ナデ、ハケ	良好	口縁部1/9	～1mm	にぶい黄橙		30	37
147	土師器	羽釜	豆腐町	3区	SE14	(27.1)	(6.4)		内面:横ナデ、横ハケ 外面:横ナデ	良好	口縁部1/18	～2mm	にぶい黄褐		30	37
148	土師器	鍋	豆腐町	3区	SE14	(41.0)	(8.1)		内面:横ナデ 外面:横ナデ、横ハケ	良好	口縁部1/10	～1mm	橙		30	37
149	土師器	竈	豆腐町	3区	SE14		(13.7)		内面:指オサエ→板ナデ 外面:縦ハケ	良好	受口部小片	精良	にぶい橙～灰白	煤付着	30	－
150	土師器	製塩土器	豆腐町	3区	SE14	(13.25)	(7.45)		内面:横ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/4	～3mm	橙～にぶい橙		31	37
151	土師器	製塩土器	豆腐町	3区	SE14		(7.0)		内面:ナデ、布目 外面:ナデ	良好	口縁部小片	～3mm	橙		31	37
152	土師器	製塩土器	豆腐町	3区	SE14	(11.1)	(5.7)		内面:指オサエ、横ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/4	～2mm	灰黄～にぶい橙		31	37
153	土師器	製塩土器	豆腐町	3区	SE14		(5.6)		内面:横ナデ 外面:指オサエ、ナデ	良好	口縁部小片	～4mm	橙		31	37
154	瓦	平瓦	豆腐町	3区	SE14	長さ (17.4)	幅 (12.5)	厚み 2.8	凹面:布目痕 凸面:斜格子タタキ→ケズリ	不良	2辺イキ	～2mm	灰白		31	38

豆腐町遺跡・駅前町遺跡出土土器観察表（8）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)			調整	焼成	残存	胎土粒径	色調	備考	図版	写真図版
						口径	器高	底径								
155	瓦	平瓦	豆腐町	3区	SE14	長さ (11.1)	幅 (15.6)	厚み 2.0	凹面:布目痕 凸面:斜格子タタキ		2辺イキ	～3mm	淡橙～黄灰		31	38
156	瓦	平瓦	豆腐町	3区	SE14	長さ (14.5)	幅 (18.4)	厚み 2.6	凹面:布目痕 凸面:縄タタキ		2辺イキ	～2mm	灰		31	38
157	須恵器	杯B蓋	豆腐町	1区	SK01	(13.2)	(2.8)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ→ロクロナデ	良好	口縁部1/2	精良	灰白		32	39
158	須恵器	杯B	豆腐町	1区	SK01		(3.2)	(8.3)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ロクロナデ	良好	底部1/3	～1mm	灰白		32	39
159	須恵器	稜椀蓋	豆腐町	1区	SK01	(22.3)	(2.2)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ→ロクロナデ	良好	口縁部1/8	～1mm	灰白		32	39
160	須恵器	盤	豆腐町	1区	SK01	(34.3)	(5.4)	(22.3)	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ		口縁部1/9	～4mm	灰白～灰		32	39
161	須恵器	甕	豆腐町	1区	SK01		(9.3)	(15.0)	内面:ナデ 外面:タタキ→ナデ	良好	底部1/4	～3mm	灰白～灰		32	39
162	土師器	竈	豆腐町	1区	SK01		(9.1)		内面:ナデ 外面:ハケ、ナデ	良好	受口部＋ 庇最上部付近	～5mm	橙		32	39
163	須恵器	蓋	豆腐町	3区	SK12-1	(13.8)	(1.75)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ→ロクロナデ	良好	口縁部1/7	精良	灰		32	40
164	須恵器	蓋	豆腐町	3区	SK12-1	(17.7)	(1.9)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ→ロクロナデ	良好	口縁部1/12	～1mm	灰白		32	40
165	須恵器	杯B	豆腐町	3区	SK12-1		(1.4)	14.1	内面:ナデ 外面:ヘラ切り→ナデ	良好	底部1/2	～2mm	灰～灰白		32	40
166	須恵器	杯B	豆腐町	3区	SK12-1	(13.3)	4.0	(9.8)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ	良好	口縁部1/10 底部1/4	～1mm	灰白		32	40
167	土師器	杯A	豆腐町	3区	SK12-2	(16.2)	(3.5)		内面:磨滅 外面:磨滅	良好	口縁部1/8	～3mm	浅黄橙		32	40
168	土師器	高杯	豆腐町	3区	SK12-1		(8.0)		内面:ナデ 外面:ケズリ、ナデ	良好	脚部完形	～1mm	橙	脚部11面	32	40
169	土師器	甕	豆腐町	3区	SK12-2	(23.1)	(6.8)		内面:横ハケ、ナデ 外面:横ナデ、縦ハケ	良好	口縁部1/10	～1mm	にぶい黄橙		32	40
170	土師器	甕	豆腐町	3区	SK12-1	(28.4)	(5.6)		内面:横ハケ、ナデ 外面:横ナデ、縦ハケ	良好	口縁部1/9	～4mm	にぶい橙		32	40
171	土師器	竈	豆腐町	3区	SK12-1		(8.75)		内面:ナデ 外面:縦ハケ	良好	受口部若干	～1mm	にぶい橙		32	40
172	土師器	竈	豆腐町	3区	SK12-2		(6.2)		内面:ナデ 外面:縦ハケ	良好	受口部小片	～2mm	にぶい橙		32	40
173	土師器	竈	豆腐町	3区	SK12-1	長さ (16.65)	幅 (6.7)	厚み (5.9)	内面:ナデ 外面:縦ハケ	良好	焚口下部＋脚	～1mm	にぶい橙～灰白		32	40
174	須恵器	杯B	豆腐町	3区	SK20	(13.5)	4.75	(9.9)	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	良好	口縁部1/9 底部1/4	精良	灰～灰白		32	41
175	土師器	高杯	豆腐町	3区	SK20		(8.5)		内面:ナデ 外面:ケズリ、ナデ	良好	脚柱一部全周	精良	にぶい橙	脚部10面	32	41
176	土師器	甕	豆腐町	1区	SP05	(27.6)	(5.9)		内面:横ナデ、指オサエ 外面:横ナデ、縦ハケ	良好	口縁部1/12	～2mm	にぶい橙		32	41

豆腐町遺跡・駅前町遺跡出土土器観察表（9）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)			調整	焼成	残存	胎土粒径	色調	備考	図版	写真図版
						口径	器高	底径								
177	土師器	杯	豆腐町	1区	SP11	(14.6)	(3.5)		内面:磨滅 外面:横ナデ	良好	口縁部1/4	～2mm	浅黄橙～にぶい橙		32	41
178	土師器	竈	豆腐町	1区	SP11		(11.2)		内面:ナデ 外面:縦ハケ	良好	受口部小片	～2mm	にぶい黄橙～橙		32	41
179	土師器	鍋or甑	豆腐町	2区	SP12		(8.2)		内面:ナデ 外面:縦ハケ	良好	把手部	～3mm	にぶい橙		32	41
180	須恵器	杯蓋	豆腐町	1区	SX21	10.7	2.6		内面:ロクロナデ、ナデ 外面:ロクロナデ、ナデ	良好	口縁部3/4	～2mm	灰白		33	42
181	須恵器	杯蓋	豆腐町	1区		(13.6)	2.3		内面:ロクロケズリ→ナデ 外面:ロクロナデ、ナデ	良好	口縁部1/4	～4mm	灰白		33	44
182	須恵器	杯蓋	豆腐町	1区	SX17	(20.0)	2.2		内面:ロクロケズリ→ナデ 外面:ロクロナデ、ナデ	良好	口縁部1/4 天井部3/7	～2mm	灰白	自然釉付着	33	44
183	須恵器	杯蓋	豆腐町	2区		12.8	2.7		内面:ロクロケズリ→ナデ 外面:ロクロナデ、ナデ	良好	口縁部1/2 天井部1/2	～1mm	灰		33	42
184	須恵器	杯蓋	豆腐町	2区		(14.9)	1.85		内面:ロクロケズリ→ナデ 外面:ロクロナデ、ナデ	良好	口縁部若干 天井部1/2	精良	灰白		33	44
185	須恵器	杯蓋	豆腐町	1区		(19.4)	(2.8)		内面:ロクロケズリ→ナデ 外面:ロクロナデ、ナデ	良好	口縁部1/5	～2mm	灰～灰白		33	44
186	須恵器	杯蓋	豆腐町	1区	SX42	(15.6)	1.8		内面:ロクロケズリ→ナデ 外面:ロクロナデ、ナデ	良好	口縁部1/16 天井部2/3	～2mm	灰～灰白		33	42
187	須恵器	杯蓋	豆腐町	1区	SK03	(14.0)	(2.3)		内面:ロクロケズリ→ナデ 外面:ロクロナデ、ナデ	良好	口縁部1/4	精良	灰白		33	44
188	須恵器	杯蓋	豆腐町	1区		(19.8)	(1.9)		内面:ロクロケズリ→ナデ 外面:ロクロナデ、ナデ	良好	口縁部1/8	精良	灰～灰白		33	44
189	須恵器	杯B	豆腐町	1区	SX33	(9.8)	4.5	(7.0)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	1/3	～2mm	灰		33	42
190	須恵器	杯B	豆腐町	1区	SX11	(12.4)	4.75	(8.0)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部1/3 底部1/2	～2mm	灰白		33	42
191	須恵器	杯B	豆腐町	1区	SX15	(17.0)	6.0	(11.6)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部1/6 底部1/2	～1mm	灰白		33	42
192	須恵器	杯B	豆腐町	1区	SX04	(10.1)	4.1	(7.4)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部若干 底部1/6	精良	灰白	内面漆付着	33	42
193	須恵器	杯B	豆腐町	1区	SX20	(12.2)	4.9	7.9	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部1/4 底部3/4	～2mm	灰白		33	42
194	須恵器	杯B	豆腐町	1区	旧耕土	(15.9)	3.7	(11.8)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部1/12 底部1/3	～2mm	灰		33	44
195	須恵器	杯B	豆腐町	2区	SX58	(10.0)	4.7	(7.6)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部1/4 底部1/4	～2mm	黄灰		33	42
196	須恵器	杯B	豆腐町	2区	SX60	(11.8)	3.8	(8.5)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部1/4 底部1/3	～2mm	灰白	自然釉	33	42
197	須恵器	杯B	豆腐町	1区		(17.0)	5.9	(11.8)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部1/6	～2mm	灰白		33	44
198	須恵器	杯B	豆腐町	1区	SX19		(1.2)	(8.3)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	底部1/5	精良	灰	底部墨書	33	42

豆腐町遺跡・駅前町遺跡出土土器観察表（10）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)			調整	焼成	残存	胎土粒径	色調	備考	図版	写真図版
						口径	器高	底径								
199	須恵器	杯B	豆腐町	2区	SX60	(13.4)	4.6	(9.6)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部1/4 底部1/4	～2mm	灰白		33	44
200	須恵器	杯B	豆腐町	1区			(2.2)	(12.7)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	底部1/2	精良	灰～灰白		33	－
201	須恵器	杯A	豆腐町	1区	SX18	(13.8)	(4.3)		内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部1/10 底部1/2	～1mm	灰白	底部線刻	33	43
202	須恵器	皿A	豆腐町	1区	SE04	(10.8)	(3.7)	(7.4)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部若干 体部1/8	～1mm	灰～灰白	内外漆付着	33	43
203	須恵器	皿A	豆腐町	1区	SX20	(19.6)	2.4		内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部1/3 底部1/3	～2mm	灰白	外面黒色付着物 あり	33	43
204	須恵器	杯A	豆腐町	1区	面検出	(11.6)	4.0	(5.6)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	底部1/4	～1mm	灰～灰白	内面漆付着	33	45
205	須恵器	皿A	豆腐町	1区		(18.1)	2.5	(16.1)	内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ、ロクロナデ	良好	口縁部1/4 底部1/4	～1mm	灰白		33	44
206	須恵器	杯A	豆腐町	2区	SX62	(12.2)	3.6		内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部1/10 底部完存	～4mm	灰		33	44
207	須恵器	皿A	豆腐町	1区		(17.8)	2.6	(15.55)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部1/8 底部1/4	～2mm	灰白		33	44
208	須恵器	杯A	豆腐町	1区	谷状土器 集中部分		(3.0)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	良好	口縁部1/16	～1mm	灰	内面漆付着	33	45
209	須恵器	杯A	豆腐町	1区	SE04	(16.1)	(4.3)	(11.9)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部若干 底部1/4	～1mm	灰白	内面漆付着	33	43
210	須恵器	把手付皿	豆腐町	1区	SX09	(13.1)	3.1		内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部1/2	～2mm	灰～灰白	一部自然釉	33	43
211	須恵器	稜椀(杯L)蓋	豆腐町	1区		(22.0)	(1.8)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	良好	口縁部1/3	精良	灰白		33	45
212	須恵器	稜椀(杯L)蓋	豆腐町	1区	SK03	(26.7)	(3.4)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ、ロクロナデ	良好	口縁部1/5	～2mm	灰～灰白		33	45
213	須恵器	稜椀(杯L)	豆腐町	1区		(20.8)	(4.9)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ、ロクロナデ	良好	口縁部1/16 体部1/4	精良	灰～灰白		33	45
214	須恵器	稜椀(杯L)	豆腐町	1区	SX11	(17.2)	5.3	(7.8)	内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ、ロクロナデ	良好	口縁部1/4	精良	灰白		33	45
215	須恵器	稜椀(杯L)	豆腐町	1区	SX09	(20.8)	5.6	(9.8)	内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ、ロクロナデ	良好	口縁部若干 底部1/2	精良	灰～灰白		33	45
216	須恵器	高杯	豆腐町	1区			(8.0)	(10.8)	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	良好	脚部1/16	～2mm	灰～灰白		33	45
217	須恵器	壺蓋	豆腐町	1区		(15.0)	(2.5)		内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ	良好	口縁部1/8	精良	灰白		34	45
218	須恵器	短頸壺	豆腐町	1区	SX56	(11.4)	(3.9)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	良好	口縁部1/4	精良	灰白		34	43
219	須恵器	壺	豆腐町	1区			(6.3)	(10.7)	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り、ロクロケズリ	良好	底部1/4	～1mm	灰		34	45
220	須恵器	長頸壺	豆腐町	2区		8.9	(6.1)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	良好	口縁部1/2 頸部7/8	～1mm	灰白	肩部自然釉	34	45

豆腐町遺跡・駅前町遺跡出土土器観察表（11）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)			調整	焼成	残存	胎土粒径	色調	備考	図版	写真図版
						口径	器高	底径								
221	須恵器	短頸壺	豆腐町	1区	SX42	8.95	8.2	7.1	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ、ロクロケズリ	良好	口縁部1/2 体部完形	精良	灰～灰白	漆入れ小壺	34	43
222	須恵器	長頸壺	豆腐町	1区	SX21		(19.2)	9.2	内面:ロクロナデ 外面:ヘラ切り→ナデ、ロクロナデ、ロクロケズリ	良好	口縁部欠損	～2mm	灰		34	43
223	須恵器	短頸壺	豆腐町	1区	SX32	(11.6)	(5.3)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	良好	把手	～2mm	灰白	穿孔は左→右	34	43
224	須恵器	壺	豆腐町	1区			(8.1)	(15.6)	内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ→ナデ	良好	底部1/8	～2mm	暗灰	内面漆付着	34	45
225	須恵器	甕	豆腐町	2区	SE10	(22.4)	(6.7)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	良好	口縁部1/5	～2mm	灰白	一部自然釉	34	－
226	須恵器	甕	豆腐町	1区			(9.0)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	良好	口縁部小片	～3mm	黄灰		34	45
227	須恵器	片口鉢	豆腐町	1区	SX23	(19.8)	(13.9)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	良好	口縁部1/4	～2mm	灰～灰白		34	45
228	土師器	杯A	豆腐町	1区		(18.8)	3.7	(17.0)	内面:横ナデ 外面:横ナデ、ヘラミガキ	良好	口縁部1/6	～1mm	橙～浅黄橙		34	46
229	土師器	杯A	豆腐町	1区	SX12	(18.1)	4.1	(14.1)	内面:横ナデ 外面:横ナデ、ヘラケズリ→ナデ	良好	口縁部1/6 底部1/2	～1mm	にぶい橙	口縁部わずかにゆがみ	34	46
230	土師器	杯A	豆腐町	1区		(17.7)	(3.95)	(14.45)	内面:横ナデ 外面:横ナデ、ヘラケズリ→ナデ	良好	口縁部1/6 底部1/3	～1mm	にぶい橙		34	46
231	土師器	杯A	豆腐町	1区		(19.7)	(4.3)		内面:横ナデ 外面:横ナデ	良好	口縁部1/8	～1mm	橙～にぶい黄橙		34	46
232	土師器	皿	豆腐町	1区		(17.4)	(2.6)	(14.2)	内面:横ナデ、ヘラミガキ 外面:ヘラミガキ、ナデ	良好	口縁部1/6 底部1/4	精良	灰褐～浅黄橙		34	46
233	土師器	灯明皿	豆腐町	1区		(8.8)	3.0		内面:板ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/4	～3mm	にぶい橙	内面煤付着	34	46
234	土師器	杯	豆腐町	1区			(2.2)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部若干	精良	橙	内面漆付着	34	45
235	土師器	盤	豆腐町	1区	SX56	(25.0)	(3.5)	(19.8)	内面:横ナデ 外面:ヘラケズリ→ナデ、横ナデ	良好	口縁部1/4 底部1/4	～5mm	橙～にぶい橙		34	46
236	土師器	高杯	豆腐町	1区	SX42		(7.0)	(11.8)	内面:ナデ 外面:ナデ	良好	脚部1/6	～2mm	橙	脚部13面面取り	34	46
237	土師器	高杯	豆腐町	1区	SE04		(7.8)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	脚柱のみ	～2mm	灰黄	脚部11面面取り 朱塗りor化粧土	34	46
238	土師器	鉢	豆腐町	1区		(19.2)	(7.6)		内面:ナデ 外面:縦ハケ	良好	口縁部1/8	～2mm	にぶい黄橙		35	46
239	土師器	甕	豆腐町	1区		(21.5)	(6.3)		内面:横ハケ 外面:横ナデ、縦ハケ	良好	口縁部1/6	精良	にぶい黄橙		35	47
240	土師器	甕	豆腐町	1区	谷状土器 集中部分	(26.0)	(7.1)		内面:横ハケ、板ナデ 外面:横ナデ、縦ハケ	良好	口縁部1/6	～2mm	にぶい黄橙		35	47
241	土師器	甕	豆腐町	1区			(9.8)		内面:ナデ、指オサエ 外面:横ナデ、縦ハケ	良好	体部1/5	～1mm	にぶい橙		35	－

豆腐町遺跡・駅前町遺跡出土土器観察表（12）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)			調整	焼成	残存	胎土粒径	色調	備考	図版	写真図版
						口径	器高	底径								
242	土師器	甕	豆腐町	3区		(29.8)	(7.35)		内面:磨滅 外面:磨滅	良好	口縁部1/10	～1mm	にぶい黄橙		35	47
243	土師器	甕	豆腐町	1区		(24.8)	(6.2)		内面:横ハケ、ナデ 外面:横ナデ、縦ハケ	良好	口縁部若干 頸部1/8	～5mm	明赤褐～橙		35	47
244	土師器	甕	豆腐町	1区		(26.6)	(8.1)		内面:横ナデ、ハケ 外面:横ナデ、縦ハケ	良好	口縁部1/5	～1mm	灰白		35	47
245	土師器	甕	豆腐町	1区		(39.1)	(6.6)		内面:横ナデ、ハケ 外面:横ナデ、縦ハケ	良好	口縁部1/7	～1mm	にぶい黄橙		35	47
246	土師器	甕	豆腐町	2区		(38.8)	(7.35)		内面:横ナデ、ハケ 外面:横ナデ、縦ハケ		口縁部1/7	～2mm	にぶい橙		35	47
247	土師器	甕	豆腐町	1区		(39.1)	(14.4)		内面:横ナデ、ハケ 外面:横ナデ、縦ハケ	良好	口縁部若干 頸部1/9	～1mm	にぶい黄橙		35	47
248	土師器	竈	豆腐町	1区	SX34		(7.2)		内面:横ナデ 外面:ハケ→ナデ	良好	受口部小片	～2mm	にぶい黄橙		36	－
249	土師器	竈	豆腐町	1区	谷状土器 集中部分		(9.8)		内面:ハケ→ナデ 外面:ハケ	良好	受口部若干 庇部	～3mm	にぶい黄橙		36	47
250	土師器	竈	豆腐町	1区	SE04		(15.1)		内面:板ナデ 外面:ハケ→ナデ	良好	受口部若干	～3mm	にぶい黄橙		36	－
251	土師器	竈	豆腐町	2区	SX64		(10.0)		内面:板ナデ 外面:ハケ	良好	受口部若干 庇取り付き部	～3mm	灰～にぶい黄橙		36	47
252	土師器	竈	豆腐町	1区	SX09		(13.1)		内面:板ナデ 外面:ハケ、ナデ	良好	庇部	～3mm	にぶい黄橙		36	47
253	土師器	竈	豆腐町	2区	SX62		(9.0)		内面:板ナデ 外面:ハケ、ナデ	良好	受口部若干 庇部	～2mm	にぶい黄橙		36	47
254	土師器	竈	豆腐町	1区	SX34		(12.1)		内面:ナデ 外面:指オサエ	良好	庇部	～2mm	にぶい黄橙		36	－
255	土師器	竈	豆腐町	1区			(18.7)		内面:ナデ、指オサエ 外面:縦ハケ、ナデ	良好	受口部若干 庇取り付き部	～1mm	灰黄褐～灰白		36	47
256	土師器	竈	豆腐町	1区	SX17		(22.2)		内面:ナデ 外面:縦ハケ、ナデ	良好	庇横	～2mm	淡橙		36	47
257	土師器	製塩土器	豆腐町	2区	SX71	(8.6)	(5.9)		内面:指オサエ、ナデ 外面:指オサエ、ナデ		口縁部1/4	～3mm	明黄褐		37	48
258	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE04	(11.2)	(7.3)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/9	～7mm	灰黄褐		37	48
259	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SX42	(11.0)	(7.0)		内面:ナデ 外面:指オサエ、ナデ	良好	口縁部若干	～5mm	褐	角閃石含む	37	48
260	土師器	製塩土器	豆腐町	1区		(15.2)	(6.0)		内面:指オサエ、ナデ 外面:指オサエ、ナデ	良好	口縁部1/8	～5mm	にぶい赤褐		37	48
261	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SE04	(8.55)	(5.8)		内面:指オサエ、ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/9	～2mm	にぶい褐		37	48
262	土師器	製塩土器	豆腐町	1区		(11.6)	(7.9)		内面:ナデ 外面:指オサエ	良好	口縁部若干 体部1/8	～2mm	にぶい褐		37	48
263	土師器	製塩土器	豆腐町	1区		(13.0)	(7.0)		内面:指オサエ、ナデ 外面:指オサエ、ナデ	良好	口縁部1/3	～3mm	にぶい赤褐～橙		37	48

豆腐町遺跡・駅前町遺跡出土土器観察表（13）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm) 口径	器高	底径	調整	焼成	残存	胎土粒径	色調	備考	図版	写真図版
264	土師器	製塩土器	豆腐町	1区		(13.4)	(6.1)		内面:指オサエ、ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/6	～4mm	にぶい橙		37	48
265	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SX42	(10.0)	(9.1)		内面:指オサエ、ナデ 外面:指オサエ、ナデ	良好	口縁部1/5 体部1/5	～5mm	にぶい赤褐～橙		37	48
266	土師器	製塩土器	豆腐町	1区		(13.2)	(9.7)		内面:指オサエ、ナデ 外面:指オサエ、ナデ	良好	口縁部1/8	～2mm	灰黄褐		37	48
267	土師器	製塩土器	豆腐町	1区		(12.9)	(7.4)		内面:指オサエ、ナデ 外面:ナデ		口縁部1/8	～2mm	橙～にぶい黄橙		37	48
268	土師器	製塩土器	豆腐町	1区	SX21	(13.0)	(11.0)		内面:ナデ、板ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/4	～5mm	橙～にぶい黄橙		37	48
269	土師器	製塩土器	豆腐町	1区		(15.4)	(8.5)		内面:指オサエ、ナデ 外面:指オサエ、ナデ	良好	口縁部1/8	～5mm	明赤褐		37	48
270	土師器	製塩土器	豆腐町	1区		(15.2)	(5.0)		内面:指オサエ、ナデ 外面:指オサエ、ナデ	良好	口縁部1/6	～3mm	にぶい赤褐		37	48
271	土製品	土錘	豆腐町	1区	SX55	長さ 5.05	幅 2.7	厚み 2.75	内面:- 外面:ナデ	良好	完形	～1.5mm	にぶい黄橙～灰黄	重量33.4g	37	48
272	土製品	土錘	豆腐町	1区	SX11	長さ (4.75)	幅 (3.6)	厚み (2.2)	内面:- 外面:ナデ	良好	1/2	～2mm	にぶい黄橙	重量(36.5)g	37	48
273	緑釉陶器	碗	豆腐町	1区			(1.5)	(6.8)	内面:ナデ 外面:ヘラケズリ→ナデ	良好	底部1/4	精良	灰		37	48
274	瓦	軒丸瓦	豆腐町	3区	SX79南側 撹乱付近	長さ (5.6)	幅 (11.5)	瓦当厚み 1.45	内面:ナデ 外面:ナデ	良好	瓦当1/2	～1mm	灰～灰白	源氏車紋	37	48
275	土師器	焙烙	豆腐町	1区	SE04	(28.8)	17.85	(29.4)	内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/5 底部1/2	～1mm	明赤褐		38	49
276	土師器	焙烙	豆腐町	1区	SE04	(25.2)	(4.8)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/6	～3mm	明赤褐		38	50
277	陶器	擂鉢	豆腐町	1区	SE04	(33.8)	(13.2)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	良好	口縁部1/16 底部1/8	～4mm	灰赤	擂目8条 備前	38	50
278	陶器	擂鉢	豆腐町	1区	SE04		(4.4)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	良好	片口部	～2mm	にぶい赤褐色	「中上」印 擂目6条 備前	38	50
279	施釉陶器	碗	豆腐町	1区	SE04		(2.9)	4.2	内面:施釉 外面:施釉	良好	底部完存	精良	黒褐	唐津　18c	38	49
280	施釉陶器	皿	豆腐町	1区	SE04	(11.6)	3.2	4.2	内面:施釉、見込釉掻き取り 外面:ロクロケズリ、施釉	良好	口縁部若干 底部完存	精良	灰	唐津 三日月高台	38	49
281	施釉陶器	鉢	豆腐町	1区	SE04	16.35	6.45	8.9	内面:施釉 外面:施釉	良好	口縁部5/8 底部7/8	精良	暗灰黄	京焼系 蛇ノ目高台	38	49
282	染付磁器	碗	豆腐町	1区	SE04	(10.0)	5.7	(3.8)	内面:施釉 外面:施釉	良好	口縁部1/2 底部1/8	精良	白	波佐見 コンニャク印判	38	49
283	白磁	碗	豆腐町	1区	SE04		(3.1)		内面:施釉 外面:施釉	良好	体部若干	精良	白	外面染付	38	50
284	白磁	鉢	豆腐町	1区	SE04		(2.1)	(10.4)	内面:施釉 外面:施釉	良好	底部若干	精良	白	肥前鉢 型打ち	38	49
285	青磁	花瓶	豆腐町	1区	SE04		(6.3)	5.0	内面:施釉 外面:施釉	良好	底部完存	精良	灰白	肥前	38	49

豆腐町遺跡・駅前町遺跡出土土器観察表（14）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)			調整	焼成	残存	胎土粒径	色調	備考	図版	写真図版
						口径	器高	底径								
286	陶器	擂鉢	豆腐町	1区	SE06	(29.2)	11.6	(12.8)	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	良好	口縁部1/3	～2mm	明赤褐	擂目10条 明石焼	38	50
287	染付磁器	碗	豆腐町	1区	SE06	(9.4)	(4.2)		内面:施釉 外面:施釉	良好	口縁部1/4	精良	白	外面　草花文	38	49
288	陶器	擂鉢	豆腐町	2区	SE10	(37.5)	(11.3)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	良好	口縁部1/4	～3mm	明赤褐	擂目8条 明石焼	38	50
289	陶器	碗	豆腐町	2区	SE10		(4.1)	4.1	内面:施釉 外面:ロクロケズリ、施釉	良好	底部完存	精良	黄褐	唐津　17c初	38	50
290	瓦	軒丸瓦	豆腐町	2区	SE11	長さ (7.1)	幅 (10.3)	厚み (3.4)	内面:ナデ 外面:ナデ	良好	瓦当のみ	～2mm	灰	巴文	38	49
291	土師器	焜炉窓蓋	豆腐町	2区	SE12	幅 10.1	6.9		内面:ロクロナデ 外面:ナデ、柿釉	良好	完形	精良	橙	外面スタンプ有	38	49
292	白磁	碗	豆腐町	1区			(2.9)	(5.0)	内面:施釉 外面:施釉	良好	底部1/3	精良	灰白	華南産	39	52
293	褐釉陶器	四耳壺	豆腐町	1区	SX01		(3.2)		内面:施釉 外面:施釉	良好	1/4	精良	にぶい黄橙		39	52
294	土師器	焙烙	豆腐町	3区	SX77 西側	(25.5)	(5.8)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/3	～2mm	橙		39	51
295	土師器	焙烙	豆腐町	3区	SX77 西側	(30.0)	(5.6)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/8	～2mm	灰褐～橙		39	52
296	瓦質土器	羽釜	豆腐町	2区	SX67	21.3	(16.4)	(14.5)	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	良好	口縁部3/4 体部1/2	～1mm	オリーブ黒		39	51
297	陶器	擂鉢	豆腐町	1区	SX11·SX12		(6.4)	(15.0)	内面:ナデ 外面:ナデ、ケズリ	良好	底部1/3	～2mm	褐	擂目6条 丹波焼	39	50
298	施釉陶器	碗	豆腐町	3区	SX83	9.8	6.8	4.4	内面:施釉 外面:施釉	良好	口縁部7/8	精良	赤褐	唐津焼	39	51
299	施釉陶器	鍋蓋	豆腐町	2区	SX66	18.1	(3.9)		内面:施釉 外面:ロクロナデ	良好	口縁部3/4 天井部3/8	精良	赤褐		39	51
300	施釉陶器	皿	豆腐町	2区	SX64	26.8	5.0	13.75	内面:ロクロナデ、施釉 外面:ロクロナデ、施釉	良好	口縁部5/6	精良	灰白	内面絵付け	39	51
301	施釉陶器	碗	豆腐町	1区	SK03		(2.4)	(5.1)	内面:ロクロナデ、施釉 外面:ロクロナデ、施釉	良好	底部1/2	精良	灰白		39	52
302	瓦	軒丸瓦	豆腐町	1区		長さ (11.4)	幅 (15.7)	厚み 1.1	内面:ヘラケズリ、ナデ 外面:ナデ	良好	瓦当2/3	～1.5mm	黒	巴文	39	52
303	瓦	小形軒丸瓦	豆腐町	2区	SX66	長さ 8.2	幅 8.4	厚み 1.6	内面:ヘラケズリ、ナデ 外面:ナデ	良好	瓦当のみ	～1mm	黒	五七桐文	39	52
304	瓦質土製品	トチン	豆腐町	2区	SX64	長さ 4.8	幅 3.5	厚み 2.0	内面:ナデ 外面:ナデ	良好	完形	～1mm	黒	重量39.6g	39	51
305	瓦質土製品	トチン	豆腐町	2区	SX64	長さ 5.3	幅 3.5	厚み 1.9	内面:ナデ 外面:ナデ	良好	完形	～1mm	灰	重量45.2g	39	51
306	瓦質土製品	トチン	豆腐町	2区	SX65	長さ 6.9	幅 5.1	厚み 2.7	内面:ナデ 外面:ナデ	良好	完形	～1mm	暗灰	重量93.2gタール状黒色物付着	39	51
307	土製品	人形	豆腐町	2区		長さ 3.7	幅 1.8	厚み 1.2	内面:ナデ 外面:ナデ	良好	頭部·脚部 先端欠損	精良	にぶい黄橙	型合わせ 京都産	39	51

豆腐町遺跡・駅前町遺跡出土土器観察表（15）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm) 口径	器高	底径	調整	焼成	残存	胎土粒径	色調	備考	図版	写真図版
308	施釉陶器	汽車土瓶	豆腐町	3区			(2.4)		内面:ロクロナデ、施釉 外面:ロクロナデ、施釉	良好	1/5	精良	灰白	時刻表	39	52
309	施釉陶器	汽車土瓶	豆腐町	3区		(7.8)	6.3	6.6	内面:ロクロナデ、施釉 外面:ロクロナデ、施釉	良好	口縁部1/8 底部完存	精良	灰白	「明石」	39	51
310	土師質	用途不明品	豆腐町	1区	SX55		17.3		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	ほぼ完形	精良	橙		40	53
311	陶器	甕	豆腐町	2区	SX59	(27.8)	39.1	(17.2)	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	良好	口縁部2/5 体部1/2	～1mm	暗オリーブ灰	丹波焼	40	53
312	弥生土器	壺	駅前町	1区	SR01 東側	(11.2)	28.1	4.9	内面:指オサエ、ナデ、ハケ 外面:ハケ、ヘラミガキ	良好	口縁部1/4 体部ほぼ完存	～3mm	浅黄橙	外面に黒斑	62	85
313	弥生土器	甕	駅前町	1区	SR01	(37.1)	(7.4)		内面:指オサエ、ナデ 外面:指オサエ、横ナデ	良好	口縁部1/12	～3mm	黄灰～灰黄		62	85
314	弥生土器	壺	駅前町	1区	SR01		(5.3)	(10.6)	内面:ナデ 外面:ナデ→ヘラミガキ	良好	底部1/3	～4mm	にぶい黄橙	外面に黒斑	62	85
315	弥生土器	壺	駅前町	1区	SR01		(6.0)	(9.6)	内面:指オサエ、ナデ 外面:ナデ、ヘラミガキ	良好	底部3/5	～2mm	にぶい黄橙～浅黄橙	底部に黒斑	62	85
316	弥生土器	壺	駅前町	1区	SR01		(4.3)	(12.0)	内面:指オサエ、ナデ 外面:ハケ	良好	底部1/4	～3mm	にぶい黄橙～明黄褐		62	85
317	弥生土器	甕	駅前町	1区	SR01		(2.3)	3.9	内面:ナデ 外面:ハケ	良好	底部完存	～2mm	灰褐～にぶい黄橙	外面に煤付着	62	85
318	弥生土器	甕	駅前町	1区	SR01		(2.8)	3.85	内面:板ナデ 外面:ハケ、ナデ	良好	底部3/4	～1mm	黒褐～にぶい黄橙		62	85
319	弥生土器	甕	駅前町	1区	SR01		(1.6)	(6.3)	内面:磨滅 外面:磨滅	良好	底部1/4	～2mm	灰黄		62	85
320	弥生土器	高杯	駅前町	1区	SR01	(23.8)	(6.7)		内面:ヘラミガキ、横ナデ 外面:ヘラミガキ、横ナデ	良好	口縁部1/4	～1mm	にぶい橙～灰白	外面に黒斑	62	85
321	弥生土器	高杯	駅前町	1区	SR01	(11.8)	(3.6)		内面:磨滅 外面:磨滅	良好	口縁部1/4	～2mm	にぶい橙～浅黄橙		62	85
322	弥生土器	高杯	駅前町	1区	SR01、SR02 合流地点		(6.65)		内面:ケズリ 外面:磨滅	良好	付け根全周	～2mm	にぶい橙		62	85
323	須恵器	杯蓋	駅前町	1区	SR01	13.2	4.5		内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ、ロクロナデ	良好	ほぼ完形	～3mm	灰～灰白	ヘラ記号	62	86
324	須恵器	高杯蓋	駅前町	1区	SR01		(3.3)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ、ロクロナデ	良好	天井部1/4	精良	灰		62	86
325	須恵器	高杯蓋	駅前町	1区	SR01	(12.15)	(4.5)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ、ロクロナデ	良好	1/4	精良	灰～灰白		62	86
326	須恵器	高杯蓋	駅前町	1区	SR01	11.4	5.7		内面:ロクロナデ、ナデ 外面:ロクロケズリ→ロクロナデ	良好	3/4	精良	灰		62	86
327	須恵器	高杯	駅前町	1区	SR01 南肩付近	10.45	8.7	8.45	内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ、ロクロナデ	良好	口縁部3/4 脚部完存	精良	灰	3方菱形透し	62	86
328	須恵器	高杯	駅前町	1区	SR01	(11.6)	9.5	8.8	内面:ロクロナデ、ナデ 外面:ロクロケズリ→ロクロナデ	良好	口縁部1/3 脚部完存	～2mm	灰～灰白	3方方形透し	62	86
329	須恵器	甕	駅前町	1区	SR01		(11.6)	最大径 (15.0)	内面:ロクロナデ、指オサエ 外面:タタキ→ナデ	良好	1/4	～2mm	灰		62	86

豆腐町遺跡・駅前町遺跡出土土器観察表（16）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)			調整	焼成	残存	胎土粒径	色調	備考	図版	写真図版
						口径	器高	底径								
330	土師器	甕	駅前町	1区	SR01	12.25	16.6	15.95	内面:ナデ、横ナデ 外面:ハケメ、横ナデ	良好	完形	～1mm	橙～浅黄橙		62	87
331	土師器	甕	駅前町	1区	SR01	11.2	(11.0)	最大径 (15.75)	内面:指オサエ、ハケメ→ナデ 外面:ハケメ、横ナデ	良好	口縁部～ 胴上半部完存	～2mm	橙～にぶい褐		62	87
332	土師器	甕	駅前町	1区	SR01		(7.6)		内面:ヘラケズリ 外面:ハケメ	良好	胴部下半～ 底部1/3	～2mm	橙～灰白		62	87
333	土師器	甕	駅前町	1区	SR01 南肩付近	(17.7)	(4.75)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	口縁部1/5	～1mm	橙		62	87
334	土師器	甕	駅前町	1区	SR01	(16.1)	(4.4)		内面:指オサエ、横ナデ 外面:横ナデ	良好	口縁部1/6	～1mm	にぶい黄橙～黒褐	黒斑	62	87
335	土師器	甕	駅前町	1区	SR01	(12.4)	(5.0)		内面:ヘラケズリ、横ナデ 外面:ハケメ→ナデ、横ナデ	良好	口縁部1/8	～1mm	にぶい橙～黒褐		62	87
336	弥生土器	甕	駅前町	1区	SR02		(3.5)	2.95	内面:指オサエ→ハケメ 外面:タタキ→板ナデ	良好	底部完存	～3mm	橙～にぶい黄橙	黒斑	63	88
337	土師器	甕	駅前町	1区	SR02	(15.0)	(5.5)		内面:板ナデ、ハケメ、横ナデ 外面:ハケメ、横ナデ	良好	口縁部1/6	～3mm	灰黄褐～黒		63	88
338	土師器	甕	駅前町	1区	SR02	(15.8)	(3.1)		内面:磨滅 外面:タタキ→ナデ	良好	口縁部1/6	～2mm	橙		63	88
339	須恵器	壺	駅前町	1区	SD01	(15.4)	(4.85)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	良好	口縁部若干 頸部1/6	～3mm	灰		63	88
340	須恵器	杯蓋	駅前町	1区	SD02		(2.3)		内面:ロクロナデ、ナデ 外面:ロクロケズリ、ロクロナデ	良好	天井部完存	精良	灰		63	88
341	須恵器	杯身	駅前町	1区	SD02		(2.15)		内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ、ロクロナデ	良好	受け部1/12	～1mm	灰		63	88
342	須恵器	甕	駅前町	1区	SD02		(10.8)		内面:タタキ当具痕 外面:タタキ→カキメ	良好	胴部下半1/4	～1mm	灰白	外面に自然釉 付着	63	88
343	施釉陶器	向付	豆腐町	1区	SX06	縦 (4.2)	横 (3.4)		内面:ナデ 外面:ナデ	良好	小片	精良	灰白		第12図	－
344	土師器	竈	豆腐町	1区	SE05	縦 (9.0)	横 (10.4)		内面:ナデ 外面:ハケ	良好	小片	～4mm	にぶい橙	内面に漆付着		巻頭6

豆腐町遺跡出土木製品計測表（１）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)						重量	残存	備考	調査番号	図版番号	写真図版番号
						口径	器高	底径	長さ	幅	厚み						
W1	木器	井戸枠ｊ	豆腐町	1区	SE03				59.9	22.5	2.6			W1,W2は接合	2013121	41	54
W2	木器	井戸枠ｋ	豆腐町	1区	SE03				56.1	13.3	1.7			W1,W2は接合	2013121	41	54
W3	木器	井戸枠ｈ	豆腐町	1区	SE03				(101.8)	17.7	1.7				2013121	41	54
W4	木器	井戸枠ｉ	豆腐町	1区	SE03				(108.3)	23.4	2.0				2013121	41	54
W5	木器	井戸枠ｄ	豆腐町	1区	SE03				133.3	10.1	10.5		上部欠損		2013121	42	55
W6	木器	井戸枠ｎ	豆腐町	1区	SE03				57.4	9.3	7.35		ほぼ完	再利用時に切断？	2013121	42	55
W7	木器	井戸枠ｆ	豆腐町	1区	SE03				91.7	5.6	4.7		完形		2013121	43	55
W8	木器	井戸枠ｅ	豆腐町	1区	SE03				91.0	5.8	5.0				2013121	43	56
W9	木器	井戸枠ｃ	豆腐町	1区	SE03				107.4	32.5	3.0				2013121	43	56
W10	木器	井戸枠	豆腐町	1区	SE03				5.7	4.6	4.9				2013121	44	56
W11	木器	斎串	豆腐町	1区	SE03				18.0	1.95	0.25		ほぼ完		2013121	44	56
W12	木器	曲物蓋	豆腐町	1区	SE05		(1.9)		(3.2)	(10.9)				樺材残存	2013121	44	56
W13	木器	加工材	豆腐町	1区	SE09				(7.1)	2.2	0.95			スギ	2013121	44	63
W14	木器	加工材(栓?)	豆腐町	1区	SE09				7.5	1.8	1.1			広葉樹　板の芯	2013121	44	63
W15	木器	板材	豆腐町	1区	SE09				(6.4)	3.0	1.0			針葉樹　板目	2013121	44	63
W16	木器	板材	豆腐町	1区	SE09				3.0	1.75	0.5			孔あり	2013121	44	63
W17	木器	加工材	豆腐町	1区	SE09				5.4	1.7	0.6		完形	針葉樹　板目	2013121	44	63
W18	木器	檜扇？	豆腐町	1区	SE09				17.1	3.3	0.15				2013121	44	63
W19	木器	曲物側板	豆腐町	1区	SE09				16.7	7.1	0.43		小片	曲物(枠)	2013121	44	－
W20	木器	横櫛	豆腐町	1区	SE09				4.4	(6.2)	0.7		片側イキ		2013121	44	63
W21	木器	曲物底板	豆腐町	1区	SE09				21.5	10.2	0.8		1/2	針葉樹　板目 釘結合式	2013121	44	63
W22	木器	井戸枠ｉ	豆腐町	1区	SE07				(80.8)	34.2	4.3				2013121	45	57

豆腐町遺跡出土木製品計測表（２）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)						重量	残存	備考	調査番号	図版番号	写真図版番号
						口径	器高	底径	長さ	幅	厚み						
W23	木器	井戸枠ｊ	豆腐町	1区	SE07				(48.2)	18.8	2.8				2013121	45	57
W24	木器	井戸枠ａ	豆腐町	1区	SE07				(42.5)	10.6	3.7				2013121	45	57
W25	木器	井戸枠ｄ	豆腐町	1区	SE07				(44.7)	9.45	4.2				2013121	45	57
W26	木器	井戸枠ｅ	豆腐町	1区	SE07				(86.6)	29.7	4.8				2013121	46	58
W27	木器	井戸枠ｂ	豆腐町	1区	SE07				(45.3)	10.2	3.7				2013121	46	58
W28	木器	井戸枠ｃ	豆腐町	1区	SE07				(41.5)	8.6	2.7				2013121	46	58
W29	木器	井戸枠ａ	豆腐町	1区	SE08				(81.3)	9.9	6.5			W30と結合	2013121	47	60
W30	木器	井戸枠ｊ	豆腐町	1区	SE08				(18.6)	6.6	5.7		片側折れ	W29と結合	2013121	47	60
W31	木器	井戸枠ｈ	豆腐町	1区	SE08				(20.7)	8.2	2.7			墨書きあり	2013121	47	59
W32	木器	井戸枠ｅ	豆腐町	1区	SE08				(91.0)	7.5	4.8				2013121	48	61
W33	木器	井戸枠ｄ	豆腐町	1区	SE08				85.1	20.4	2.2		完形		2013121	48	61
W34	木器	井戸枠ｇ	豆腐町	1区	SE08				(85.8)	9.4	5.7				2013121	48	61
W35	木器	井戸枠ｂ	豆腐町	1区	SE08				82.1	19.0	1.8		完形		2013121	48	61
W36	木器	井戸枠ｉ	豆腐町	1区	SE08				80.2	5.6	5.5		完形		2013121	49	62
W37	木器	井戸枠ｃ	豆腐町	1区	SE08				76.2	15.7	1.5		完形		2013121	49	62
W38	木器	井戸枠ｆ	豆腐町	1区	SE08				75.1	18.6	1.9		ほぼ完形		2013121	49	62
W39	木器	楔	豆腐町	1区	SE08				5.25	3.0	1.3		完形	板目	2013121	49	－
W40	木器	楔	豆腐町	1区	SE08				4.5	2.5	0.95			井戸枠a枘についた楔	2013121	49	－
W41	木器	楔	豆腐町	1区	SE08				2.8	2.5	0.8		完形	井戸枠h 板目	2013121	49	－
W42	木器	楔	豆腐町	1区	SE08				3.7	2.7	0.9		完形	板目	2013121	49	－
W43	木器	楔	豆腐町	1区	SE08				7.7 6.5	3.2 2.6	1.4 0.75		2個体	井戸枠h 板目	2013121	49	62
W44	木器	曲物	豆腐町	1区	SE08				13.2	8.8	12.6		ほぼ完	底部漆塗(黒漆) 樺材、木釘残	2013121	50	59

豆腐町遺跡出土木製品計測表（３）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)						重量	残存	備考	調査番号	図版番号	写真図版番号
						口径	器高	底径	長さ	幅	厚み						
W45	木器	用途不明品	豆腐町	1区	SE08				10.0	3.5	0.7			柾目	2013121	50	59
W46	木器	皿(挽物)	豆腐町	1区	SE08				23.8	2.3	21.4		口縁部1/2 底部1/2		2013121	50	59
W47	木器	部材(楔)	豆腐町	1区	SE08				9.0	3.05	1.5		ほぼ完		2013121	50	59
W48	木器	部材(楔)	豆腐町	1区	SE08				(9.7)	3.1	1.7		片側折れ	井戸枠h 板目	2013121	50	－
W49	木器	横櫛	豆腐町	1区	SE04				(3.1)	(6.7)	0.85				2013121	51	64
W50	木器	漆椀	豆腐町	1区	SE04		(3.1)	(4.6)					底部2/3	外面:黒漆 内面:赤漆	2013121	51	64
W51	木器	漆椀	豆腐町	1区	SE04	(12.3)	(4.4)							家紋あり 外面:黒漆　内面:赤漆	2013121	51	64
W52	木器	漆椀	豆腐町	1区	SE04	12.2	4.4	(5.7)					口縁部1/2		2013121	51	64
W53	木器	下駄の歯	豆腐町	1区	SE04				10.05	(8.6)	1.6		1/2		2013121	51	64
W54	木器	下駄の歯	豆腐町	1区	SE04				(7.6)	(5.9)	1.8		1/3		2013121	51	64
W55	木器	用途不明品	豆腐町	1区	SE04				(5.4) (3.2)	(2.1) (1.5)	(1.7) (1.1)				2013121	51	64
W56	木器	馬形	豆腐町	1区	SE04				(12.3)	5.5	1.2		1/2		2013121	51	64
W57	木器	板材	豆腐町	1区	SE04				11.7	2.3	1.8			木釘あり	2013121	51	65
W58	木器	桶材	豆腐町	1区	SE04				12.5	5.15	1.1				2013121	51	65
W59	木器	板材	豆腐町	1区	SE04				(17.7)	3.9	1.6			木釘あり	2013121	51	65
W60	木器	板材	豆腐町	1区	SE04				25.9	2.5	1.1			木釘あり	2013121	51	65
W61	木器	曲物蓋	豆腐町	1区	SE04				14.2	12.15	0.6			釘孔あり	2013121	52	66
W62	木器	曲物側板	豆腐町	1区	SE04		6.3			(15.7)	0.6			樺材残存	2013121	52	66
W63	木器	柄杓	豆腐町	1区	SE04				(6.7)	(17.3)	0.2				2013121	52	66
W64	木器	曲物蓋	豆腐町	1区	SE04				11.1	(9.25)	0.75		3/4	樺材残存	2013121	52	66
W65	木器	曲物蓋	豆腐町	1区	SE04				10.8	(5.4)	0.4			漆塗り 紐あり	2013121	52	66
W66	木器	つた	豆腐町	1区	SE04										2013121	52	66

豆腐町遺跡出土木製品計測表（4）

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)						重量	残存	備考	調査番号	図版番号	写真図版番号
						口径	器高	底径	長さ	幅	厚み						
W67	木器	箸	豆腐町	1区	SE04				25.1	0.7	0.85				2013121	52	67
W68	木器	曲物側板	豆腐町	1区	SE04	(16.4)	(5.1)	(15.6)							2013121	52	67
W69	木器	薄板	豆腐町	1区	SE04				11.7	2.3	0.5			木釘あり	2013121	52	67
W70	木器	部材	豆腐町	1区	SE04				18.0	3.2	1.2				2013121	52	67
W71	木器	桶底板	豆腐町	3区	SK12－2				30.1	7.0	3.0			断面釘孔あり	2014009	53	63
W72	木器	漆椀	豆腐町	2区	SX65-2		(4.9)	5.2		10.3			2/3	内外赤漆	2013121	53	63

豆腐町遺跡・駅前町遺跡　出土石器･石製品計測表

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)			重量(g)	残存	備考	調査番号	図版番号	写真図版番号
						長さ	幅	厚み						
S1	石器	敲石	豆腐町	1区	SE08	15.7	21.6	21.1	9400	完形		2013121	28	31
S2	石製品	砥石	豆腐町	1区	SE04	(11.8)	5.8	2.1	185	下部折れ		2013121	54	68
S3	石製品	砥石	豆腐町	1区	SE04	(7.2)	(6.8)	3.8	189.7	2面イキ		2013121	54	68
S4	石製品	砥石	豆腐町	1区	SE06	(9.9)	5.4	1.0	61.8	下部折れ		2013121	54	68
S5	石製品	砥石	豆腐町	1区	SX11	(5.5)	(4.6)	1.8	44.9	3面イキ		2013121	54	68
S6	石製品	不明	豆腐町	2区	SX59	(3.8)	(4.5)	0.3				2013121	54	68
S7	石器	石鏃	駅前町	1区	SR01	(2.9)	(1.55)	0.55	1.4			2014010	63	88

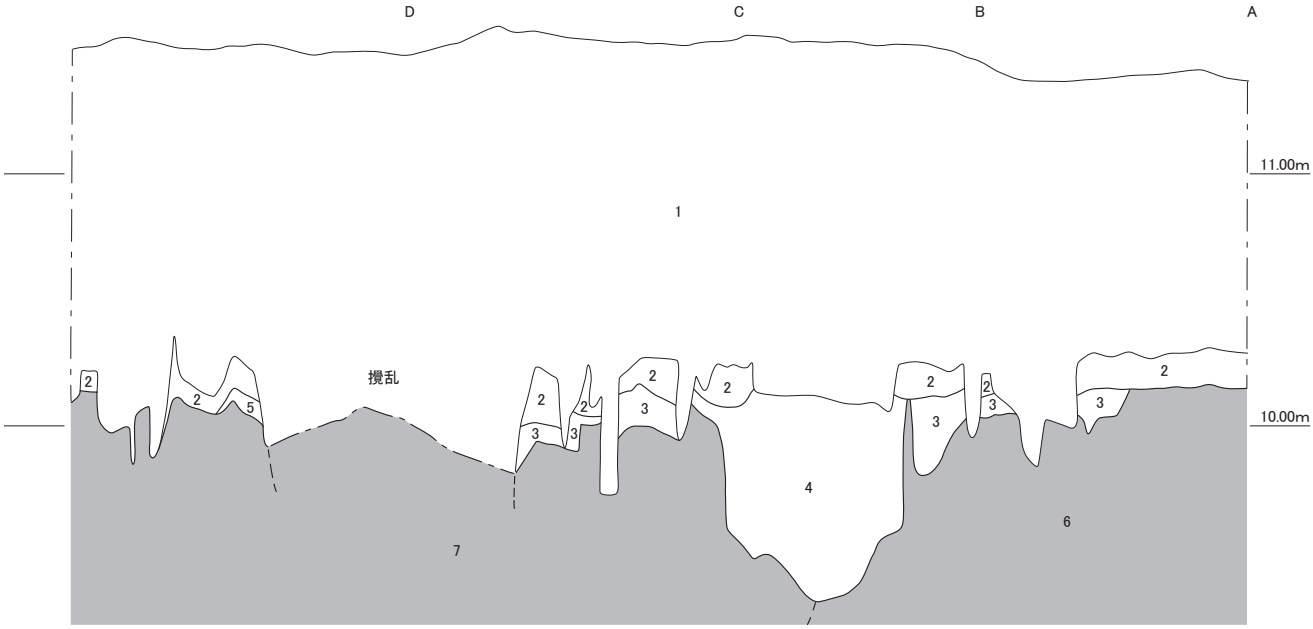
豆腐町遺跡・駅前町遺跡　出土金属製品計測表

No.	種別	器種	遺跡名	出土地区	出土遺構	法量(cm)			重量(g)	残存	備考	調査番号	図版番号	写真図版番号
						長さ	幅	厚み						
M1	鉄器	刀子	豆腐町	1区	SE08	20.7	2.45	2.0	59.3	ほぼ完形		2013121	55	69
M2	銅製品	銭	豆腐町	1区	SE09	縦2.6				3/4	和同開珎 曲物W19に付着	2013121	55	69
M3	銅製品	キセル	豆腐町	1区	SE04	7.7	1.5	0.1	8.8	完形		2013121	55	70
M3	銅製品	キセル	豆腐町	1区	SE04	7.2	1.0	0.1	5.1	完形		2013121	55	70
M4	鉄器	釘	豆腐町	1区	SE06 西半部	4.1	0.5	0.5	1.7	下半欠		2013121	55	70
M5	鉄器	釘	豆腐町	3区	SK12－2	3.0	0.6	0.5	1.1	上半欠		2014009	55	70
M6	鉄器	釘	豆腐町	3区	SK12－2	3.0	0.55	0.5	1.8	上下欠		2014009	55	70
M7	鉄器	釘	豆腐町	3区	SK13	5.2	0.6	0.6	3.3	上半欠		2014009	55	70
M8	銅製品	銭	豆腐町	3区		2.8	2.8	0.1	6.9	完形	一銭硬貨	2014009	55	70
M9	鉄器	釘	駅前町	1区	鋤溝2	4.1	0.5	0.4	2.1	下半欠		2014010	63	88

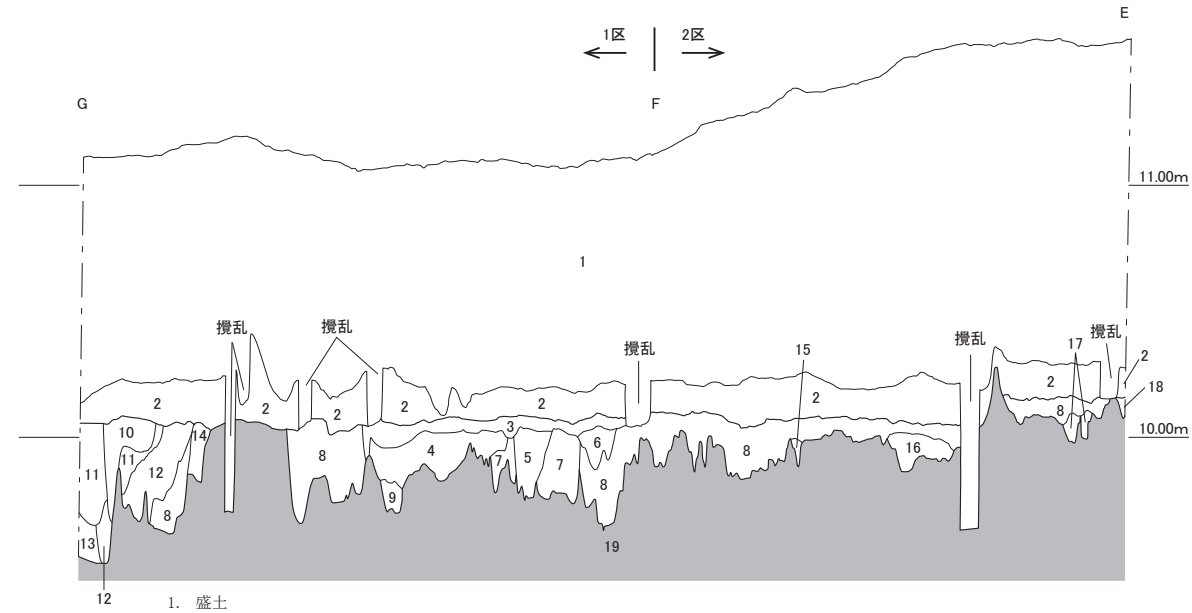
図　　版

豆腐町遺跡

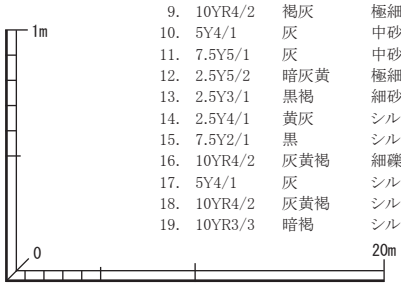
調査区遺構平面図（1/750）



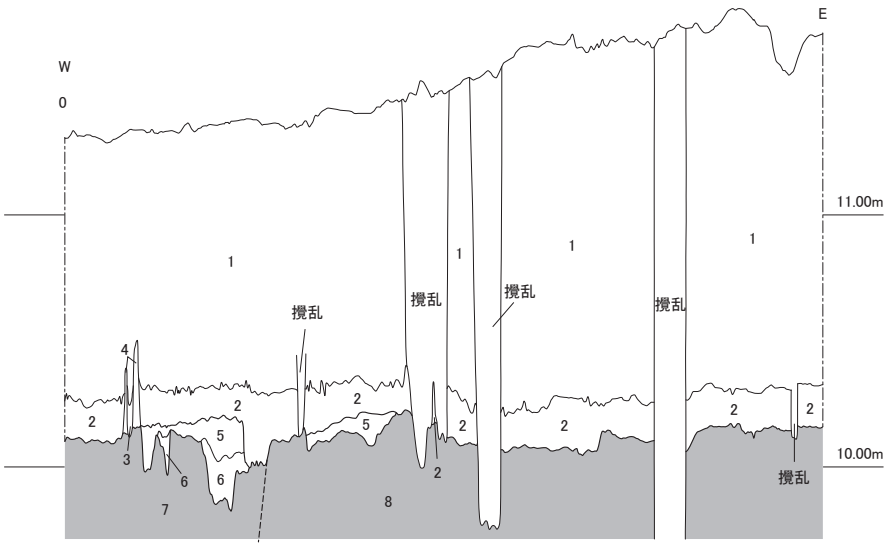
1. 盛土
2. 旧耕土
3. 5YR4/1　灰　シルト～中砂　小礫～中礫まばらに含む　土器片含む　炭化物含む
4. 10Y4/2　灰黄褐　シルト～中砂　礫～中礫含む　土器片含む　炭化物含む　2.5Y6/2灰黄シルトブロック含む
5. 10YR3/3　暗褐　シルト質極細砂
6. 10YR4/3　にぶい黄褐　極細砂～粗砂
7. 10YR5/6　黄褐　シルト

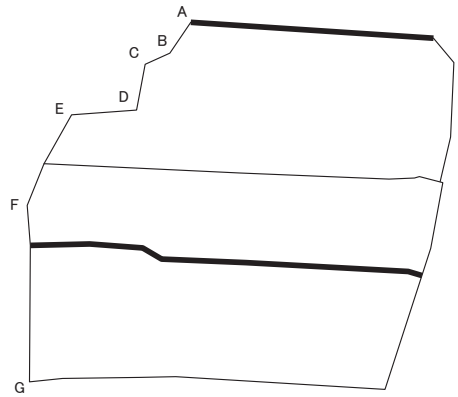


1. 盛土
2. 旧耕土
3. 2.5Y4/2　暗灰黄　シルト質極細砂
4. 10YR4/2　灰黄褐　細砂～中砂質極細砂　10YR5/6黄褐ブロック含む
5. 2.5Y5/2　黄褐　シルト質極細砂　下部に10YR4/1褐灰ブロック多く含む
6. 2.5Y4/1　黄灰　中礫混じり中砂質極細砂～細砂
7. 10YR4/6　褐　細砂～中砂　10YR4/1褐灰ブロック多く含む
8. 2.5Y4/1　黄灰　シルト質極細砂　ブロック多い　全体還元　2区部分について、還元を受けるのは0～15mの範囲のみ
9. 10YR4/2　褐灰　極細砂質シルト　10YR5/6黄褐ブロック含む
10. 5Y4/1　灰　中砂質極細砂～細砂
11. 7.5Y5/1　灰　中砂質極細砂～細砂　10YR5/6黄褐ブロック含む
12. 2.5Y5/2　暗灰黄　極細砂～細砂　10YR5/6黄褐ブロック含む
13. 2.5Y3/1　黒褐　細砂質シルト　7.5Y5/1灰ブロック含む
14. 2.5Y4/1　黄灰　シルト質極細砂～細砂
15. 7.5Y2/1　黒　シルト質極細砂
16. 10YR4/2　灰黄褐　細礫混じり中砂質極細砂～細砂　10YR5/6黄褐や10YR4/1褐灰ブロック多く含む
17. 5Y4/1　灰　シルト質極細砂　10YR4/1褐灰ブロック含む
18. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質極細砂　マンガン粒含む
19. 10YR3/3　暗褐　シルト　乾裂多数　2区部分について、北にいくほど中礫が混じってくる　基盤層

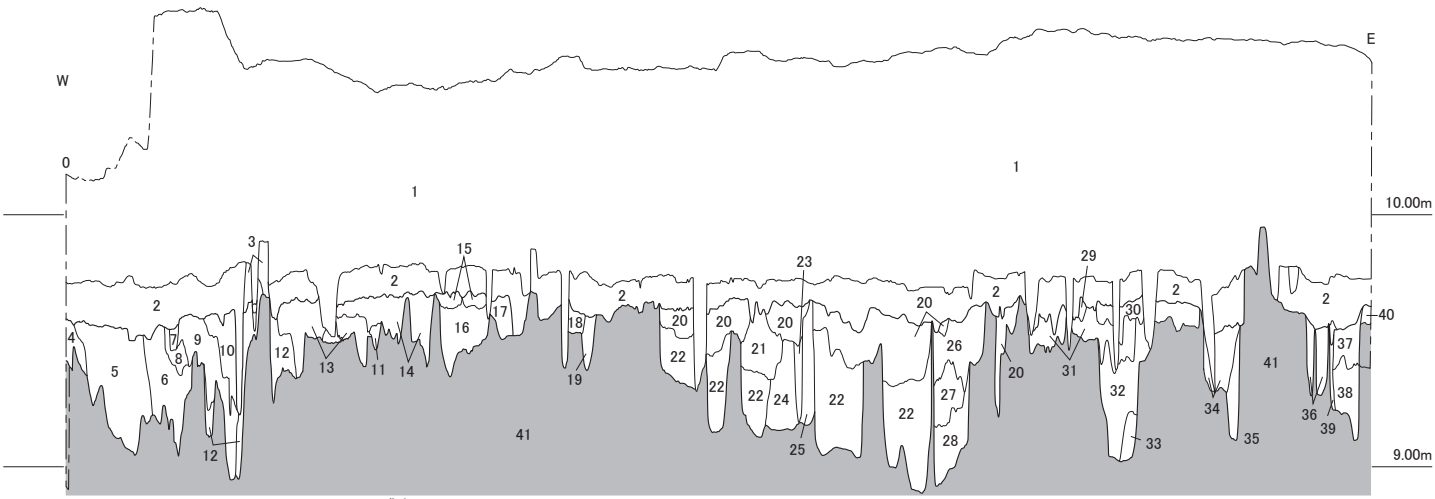


調査区西壁土層断面図

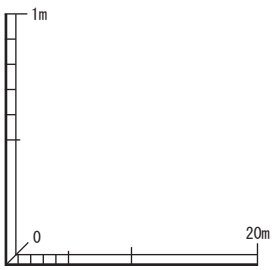




1.	盛土			
2.	旧耕土			
3.	2.5Y4/2	暗灰黄	シルト質極細砂～細砂	炭化物含む　小礫～中礫わずかに含む	畦
4.	N3/1	暗灰	シルト	水路内の堆積？	
5.	10YR4/4	褐	シルト～中砂	2.5Y4/1黄灰シルトブロック含む	
6.	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト質極細砂～中砂	5Y5/1灰シルトブロック多く含む	
7.	10YR4/6	褐	細礫～中礫混じり中砂質シルト	中礫1%含む	基盤層
8.	礫層				基盤層



1.	盛土				
2.	旧耕土				
3.	10YR4/2	灰黄褐	極細砂質シルト	細礫・中礫わずかに含む	粘土採掘抗Ⅰ
4.	2.5Y4/1	黄灰	シルト質極細砂	ブロック多い　全体還元	粘土採掘抗Ⅰ
5.	10YR4/1	褐灰	極細砂質シルト	中礫わずかに含む　ブロック多い　一部還元	粘土採掘抗Ⅰ
6.	10YR4/2	灰黄褐	シルト質極細砂	中礫わずかに含む　ブロック多い	粘土採掘抗Ⅰ
7.	2.5Y5/1	黄灰	細砂質シルト		粘土採掘抗Ⅰ
8.	2.5Y5/1	黄灰	シルト	大礫わずかに含む　褐鉄・マンガン含む	粘土採掘抗Ⅰ
9.	10YR4/2	灰黄褐	極細砂質シルト	中礫わずかに含む　地山ブロック多い	粘土採掘抗Ⅰ
10.	10YR5/2	灰黄褐	極細砂質シルト	細礫・中礫わずかに含む　上部に褐鉄・マンガン沈着	粘土採掘抗Ⅰ
11.	10YR5/8	黄褐	シルト	マンガン粒含む　基盤層のブロック多い	粘土採掘抗Ⅰ
12.	2.5Y4/1	黄灰	細礫～中礫混じりシルト	礫1%　炭粒2%含む	粘土採掘抗Ⅰ
13.	10YR4/1	褐灰	中礫混じりシルト質極細砂	中礫1%　下部にブロック　上部にマンガン・褐鉄沈着	粘土採掘抗Ⅰ
14.	2.5Y4/1	黄灰	中砂～粗砂質シルト		粘土採掘抗Ⅰ
15.	2.5Y5/1	黄灰	中砂質極細砂		
16.	10YR4/1	褐灰	中礫混じり中砂質シルト	還元で一部変色	
17.	2.5Y5/1	黄灰	中砂混じり極細砂質シルト		粘土採掘抗Ⅱ
18.	10YR5/2	灰黄褐	極粗砂混じりシルト質極細砂	高師小僧　褐鉄沈着	粘土採掘抗Ⅱ
19.	2.5Y5/2	暗灰黄	細礫～中礫混じりシルト質極細砂	高師小僧　褐鉄沈着	粘土採掘抗Ⅱ
20.	2.5Y4/1	黄灰	中砂～粗砂質シルト		粘土採掘抗Ⅱ
21.	10YR5/1	褐灰	中砂～極粗砂質極細砂	褐鉄・マンガン含む	粘土採掘抗Ⅱ
22.	10YR3/1	黒褐	極粗砂質細礫～大礫	細礫・中礫多く含む　大礫含む　淘汰悪い	粘土採掘抗Ⅱ
23.	10YR5/2	灰黄褐	中礫混じり粗砂質極細砂		粘土採掘抗Ⅱ
24.	10YR5/2	灰黄褐	大礫混じり粗砂質極細砂	淘汰悪い　マンガン粒含む	粘土採掘抗Ⅱ
25.	10YR4/4	褐	細礫混じり粗砂質シルト	粗砂～極粗砂層の同時移送	粘土採掘抗Ⅱ
26.	2.5Y5/2	暗灰黄	中礫混じり中砂質極細砂～細砂		粘土採掘抗Ⅱ
27.	10YR4/3	にぶい黄褐	中礫混じり粗砂質細砂		粘土採掘抗Ⅱ
28.	10YR5/4	にぶい黄褐	中礫混じり細砂質シルト	10YR5/2灰黄褐ブロック含む	粘土採掘抗Ⅱ
29.			30層と31層の漸移層		粘土採掘抗Ⅱ
30.	2.5Y5/1	黄灰	中礫混じり細砂～中砂	ブロック含む	粘土採掘抗Ⅱ
31.	2.5Y5/2	暗灰黄	中礫混じりシルト質極細砂	10YR5/6黄褐ブロック含む	粘土採掘抗Ⅱ
32.	10YR5/4	にぶい黄褐	中礫混じりシルト	礫1%含む	粘土採掘抗Ⅱ
33.	2.5Y5/4	暗灰黄	中礫混じり極細砂～細砂		粘土採掘抗Ⅱ
34.	10YR4/1	褐灰	中礫混じり細砂質粗砂～極粗砂	マンガン粒含む　地山ブロック含む	粘土採掘抗Ⅱ
35.	10YR4/2	灰黄褐	中礫～細礫混じりシルト質極細砂	地山ブロック含む	粘土採掘抗Ⅱ
36.	10YR4/3	にぶい黄褐	中礫混じりシルト質極細砂	上部に地山ブロック含む	粘土採掘抗Ⅱ
37.	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト質極細砂	マンガン含む　2.5Y4/1黄灰ブロック含む	粘土採掘抗Ⅱ
38.	2.5Y4/1	黄灰	シルト質極細砂～細砂		粘土採掘抗Ⅱ
39.	7.5YR4/3	褐	細砂～中砂	地山崩落土	粘土採掘抗Ⅱ
40.	2.5Y4/1	黄灰	シルト質極細砂～細砂	層下部に2.5Y7/3浅黄極細砂のラミナ	粘土採掘抗Ⅱ
41.	10YR4/6	褐	細礫～中礫混じり中砂質シルト	中礫1%含む	基盤層

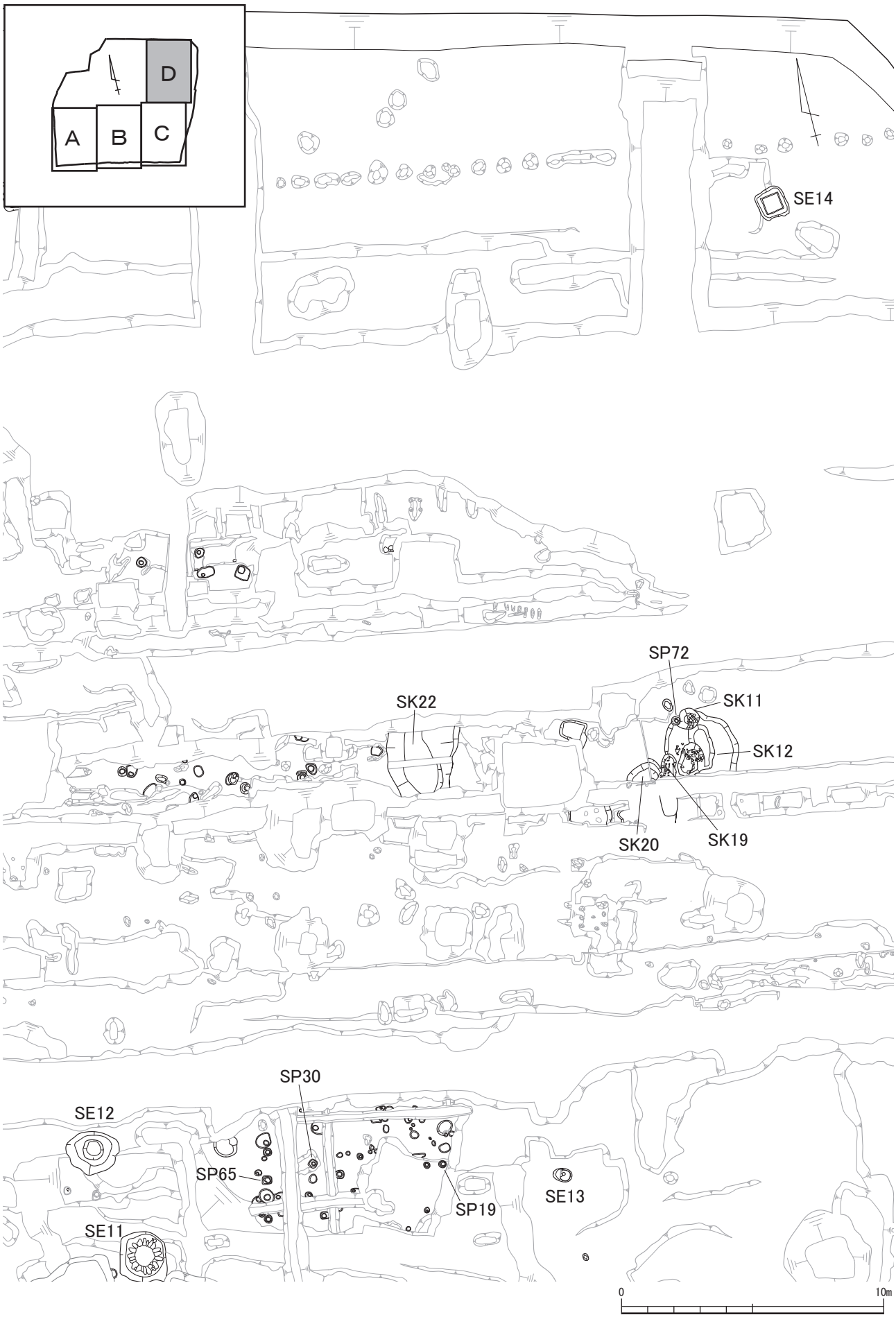


調査区北壁土層断面図

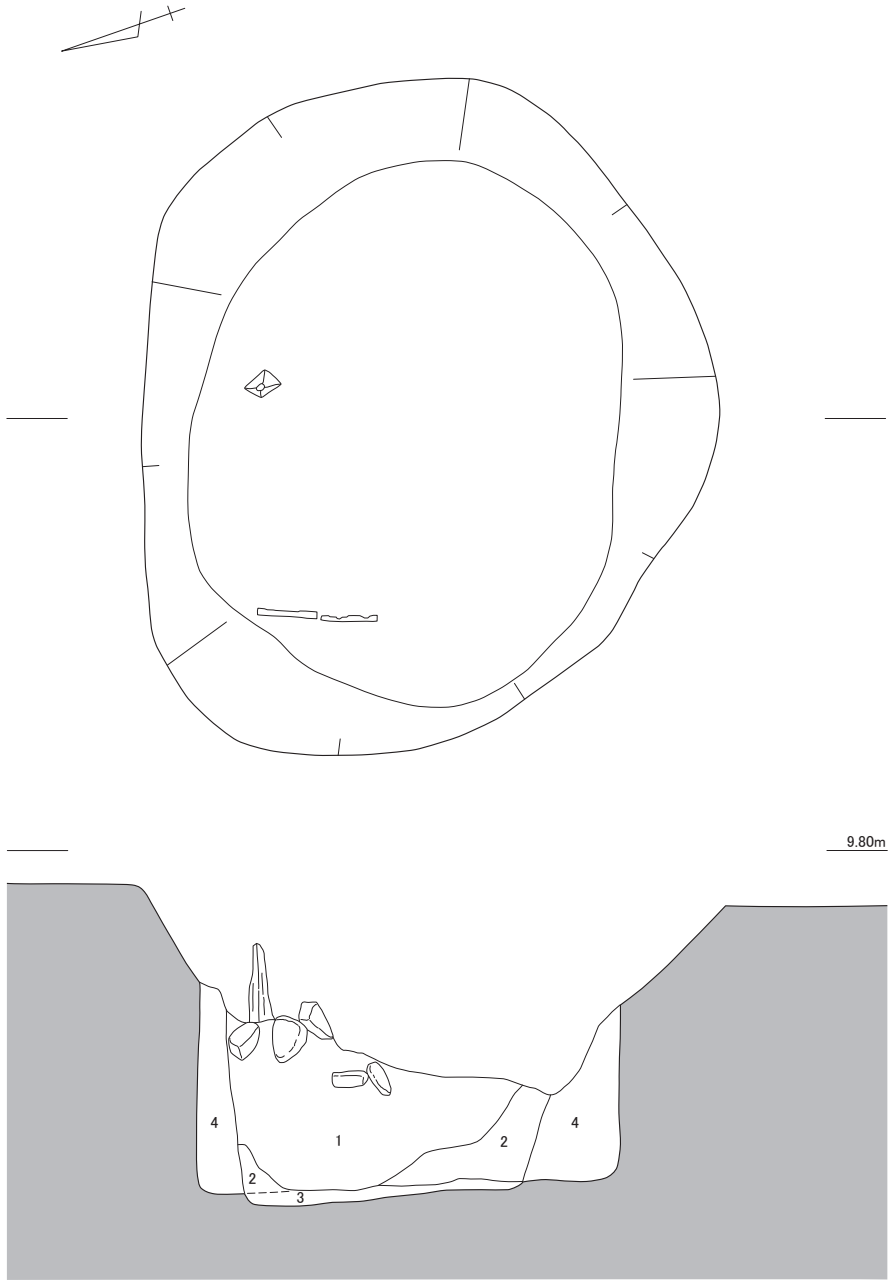
遺構群 A 平面図（1/200）

遺構群 B 平面図（1/200）

遺構群 C 平面図（1/200）

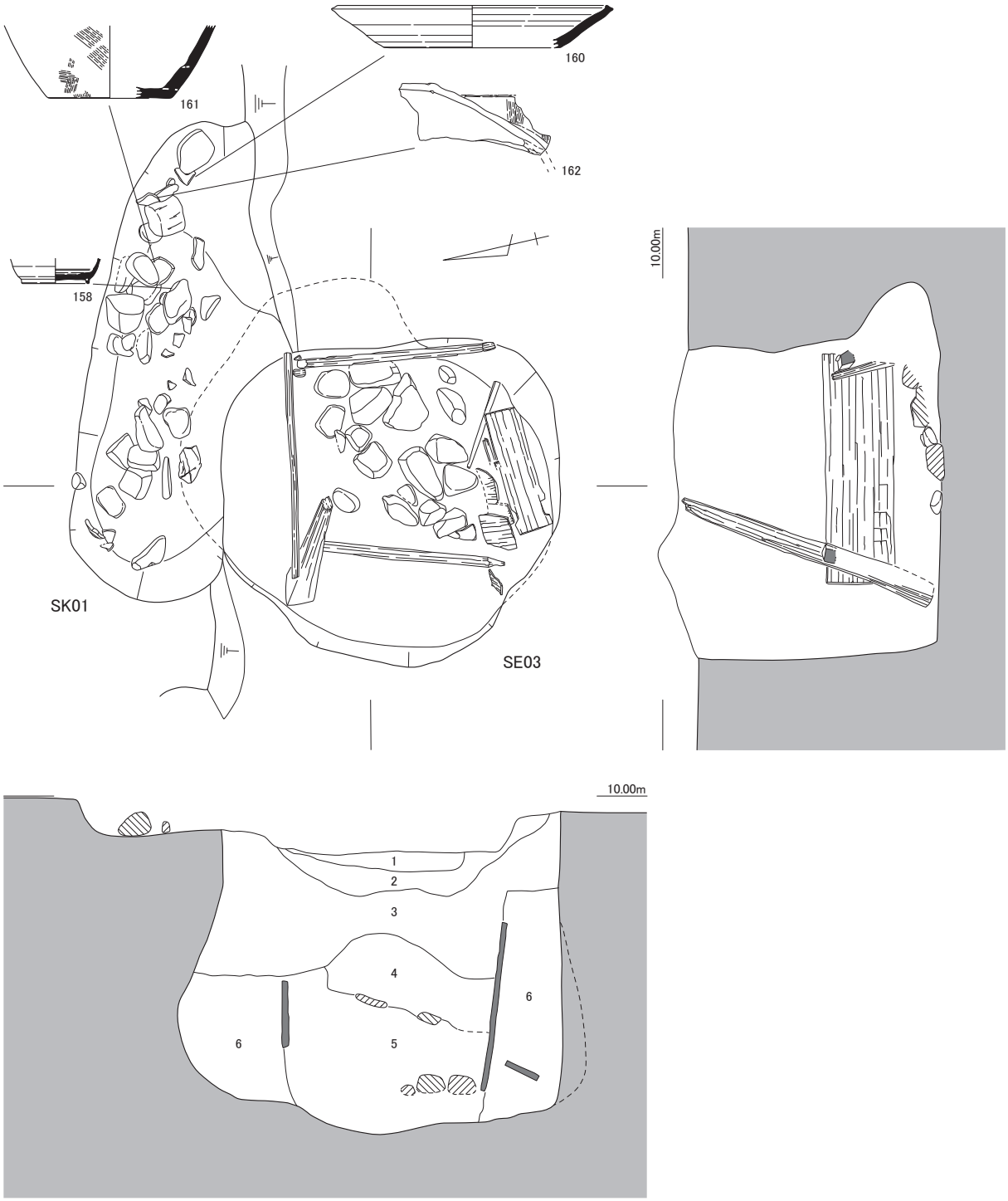


遺構群 D 平面図（1/200）



1. 5Y4/1	灰	極細砂混じりシルト	褐砂ブロック含む　φ5～20cmの円礫で埋めている　土器片多く含む
2. 5Y3/1	オリーブ黒	極細砂質シルト	褐シルトブロック含む　φ5cm大の円礫含む
3. 7.5Y4/1	灰	極細砂	灰シルトブロック含む
4. 2.5Y5/2	暗灰黄	シルト	褐シルトブロック含む

SE01　平面図・断面図

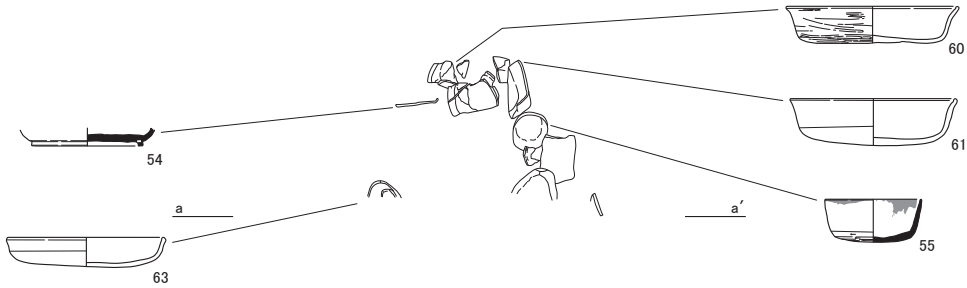


1.	7.5Y5/2	灰オリーブ	極細砂混じりシルト	5Y3/1オリーブ黒シルトブロック含む 鉄分沈着
2.	2.5Y4/1	黄灰	極細砂混じりシルト	鉄分沈着
3.	5Y4/1	灰	極細砂混じりシルト	2.5GY6/1オリーブ灰シルトブロック含む 鉄分沈着
4.	2.5GY6/1	オリーブ灰	シルト	粗砂～細礫含む
5.	7.5Y4/1	灰	極細砂混じりシルト	植物遺体含む
6.	2.5Y5/1	黄灰	シルト	2.5Y5/6黄褐細砂ブロック含む

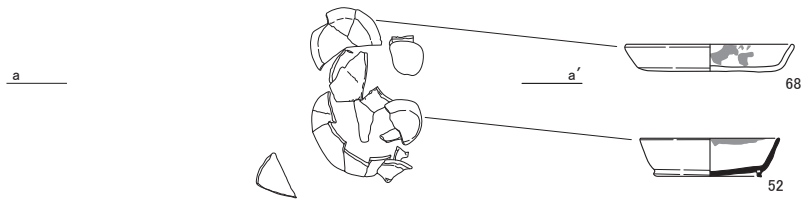
0 2m

SE03・SK01　平面図・断面図・立面図

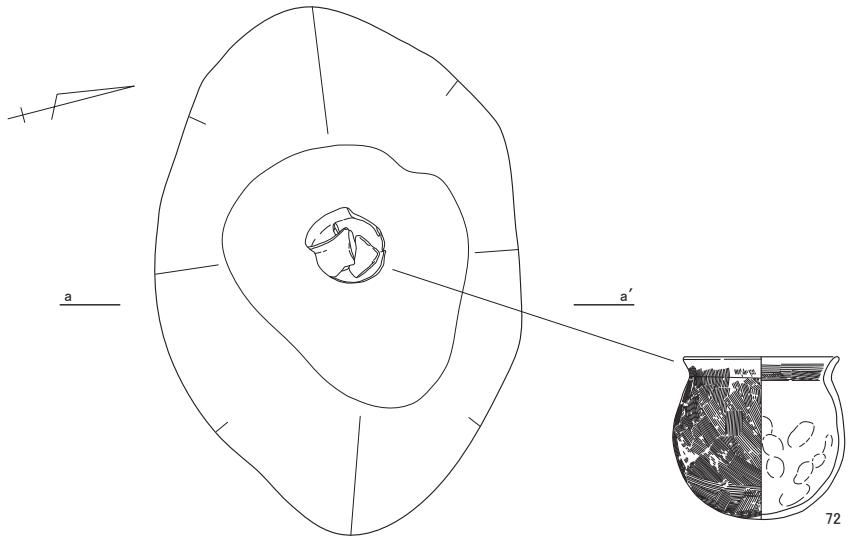
上層

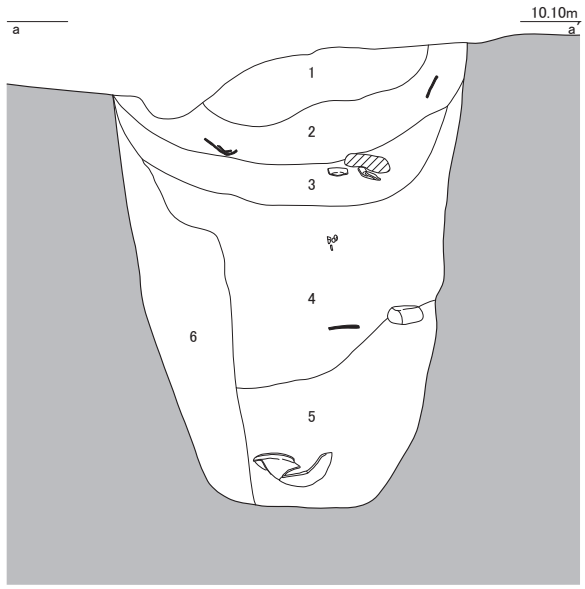


中層



下層

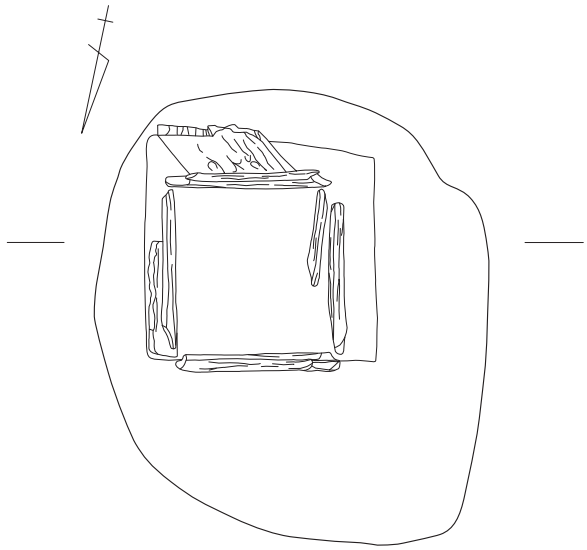


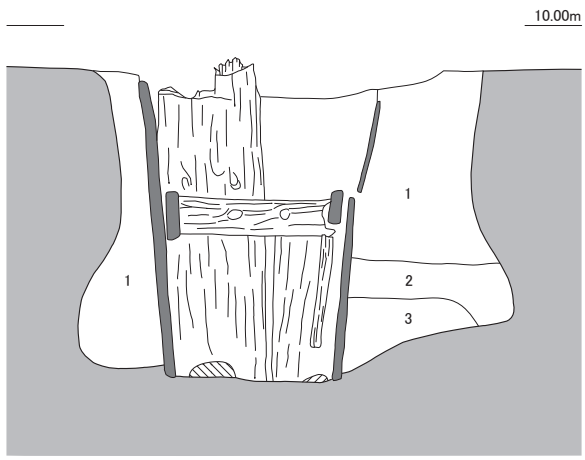


1. 5GY5/1 オリーブ灰 シルト 還元受けたベースブロック含む マンガン粒多く含む（上層）
2. 2.5Y4/1 黄灰 中礫混じりシルト φ～5cmの中礫1%、大礫1点含む 上方にφ～2cmの炭化物粒10%含む（上層）
3. 5Y4/1 灰 粘土～シルト 大礫わずかに含む（上層）
4. 2.5Y4/1 黄灰 粘土質シルト 土器多量に含む 炭化物わずかに含む 粘性あり（中層）
5. 5GY6/1 オリーブ灰 大礫質シルト 長径20cmの亜円礫多量に含む 粘性あり（下層）
6. 7.5Y5/1 灰 シルト 粘性あり

0 1m

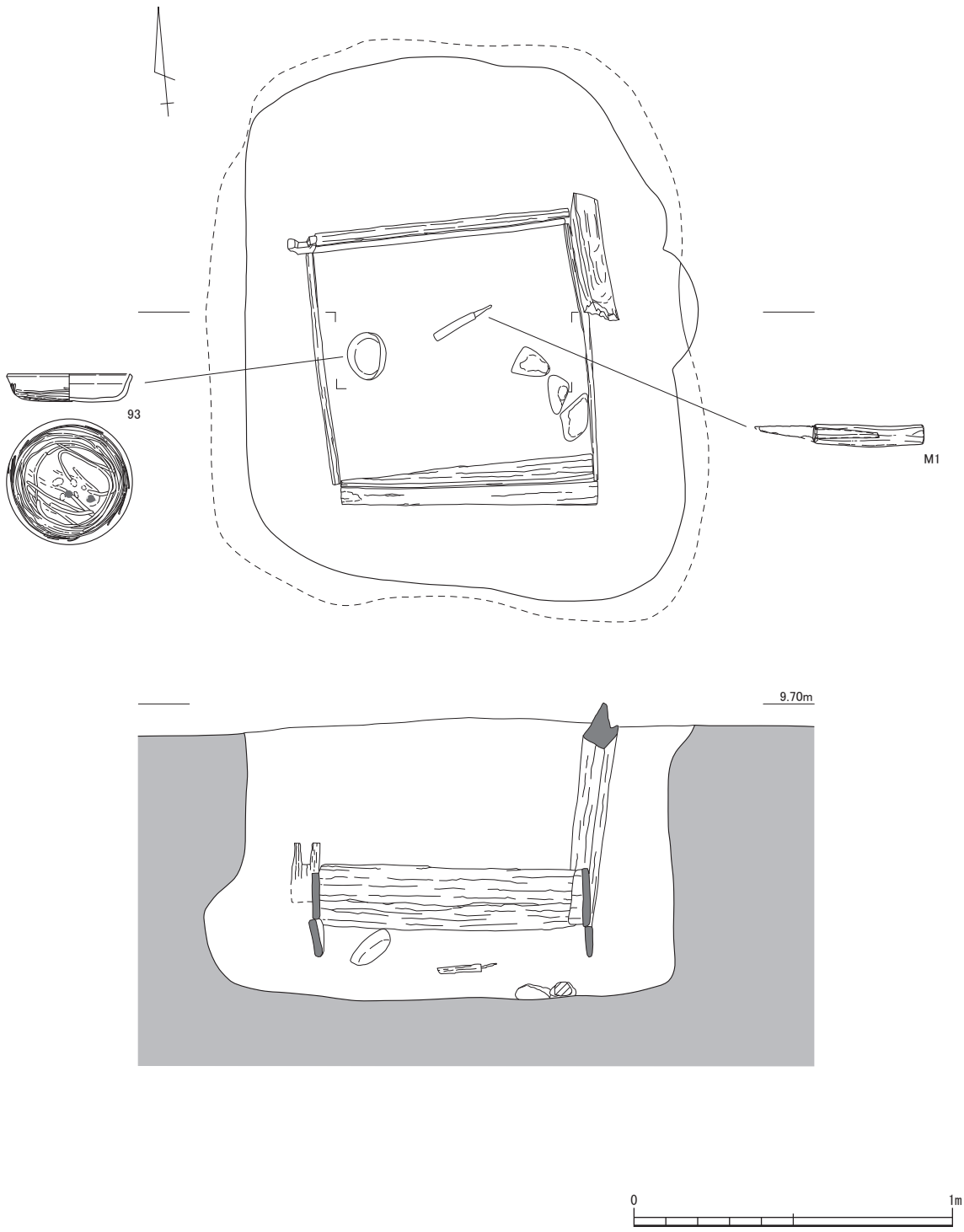
SE05 平面図・断面図





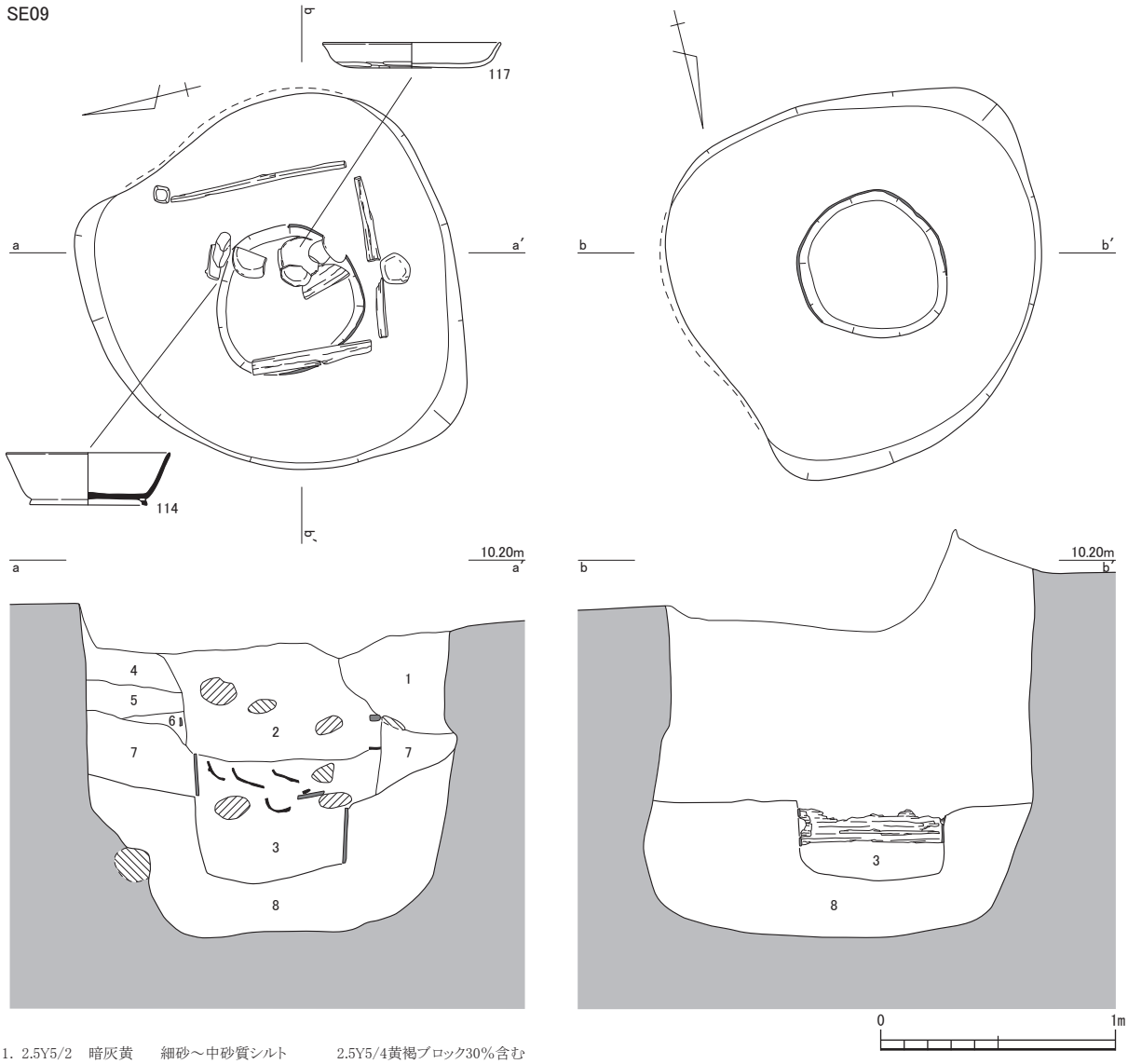
1. 5Y4/1　灰　シルト　5Y6/4オリーブ黄ブロック含む　炭化物含む　粘性あり
2. 2.5Y4/1　黄灰　シルト
3. 2.5Y4/1　黄灰　シルト　10Y6/1灰ブロック含む

SE07　平面図・立面図



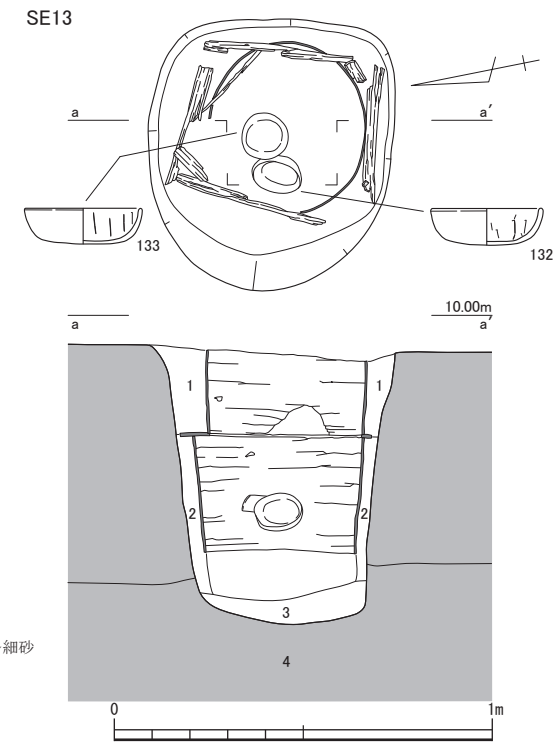
SE08　平面図・立面図

SE09



1. 2.5Y5/2	暗灰黄	細砂～中砂質シルト	2.5Y5/4黄褐ブロック30%含む 上部に高師小僧含む
2. 2.5Y4/1	黄灰	大礫質シルト	最大径25cmまでの大礫30%含む φ2cmの炭化物含む 淘汰悪い
3. 2.5Y4/1	黄灰	シルト	炭化物残る 粘性あり
4. 2.5Y5/2	暗灰黄	極細砂～細砂質シルト	2.5Y5/4黄褐ブロック20%含む
5. 2.5Y6/4	にぶい黄	シルト	高師小僧含む
6. 7.5Y5/1	灰	シルト	粘性強い
7. 5Y4/1	灰	シルト	炭化物多く 含む
8. 10YR4/1	褐灰	粗砂～細礫質中礫～大礫	最大径25cm 淘汰悪い

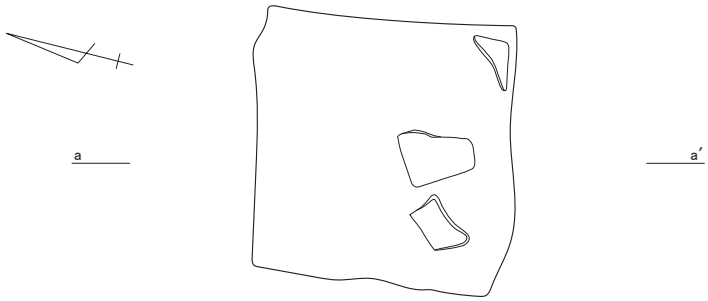
SE13



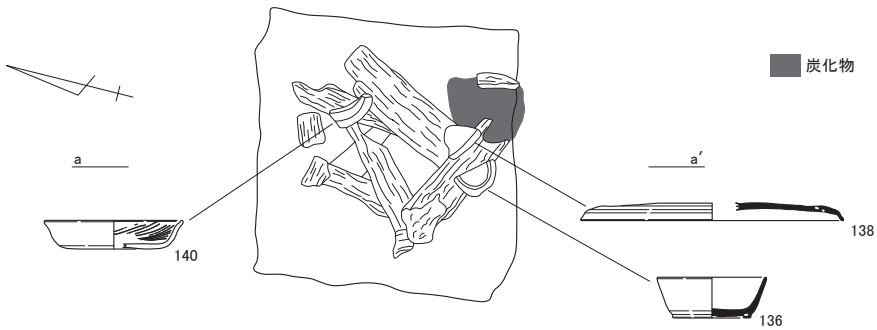
1. 10YR4/3	にぶい黄褐	中砂質粗砂～極粗砂
2. 2.5Y5/2	暗灰黄	粗砂混じりシルト質極細砂～細砂
3. 10YR4/2	灰黄褐	中礫混じり極細砂～細礫
4.		砂礫層

SE09　平面図・立面図　SE13　平面図・立面図

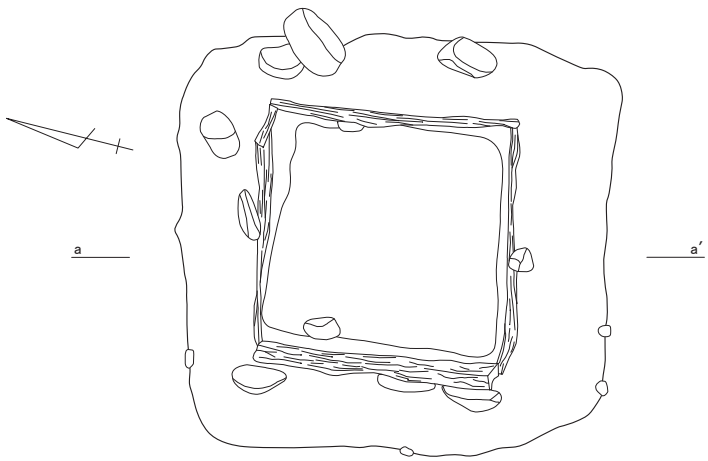
上層

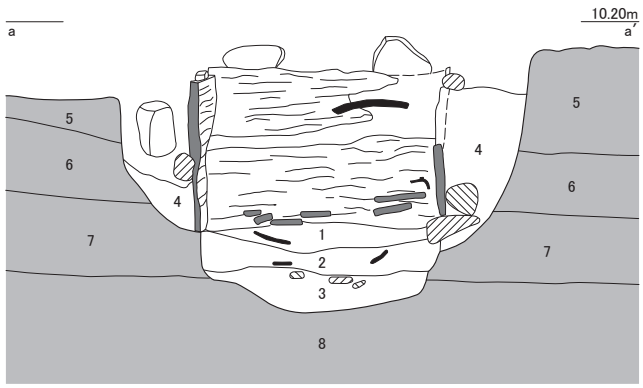


下層



完掘状況

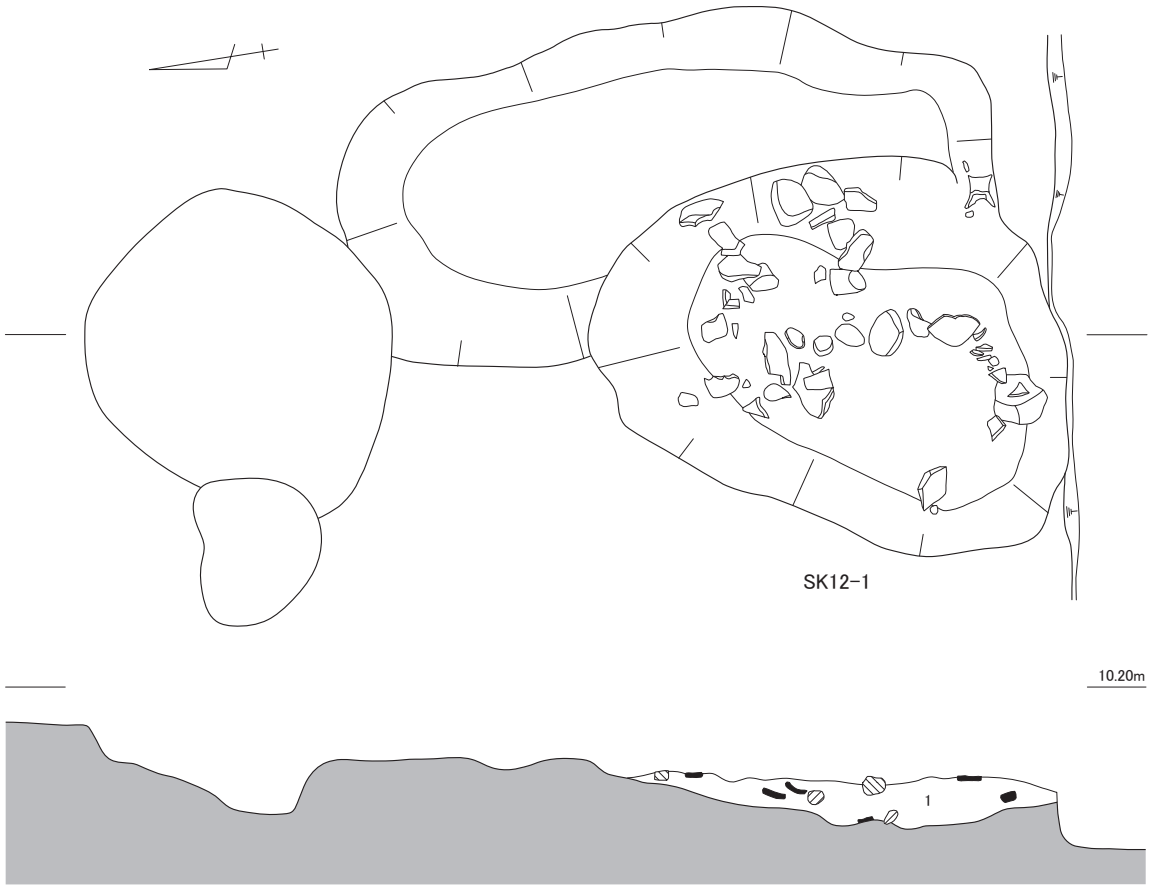




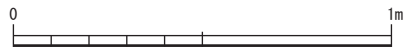
1. 5Y4/1	灰	シルト～中砂	粘性高い　土器片含む	(SE14埋戻土)
2. 2.5Y4/2	にぶい黄褐	中砂～粗砂	土器片含む	(SE14埋土)
3. 10YR5/4	にぶい黄褐	中砂～粗砂	細礫～中礫含む	(SE14埋土)
4. 10YR5/2	灰黄褐	極細砂～中砂	土器片含む	(SE14掘方埋土)
5.		中礫～大礫(φ2～20cm　亜円礫)	マトリックスは10YR3/2黒褐極細砂質シルト	(地山)
6. 2.5Y4.7/1.3	黄灰	粗砂～極粗砂		(地山)
7.		中礫～大礫(φ2～20cm　亜円礫)	マトリックスは粗砂～極粗砂混じりシルト	(地山)
8.		中礫(φ1～5cm　亜円礫)	含水量多い	(地山)

0　1m

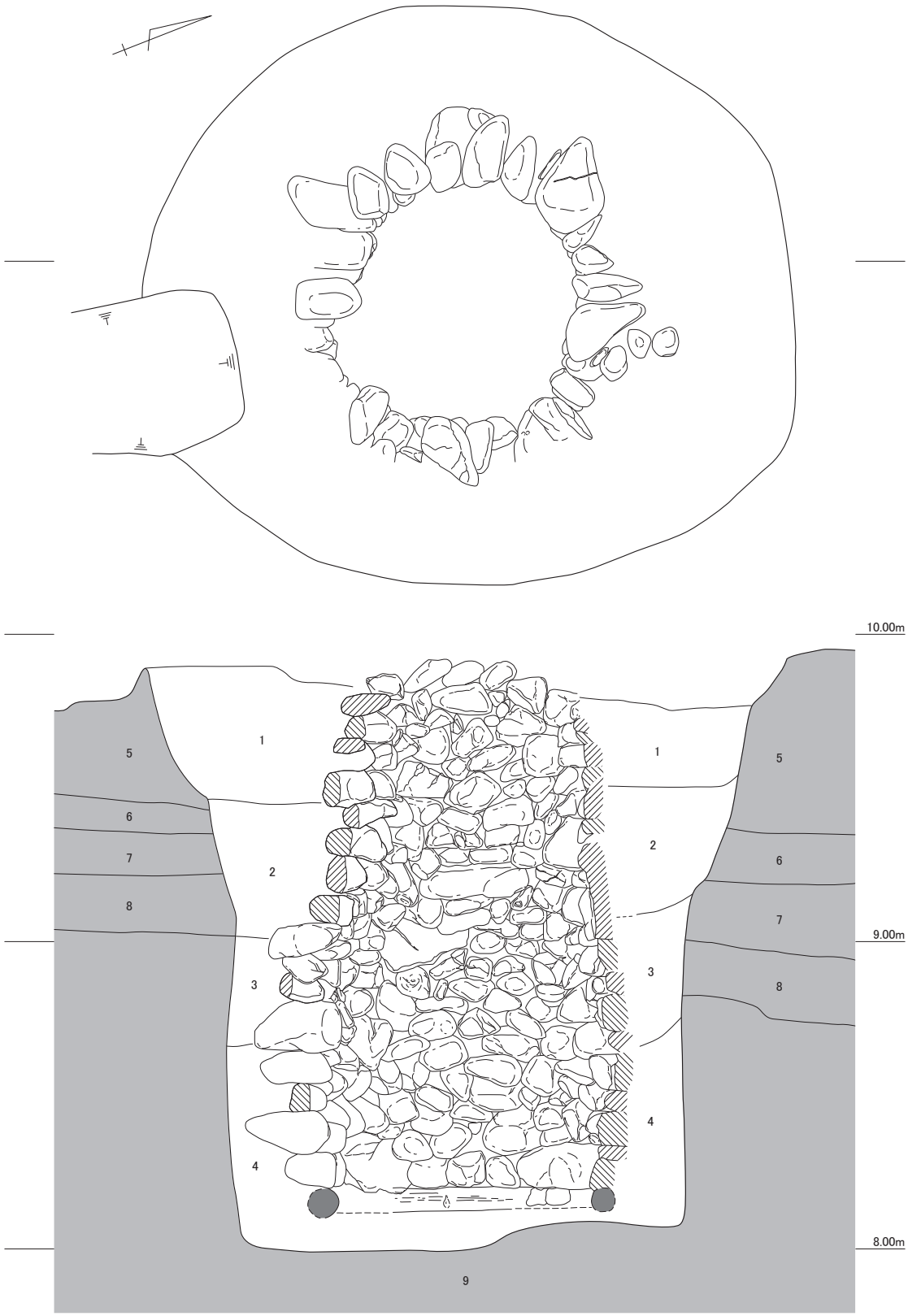
SE14　平面図・立面図



1. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質極細砂～細砂　細礫～φ15㎝大の大礫含む
炭化物・焼土含む　土器片多数含む



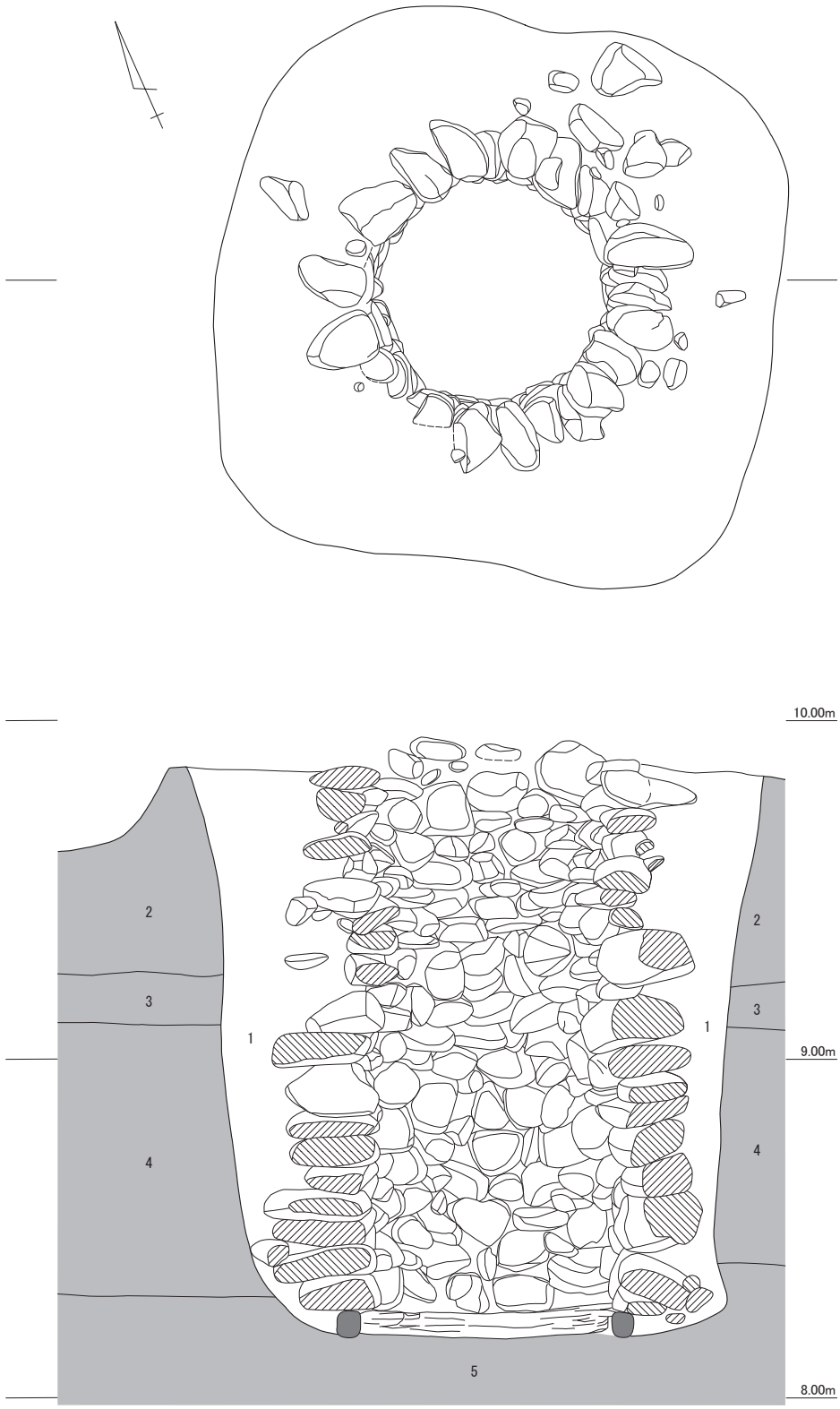
SK12-1　平面図・断面図



1.	10YR4/1	褐灰	シルト質中礫～大礫	非常にしまり良い
2.	10YR5/4	にぶい黄褐	中礫混じりシルト質極細砂	10YR4/1褐灰ブロック含む
3.	2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂	粘性あり
4.	10YR4/1	褐灰	中礫質中砂～細礫	中礫25％含む しまり良い
5.	10YR5/6	黄褐	シルト質極細砂	しまり良い 粘性ややあり
6.	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト質極細砂～細砂	
7.	10YR5/6	黄褐	シルト質極細砂	
8.	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト質極細砂～細砂	
9.	10YR3/2	黒褐	粗砂～細礫質中礫～大礫	淘汰悪い

0 1m

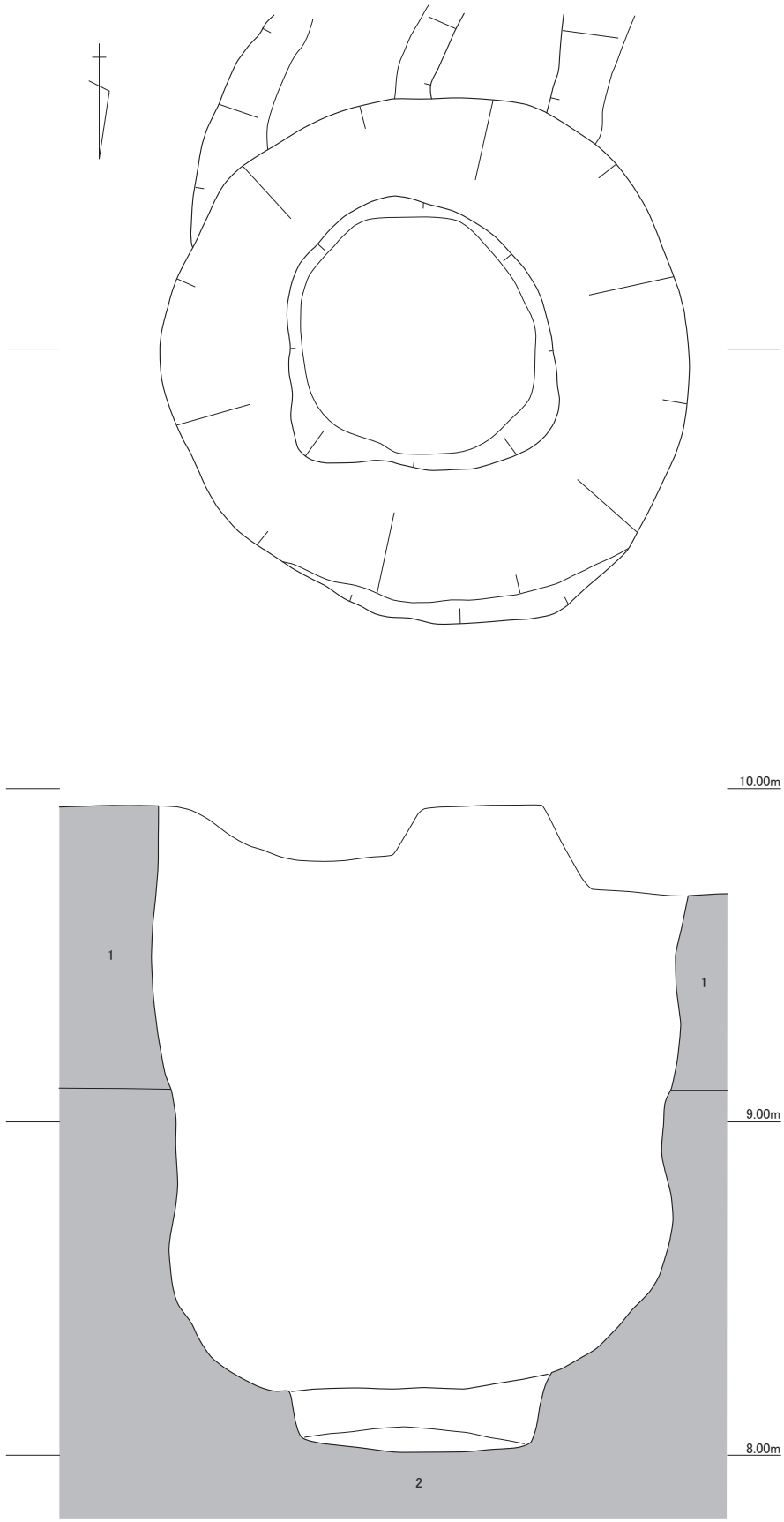
SE04　平面図・立面図



1. 2.5Y4/3　オリーブ褐　細礫質細砂～粗砂
2. 10YR7/6　明黄褐　極細砂混じりシルト
3. 2.5Y4/2　暗灰黄　中砂～粗砂
4. 10YR4/3　にぶい黄褐　細礫～中礫混じり粗砂　上層に鉄分沈着
5. 10YR4/2　灰黄褐　中礫質粗砂～細礫

0　1m

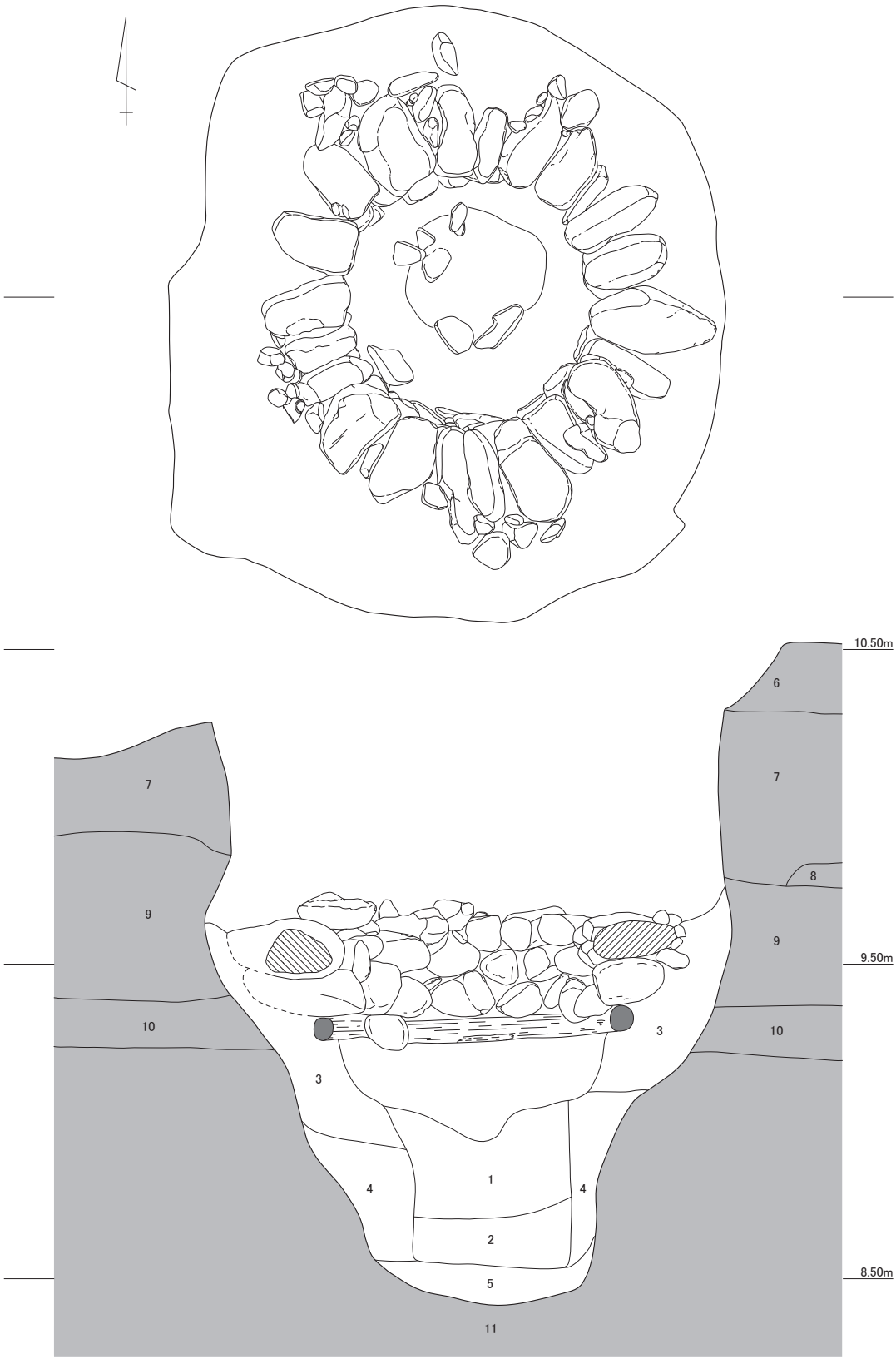
SE06　平面図・立面図



1. 10YR5/6　黄褐　シルト質極細砂　　しまり良い　粘性ややあり
2. 10YR3/2　黒褐　粗砂～細礫質中礫～大礫　淘汰悪い

0　1m

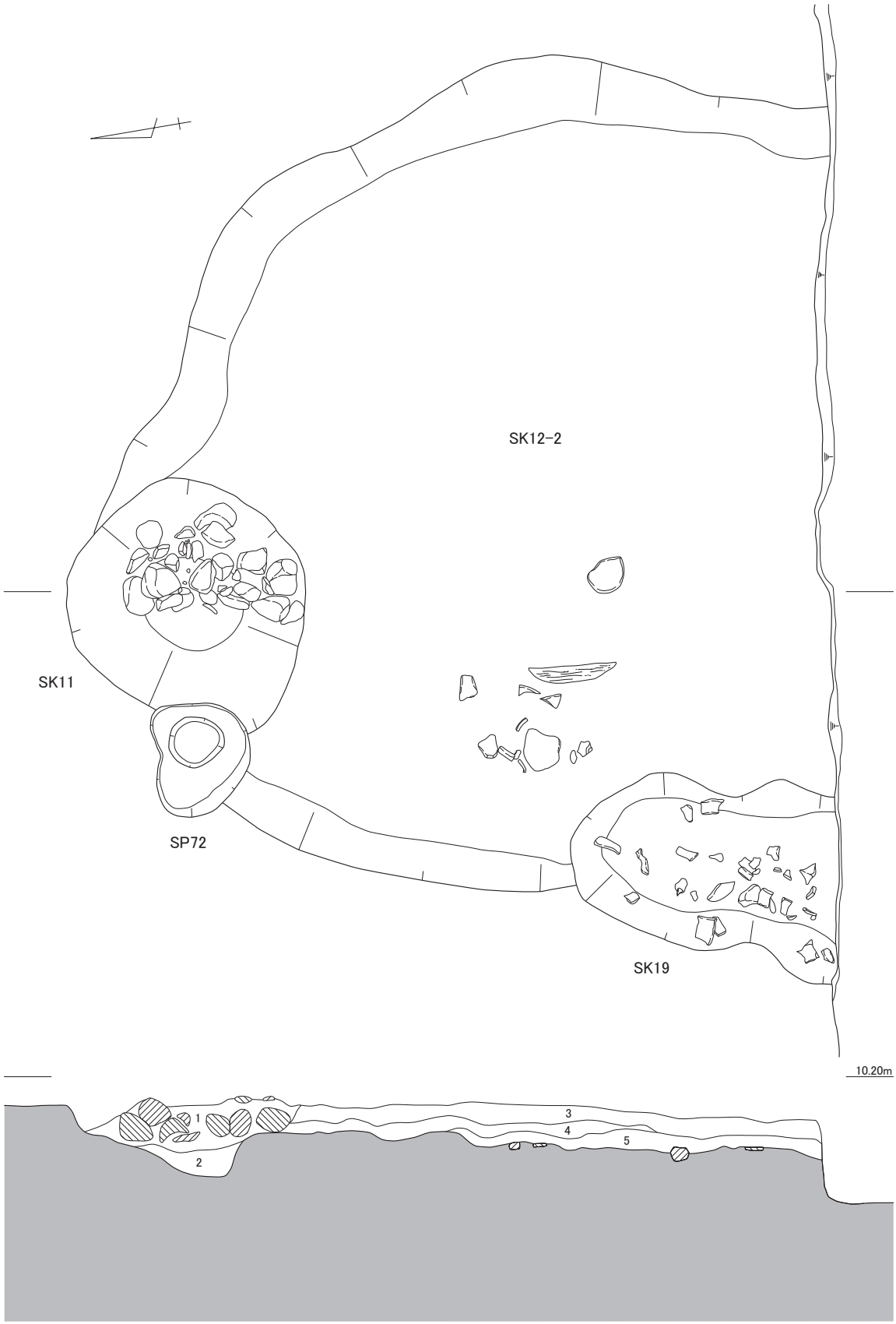
SE10　平面図・断面図



1. 2.5Y4/1	黄灰	中礫～大礫混じりシルト質細砂～粗砂(中礫20%、大礫15%)	粘性あり 植物質多い
2. 5Y4/1	灰	大礫混じりシルト質極細砂(大礫15%)	粘性あり 植物質多い
3. 10YR4/3	にぶい黄褐	粗砂～極粗砂質細礫～中礫	ややしまり悪い やや軟質
4. 10YR4/2	灰黄褐	中礫混じり粗砂～細礫(中礫20～30%)	軟質 しまり悪い
5. 10YR4/3	にぶい黄褐	中礫混じり中砂～粗砂(中礫15%)	軟質 しまり悪い
6. 10YR4/4	褐	中礫混じりシルト質極細砂～細砂(中礫2%)	しまり良い 乾裂あり マンガン粒あり 淘汰悪い
7. 10YR4/3	にぶい黄褐	中礫混じりシルト質極細砂(中礫2%)	しまり良い 生痕あり 淘汰悪い
8. 10YR4/2	灰黄褐	細礫～中礫混じり 粗砂～極粗砂	淘汰悪い ややしまり良い
9. 10YR4/2	灰黄褐	粗砂～中礫質細礫	淘汰悪い ややしまり良い 下位に放棄流路あり
10. 10YR4/3	にぶい黄褐	中礫混じり粗砂～極粗砂(中礫5～10%)	しまり悪い 軟質
11. 10YR4/2	灰黄褐	粗砂～細礫質中礫～大礫(中礫30%、大礫30%)	淘汰悪い しまり良い

0 1m

SE11　平面図・立面図

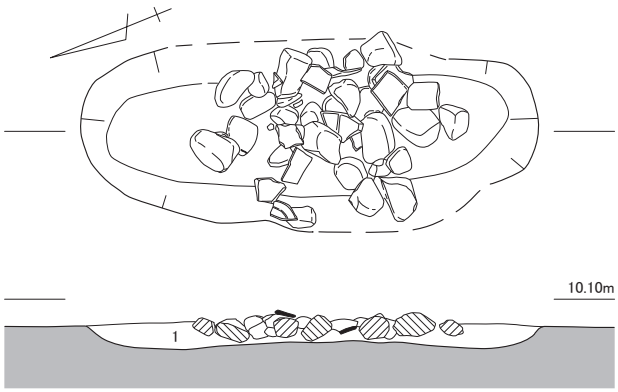


1. 10YR4/2	灰黄褐	シルト質極細砂	φ10cm大の円礫集積	(SK11埋土)
2. 2.5Y4/1	黄灰	シルト質極細砂～細砂	炭化物多く 含む 土器片含む 10YR5/4にぶい黄褐シルトブロック含む	(SK11埋土)
3. 2.5Y5/2	暗灰黄	シルト質極細砂～細砂	極粗砂～中礫含む 耕土や褐シルトのブロック含む	(SK12-2埋土)
4. 2.5Y4.7/1.7	暗灰黄	極細砂～細砂	極粗砂～細礫含む(耕土に近い土)	(SK12-2埋土)
5. 10YR4/4	褐	シルト混じり細砂～中砂	細礫含む 褐ブロック含む	(SK12-2埋土)

0 1m

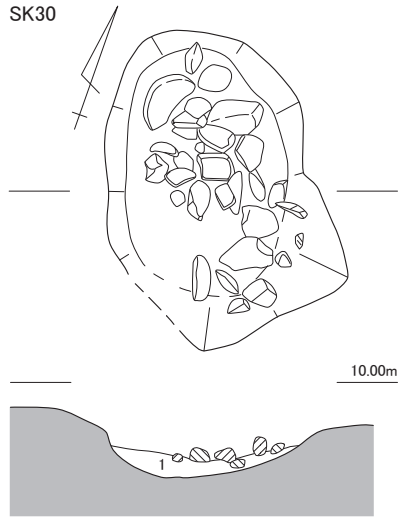
SK11・SK12-2・SK19　平面図・断面図

SK03



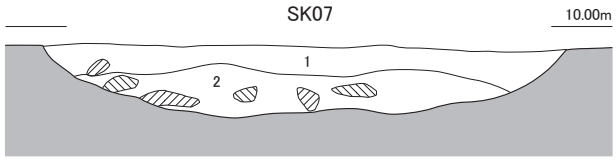
1. 2.5Y4/2　黄灰　　シルト質極細砂

SK30



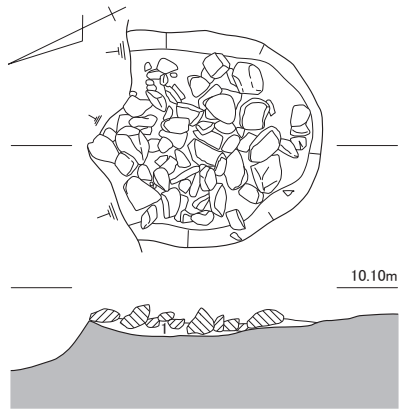
1. 2.5Y4/1　黄灰　　シルト質極細砂

SK07



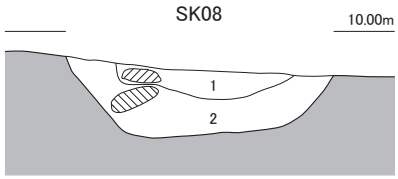
1. 10YR5/6 黄褐　　シルト質極細砂　　マンガン粒含む
2. 10YR4/2 灰黄褐　　中～大礫混じり細砂～中砂質極細砂
中～大礫 25%　炭化物粒 7%含む

SK37



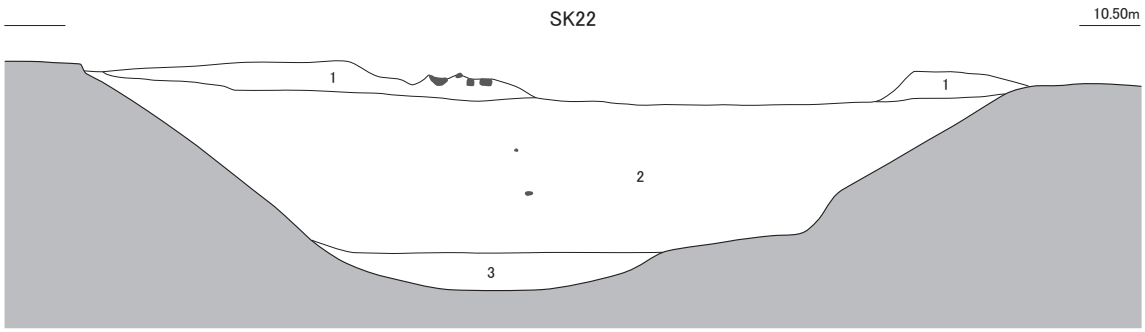
1. 2.5Y4/1　黄灰　　シルト質極細砂

SK08



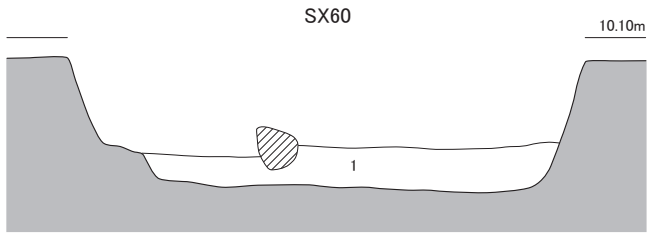
1. 10YR5/4 にぶい黄褐　　中～大礫混じり中砂～粗砂質細粒
マンガン粒含む　中礫 15%含む
2. 5Y5/1　灰　　中礫混じりシルト質極細砂
中礫 5%含む　マンガン粒含む　高師小僧含む

SK22

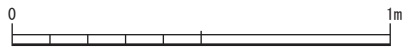


1. 10YR5/4　にぶい黄褐　　シルト質細砂～細砂　焼土含む
2. 10YR4/3　にぶい黄褐　　シルト～極細砂　　焼土わずかに含む　2.5Y5/2 暗灰黄シルト質極細砂ブロック
3. 10YR5/3　にぶい黄褐　　シルト～細砂

SX60

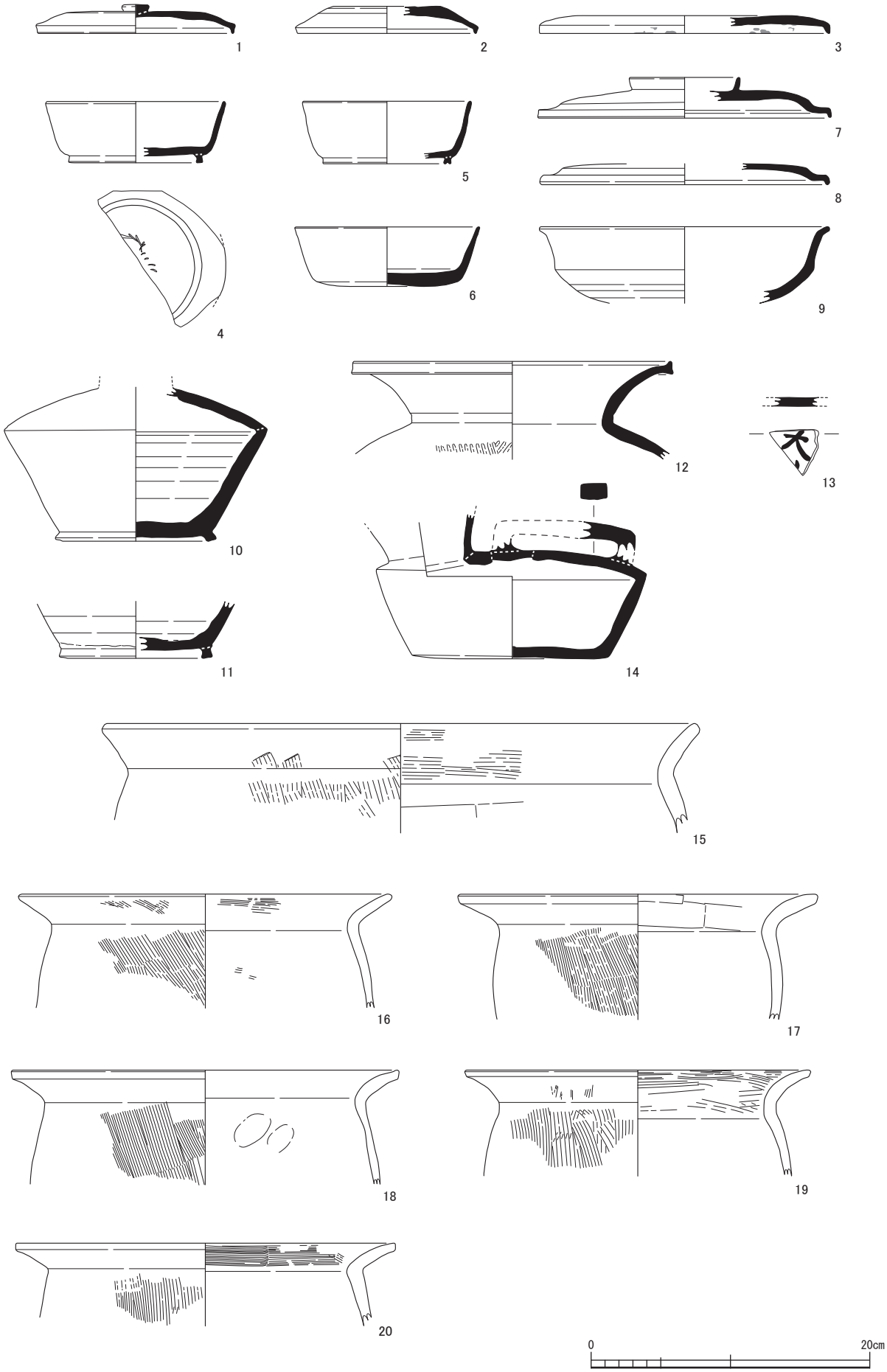


1. 2.5Y4/1　黄灰　　細礫～大礫混じり粗砂質極細砂（上方は大礫多い）



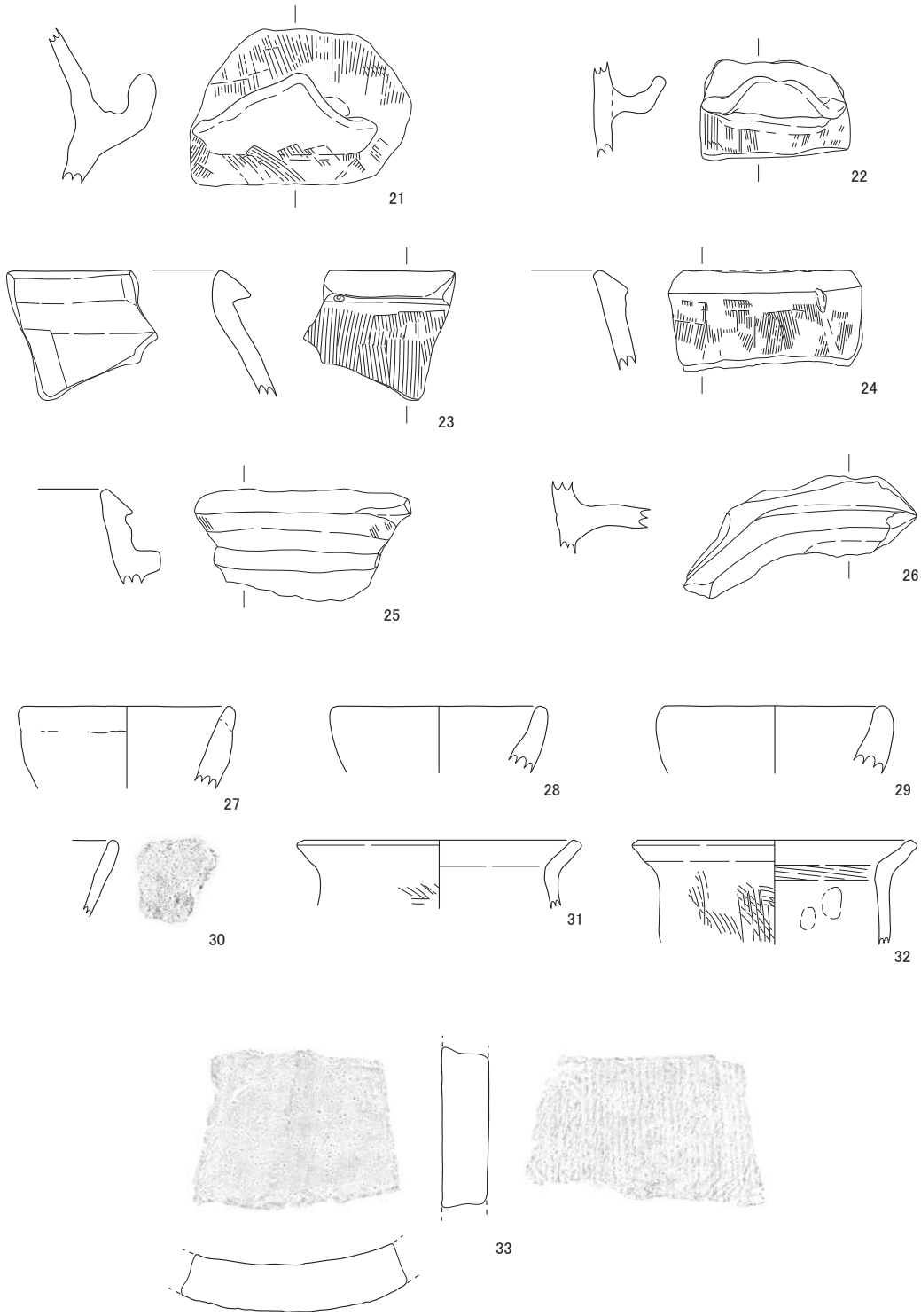
SK03・SK07・SK08・SK22・SK30・SK37・SX60　断面図

SE01



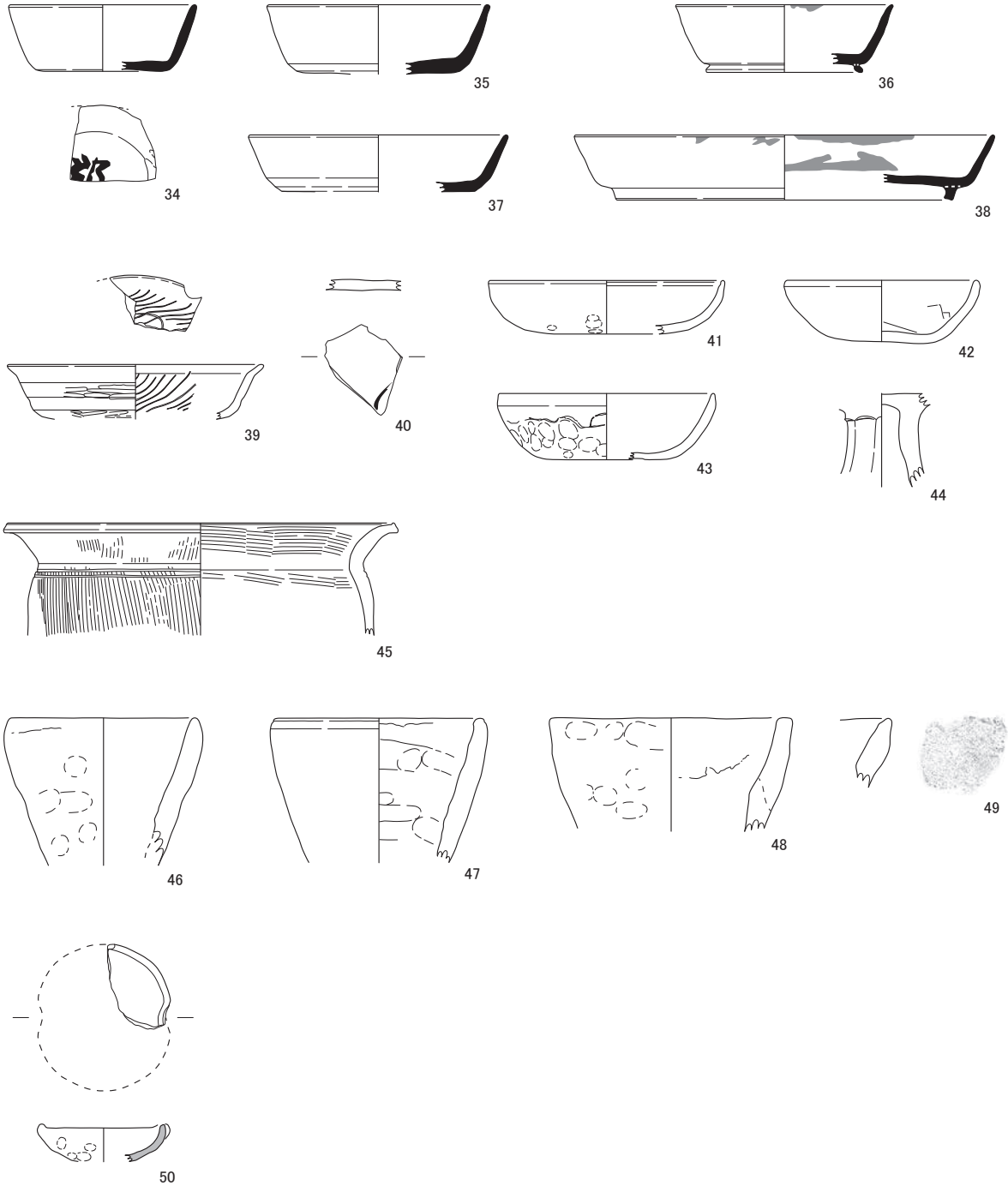
出土土器（SE01）

SE01



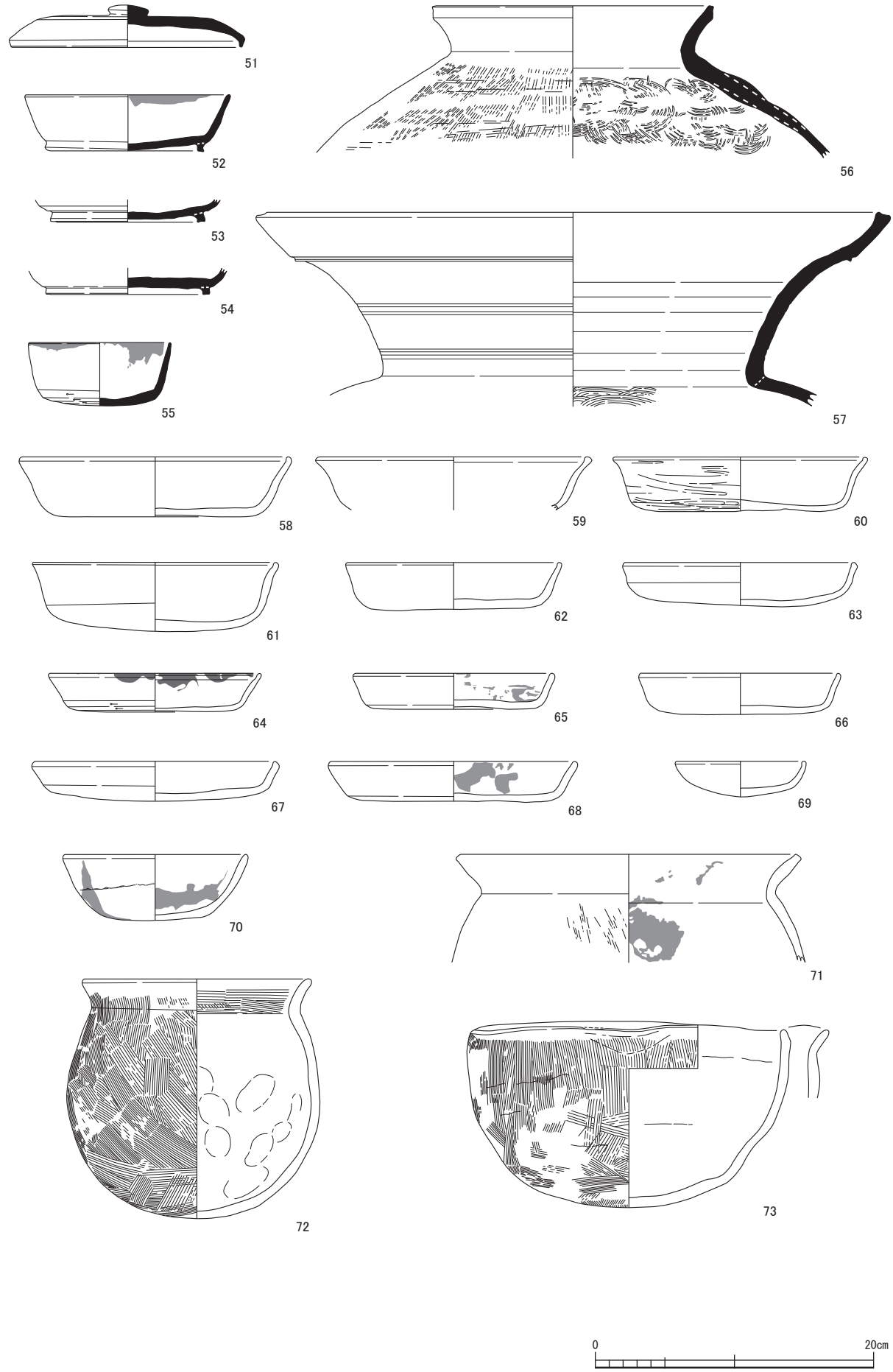
出土土器（SE01）

SE03



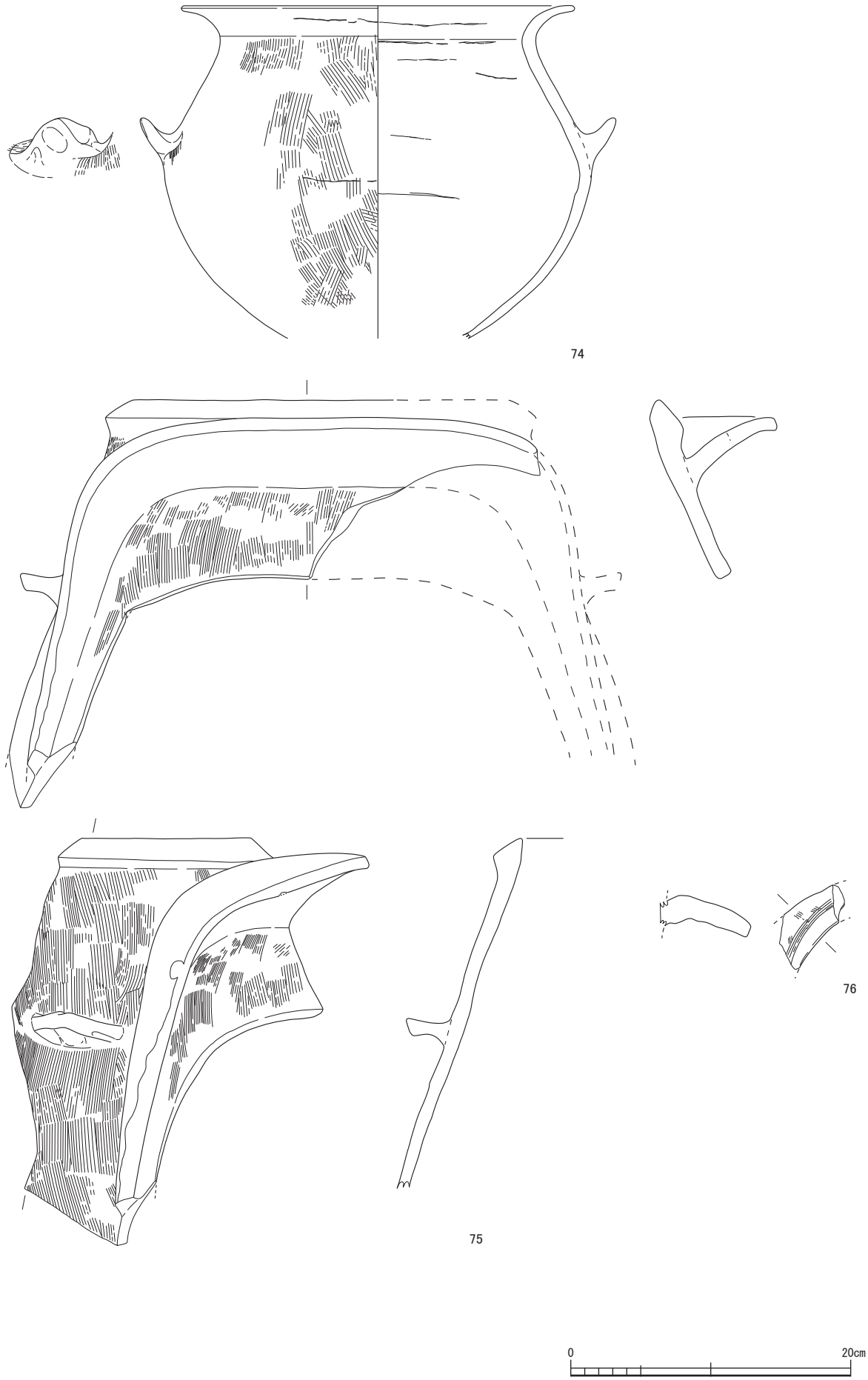
出土土器（SE03）

SE05



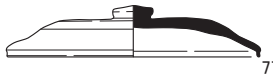
出土土器（SE05）

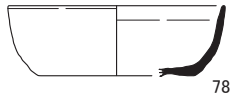
SE05

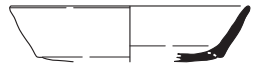


出土土器（SE05）

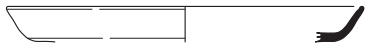
SE07

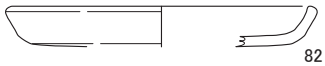

77

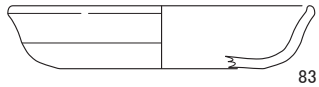

78

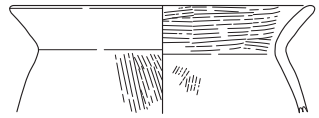

79

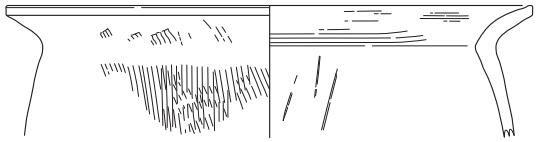
80


81


82


83

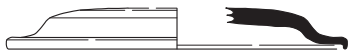

84

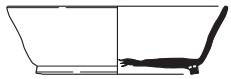

85

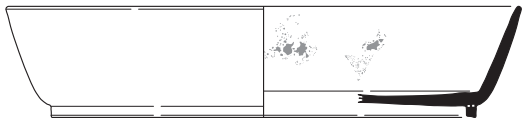
86

87

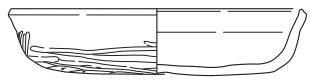
SE08

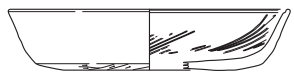

88

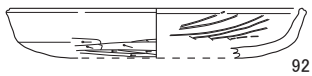

89


91

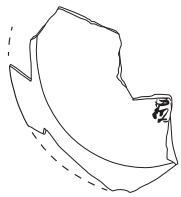
90

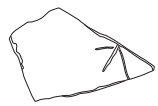


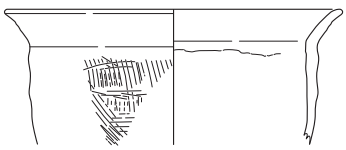


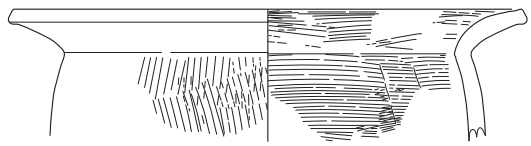

92

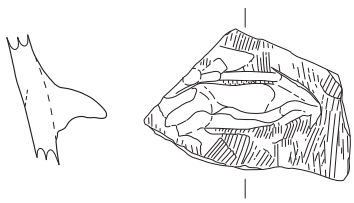
93

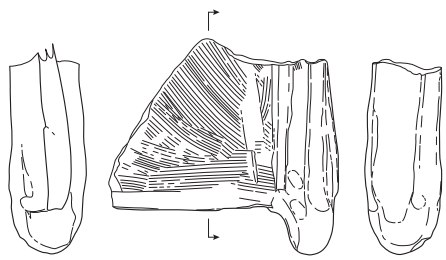

94


95


96


97

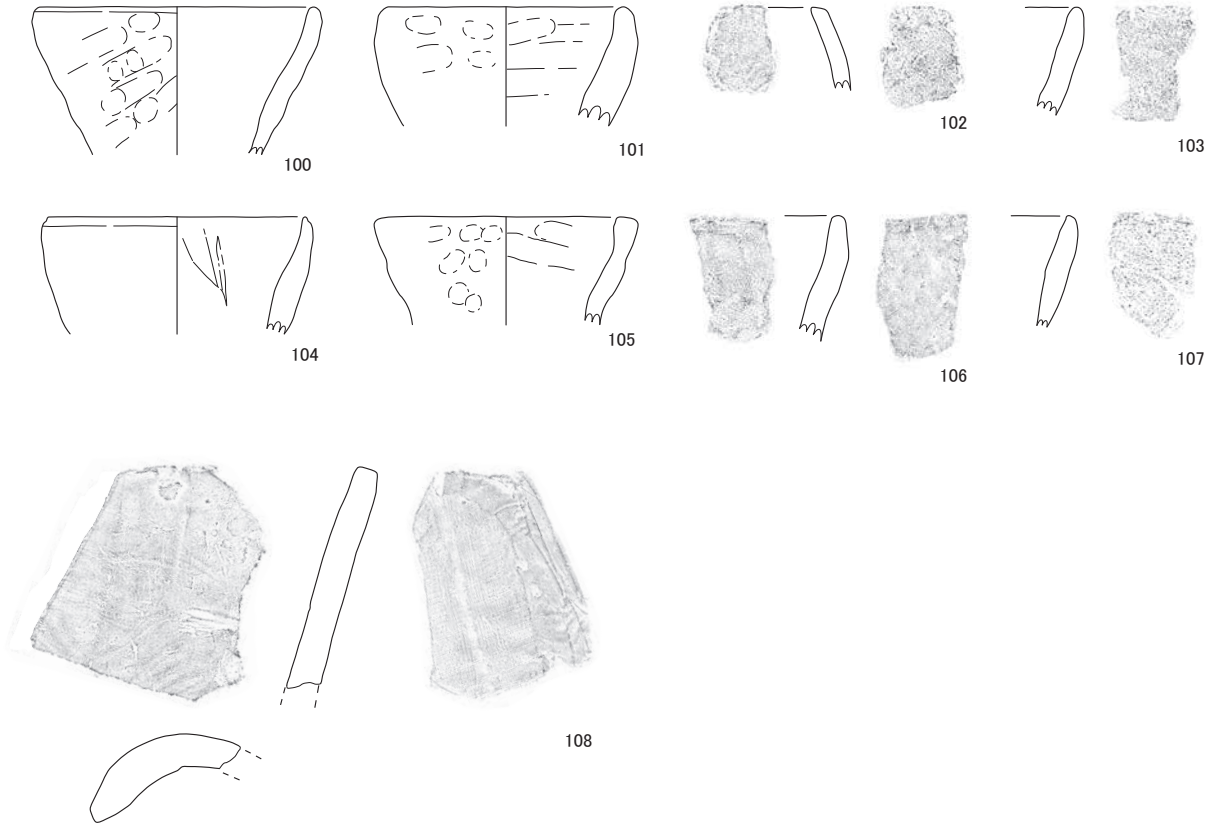

98

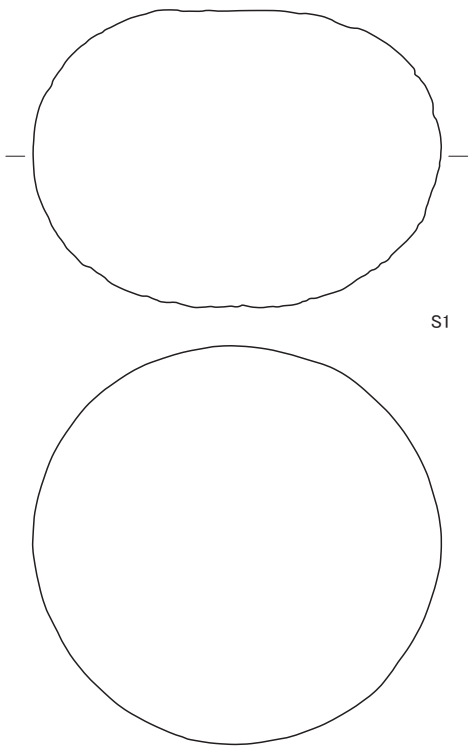

99

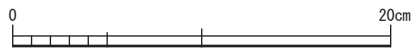
0 20cm

出土土器（SE07・SE08）

SE08

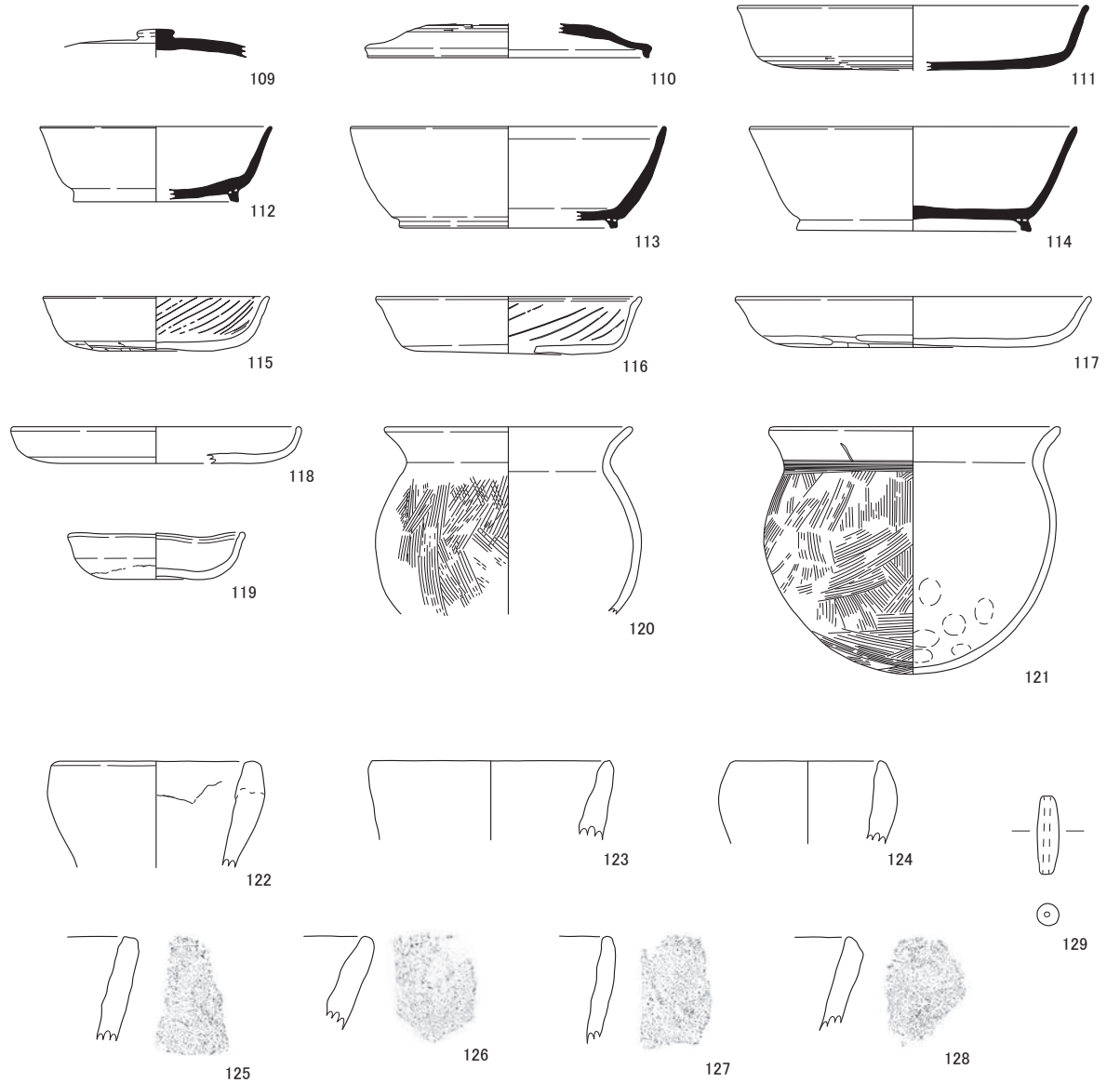






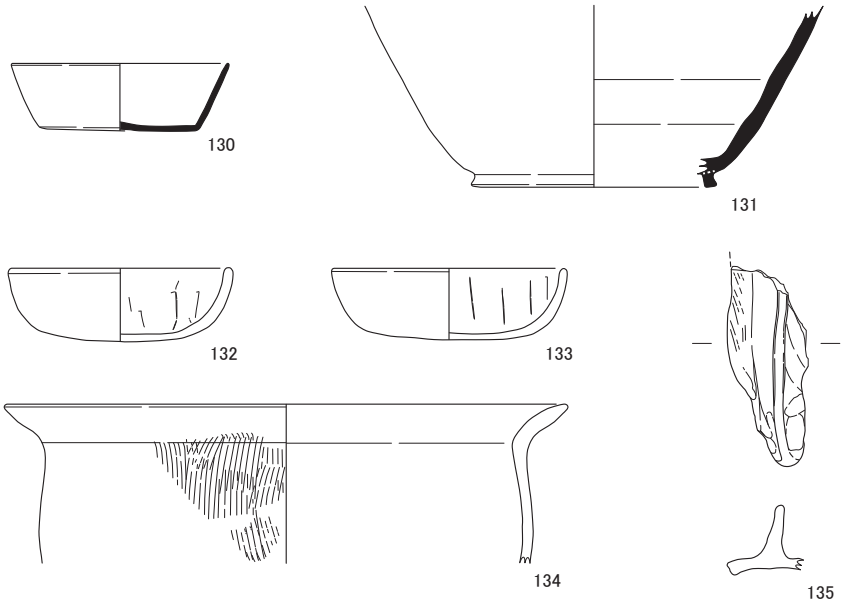
出土土器・石製品（SE08）

SE09

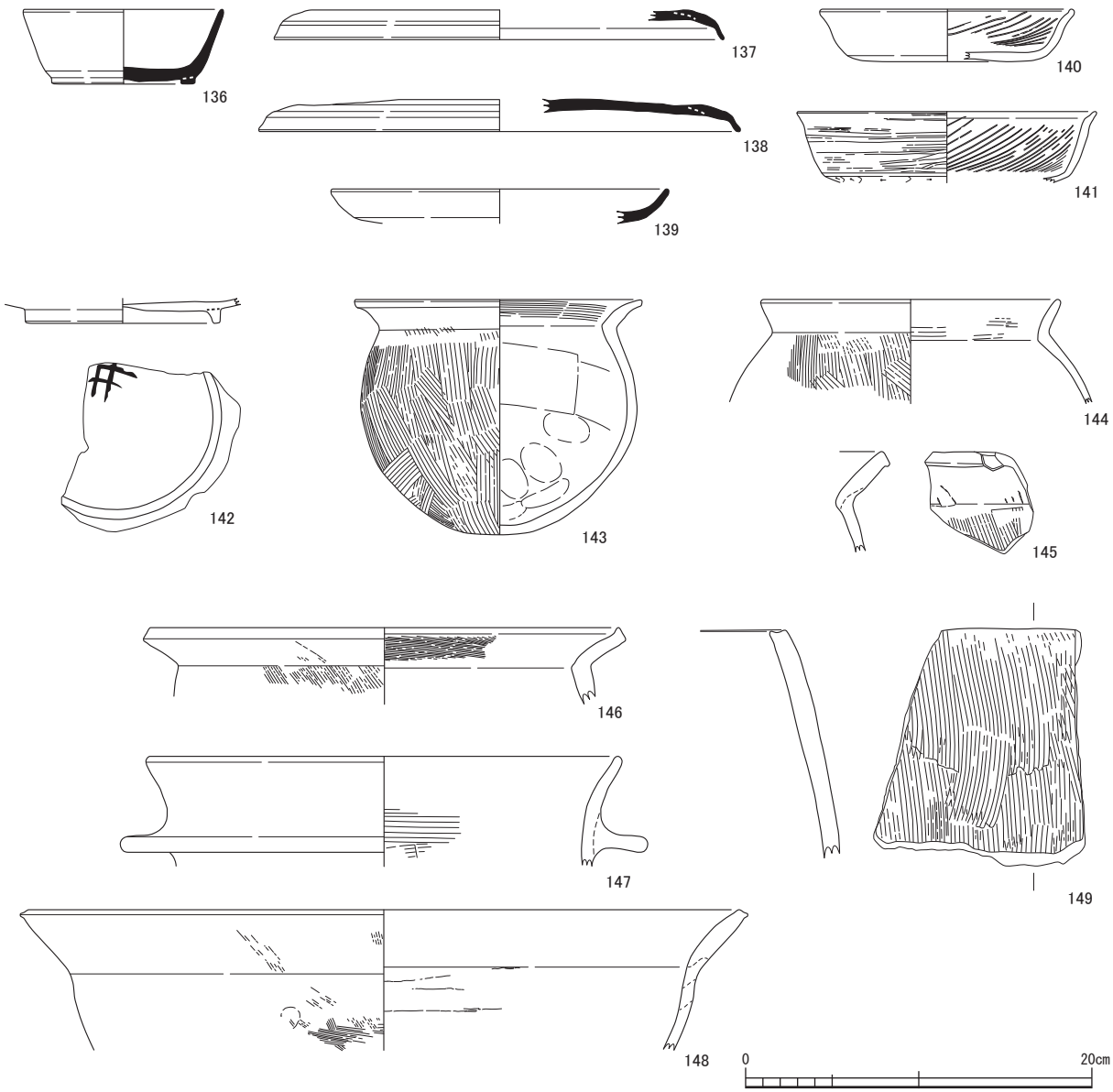


出土土器（SE09）

SE13



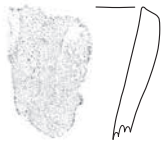
SE14

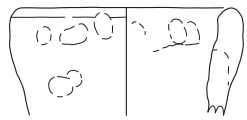


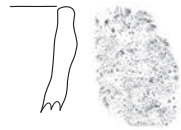
出土土器（SE13・SE14）

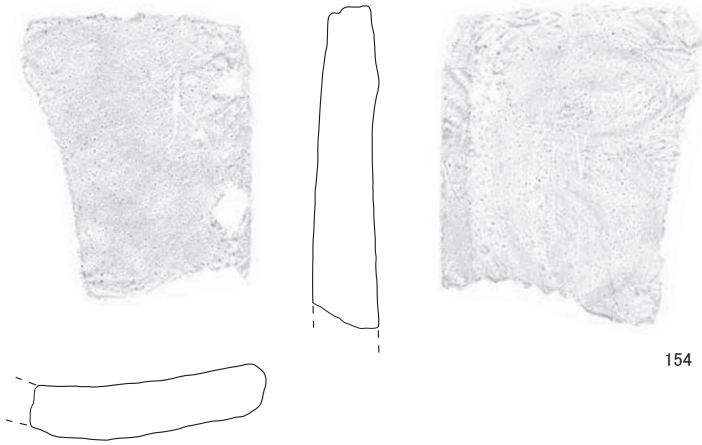
SE14

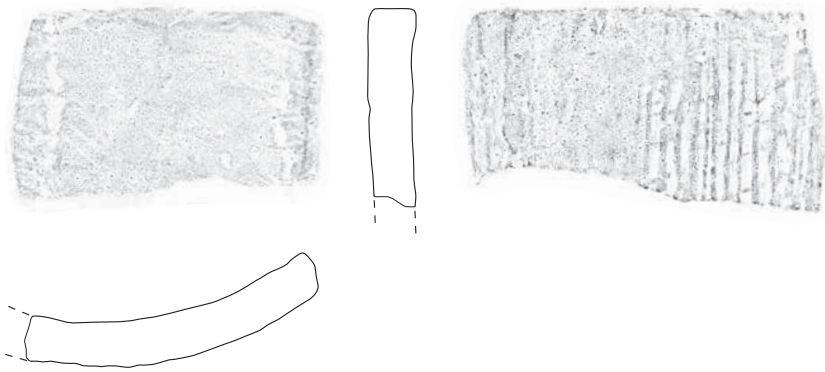
150

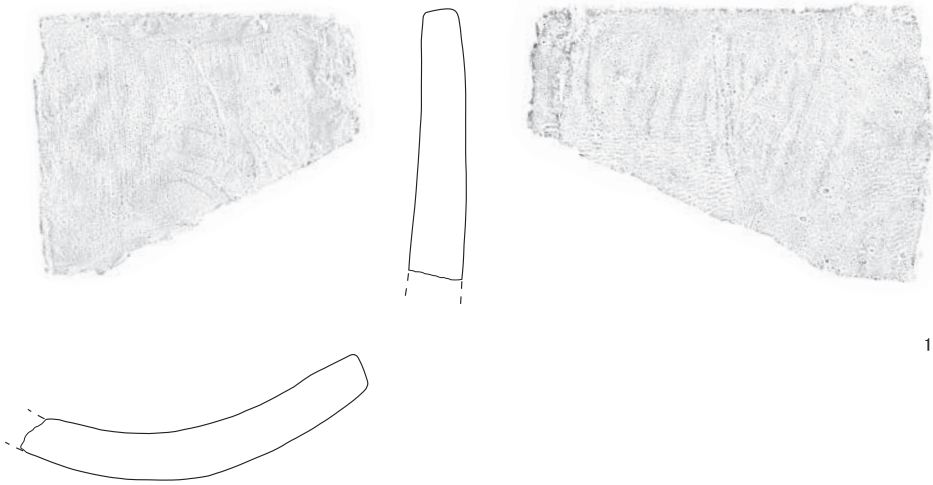

151

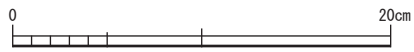

152


153

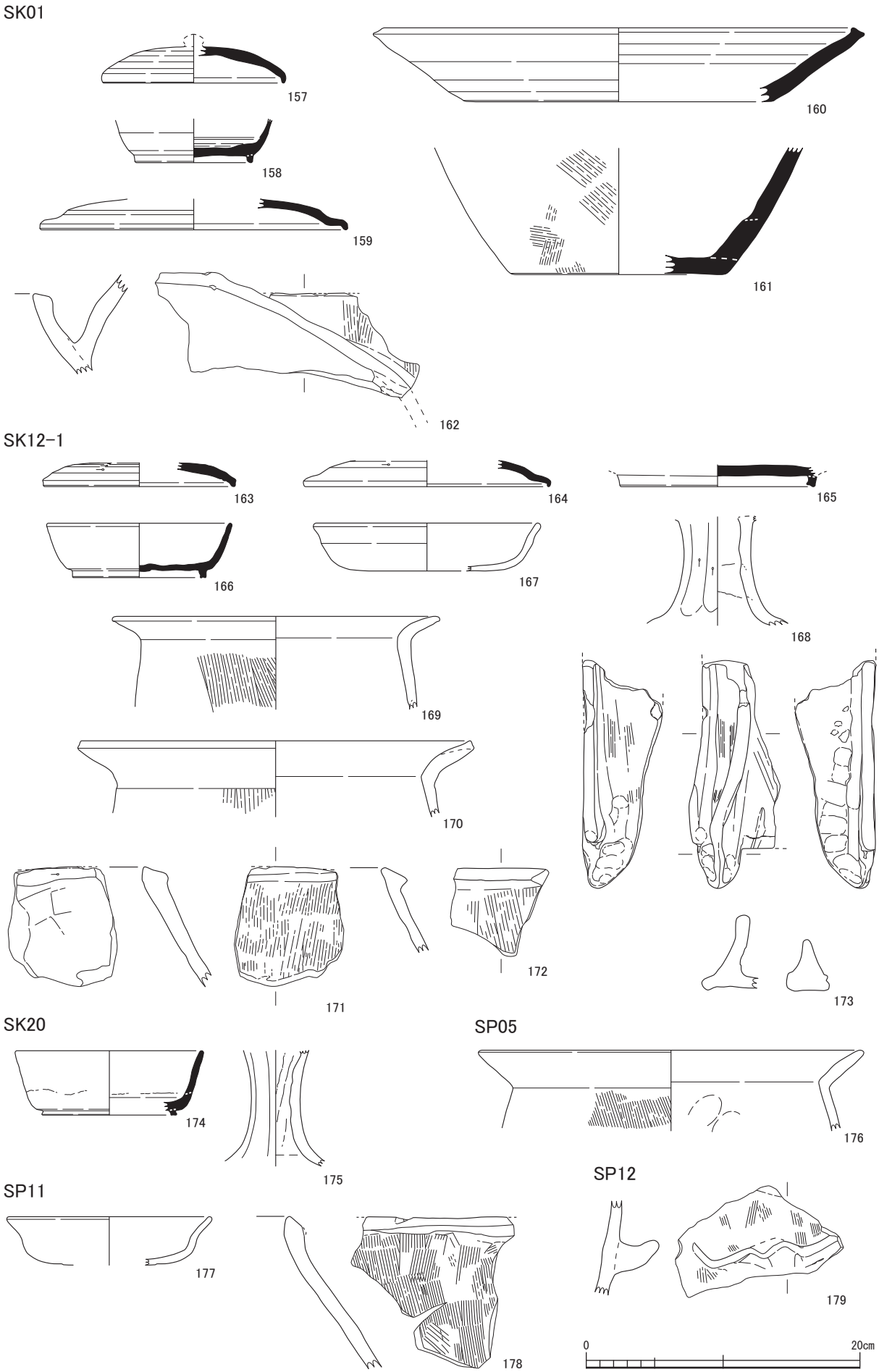

154


155

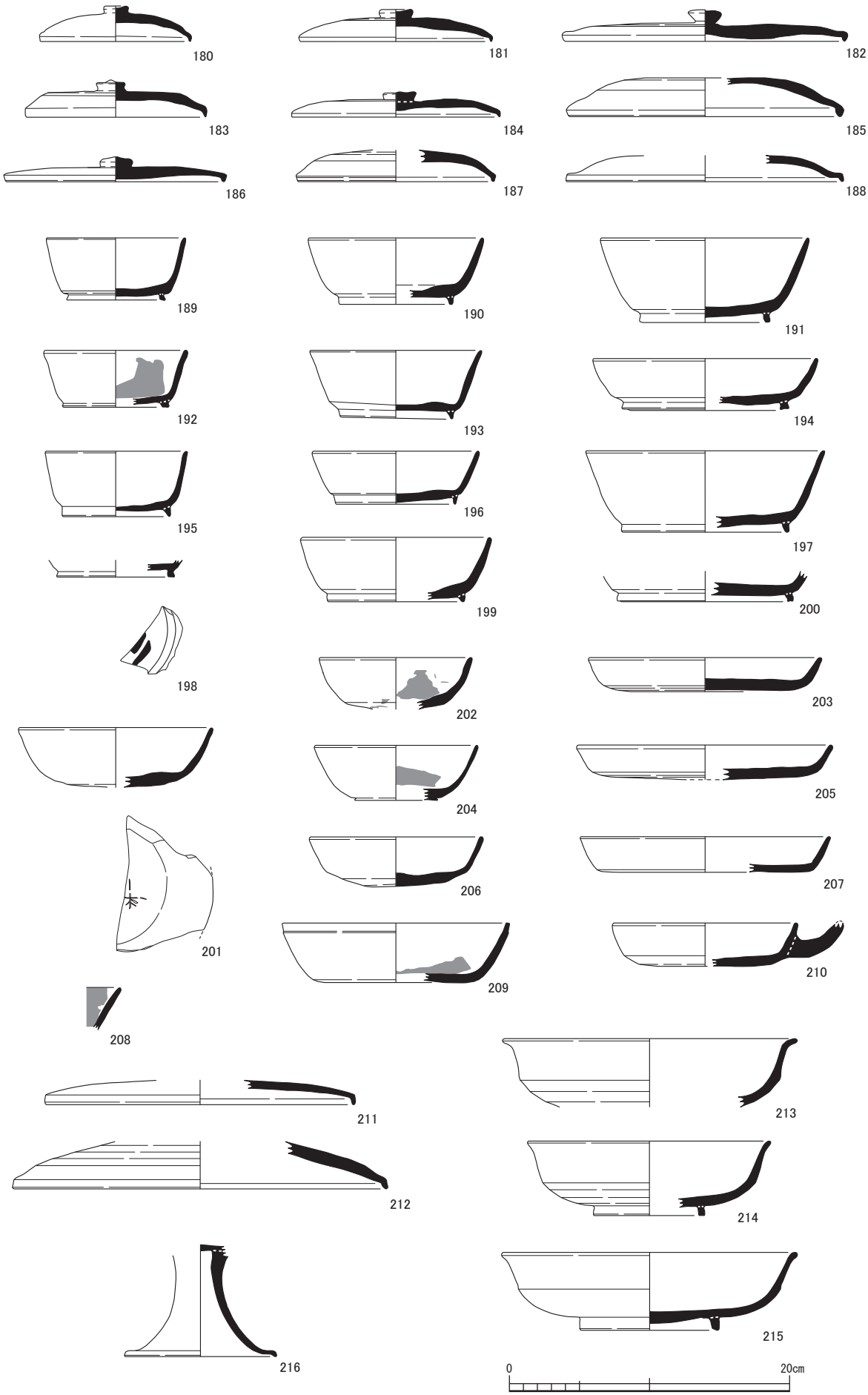

156



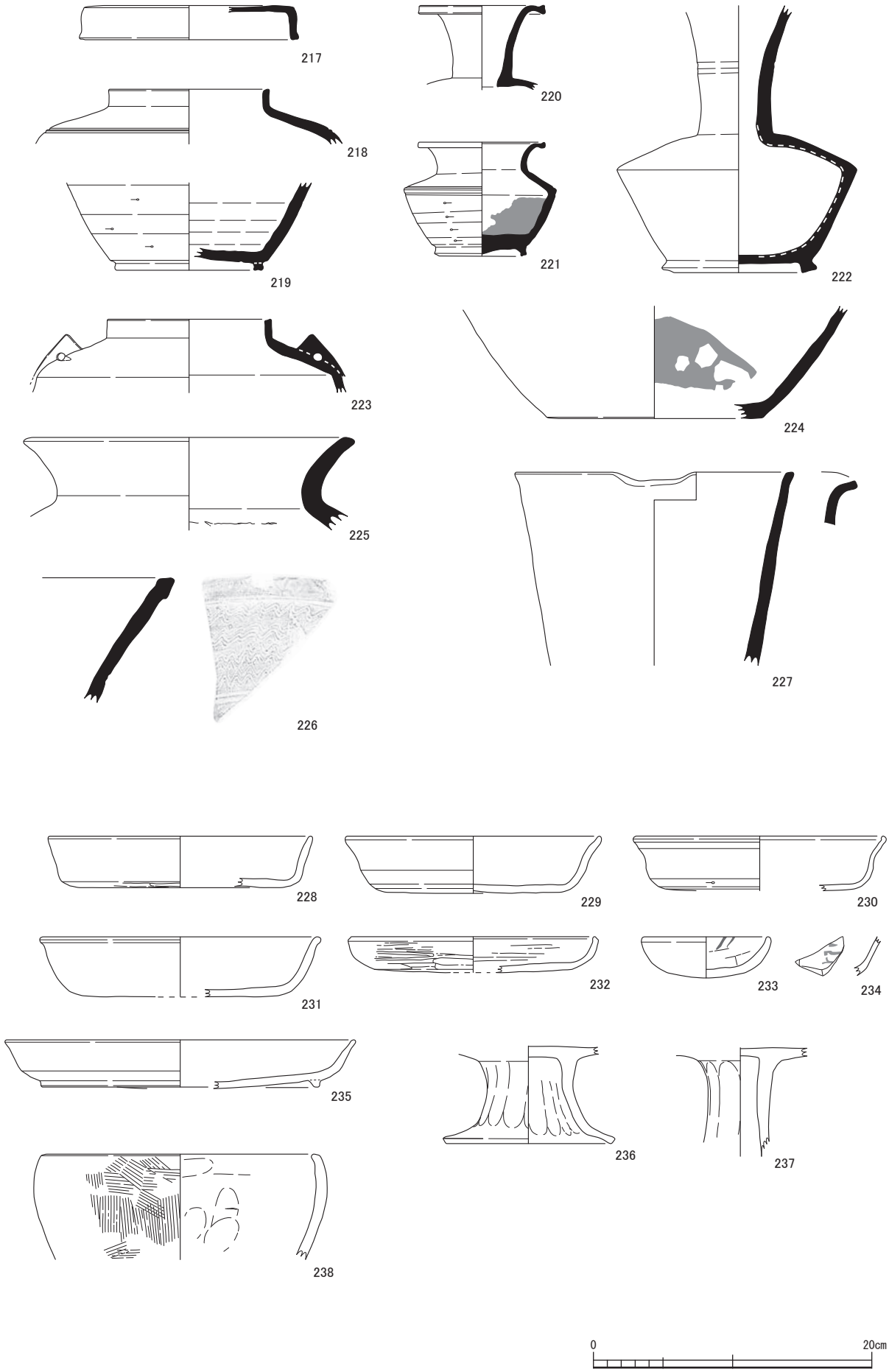
出土土器（SE14）



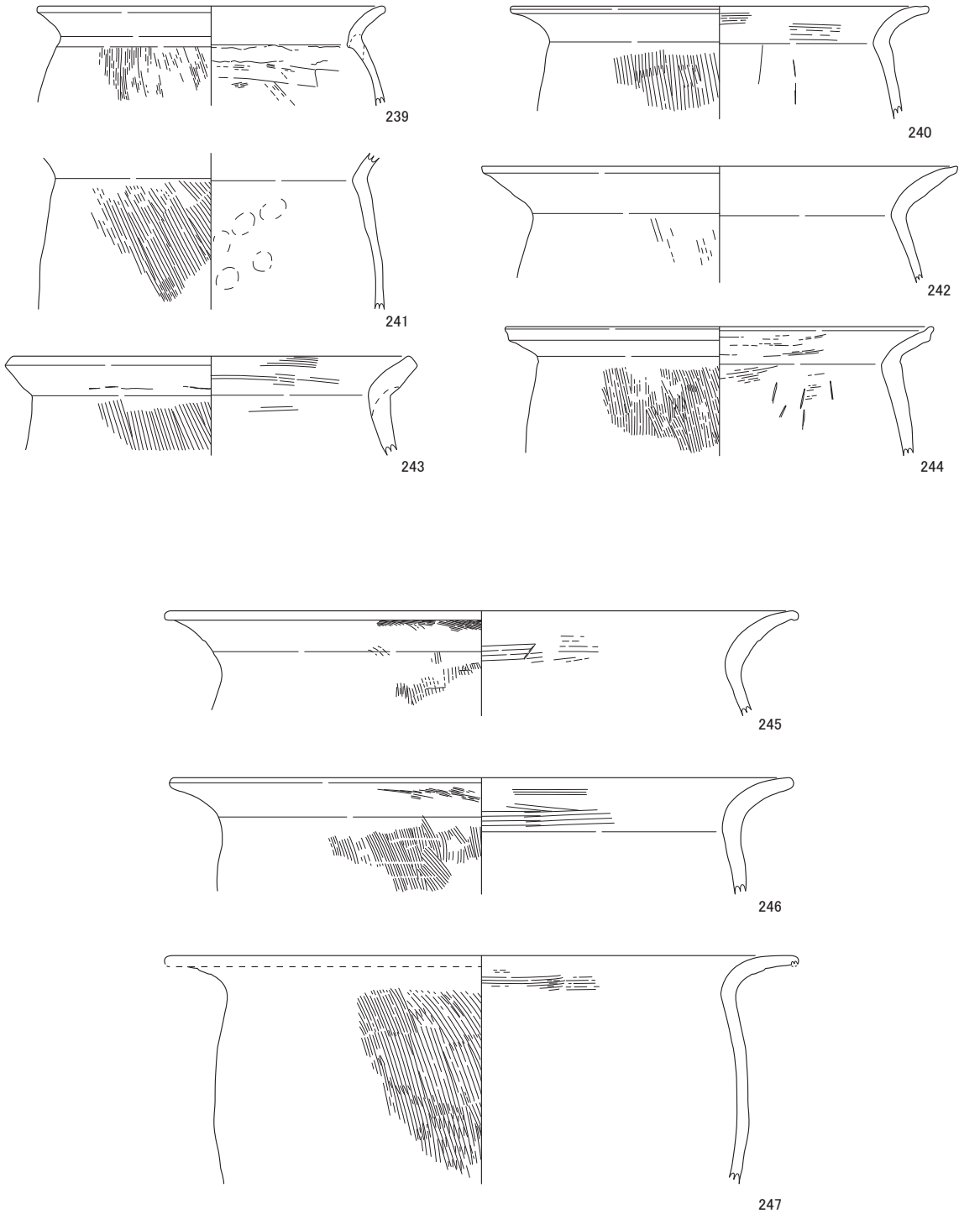
出土土器（SK01・SK12-1・SK20・SP05・SP11・SP12）



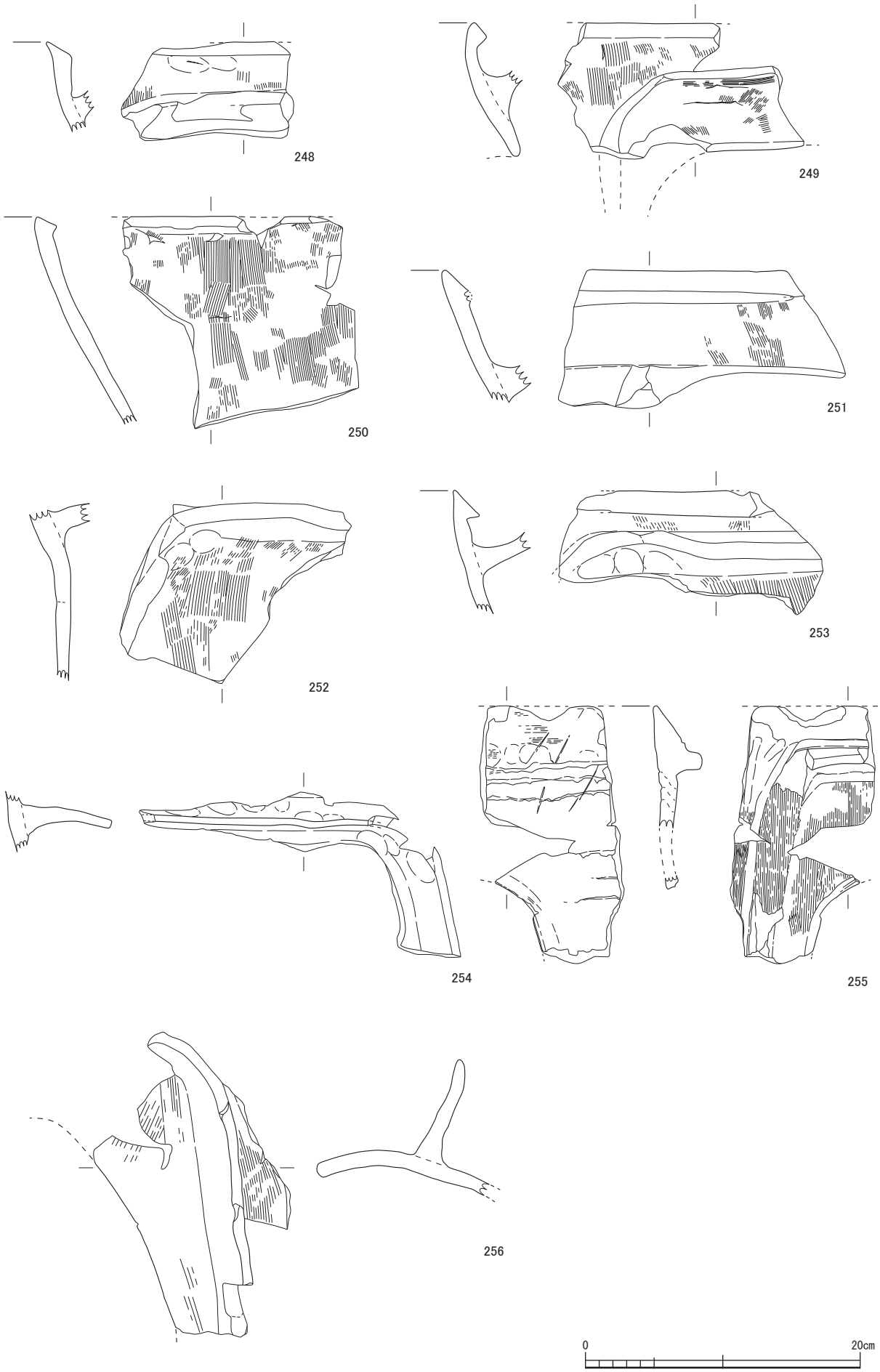
出土土器（粘土採掘坑埋土）



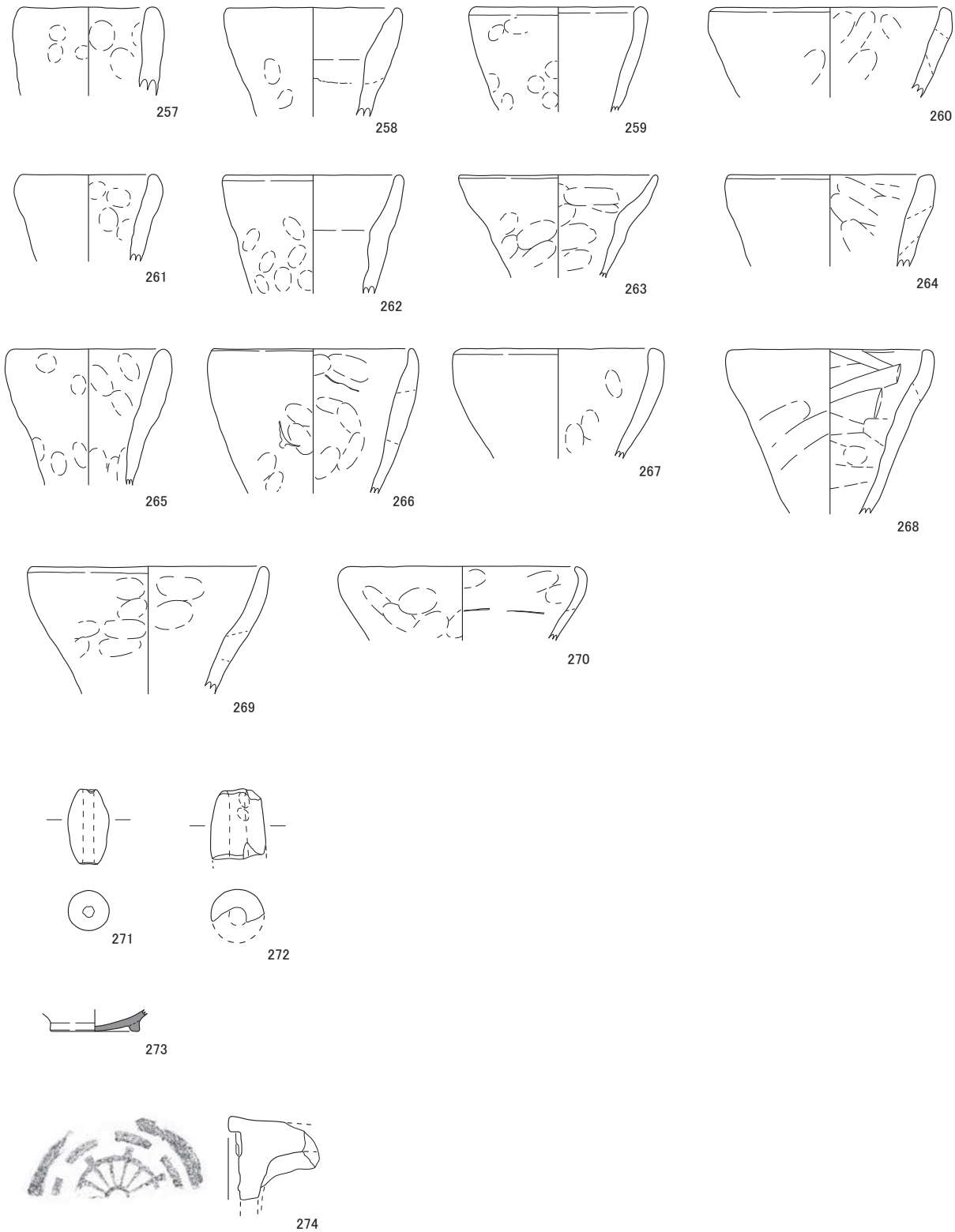
出土土器（粘土採掘坑埋土）



出土土器（粘土採掘坑埋土）

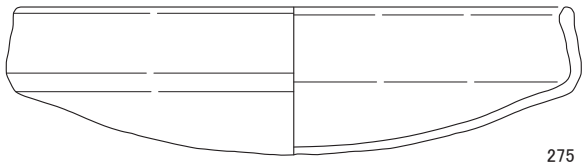


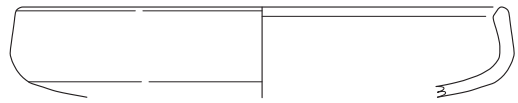
出土土器（粘土採掘坑埋土）

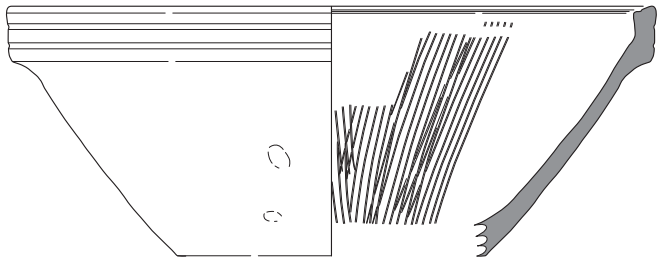


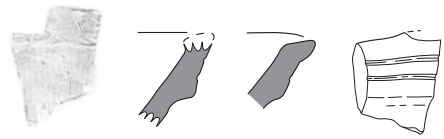
出土土器（粘土採掘坑埋土）

SE04

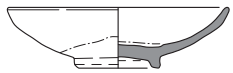

275

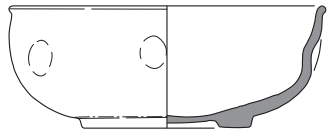

276


277


278

279

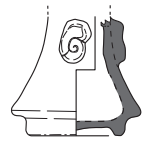

280


281

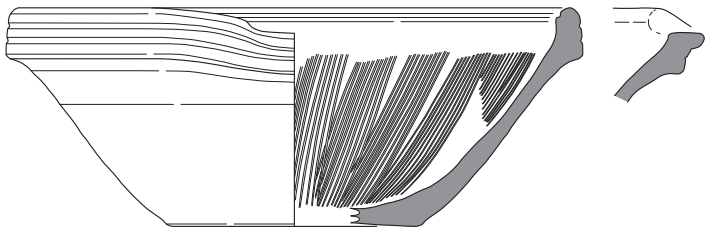
282

283

284

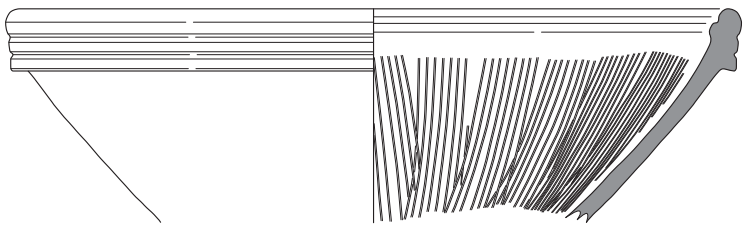

285

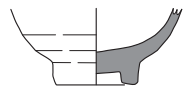
SE06


286

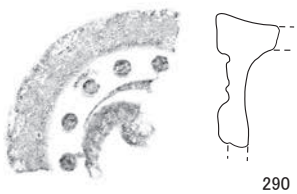
287

SE10

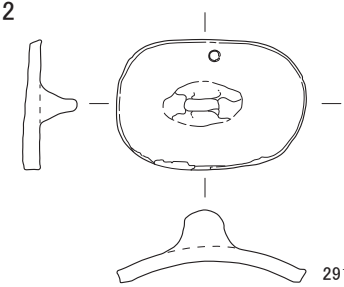

288


289

SE11


290

SE12

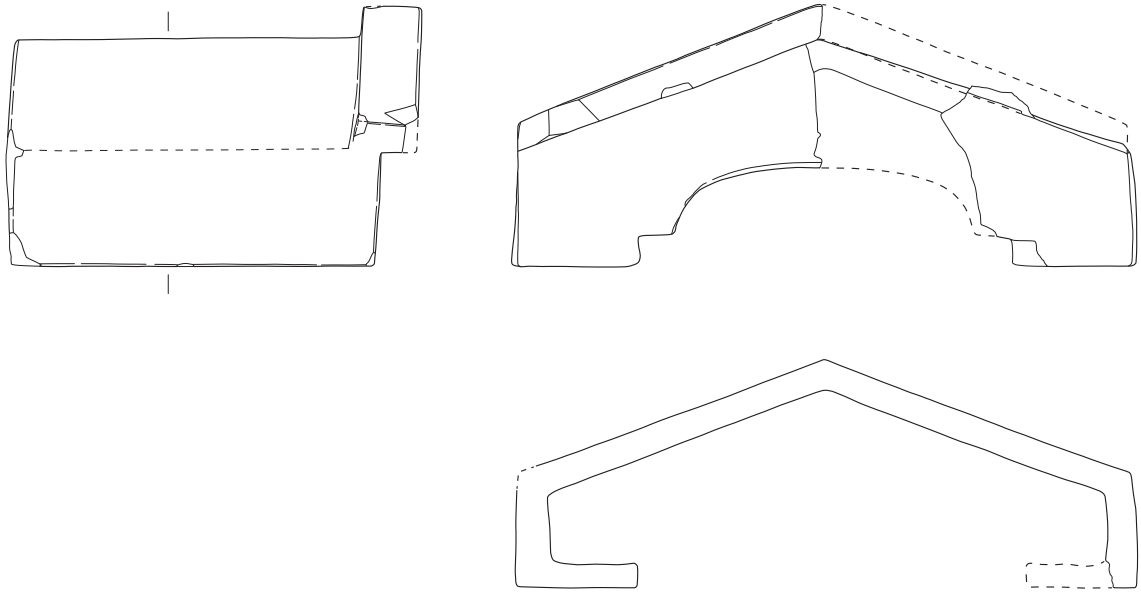

291

0 20cm

出土土器（SE04・SE06・SE10・SE11・SE12）

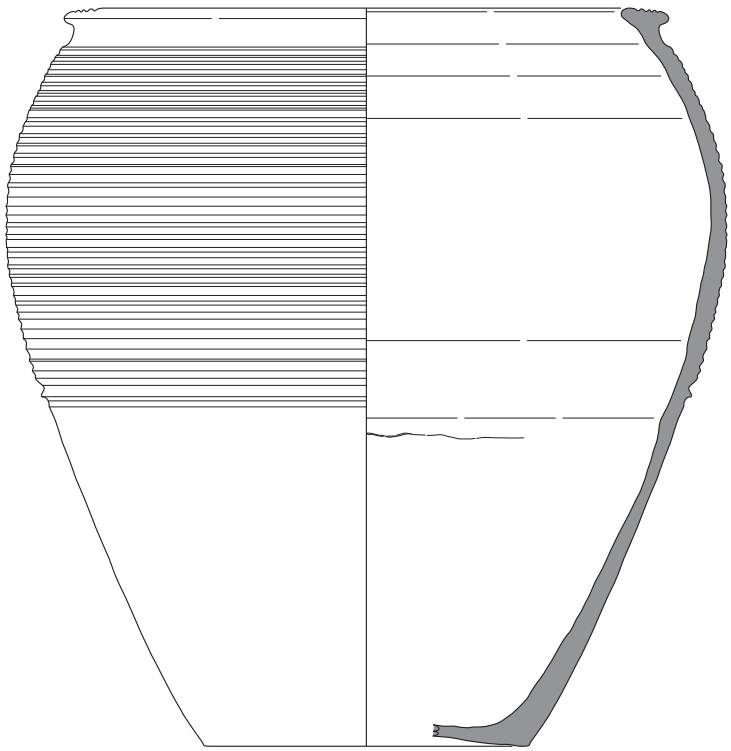
出土土器・土製品（土坑・粘土採掘坑）

SX55

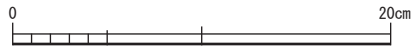


310

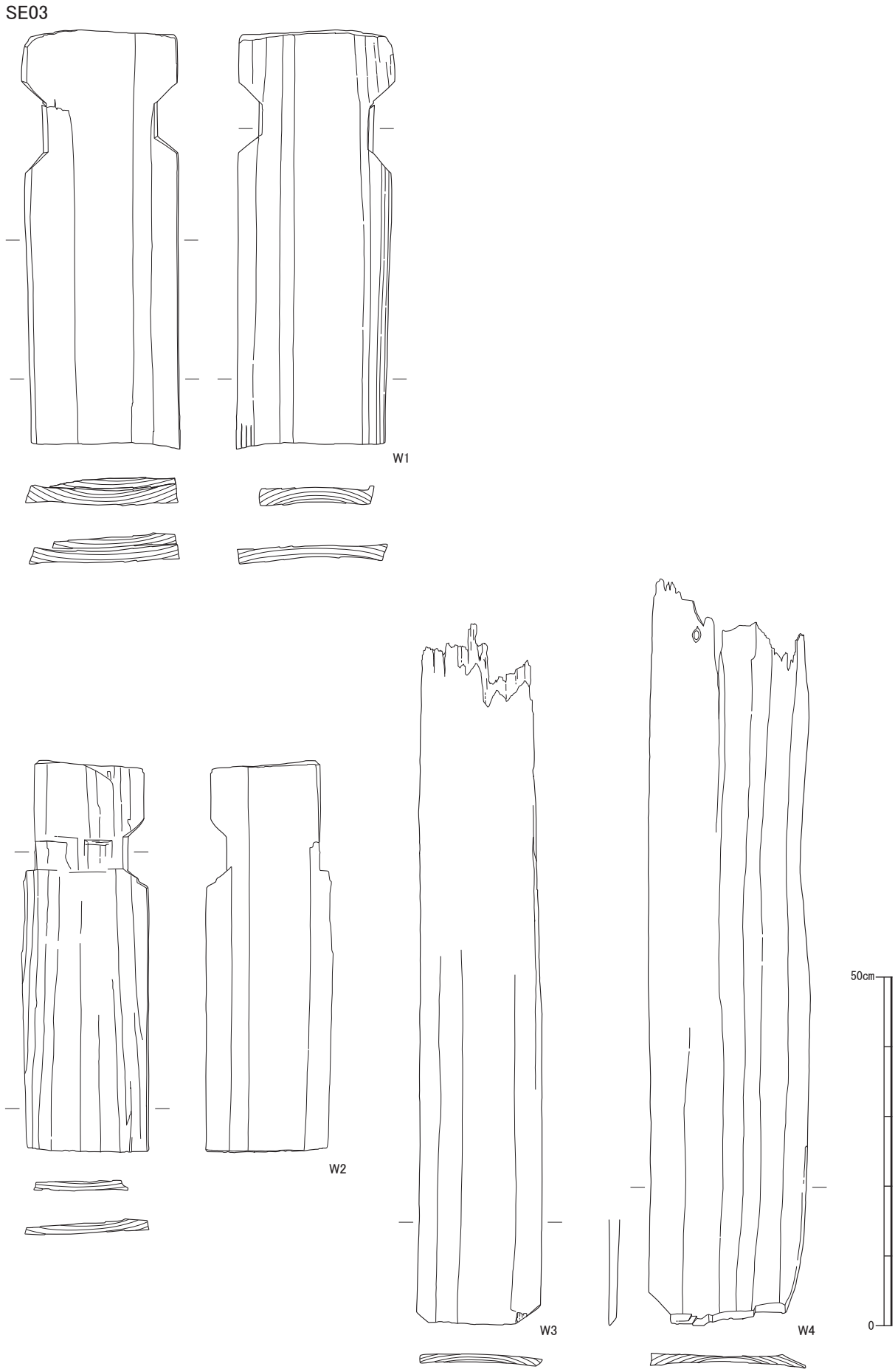
SX65



311

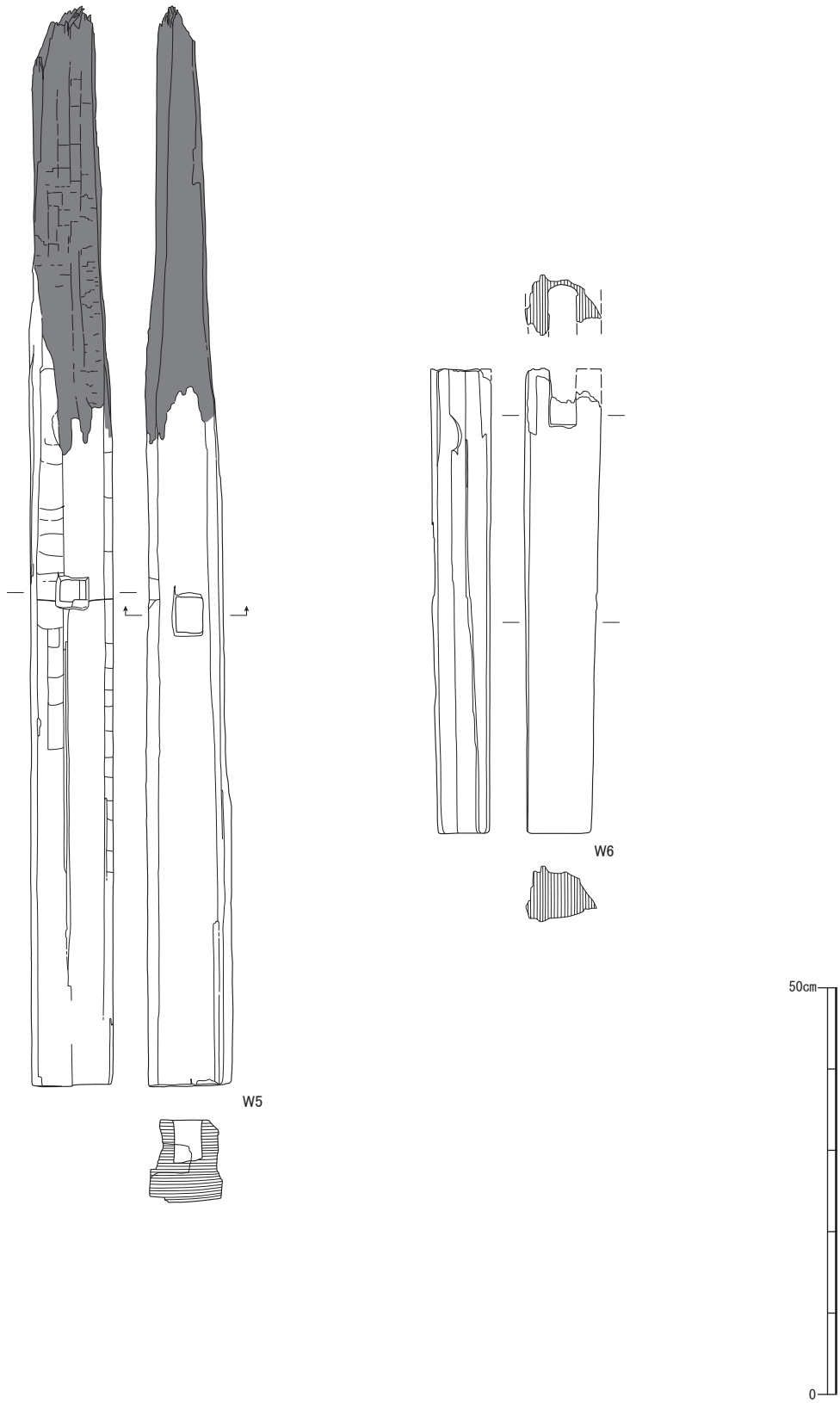


出土土器（SX55・SX65）



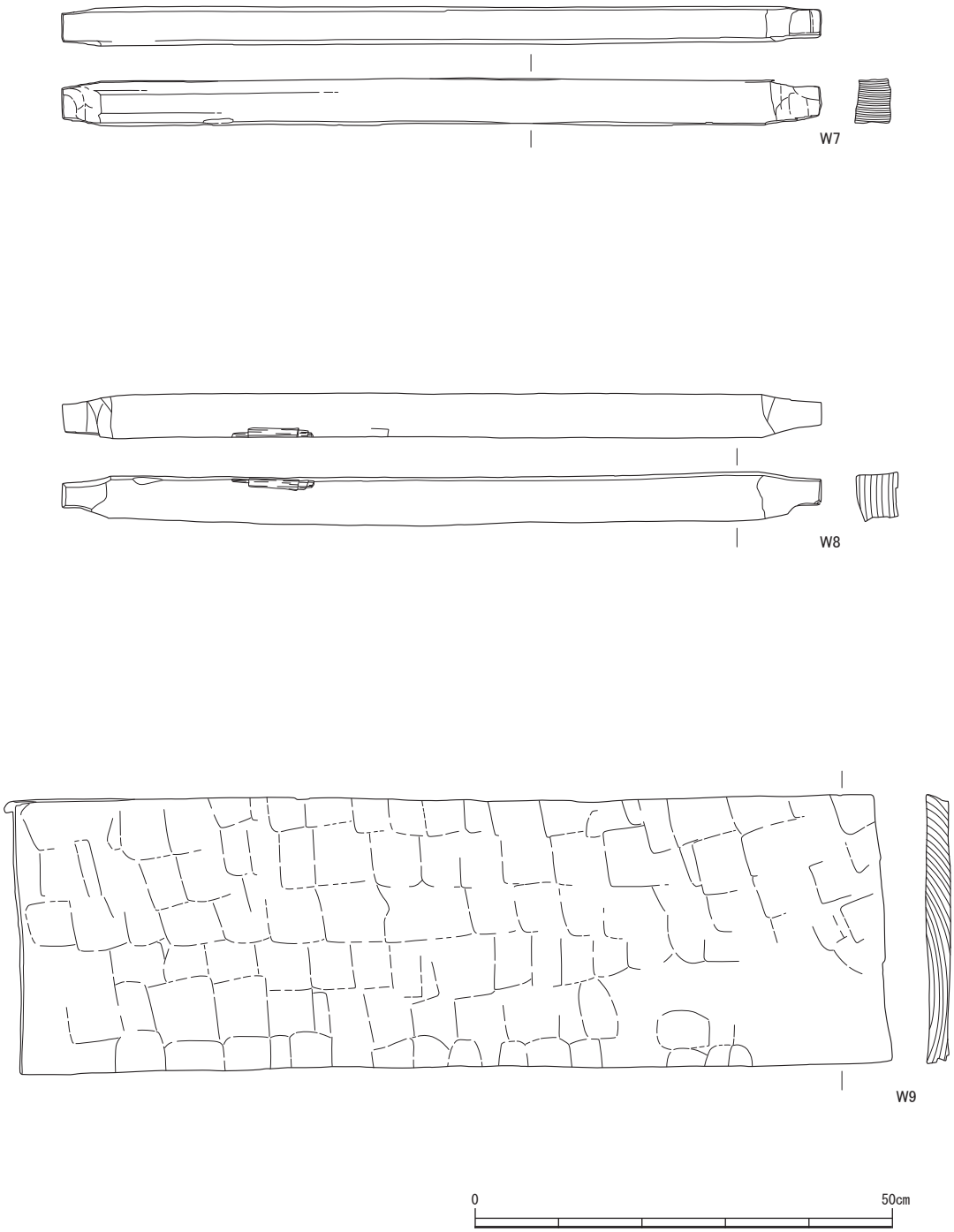
出土木製品（SE03 井戸枠）

SE03



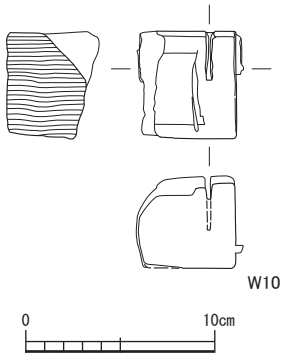
出土木製品（SE03 井戸枠）

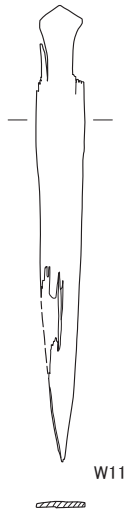
SE03



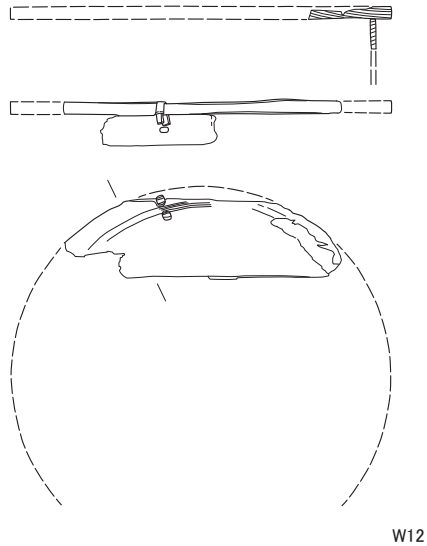
出土木製品（SE03 井戸枠）

SE03

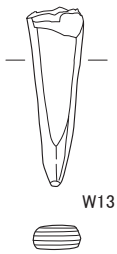


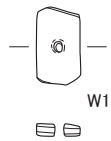


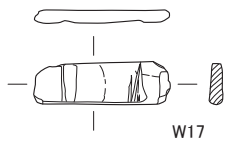
SE05

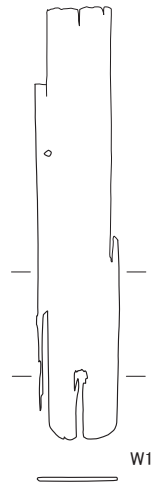


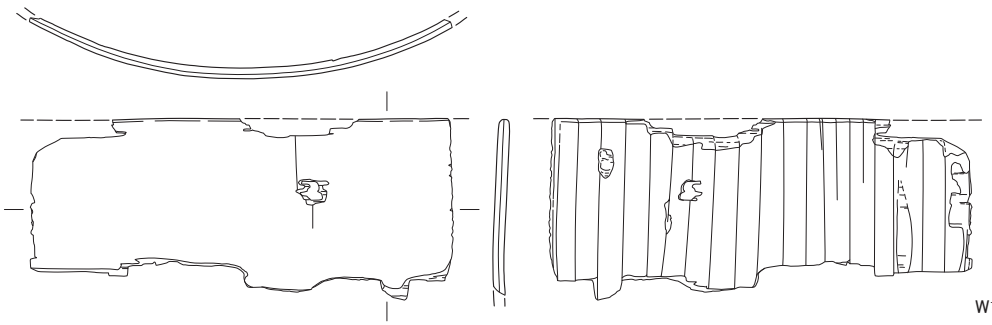
SE09

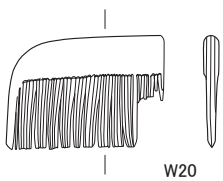


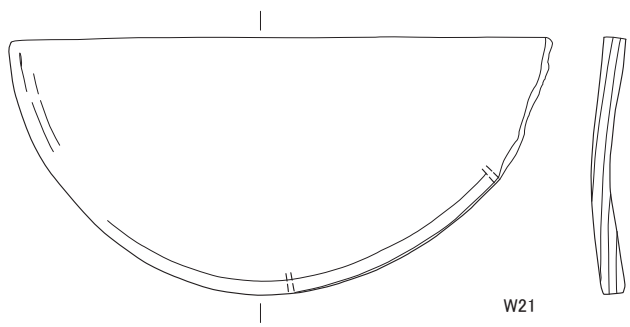








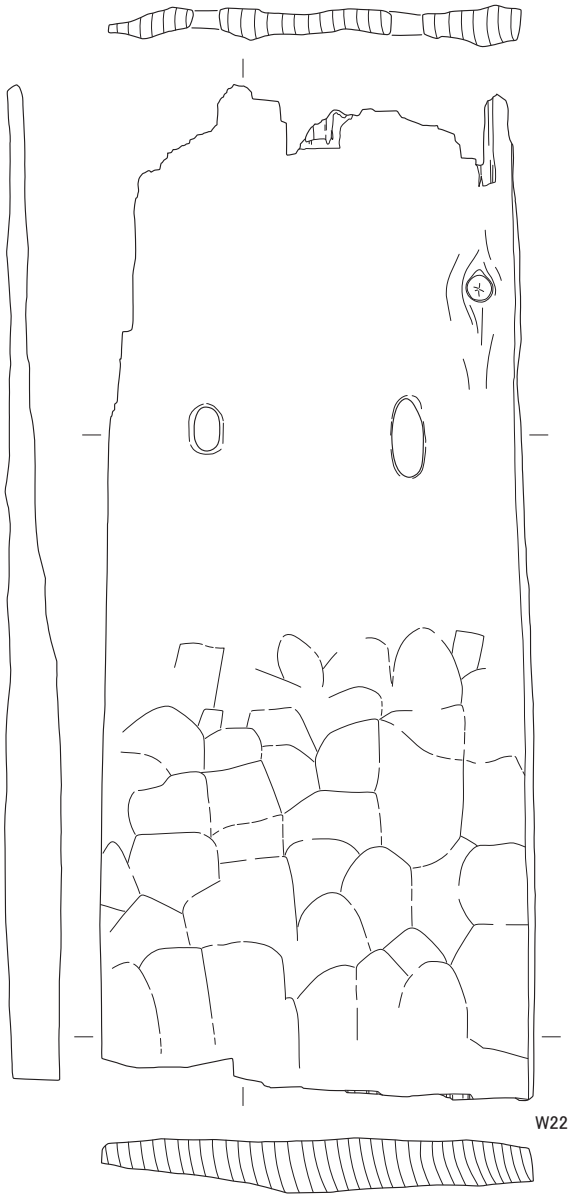


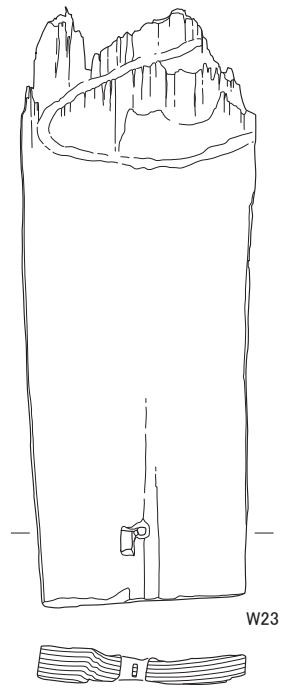


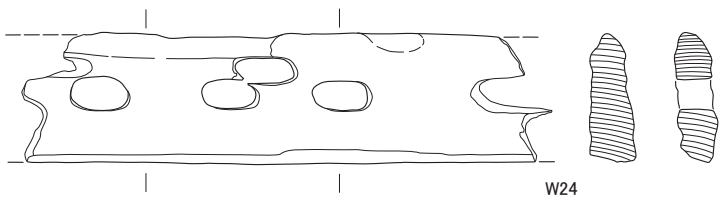
0 10cm

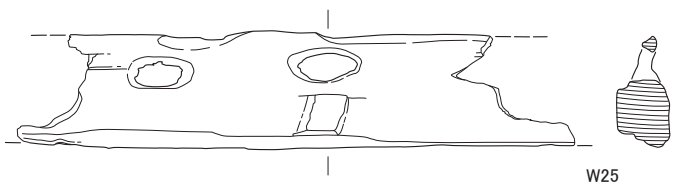
出土木製品（SE03・SE05・SE09）

SE07



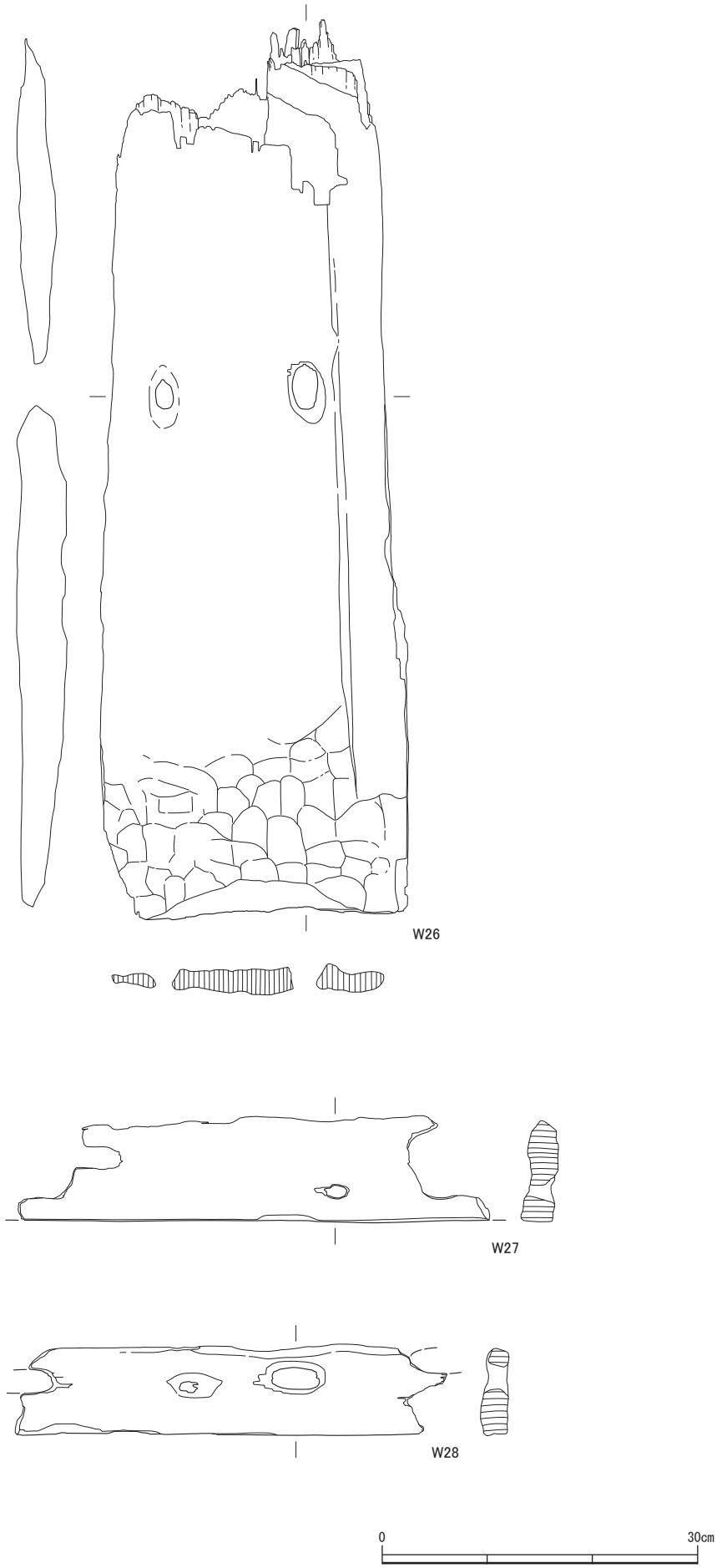






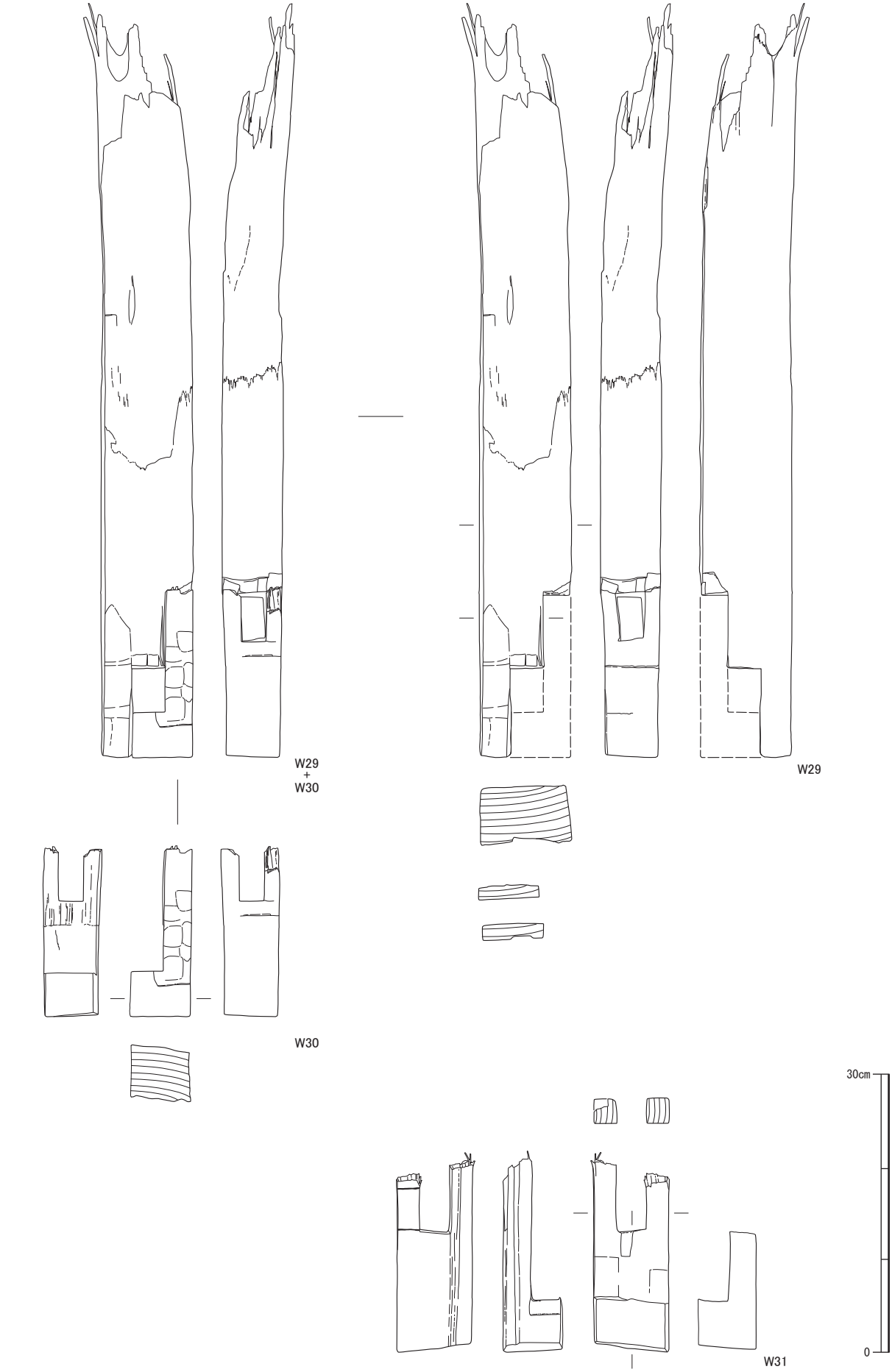
出土木製品（SE07 井戸枠）

SE07



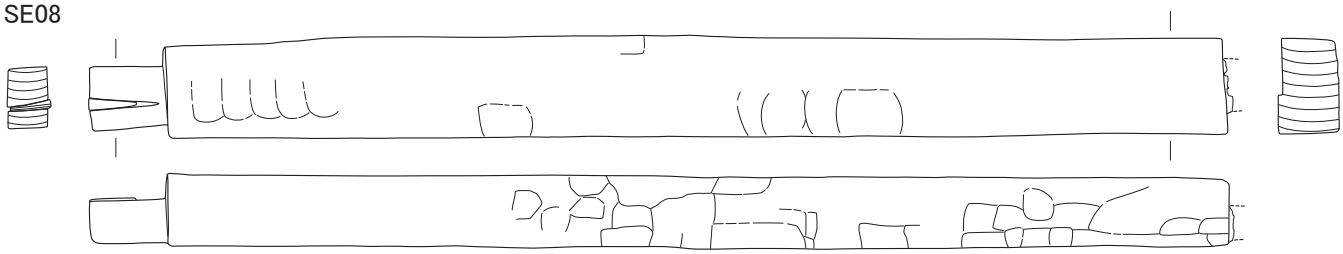
出土木製品（SE07 井戸枠）

SE08

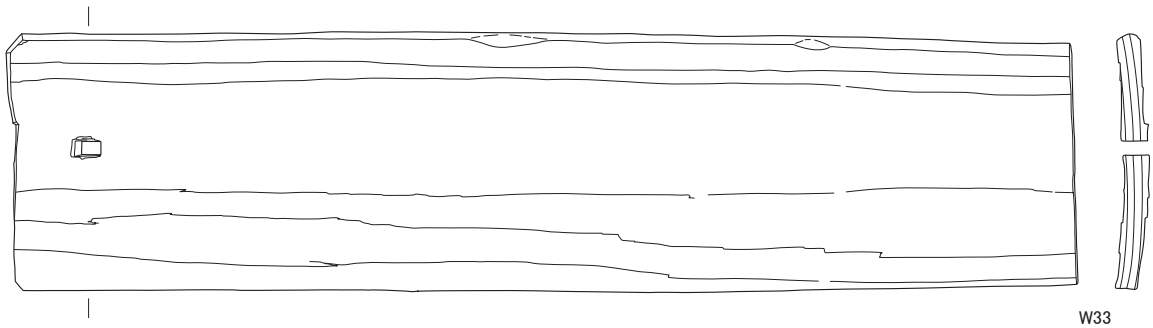


出土木製品（SE08 井戸枠）

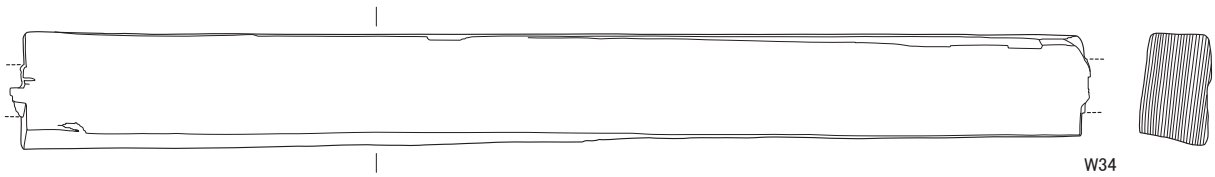
SE08



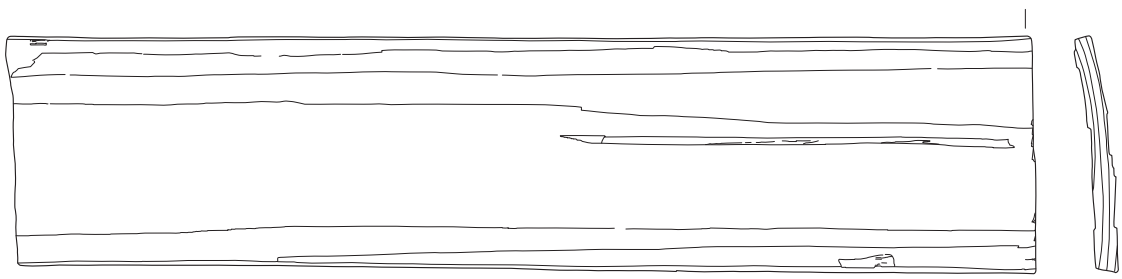
W32



W33



W34

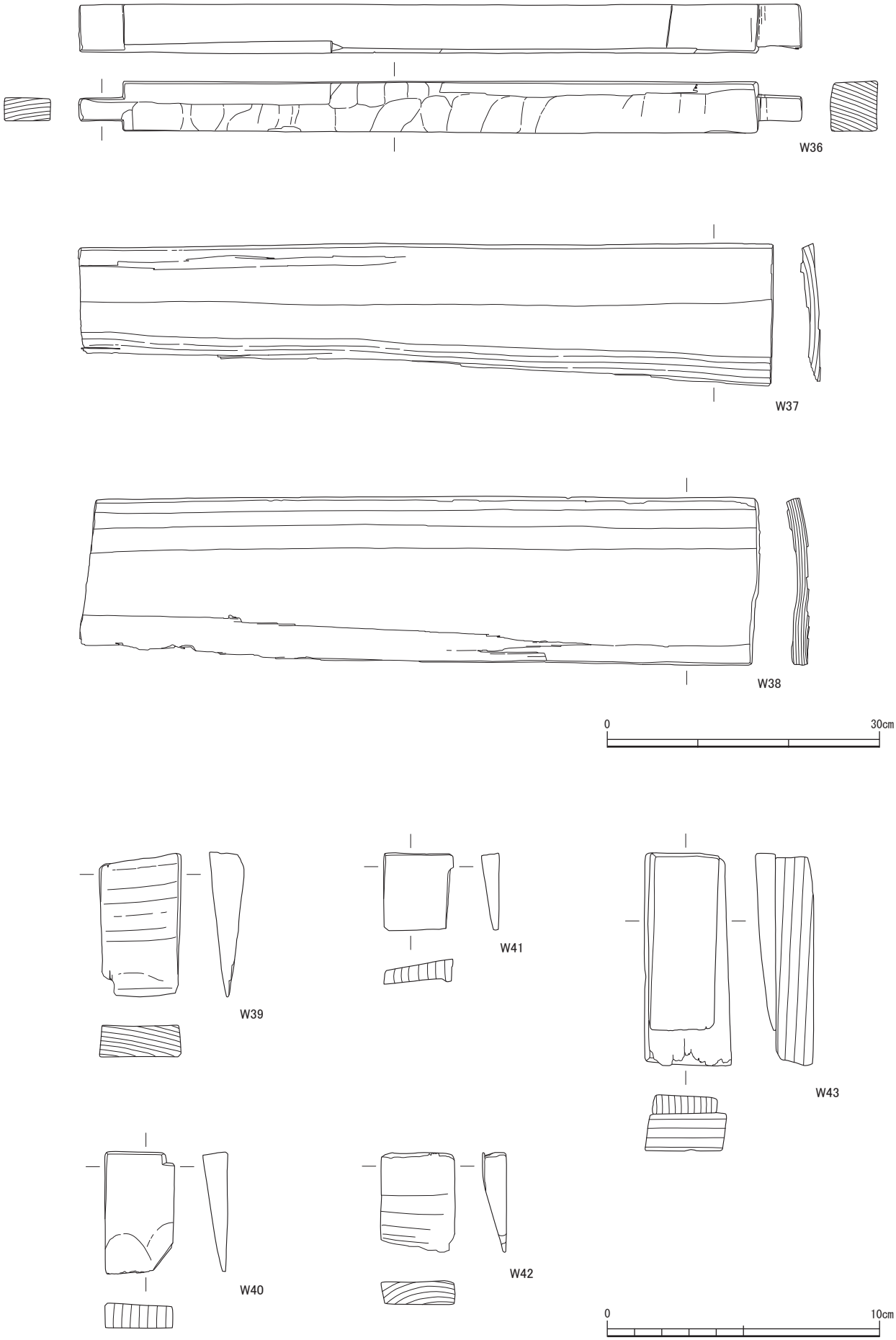


W35

0 30cm

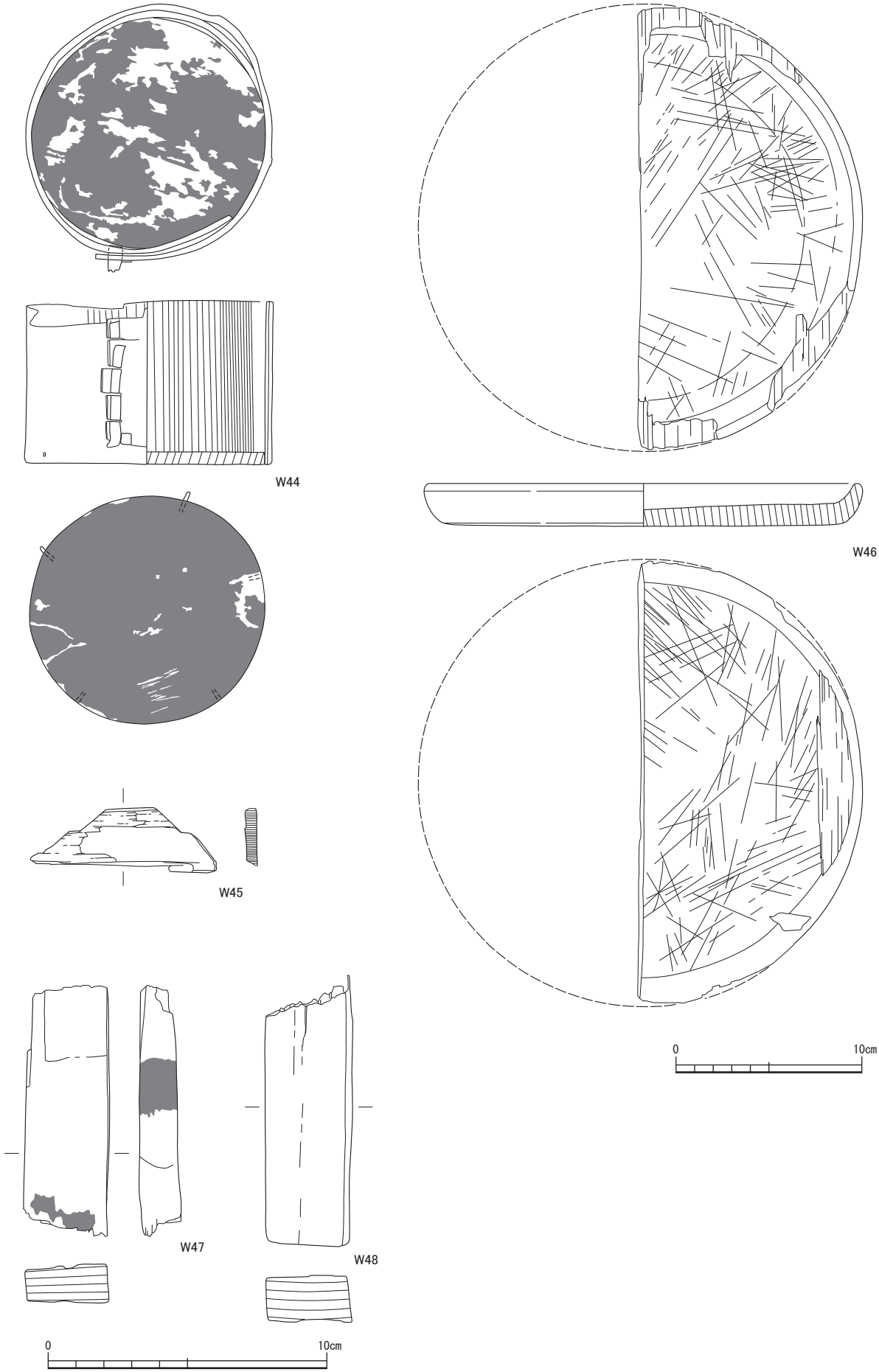
出土木製品（SE08 井戸枠）

SE08



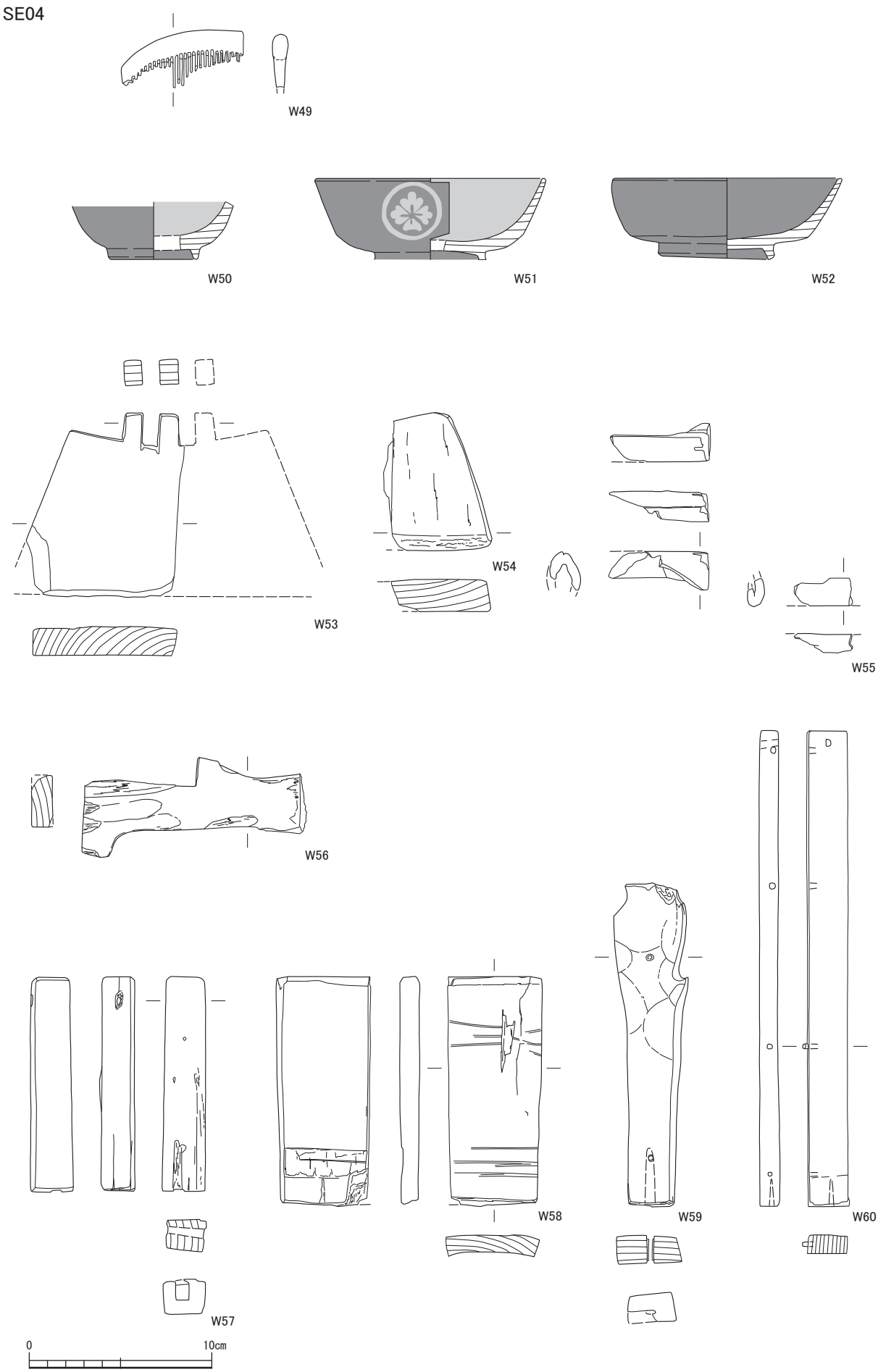
出土木製品（SE08 井戸枠）

SE08

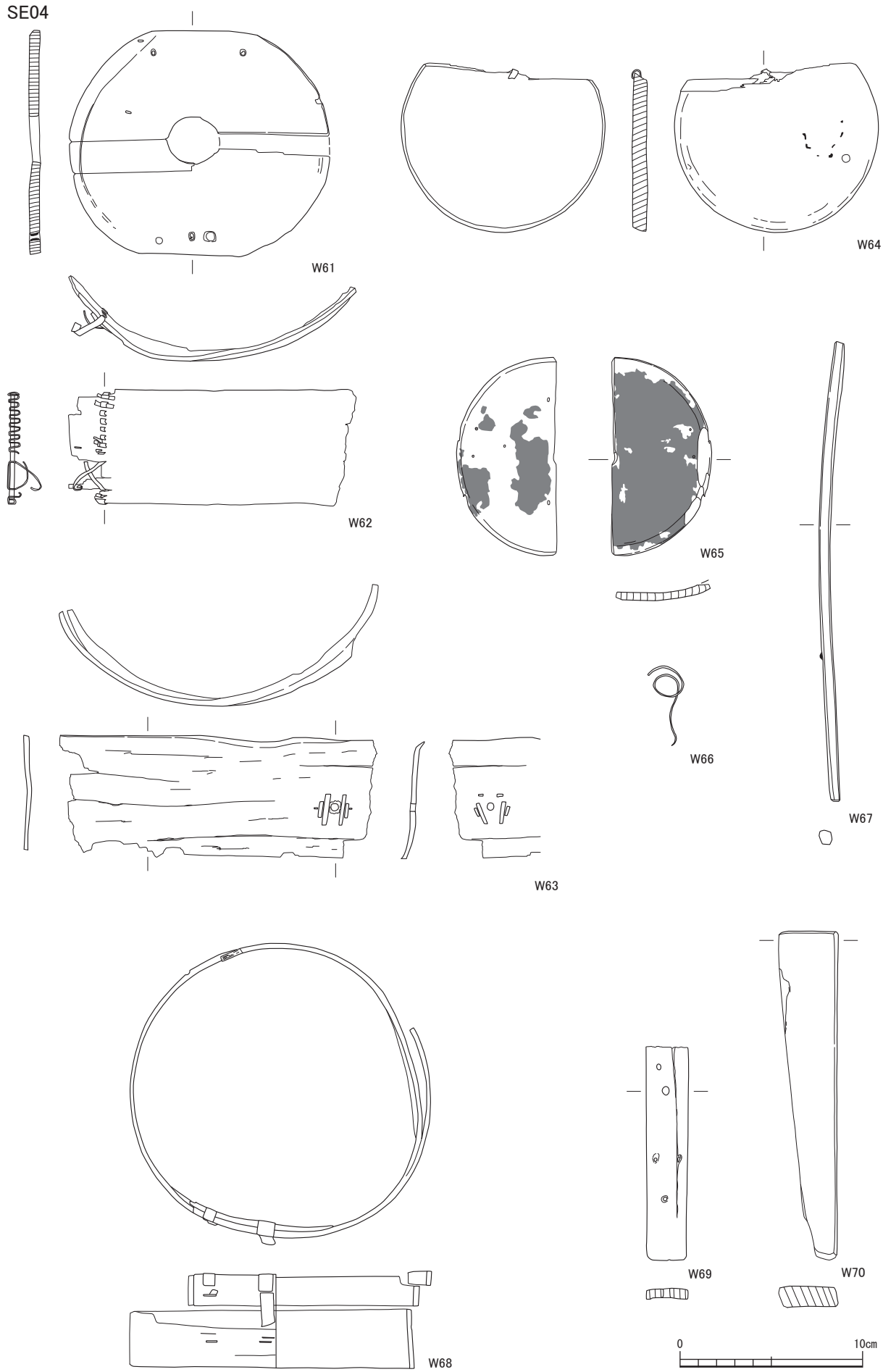


出土木製品（SE08）

SE04

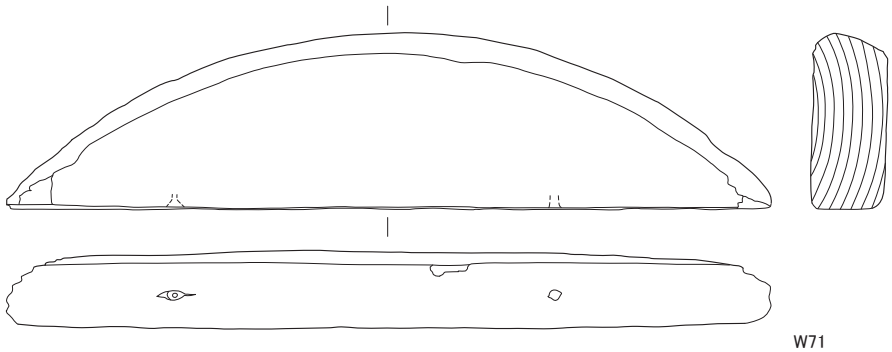


出土木製品（SE04）



出土木製品（SE04）

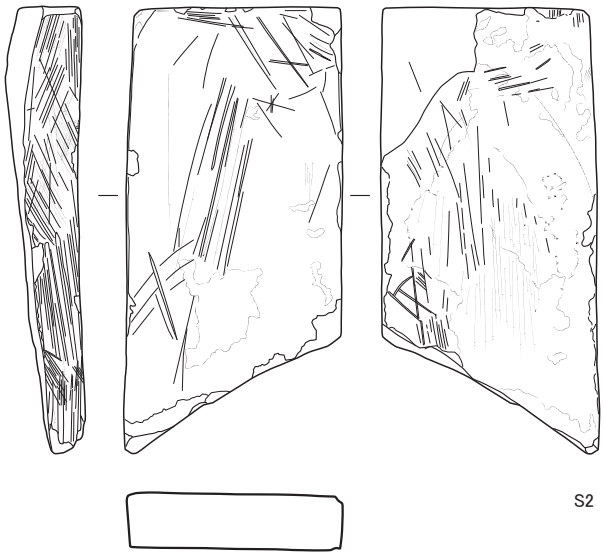
SK12-2



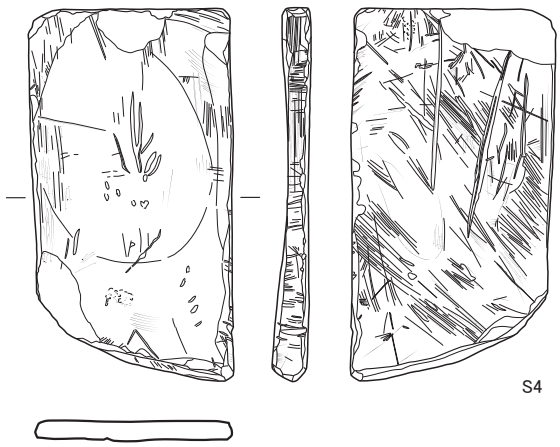
SX65

出土木製品（SK12-2・SX65）

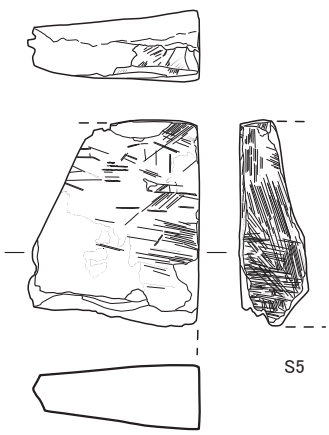
SE04



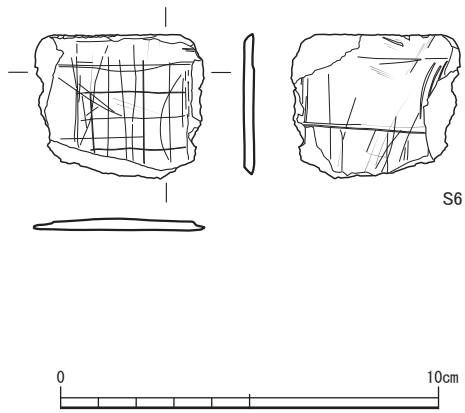
SE06



SX11

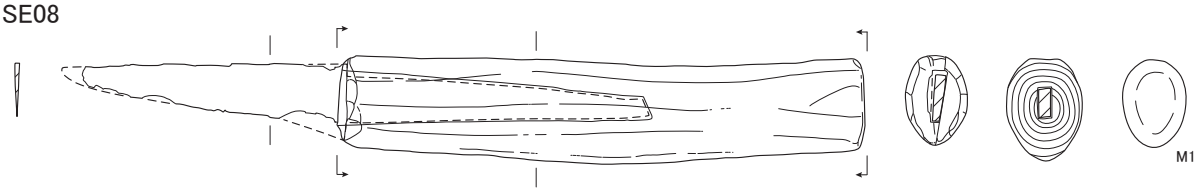


SX59

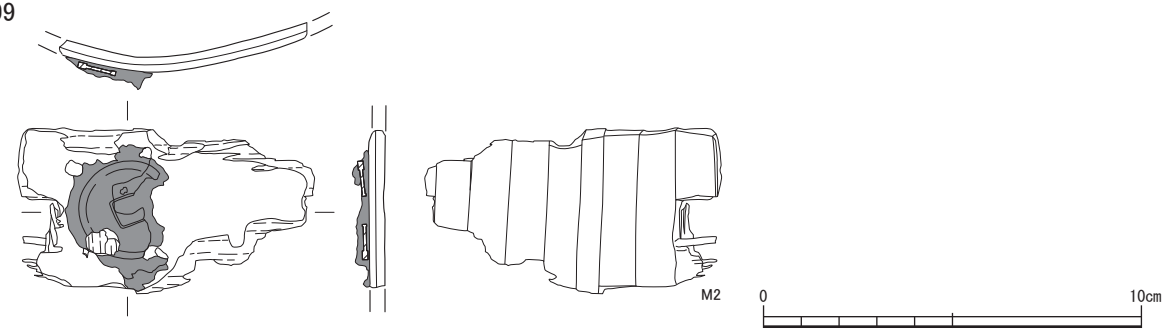


出土石製品

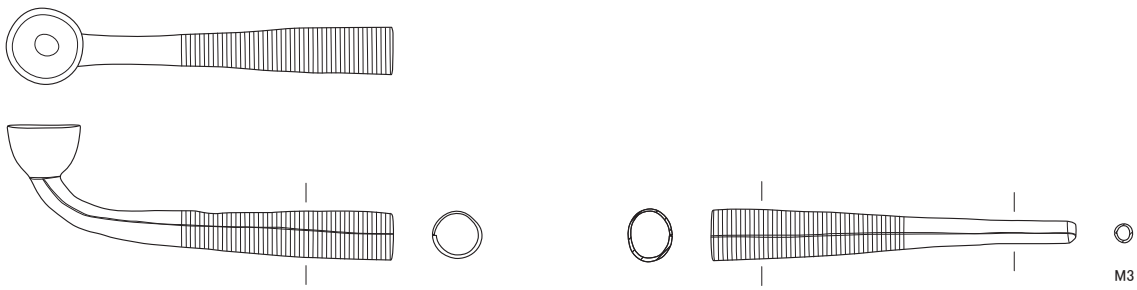
SE08



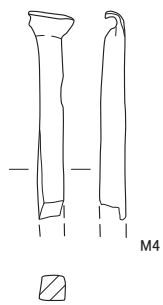
SE09



SE04

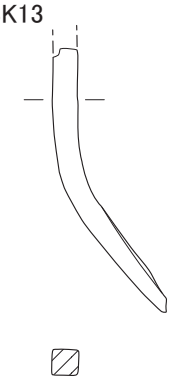


SE06



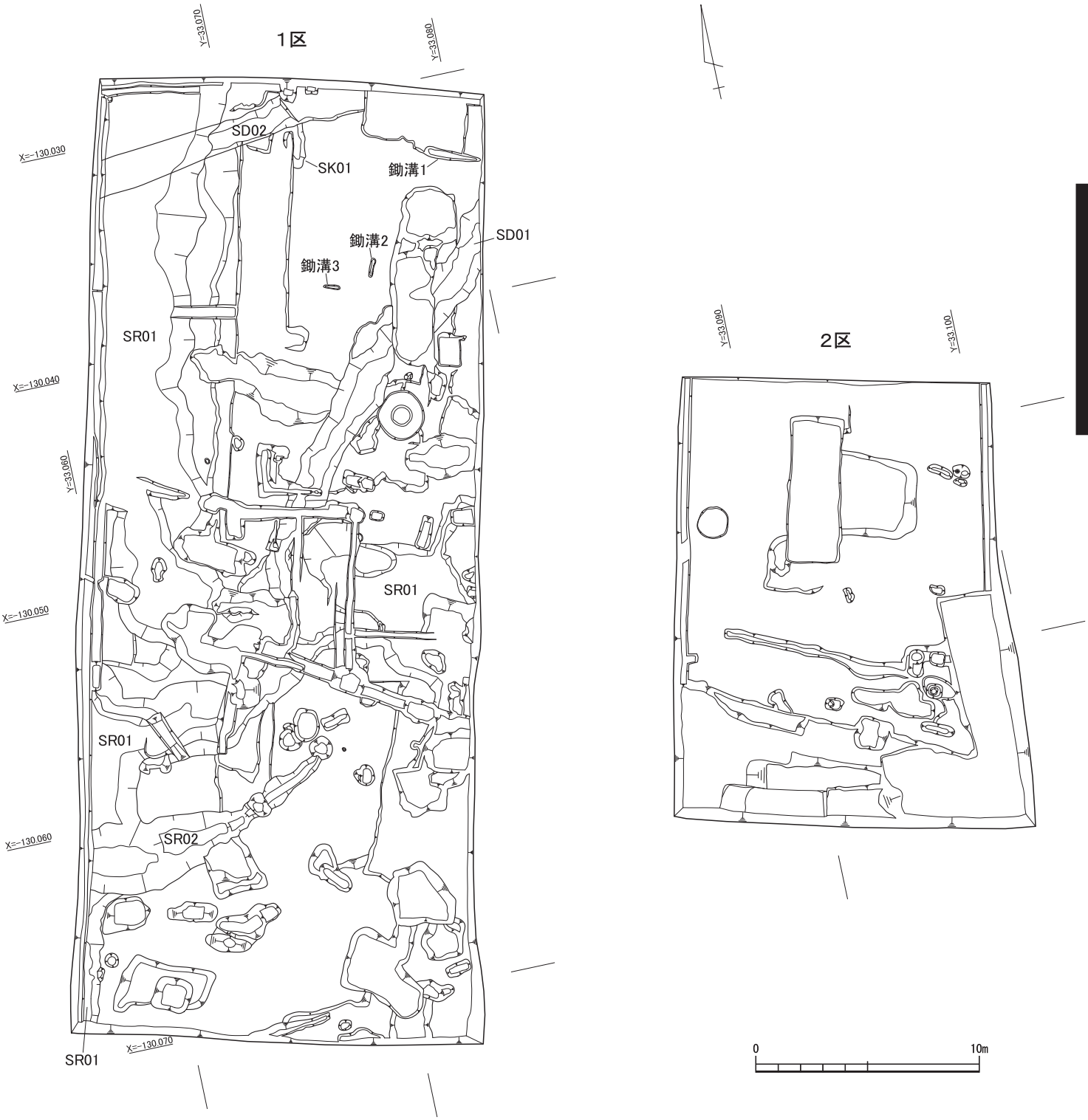
SK12-2

SK13



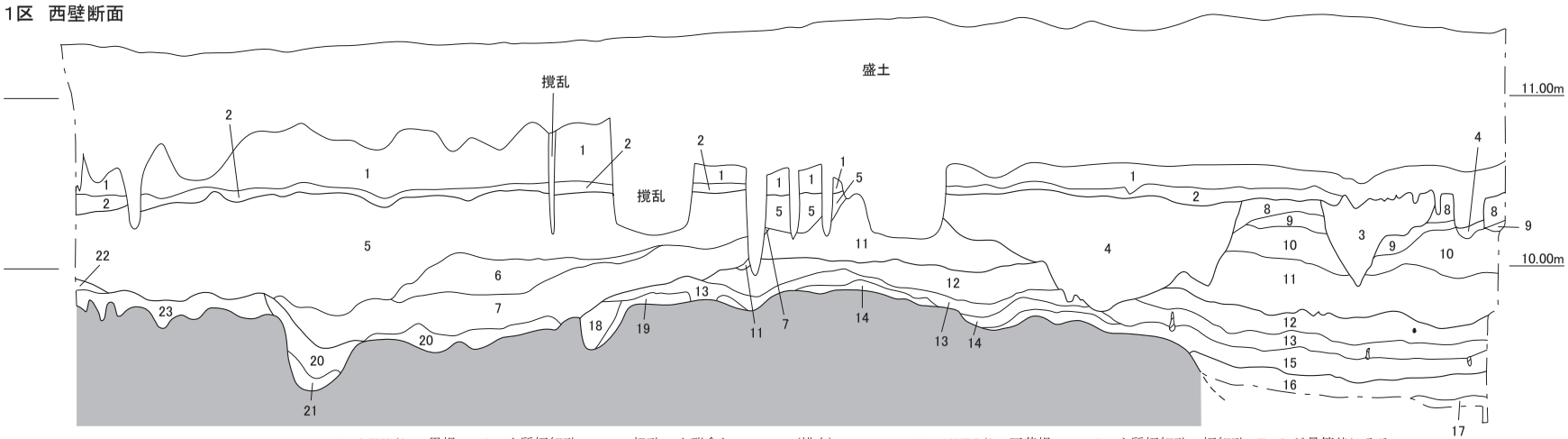
出土金属製品

駅前町遺跡


1区
2区
Y=-33,070
Y=-33,080
Y=-33,090
Y=-33,100
X=-130,030
X=-130,040
X=-130,050
X=-130,060
X=-130,070
SD02
SK01
鋤溝1
鋤溝2
鋤溝3
SD01
SR01
SR02
0
10m

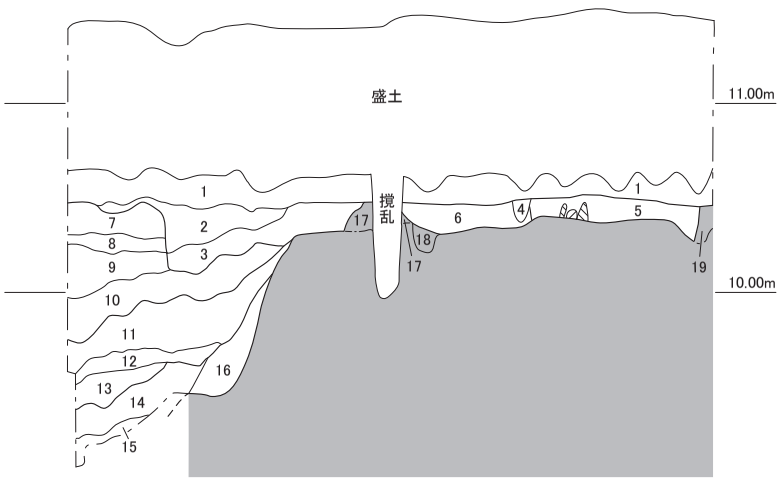
調査区平面図（1/250）

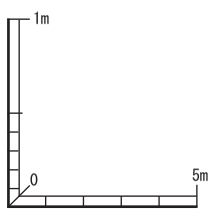
1区　西壁断面



1. 2.5Y3/2	黒褐	シルト質極細砂	粗砂～小礫含む	(耕土)
2. 2.5Y5/2	暗灰黄	シルト質極細砂		(床土)
3. 10YR6/2	灰黄褐	極細砂～粗砂	ラミナあり	(SD02埋土)
4. 10YR4/2	灰黄褐	極細砂～極粗砂	ラミナあり	(SR01埋土)
5. 7.5Y4/4	褐	シルト質極細砂～細砂		(SR01埋土)
6. 10YR4/2	灰黄褐	シルト質極細砂		(SR01埋土)
7. 2.5Y4/2	暗灰黄	シルト質極細砂～細砂	ラミナあり	(SR01埋土)
8. 10YR3/3	暗褐	極細砂質シルト		(SR01埋土)
9. 7.5YR3/2	黒褐	極細砂質シルト	土壌化	(SR01埋土)
10. 10YR4/2	灰黄褐	シルト質極細砂	粗砂含む　上半部土壌化	(SR01埋土)
11. 10YR5/2	灰黄褐	シルト質極細砂～極細砂	Fe_2O_3が量管状に入る	(SR01埋土)
12. 2.5Y3/1	黒褐	極細砂質シルト	白色シルト層状に入る　弥生土器片含む	(SR01埋土)
13. 10YR3/1	黒褐	シルト	極細砂含む　下面に中礫～大礫含む　土壌化	(SR01埋土)
14. 2.5Y3/2	黒褐	極細砂質シルト		(SR01埋土)
15. 10YR4/1	褐灰	シルト質極細砂		(SR01埋土)
16. 2.5Y2/1	黒	極細砂質シルト	粗砂含む　縄文晩期～弥生前期の土器片を含む　土壌化	(SR01埋土)
17. 7.5Y4/1	灰	シルト		(SR01埋土)
18. 2.5Y4/1	黄灰	シルト～細砂	青灰色シルトブロック含む	(SR01埋土)
19. 10YR5/6	黄褐	シルト質極細砂		(SR01埋土)
20. 10YR5/2	灰黄褐	シルト質極細砂～細砂	粗砂～極粗砂層状に入る　小礫含む	(SR01埋土)
21. 10YR4/3	にぶい黄褐	細砂～粗砂		(SR01埋土)
22. 10YR3/2	黒褐	極細砂質シルト		(SR01埋土)
23. 10YR3/3	暗褐	極細砂～中砂		(SR01埋土)

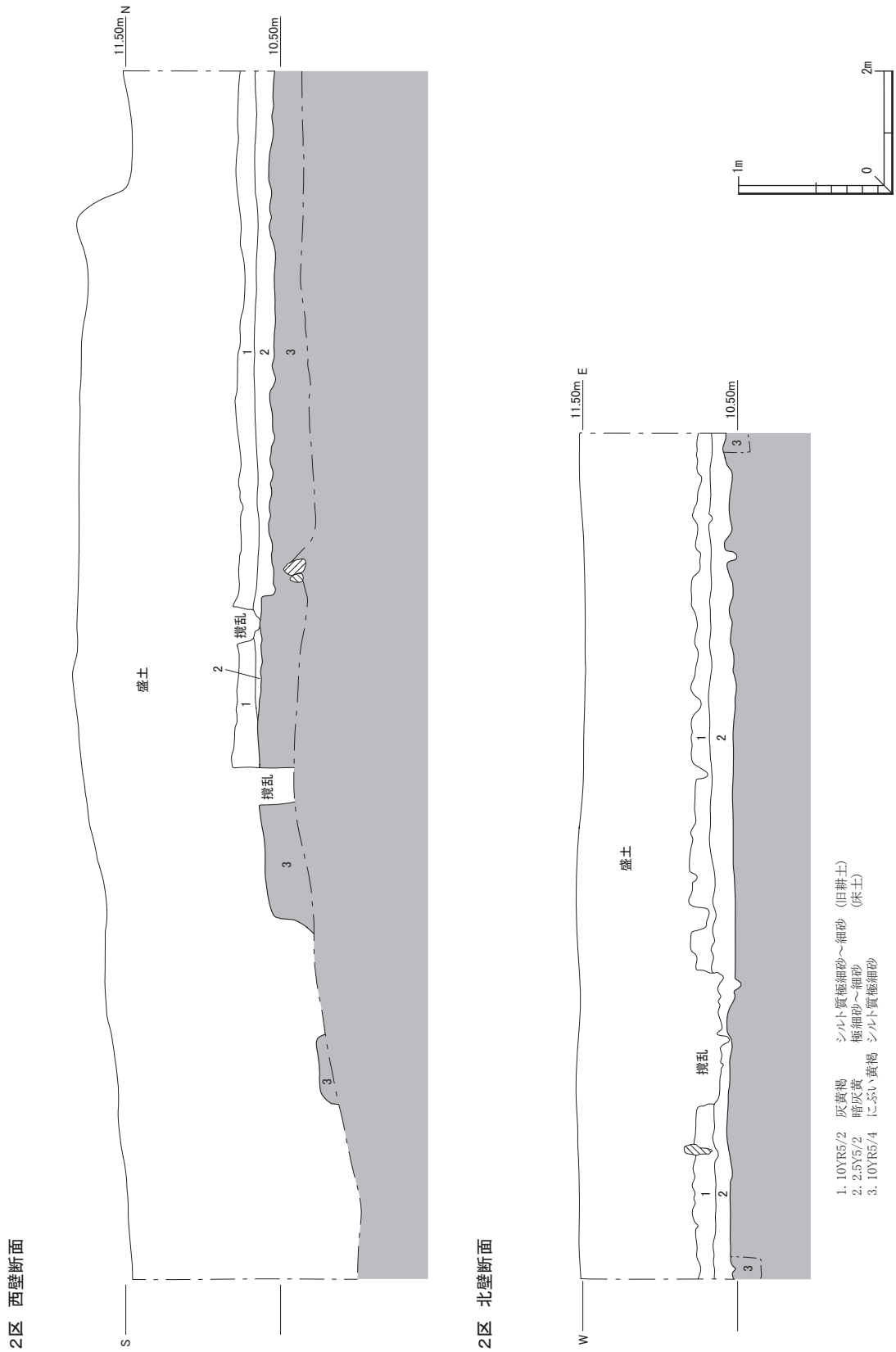
1区　北壁断面



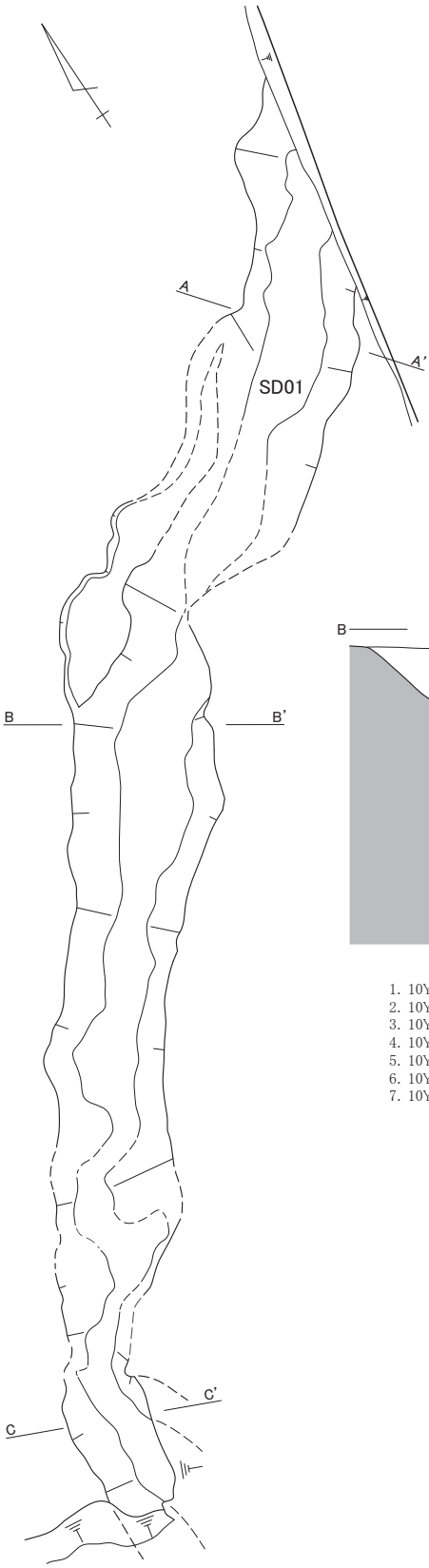


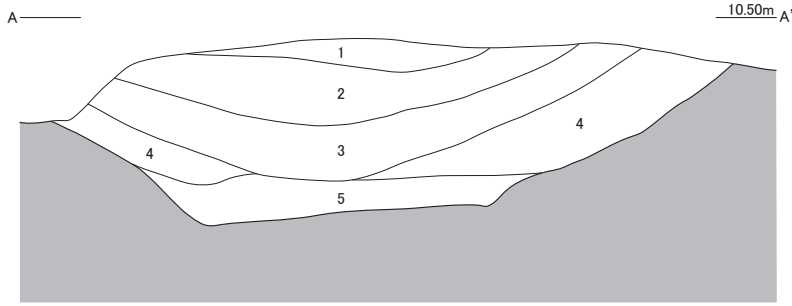
1. 2.5Y3/2	黒褐	シルト質極細砂	粗砂～小礫含む	(耕土)
2. 2.5Y4/1	黄灰	シルト質極細砂	シルトブロック含む　下部に小礫～大礫含む	(整地土)
3. 10YR4/3	にぶい黄褐	シルト質極細砂	細砂含む　全体にシルトブロック含む	(整地土)
4. 10YR5/2	灰黄褐	極細砂～細砂	暗灰色シルトブロック含む	
5. 2.5Y5/2	暗灰黄	シルト質極細砂	中礫～大礫多く 含む	
6. 10YR6/2	灰黄褐	極細砂～粗砂	ラミナあり	(SD02埋土)
7. 10YR3/3	暗褐	極細砂質シルト		(SR01埋土)
8. 7.5YR3/2	黒褐	極細砂質シルト	土壌化	(SR01埋土)
9. 10YR4/2	灰黄褐	シルト質極細砂	粗砂含む　上半部土壌化	(SR01埋土)
10. 10YR5/2	灰黄褐	シルト質極細砂～極細砂	Fe_2O_3が量管状に入る	(SR01埋土)
11. 2.5Y3/1	黒褐	極細砂質シルト	白色シルト層状に入る　弥生土器片含む	(SR01埋土)
12. 10YR3/1	黒褐	シルト	極細砂含む　下面に中礫～大礫含む　土壌化	(SR01埋土)
13. 10YR4/1	褐灰	シルト質極細砂		(SR01埋土)
14. 2.5Y2/1	黒	極細砂質シルト	粗砂含む　縄文晩期～弥生前期の土器片を含む　土壌化	(SR01埋土)
15. 7.5Y4/1	灰	シルト		(SR01埋土)
16. 10YR4/2	灰黄褐	細砂混じり極細砂質シルト	中礫含む　土器片含む	(SR01埋土)
17. 10YR5/4	にぶい黄褐	シルト質極細砂～細砂	粗砂～細礫含む	(地山)
18. 10YR4/4	褐	シルト質極細砂	中礫含む	(地山)
19. 10YR4/3	にぶい黄褐	シルト質極細砂		(地山)

1区西壁・北壁断面図

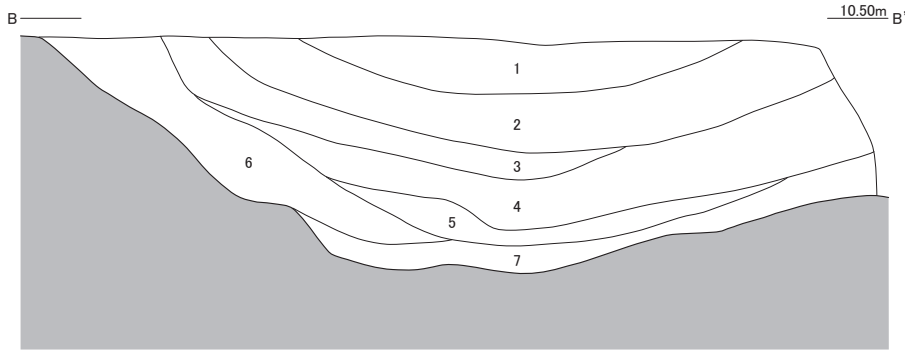

2区　西壁断面
S
N
11.50m
10.50m
盛土
撹乱
撹乱
1
2
3
2区　北壁断面
W
E
11.50m
10.50m
盛土
撹乱
1
2
3
1m
0
2m
1. 10YR5/2　灰黄褐　シルト質極細砂～細砂（旧耕土）
2. 2.5Y5/2　暗灰黄　極細砂～細砂（床土）
3. 10YR5/4　にぶい黄褐　シルト質極細砂

2区西壁・北壁断面図

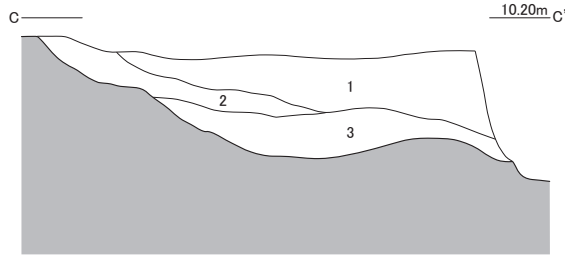




1. 10YR4/4　褐　シルト質極細砂
2. 10YR5/3　にぶい黄褐　極細砂～細砂　中央部上半に粗砂入る ラミナあり
3. 2.5Y4/2　暗灰黄　シルト質極細砂　粗砂含む 有機質を含む(上半部特に多い)
4. 10YR5/4　にぶい黄褐　シルト質極細砂～粗砂　シルトブロック含む
5. 10YR4/3　にぶい黄褐　極細砂～細礫　シルトブロック含む 2cm大の中礫含む



1. 10YR4/4　褐　シルト質極細砂　A-Á第1層に対応
2. 10YR5/3　にぶい黄褐　極細砂～細砂　中央部上半に粗砂入る ラミナあり　A-Á第2層に対応
3. 10YR3/3　暗褐　シルト質極細砂　有機質多く 含む
4. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂～細砂
5. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂～粗砂　シルトブロック含む
6. 10YR5/4　にぶい黄褐　シルト質極細砂～粗砂　シルトブロック含む　A-Á第4層に対応
7. 10YR5/3　にぶい黄褐　極細砂～粗砂　シルトブロック含む



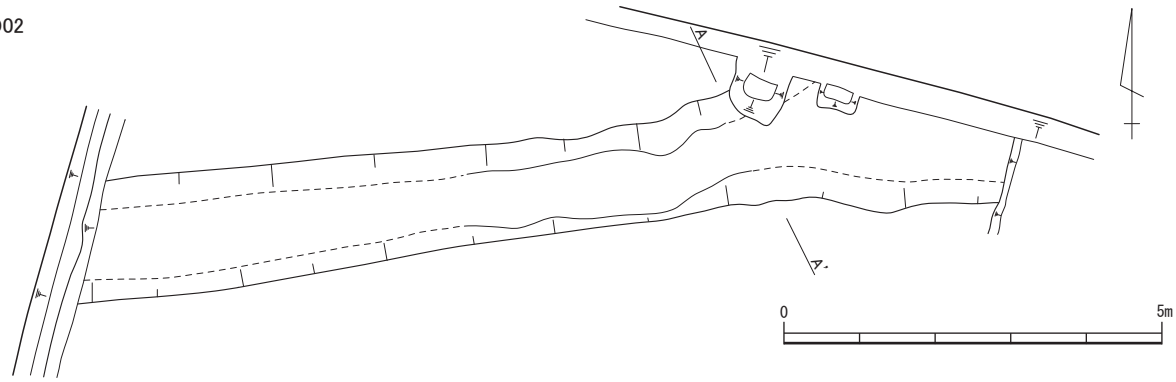
1. 2.5Y4/1　黄灰　極細砂～細砂　鉄分沈着
2. 2.5Y5/1　黄灰　シルト質極細砂
3. 2.5Y5/2　暗灰黄　シルト質極細砂～細砂　ラミナあり 最下層に黄色ブロック含む

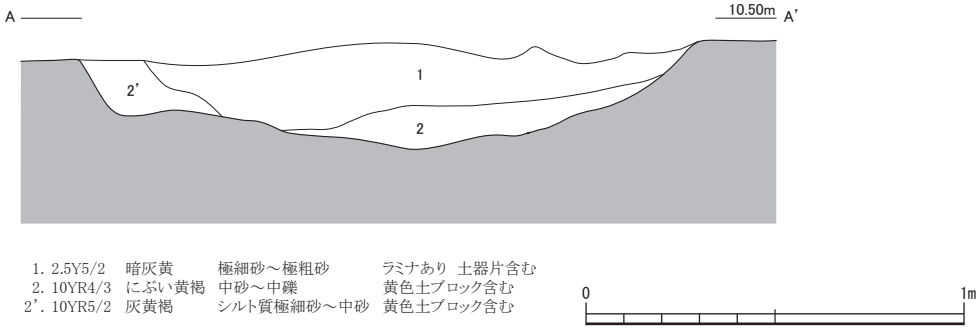
0　5m

0　1m

SD01　平面図・断面図

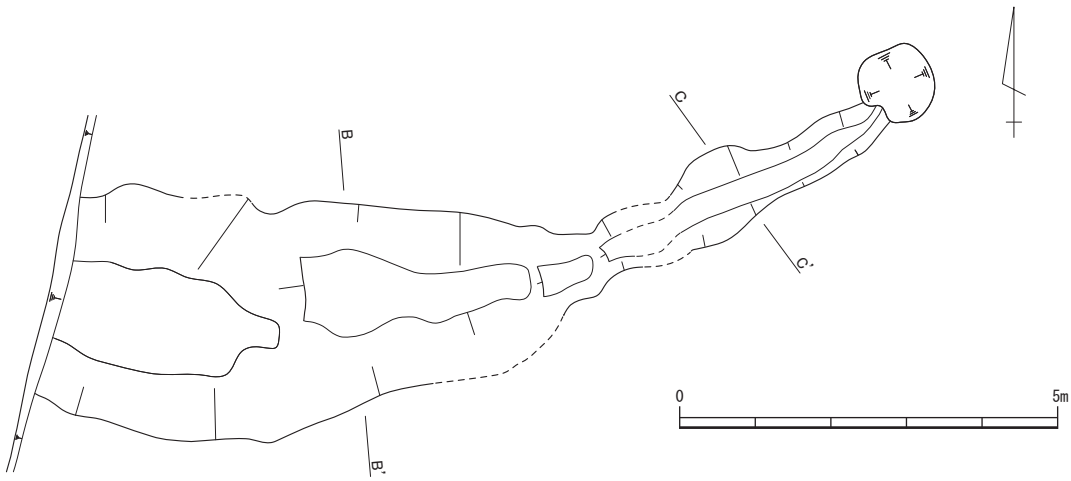
SD02

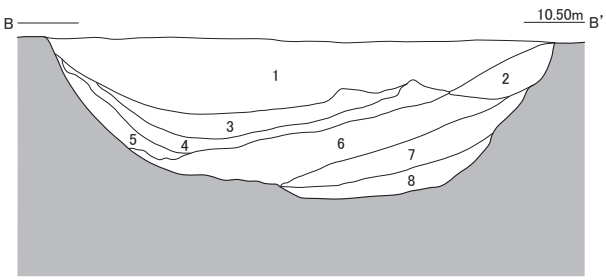


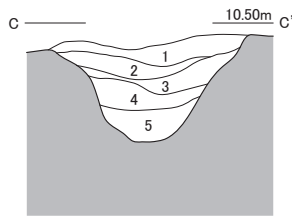


1. 2.5Y5/2　暗灰黄　極細砂～極粗砂　ラミナあり 土器片含む
2. 10YR4/3　にぶい黄褐　中砂～中礫　黄色土ブロック含む
2'. 10YR5/2　灰黄褐　シルト質極細砂～中砂　黄色土ブロック含む

SR02





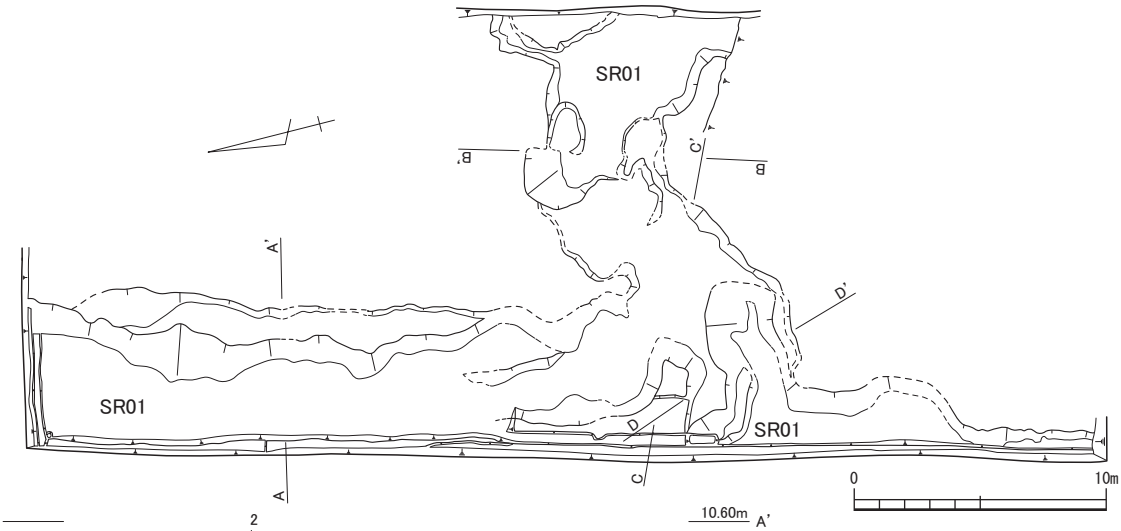


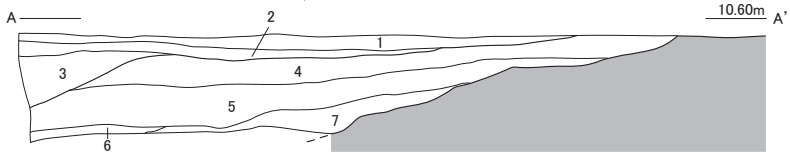
1. 10YR5/2　灰黄褐　極細砂～細砂　下層に粗砂含む
2. 10YR5/1　褐灰　極細砂混じりシルト　暗黄褐色シルトブロック含む
3. 10YR5/4　にぶい黄褐　細砂～中砂　ラミナあり
4. 2.5Y5/2　暗灰黄　極細砂混じりシルト　炭化物含む
5. 2.5Y6/3　にぶい黄　極細砂混じりシルト　鉄分沈着
6. 10YR4/2　灰黄褐　粗砂　小礫、黄色粘土ブロック多く 含む
7. 10YR5/1　褐灰色　中砂～粗砂　ラミナあり
8. 10YR6/6　明黄褐　極細砂混じりシルト　粗砂ブロック状に含む 土器含む

1. 10YR4/3　にぶい黄褐　細砂～中砂
2. 10YR5/3　にぶい黄褐　細砂　円礫(φ1cm大)多く 含む
3. 10YR5/2　灰黄褐　極細砂混じりシルト
4. 10YR5/4　にぶい黄褐　極細砂～細砂
5. 10YR3/2　黒褐　粗砂、小礫含む

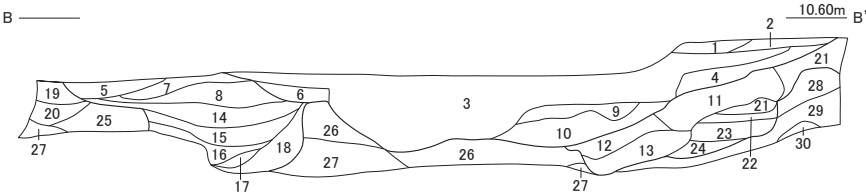
0　2m

SD02・SR02　平面図・断面図

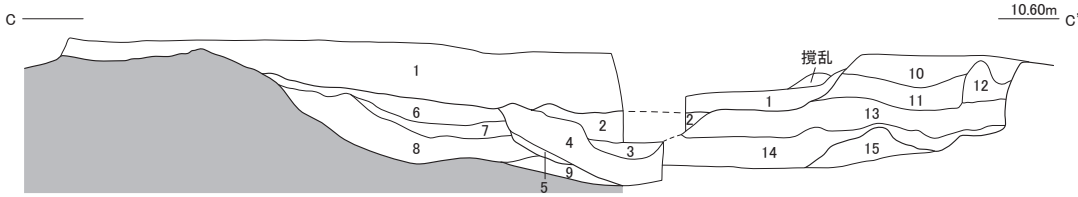




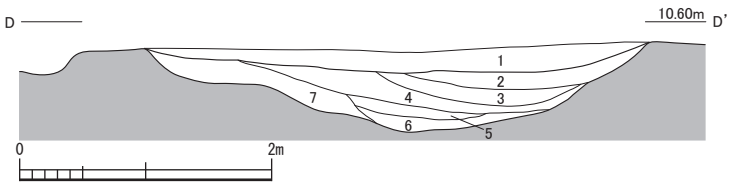
1. 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂 粗砂含む シルトブロック 土壌化
2. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細砂～細砂 粗砂含む 土壌化
3. 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂～極粗砂 ラミナあり
4. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂
5. 10YR3/2 黒褐 シルト わずかに粗砂含む 細砂ブロック含む 含水量少なく しまり良い
6. 2.5Y3/2 黒褐 シルト 細砂ブロック含む
7. 2.5Y5/1 黄灰 シルト混じり細砂 極粗砂～中礫含む



1. 10YR5/2 灰黄褐 極細砂～極粗砂
2. 10YR6/2 灰黄褐 シルト質極細砂 粗砂～極粗砂含む 土器片含む 土壌化
3. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質極細砂～細礫 ラミナあり 古墳時代の土器片含む
4. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細砂～細砂 粗砂含む 土壌化
5. 10YR5/4 にぶい黄褐 極細砂～細礫 黄色ブロック含む
6. 10YR3/3 暗褐 シルト質極細砂～粗砂 細礫含む 土壌化
7. 10YR4/3 にぶい黄褐 極細砂～中礫 シルトブロック含む
8. 10YR6/3 にぶい黄橙 極細砂～細砂 シルトブロックパッチ状に含む
9. 10YR4/1 褐灰 シルト質極細砂～細砂 第4層より細砂多い
10. 10YR4/2 灰黄褐 シルト混じり極細砂～中砂 極粗砂含む
11. 10YR5/2 灰黄褐 シルト質極細砂～粗砂 1～3cm大のブロック状の堆積
12. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細砂～細砂 シルトブロック、粗砂ブロック含む
13. 10YR3/2 黒褐 極細砂質シルト シルトブロック含む
14. 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト質極細砂～粗砂 ラミナあり シルトブロック含む
15. 10YR5/2 灰黄褐 シルト質極細砂～中砂 ラミナあり シルトブロック含む
16. 10YR3/2 黒褐 粗砂～1cm大の中礫
17. 10YR6/2 灰黄褐 細砂～中砂混じりシルト
18. 10YR5/2 灰黄褐 細砂～極粗砂 ラミナあり 下面にシルトブロック含む
19. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質極細砂 粗砂含む ラミナあり
20. 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂～細砂 粗砂含む ラミナあり
21. 2.5Y5/3 黄褐 極細砂～細砂 細礫含む 土壌化
22. 10YR3/2 黒褐 シルト質極細砂 土壌化
23. 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂～細砂 粗砂含む
24. 10YR4/1 褐灰 シルト質極細砂 土壌化
25. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質極細砂～細砂 シルトブロックパッチ状に含む
26. 10YR6/2 灰黄褐 コースシルト 中砂含む
27. 2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂～粗砂
28. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細砂 粗砂含む 土壌化
29. 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂～極粗砂 グレーディング
30. 7.5YR4/4 褐 粗砂～極粗砂 浅黄色シルトブロック含む



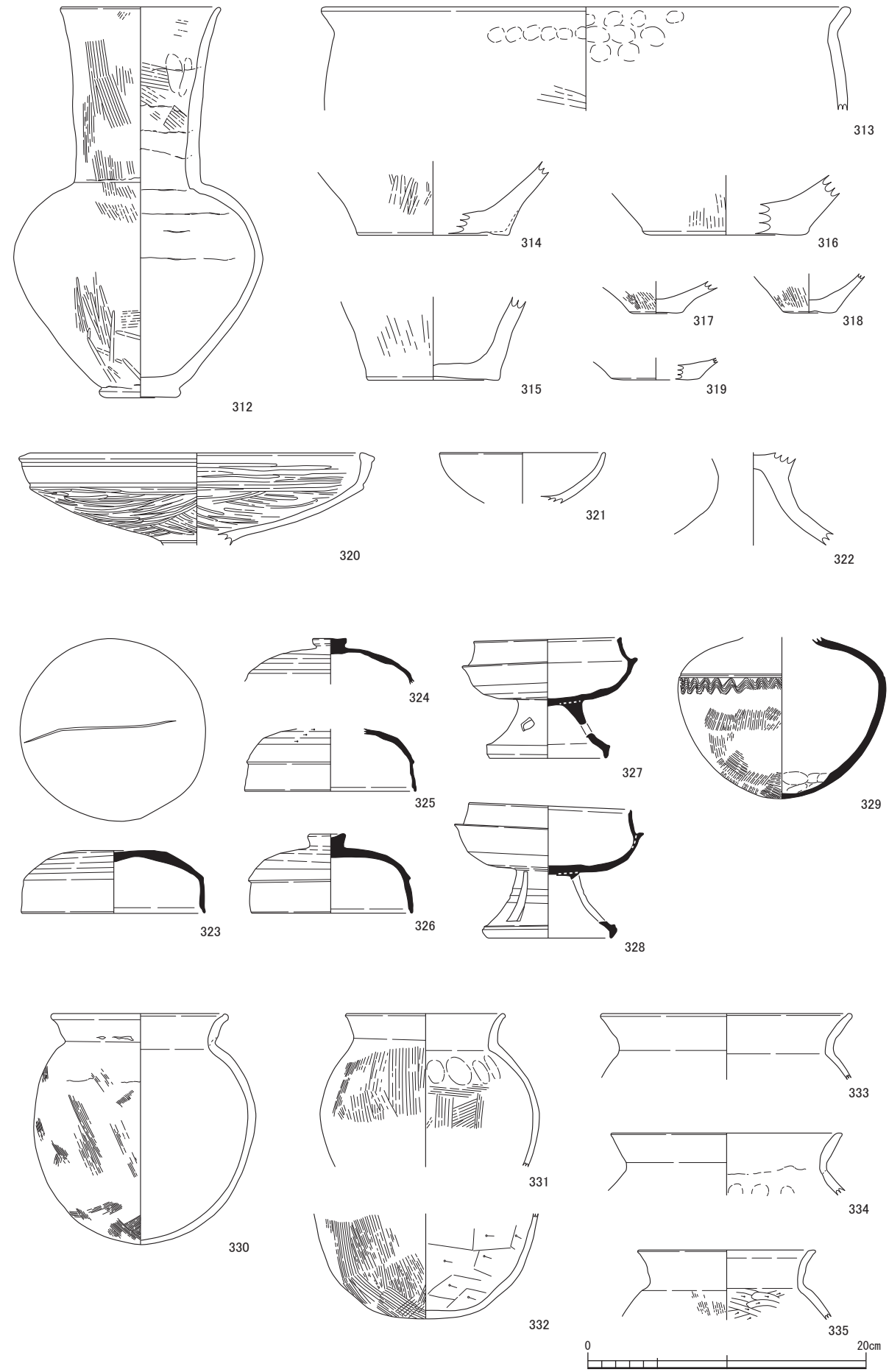
1. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質極細砂～細礫 ラミナあり 下面に有機物を含むシルト層がみられる 下面にFe_2O_3 古墳時代の土器含む
2. 2.5Y5/1 黄灰 シルト質極細砂～細砂 シルトブロック含む
3. 2.5Y4/2 暗灰黄 中砂～φ2cm大までの中礫 淘汰悪い
4. 2.5Y6/2 灰黄 極細砂質シルト～極粗砂 黄色シルトブロック含む
5. 10YR4/1 褐灰 シルト
6. 10YR3/2 黒褐 極細砂質シルト 黄色シルトブロック含む
7. 10YR4/1 褐灰 シルト 粗砂少量含む
8. 10YR5/2 灰黄褐 シルト質極細砂～細砂 ラミナあり 黄色シルトブロック、黒色シルトブロック含む
9. 2.5Y5/2 灰黄 細砂～中砂
10. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細砂 下部に粗砂含む(ラミナ状) 土器片含む
11. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂～細砂 土器片含む
12. 2.5Y5/3 オリーブ褐 シルト質極細砂
13. 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂～中砂 ラミナあり 浅黄色シルトブロック含む
14. 10YR5/2 灰黄褐 シルト質極細砂～極粗砂 黄色シルトブロック、黒色シルトブロック含む
15. 10YR4/2 灰黄褐 極細砂～粗砂



1. 10YR3/3 暗褐 シルト質極細砂 細砂含む 土壌化
2. 10YR3/2 黒褐 シルト質極細砂 ラミナあり
3. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細砂～中砂 南半部シルト分多い
4. 2.5Y3/2 黒褐 シルト質極細砂
5. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質極細砂～細砂
6. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 極細砂質シルト 炭化物多く含む
7. 10YR4/3 にぶい黄褐 極細砂～中砂

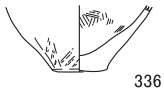
SR01 平面図・断面図

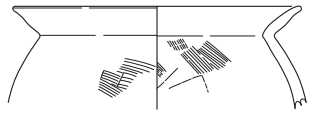
SR01

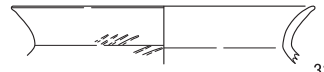


出土土器（SR01）

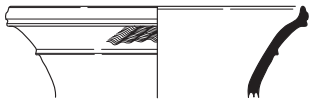
SR02


336

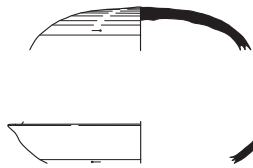

337


338

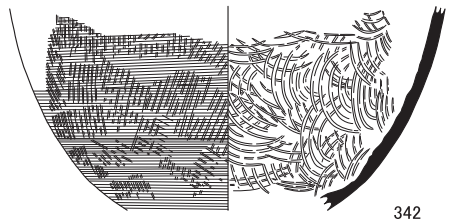
SD01


339

SD02

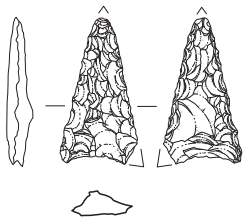

340

341


342

0 20cm

SR01


S7

0 3cm

鋤溝 2

M9

0 5cm

写　真　図　版

豆腐町遺跡

１区・２区調査前状況（西から）

１区全景（北西から）

１区・２区全景（北西から）

１区・２区全景（北東から）

３区遠景（北東上空から）

３区全景（西から）

１区北壁土層断面
（南から）

１区・２区西壁土層断面
（北東から）

２区西壁土層断面
（東から）

SE01 検出状況（西から）

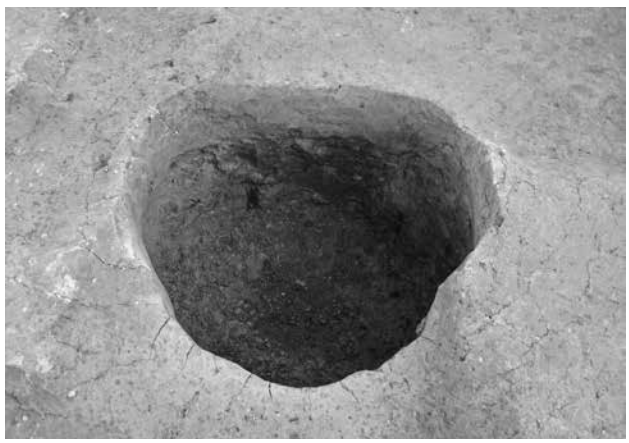
SE01 土層断面（西から）

SE01 井戸枠出土状況
（南から）

SE03 井戸枠（南西から）

SE03 土層断面（西から）

SE03 井戸枠部材出土状況（東から）



SE03 完掘（西から）

SE03・SK01 出土状況（西から）

SE05 土層断面（西から）

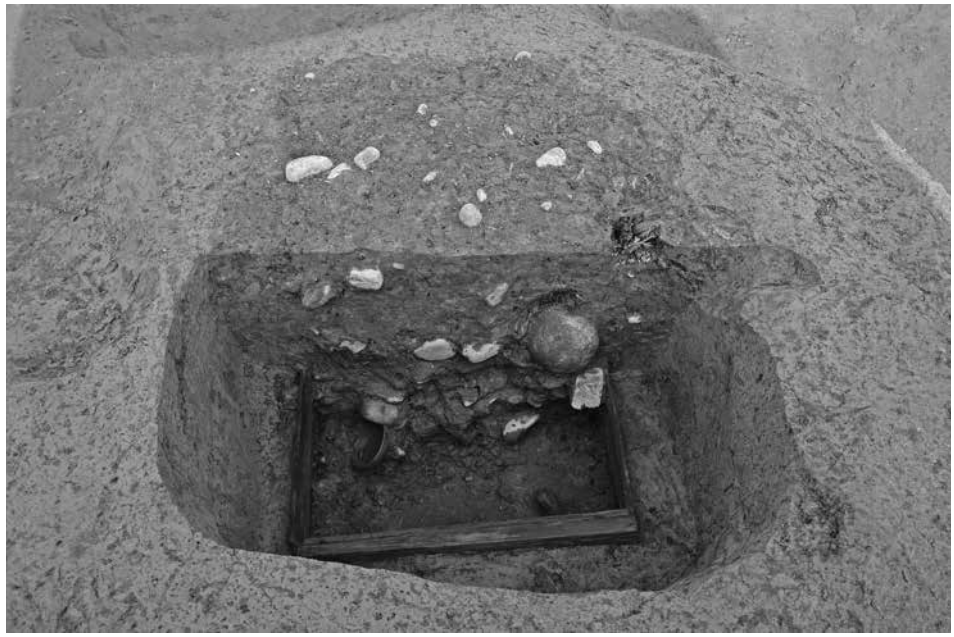
SE05 上層土器出土状況
（西から）

SE05 下層土器出土状況
（西から）

SE07 検出状況（北から）

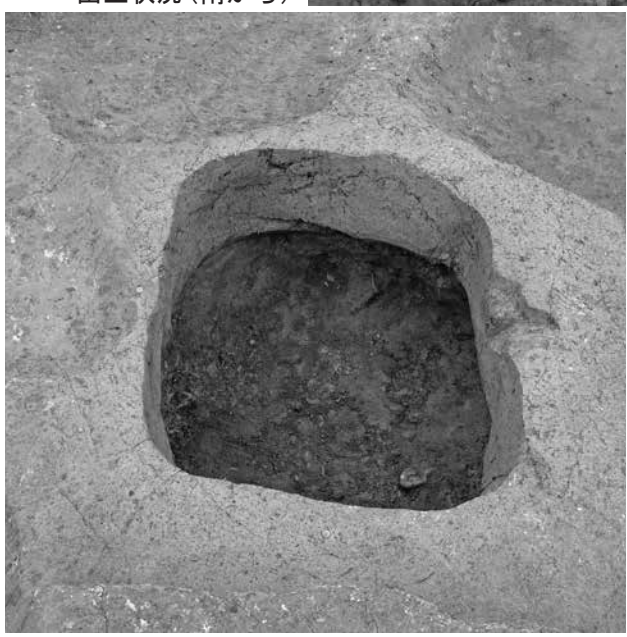
SE07 土層断面（北から）

SE07 完掘状況（北から）



SE08 土層断面（南から）

SE08 刀子・墨書土器
出土状況（南から）



SE08 完掘状況（南から）

SE08 井戸枠 枘・楔組合せ状況

SE09 土層断面（西から）

SE09 井戸枠内土器・
木器出土状況（西から）

SE09 井戸枠（西から）

SE09 井戸枠（北から）

SE09 集水施設
曲物検出状況（北から）

SE09 完掘状況（北から）

SE13 井戸枠曲物及び桟（西から）

SE13 土層断面（西から）

SE13 桟組み（南から）

SE13 井戸枠内 土師器出土状況（北から）

SE13 断割り（西から）

SE14 完掘状況（西から）

SE14 検出状況（西から）

SE14 断割り（西から）

SE14 井戸枠南東隅 拡大

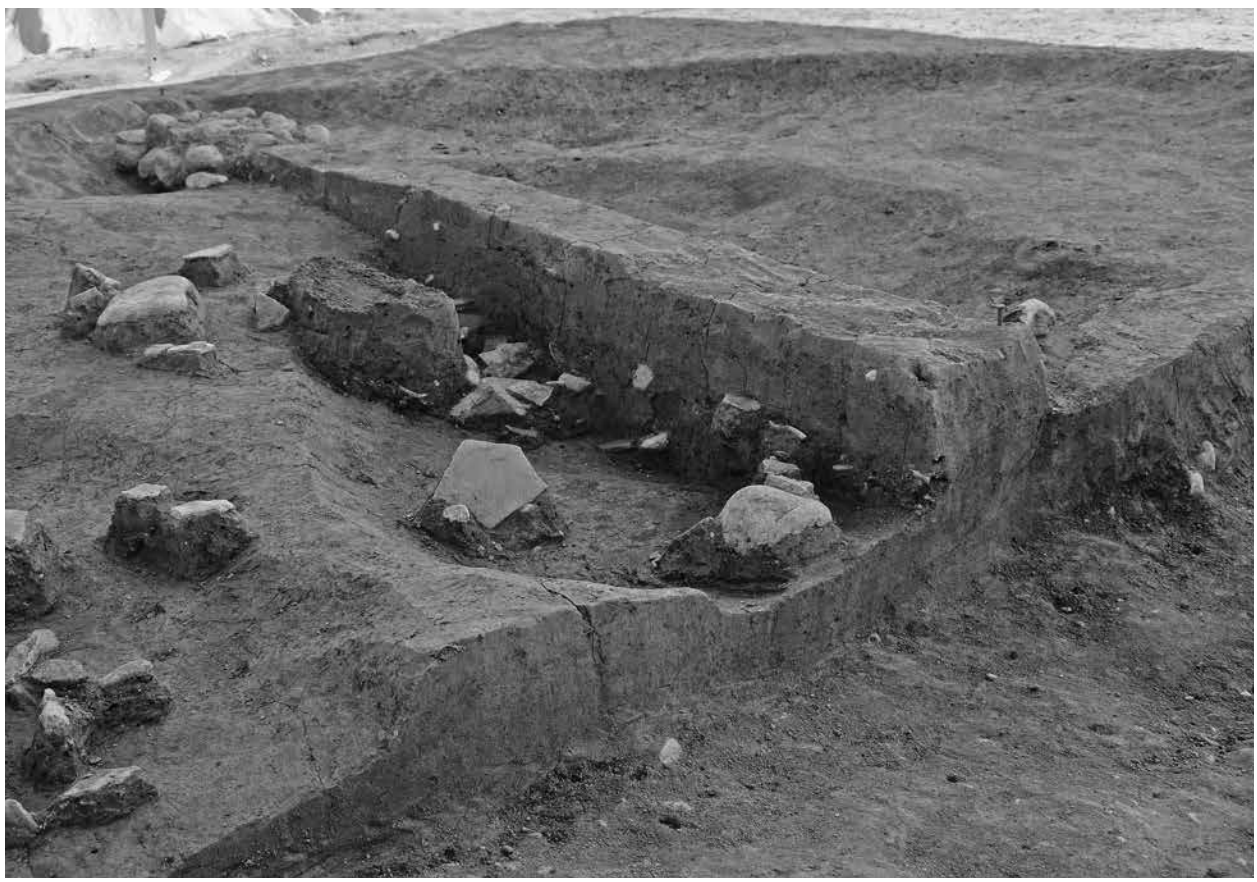
SE14 井戸枠板材の加工

SK11・SK12-2・SK19 全景（南から）

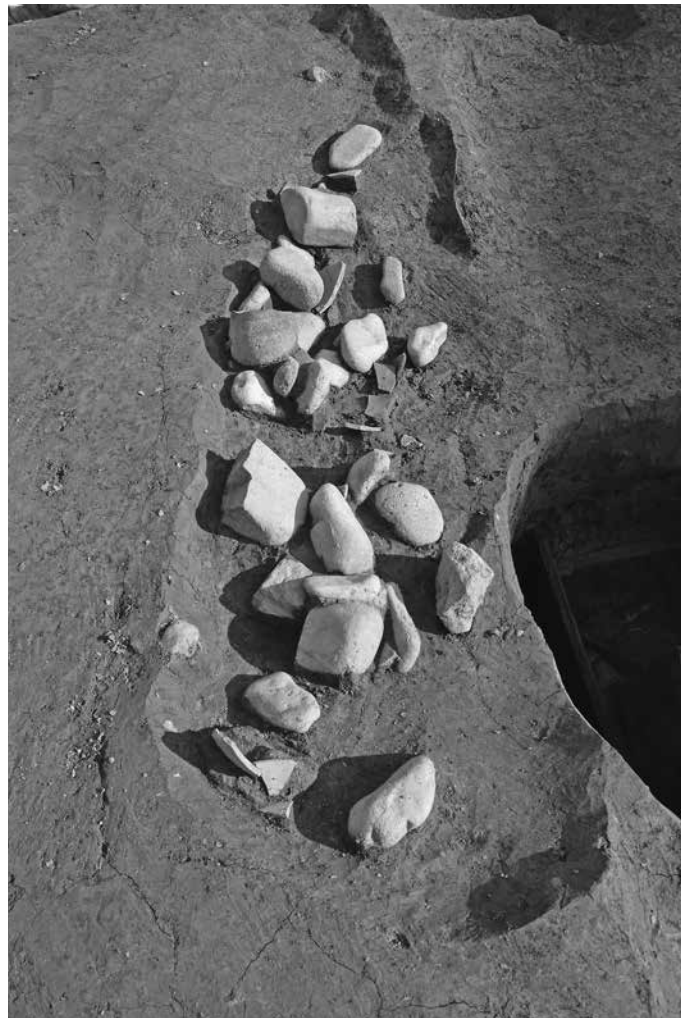
SK12-2　土器・木器出土状況（東から）

SK11 集石出土状況（西から）

SK19 土器出土状況（西から）

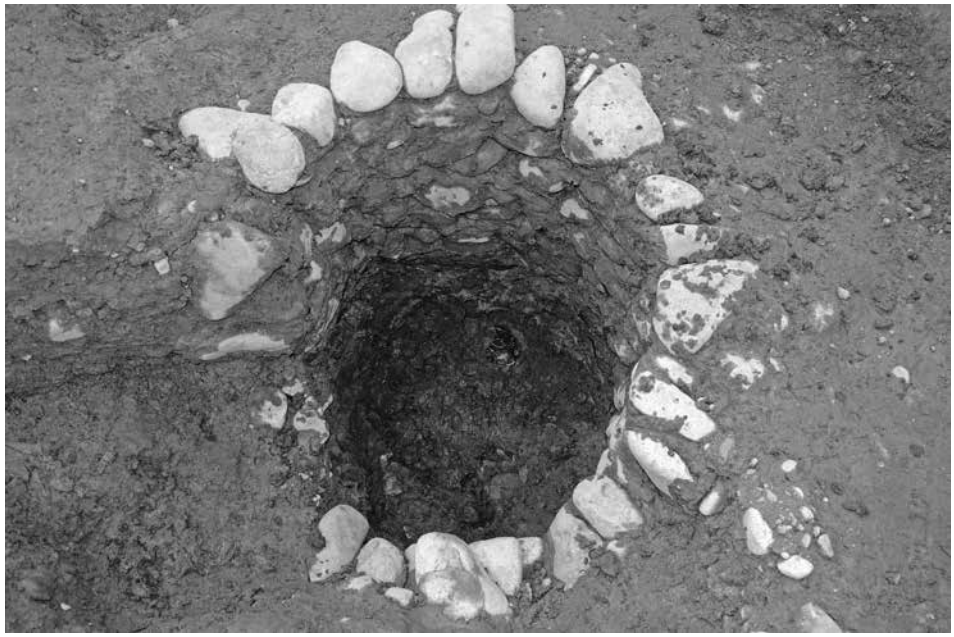


SK11・SK12-1・SK12-2・SK19 土層断面（南西から）

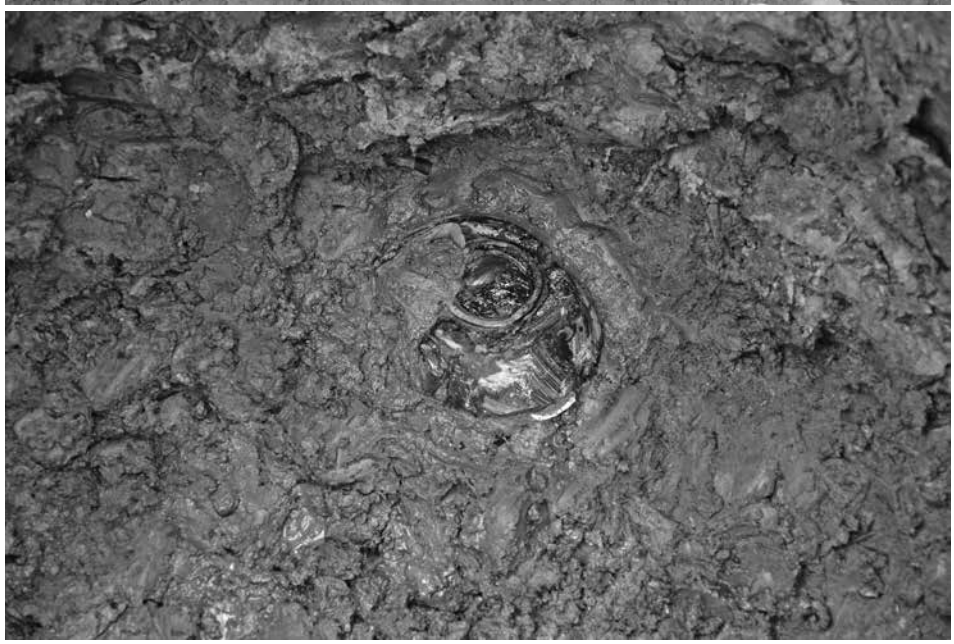


SK01 集石出土状況（西から）

２区９Ｆ　柱穴群（南から）



SE04 漆器椀
出土状況（東から）



SE04 漆器椀
出土状況（東から）

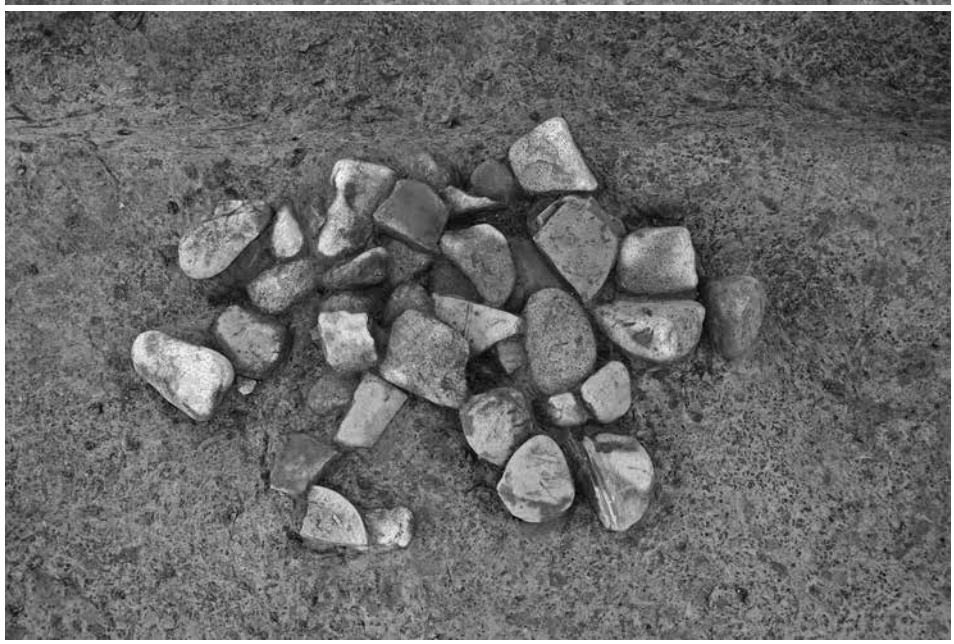
SE04 断割り（東から）

SE06 断割り（東から）

SE10 完掘状況（西から）

SE11 断割り（北から）

SE02 完掘状況（南から）



SK03 集石（西から）

SK37 集石（東から）

1区西 粘土採掘坑群（北から）

粘土採掘坑 土層断面（東から）

SX12 土器出土状況（西から）

SX60 集石出土状況（西から）

SX60 土層断面（北から）

１区東部 粘土採掘坑群（北から）

１区・２区中央部 粘土採掘坑群（北東から）

粘土採掘坑土層断面（南から）

粘土採掘坑土層断面（南から）

粘土採掘坑（南から）

下層確認トレンチ土層断面（南西から）

3

4

5

6

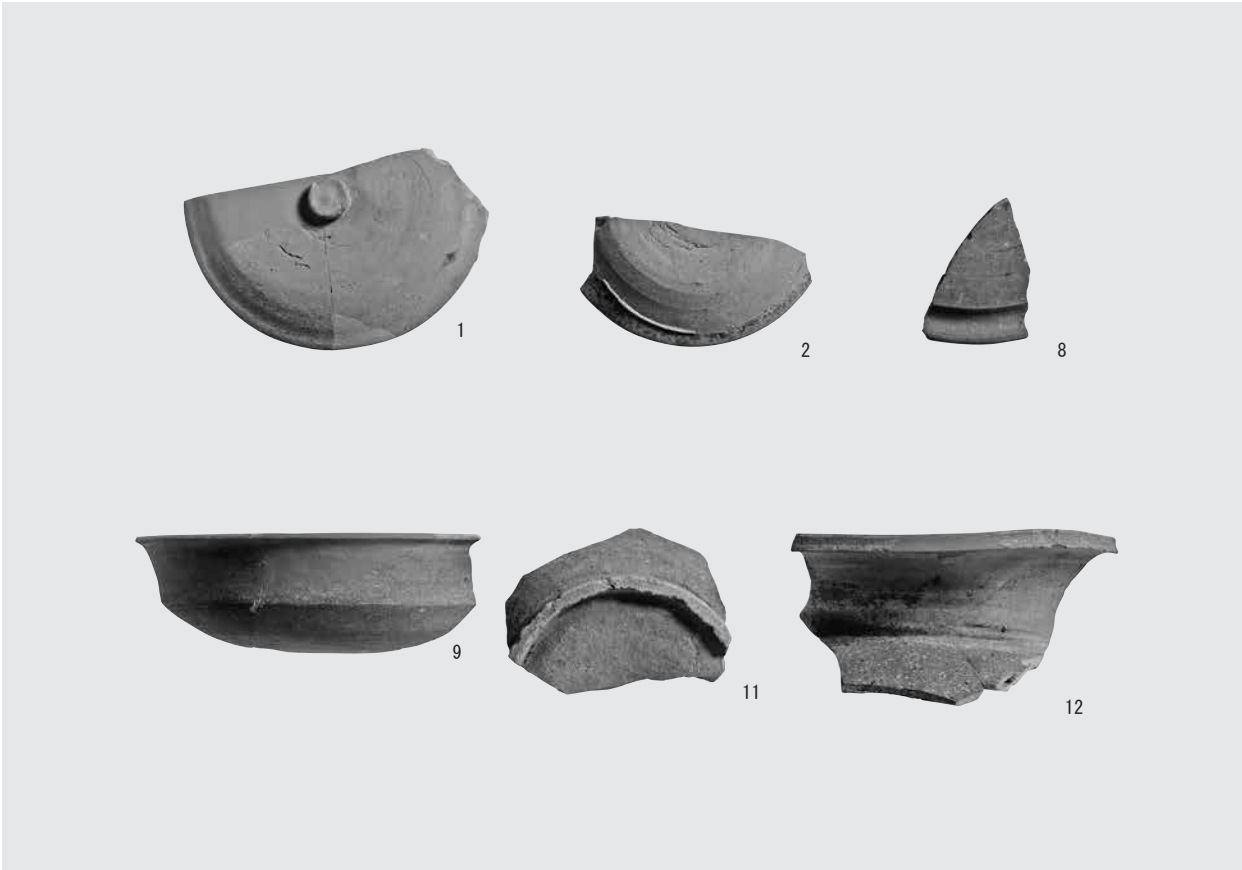
7

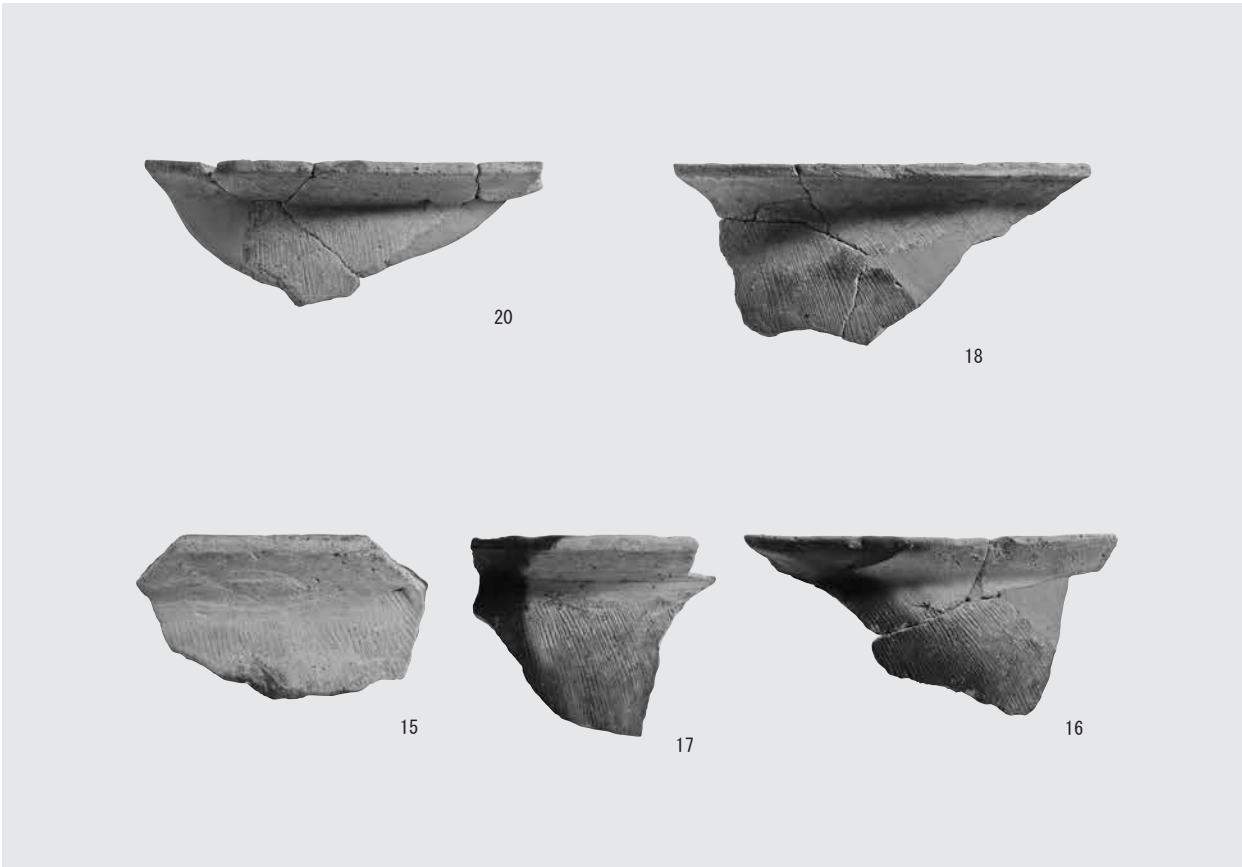
13

10

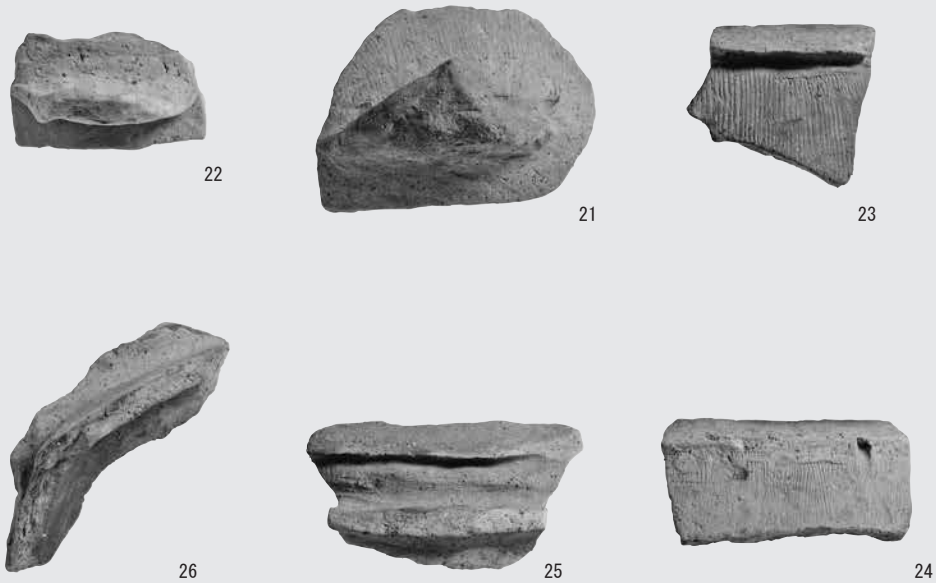
14

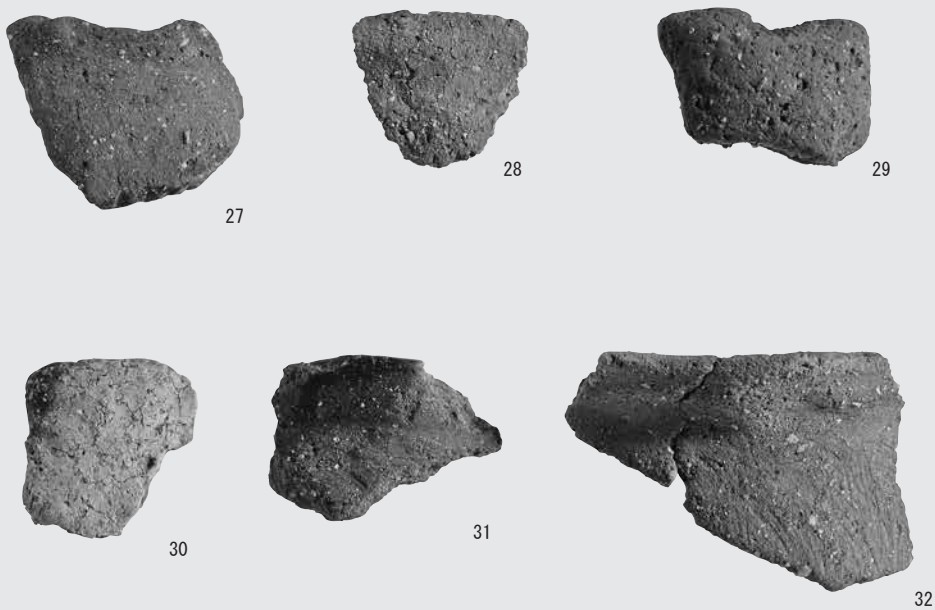
SE01 出土須恵器





SE01 出土須恵器・土師器

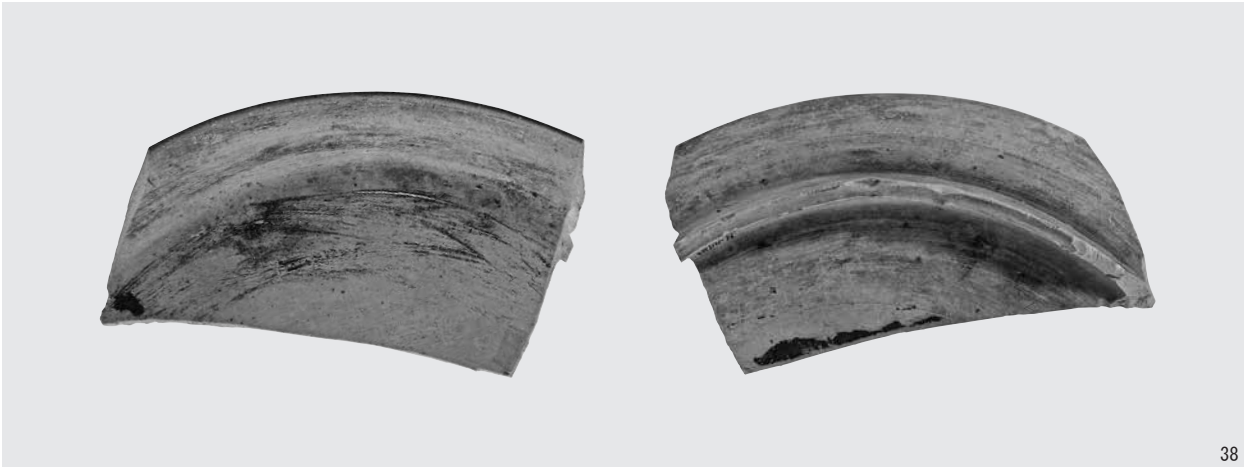


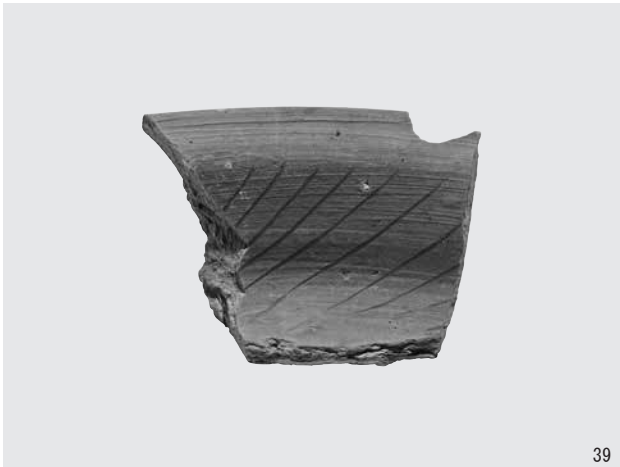


SE01 出土竈・製塩土器・瓦

34

35


38

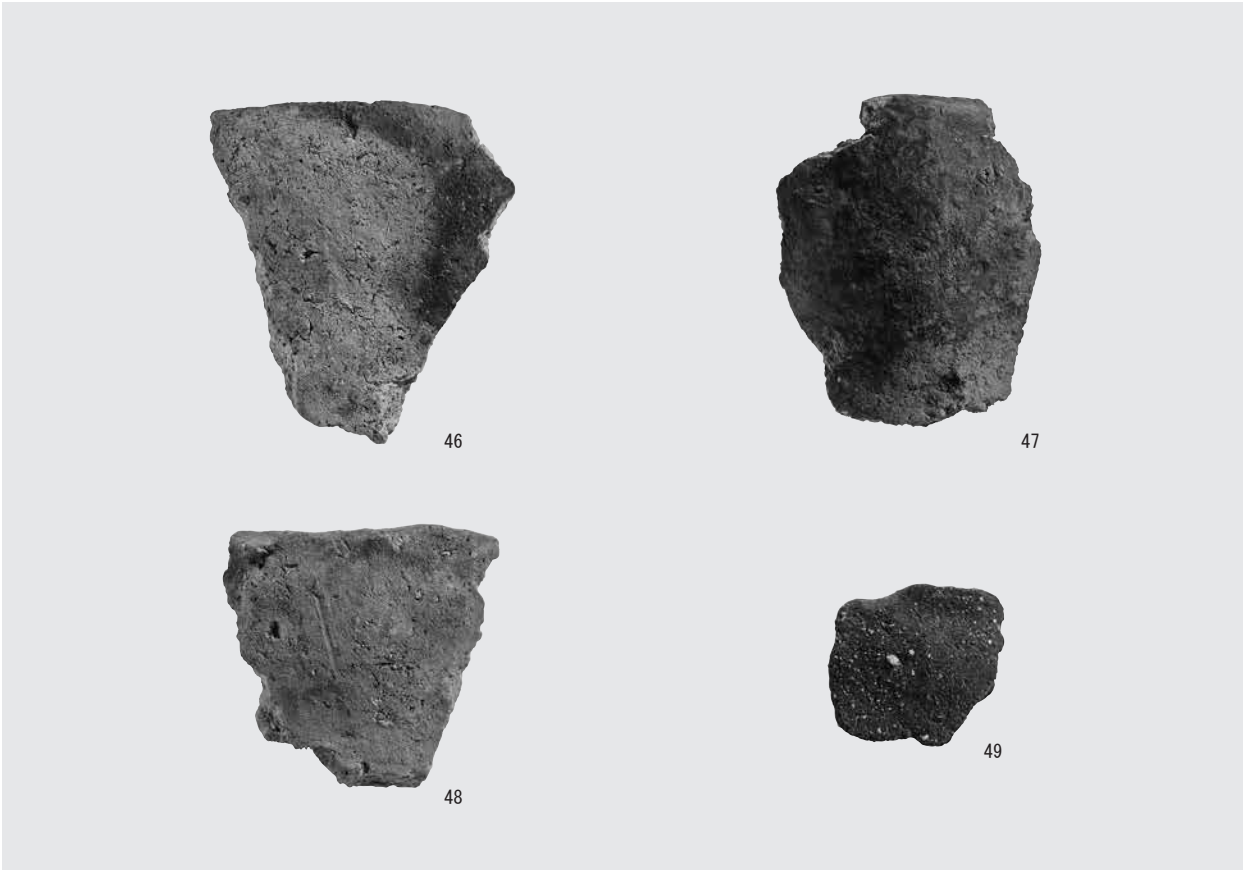

39

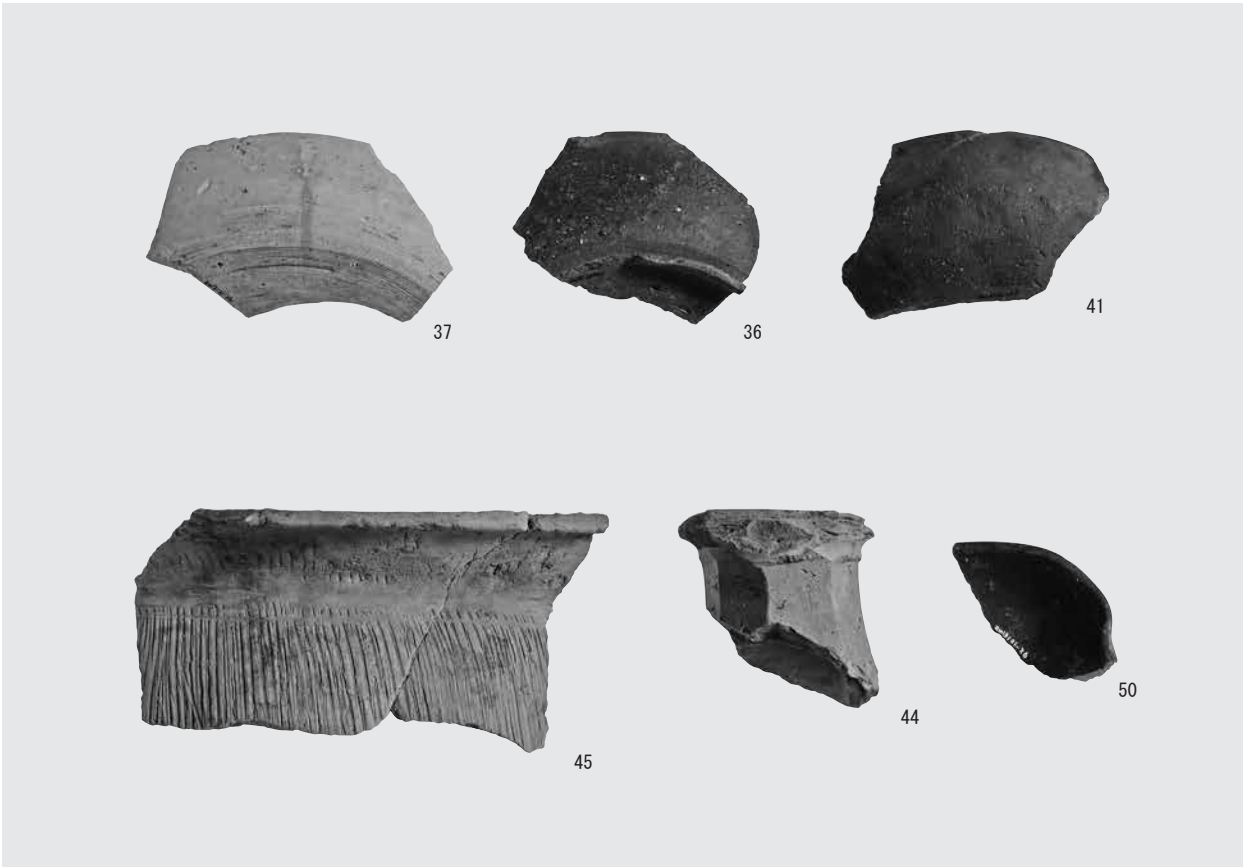
40

42

43

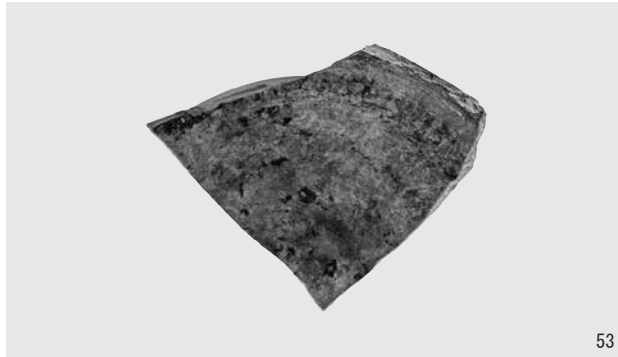
SE03 出土須恵器・土師器





SE03 出土製塩土器・須恵器・土師器

51


53

54

52

55

57

56

SE05 出土須恵器

58

60

61

62

63

65

64

66

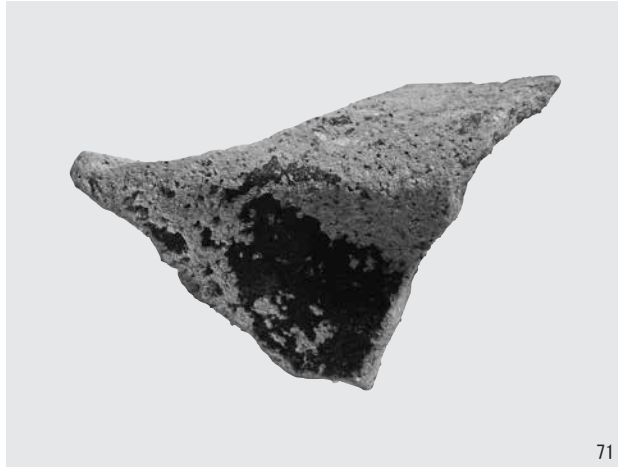
67

68

69

SE05 出土土師器 1

70



71

72

73

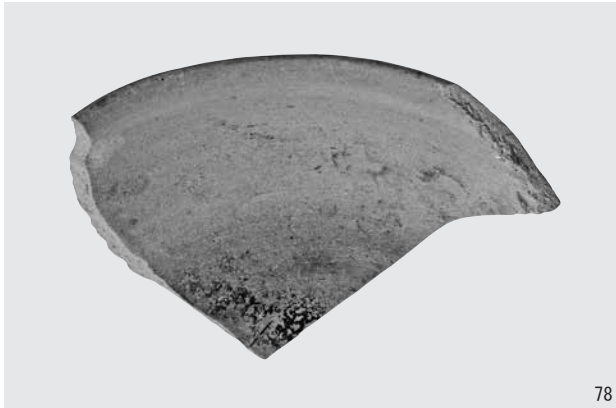
SE05 出土土師器２

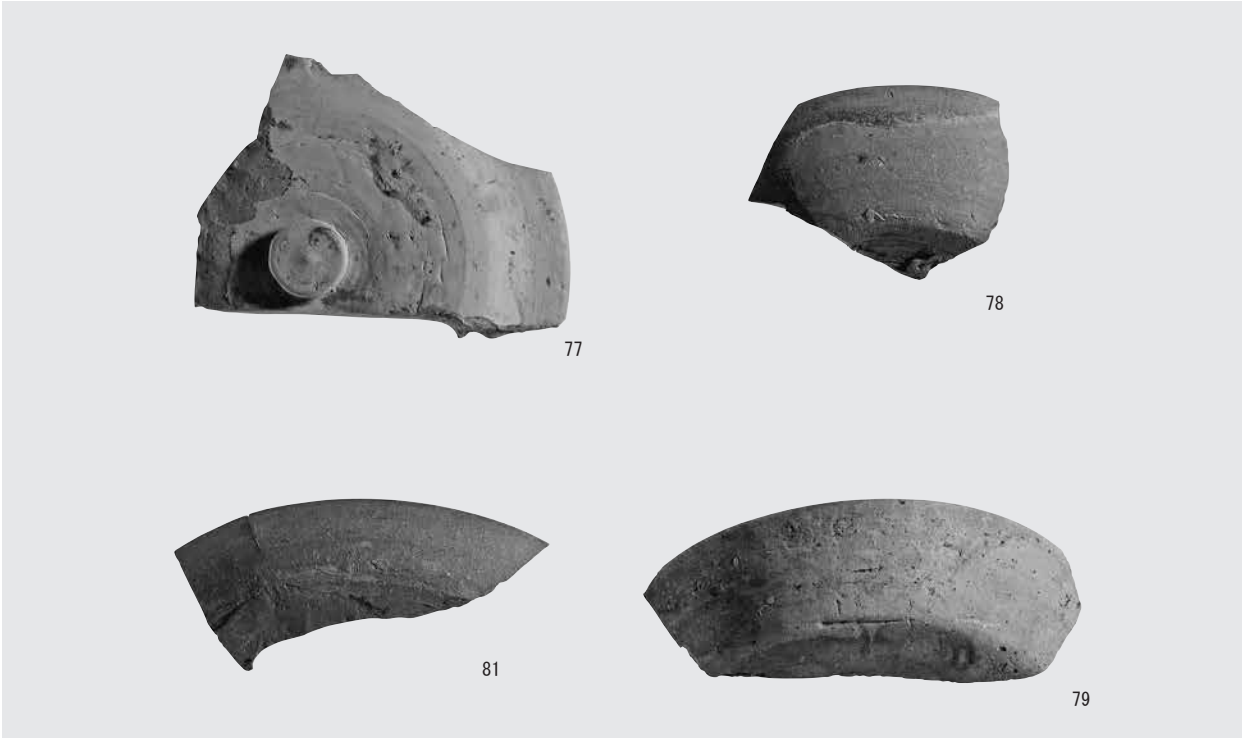
74

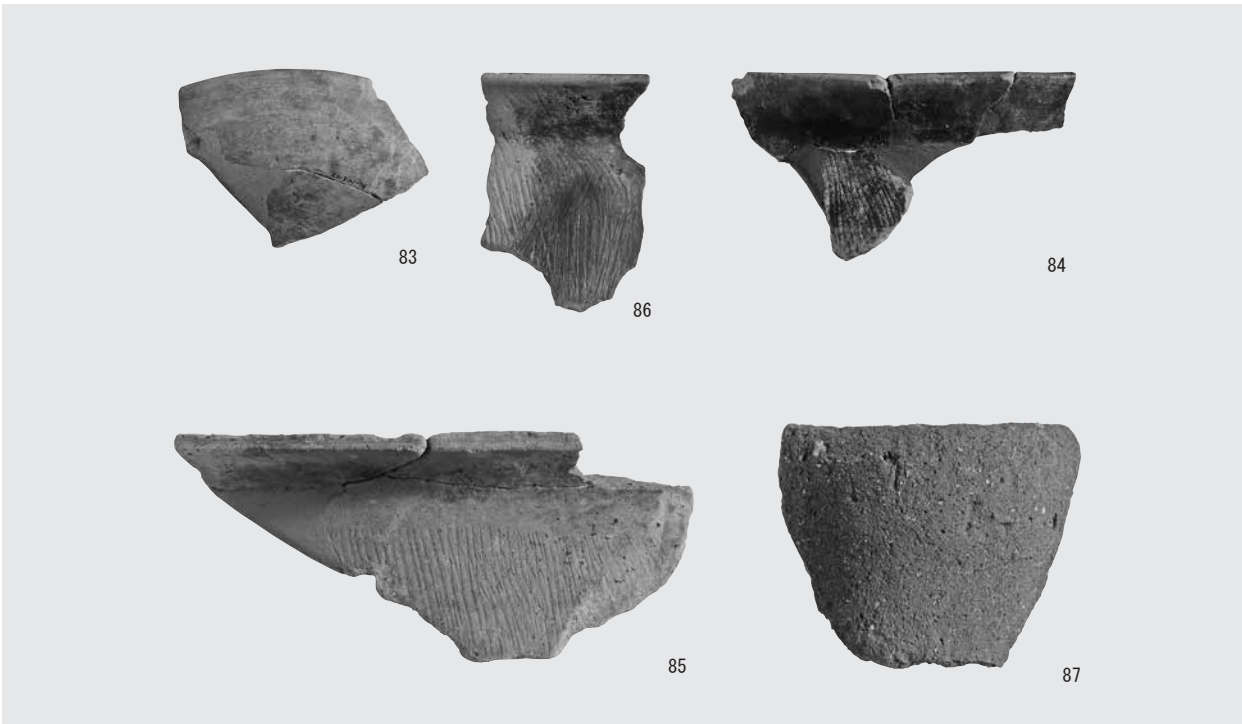
75

74・75

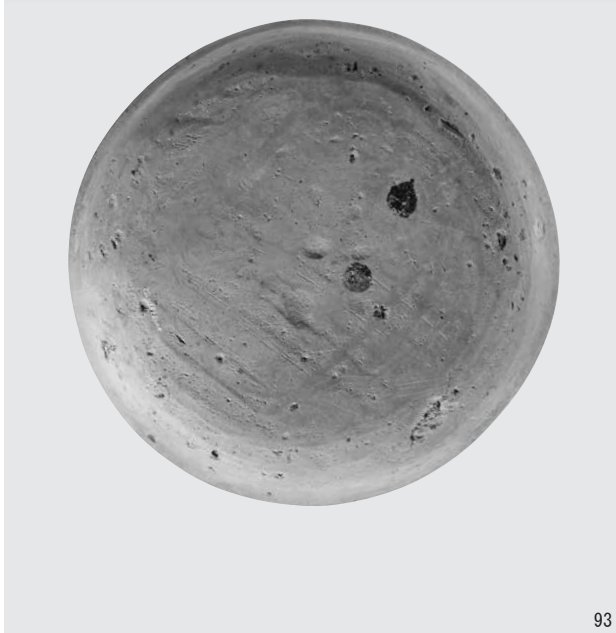
SE05 出土竈

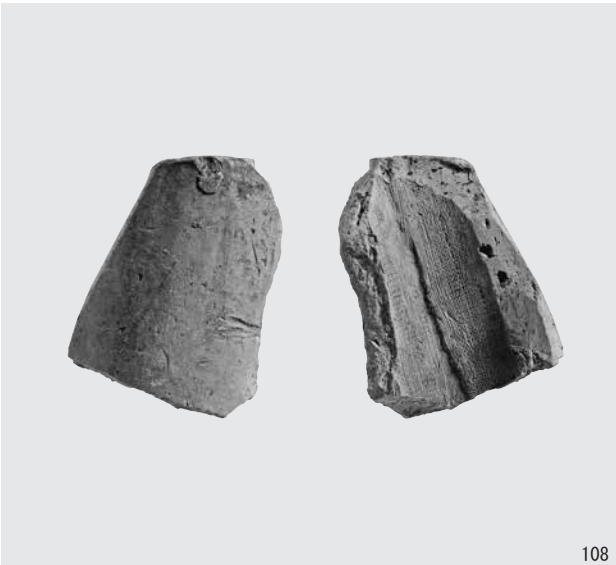






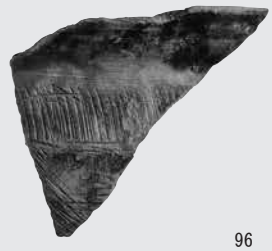
SE07 出土須恵器・土師器・製塩土器





SE08 出土須恵器・墨書土器・瓦・石製品

88

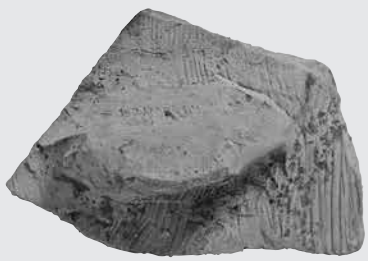

96

97

90

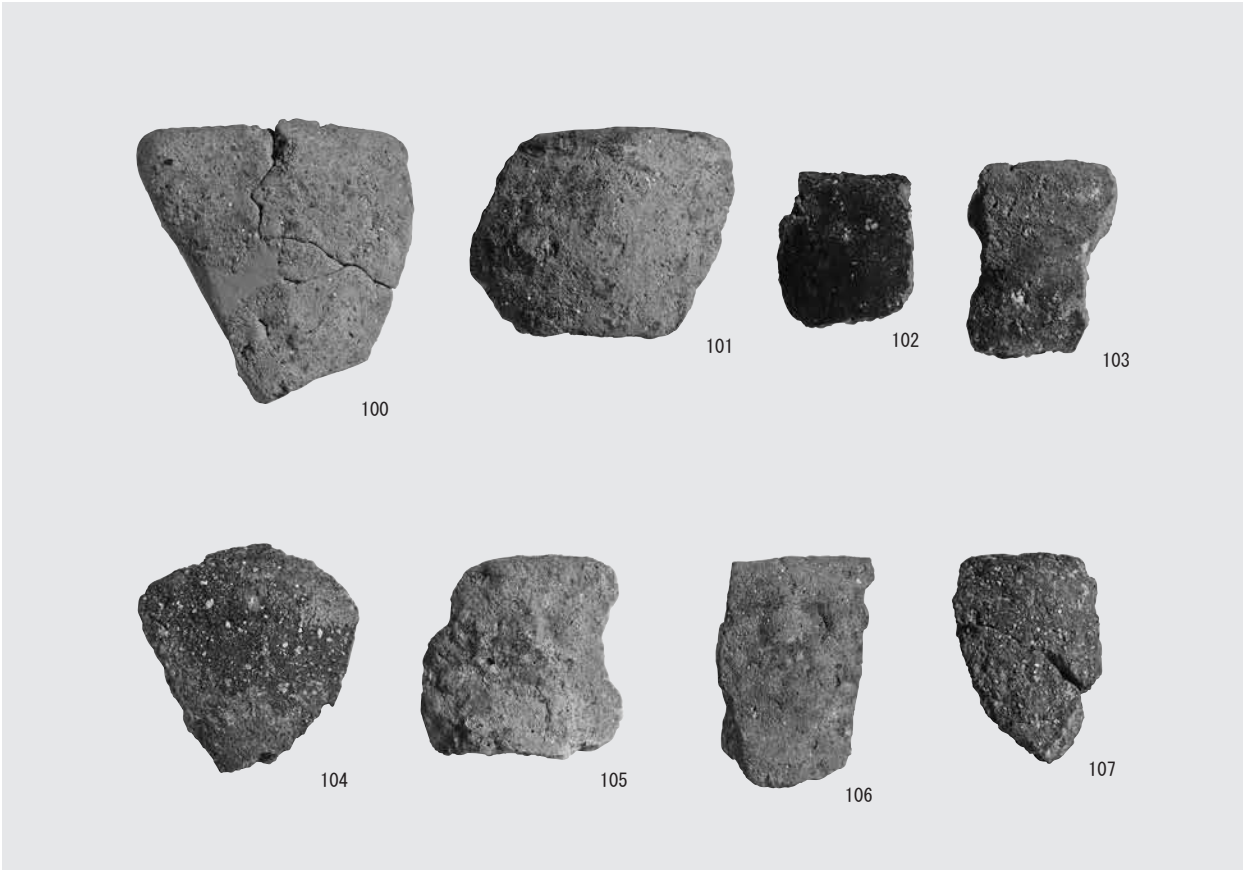
94

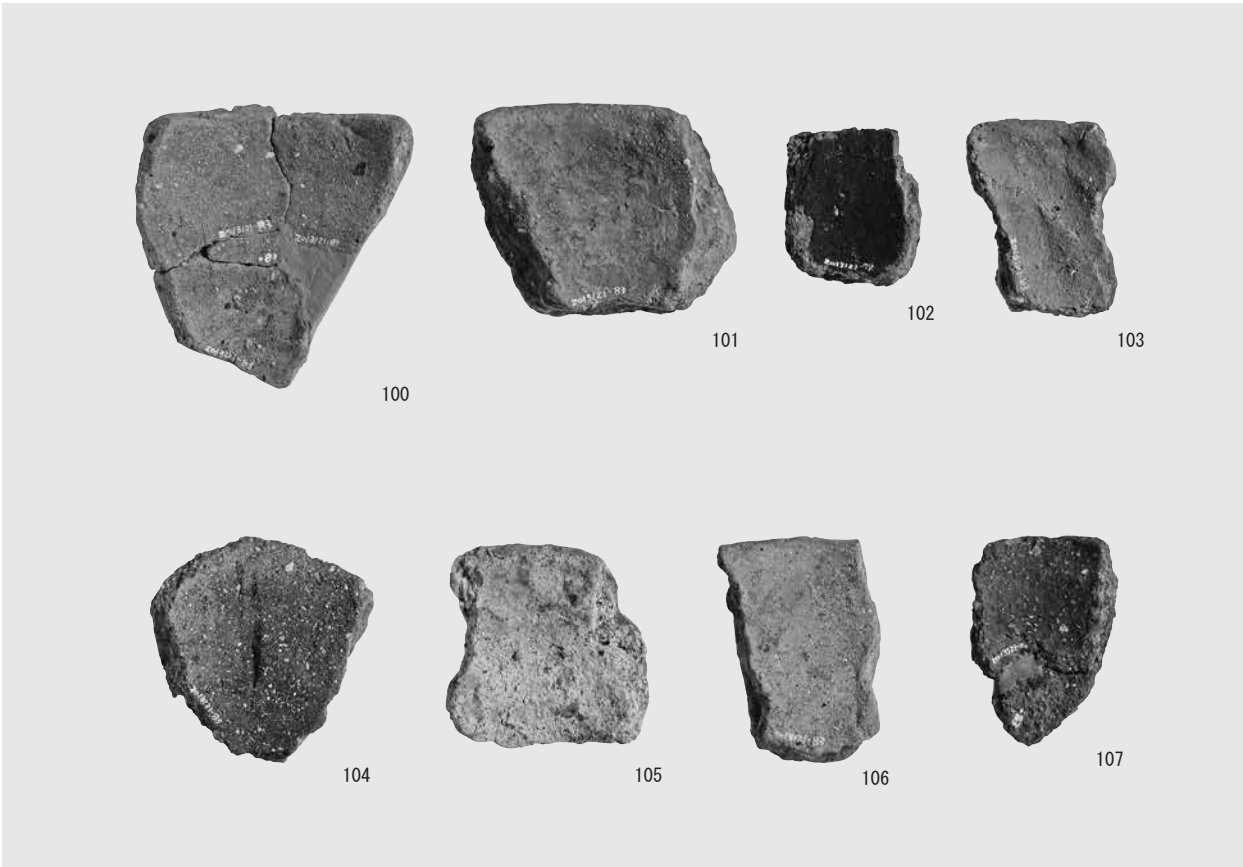
95


98

99

SE08 出土須恵器・土師器・墨書土器・竈





SE08 出土製塩土器

112

114

116

115

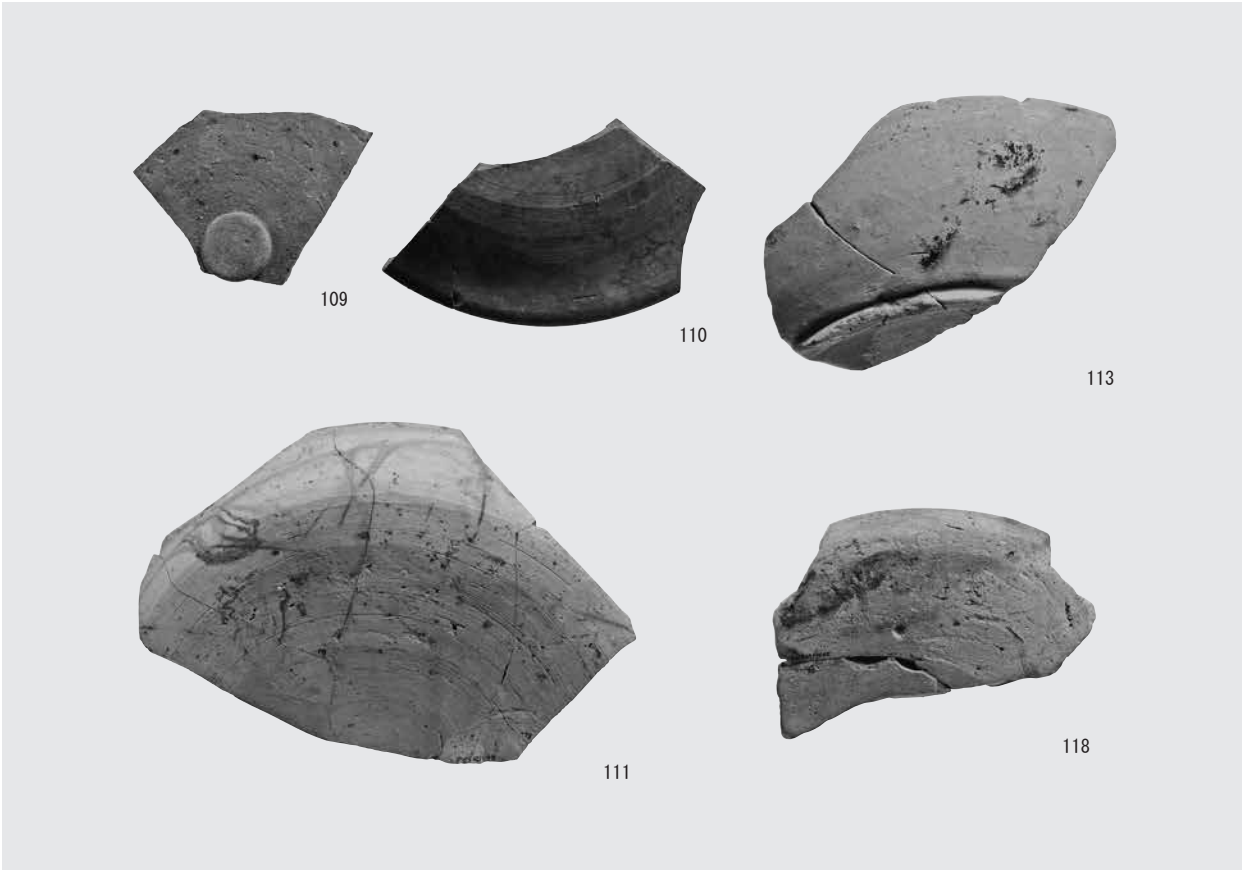
117

119

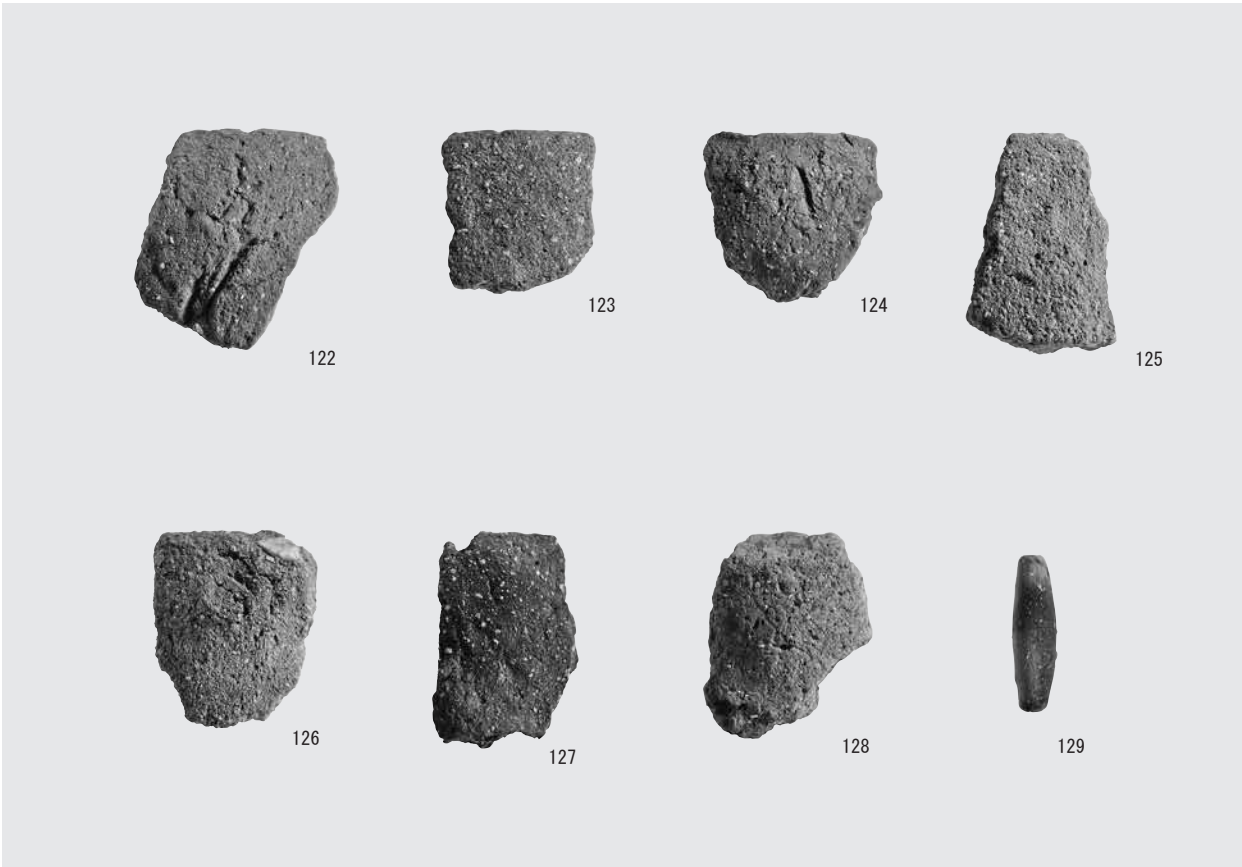
120

121

SE09 出土須恵器・土師器

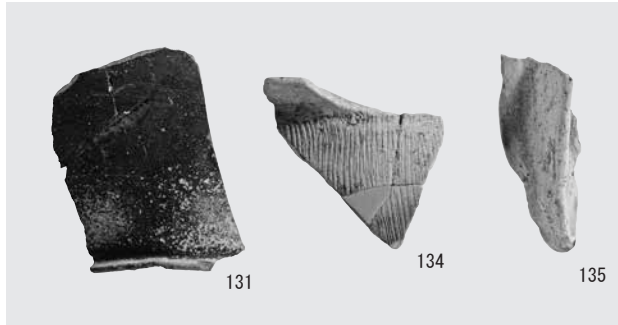


SE09 出土須恵器・土師器



SE09 出土製塩土器

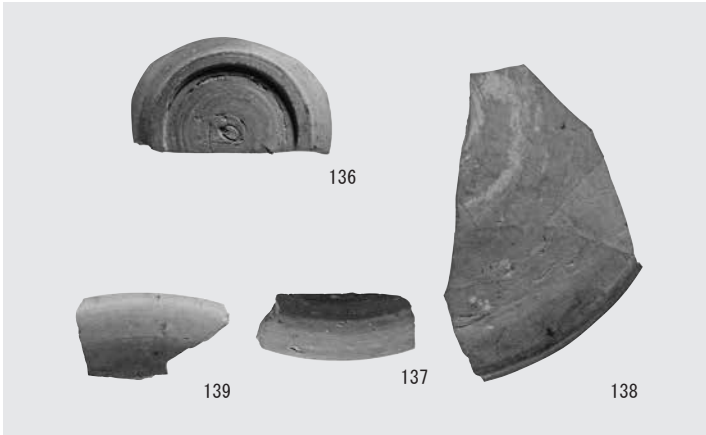
130


131 134 135

132

133

138

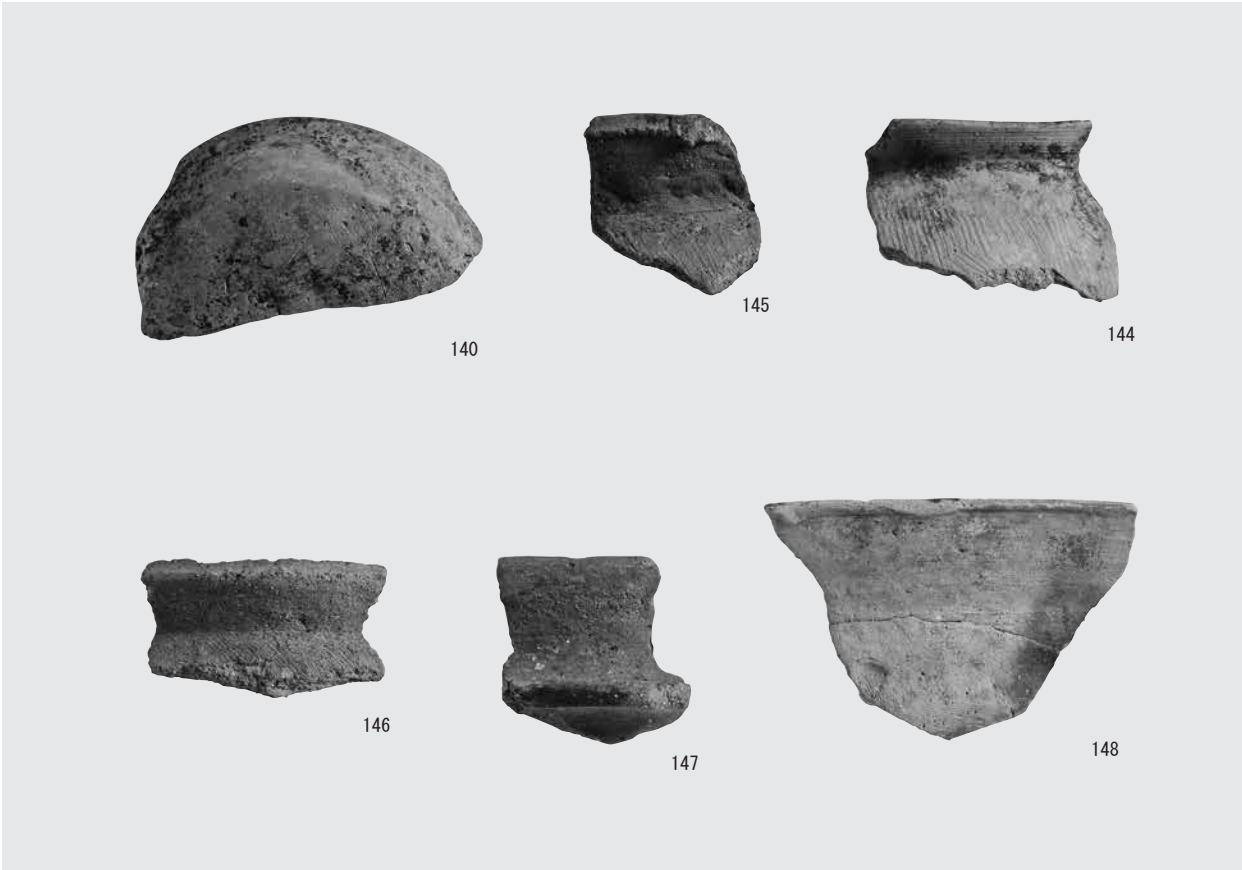

136 139 137 138

141

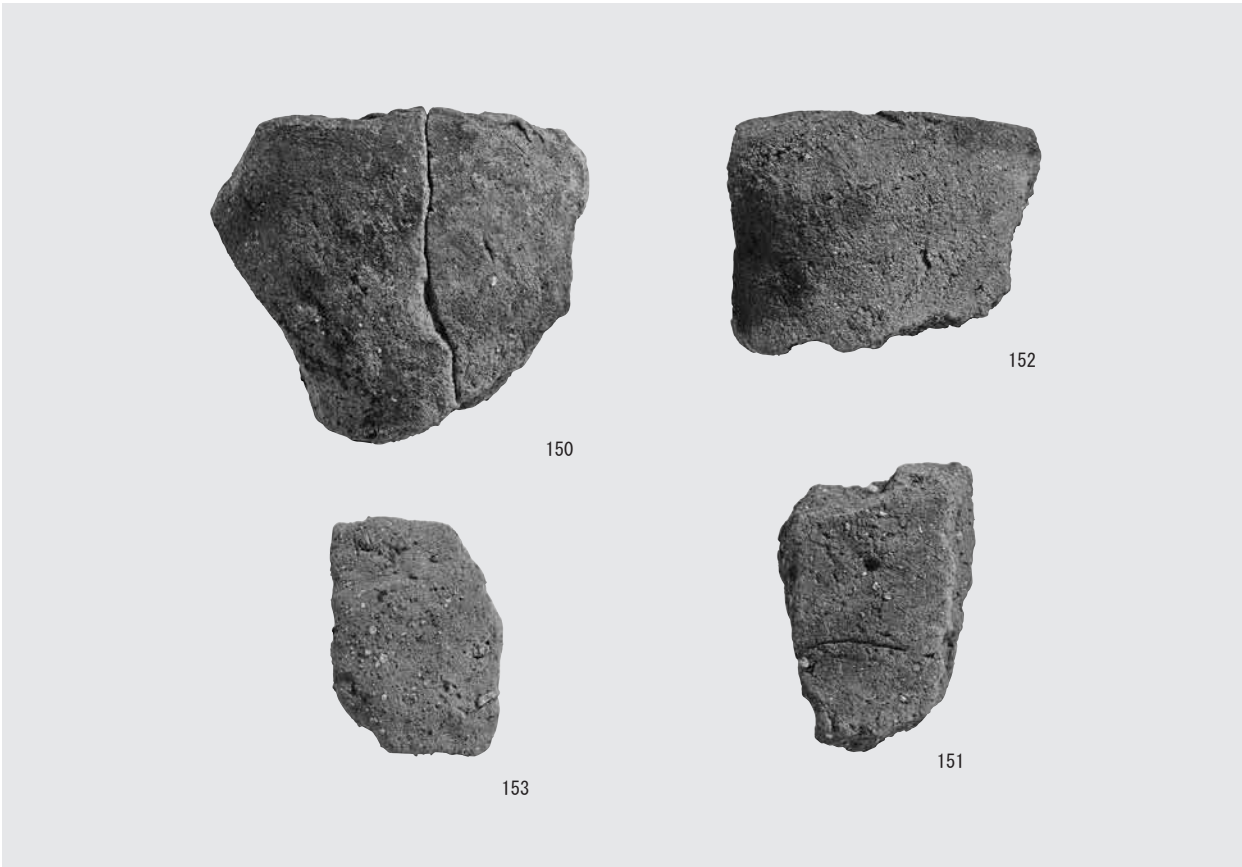
142

143

SE13 出土土器
SE14 出土土器



SE14 出土土師器



SE14 出土製塩土器

154

155

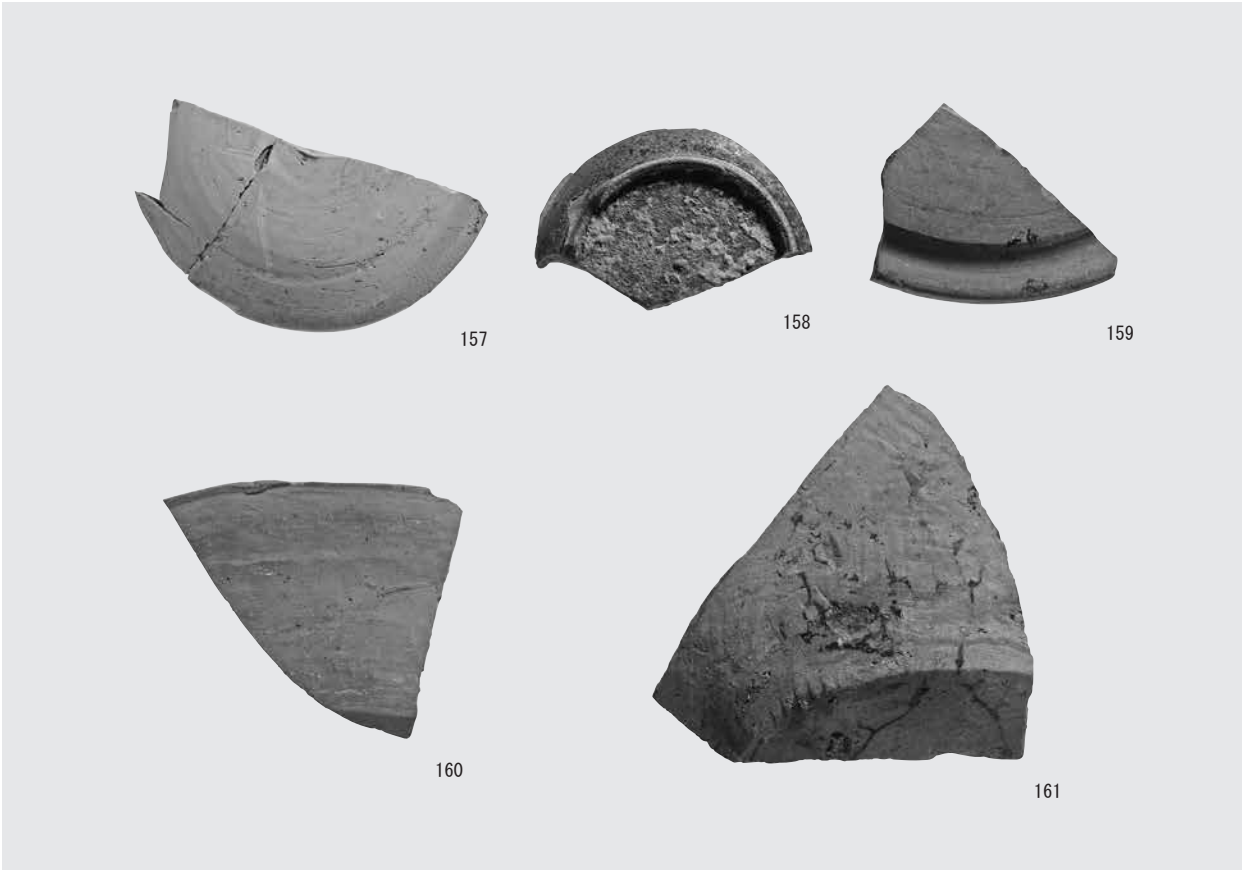
156

154

155

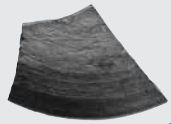
156

SE14 出土瓦



SK01 出土須恵器

SK01 出土竈


163

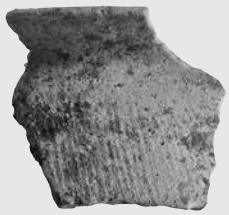
164

166

165

167

168


169

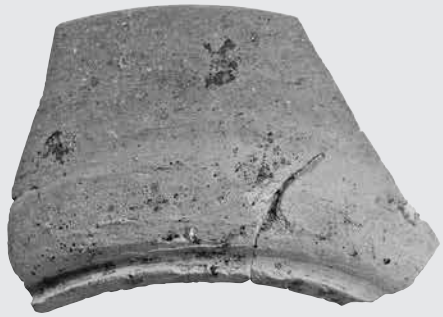
170

171

172

173

SK12-1 出土土器



174

175

SK20 出土土器

177

176

179

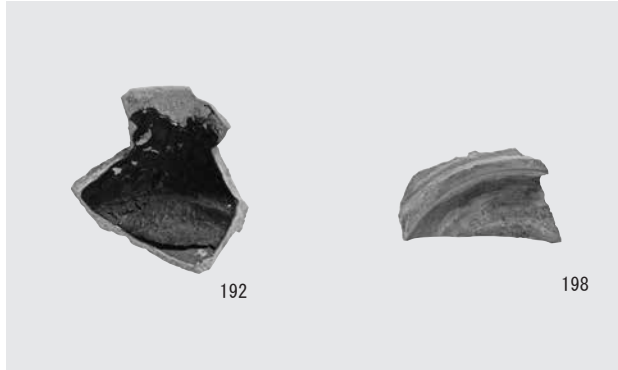
178

SP11・SP12 出土土器

180

183

186


192 198

189

190

191

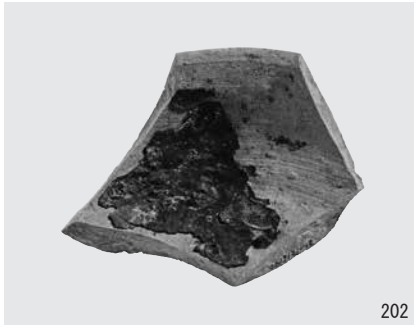
193

195

196

粘土採掘坑群出土土器 1

201


202

209

203

210

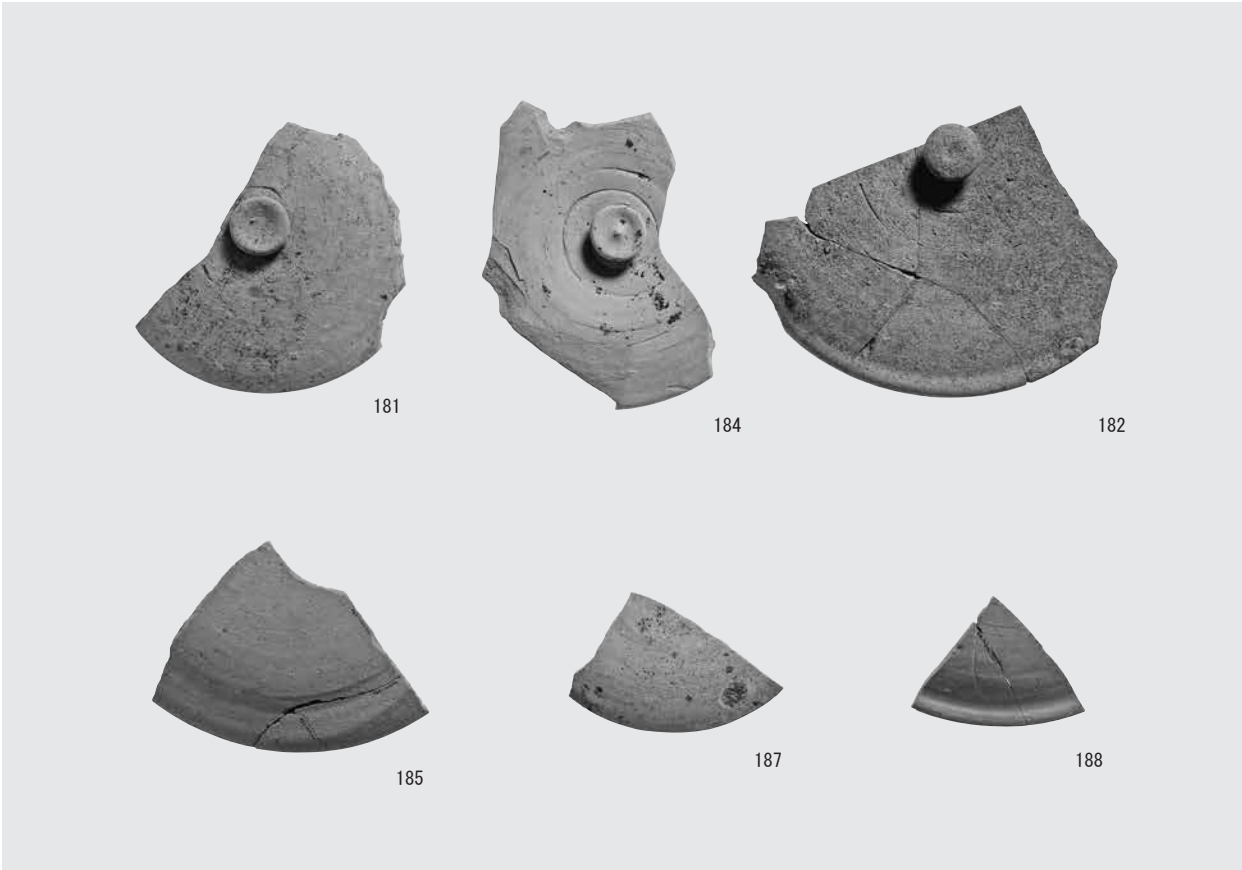
218

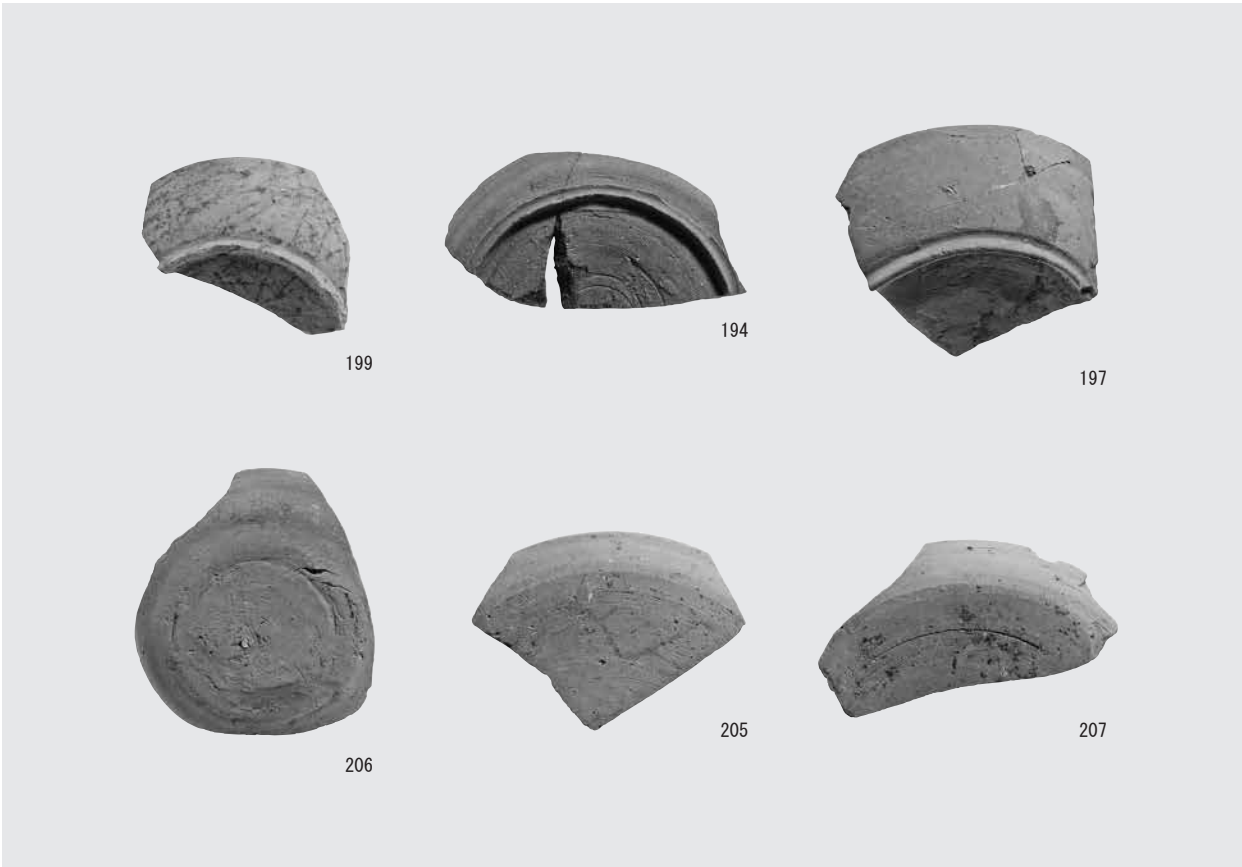
223

222

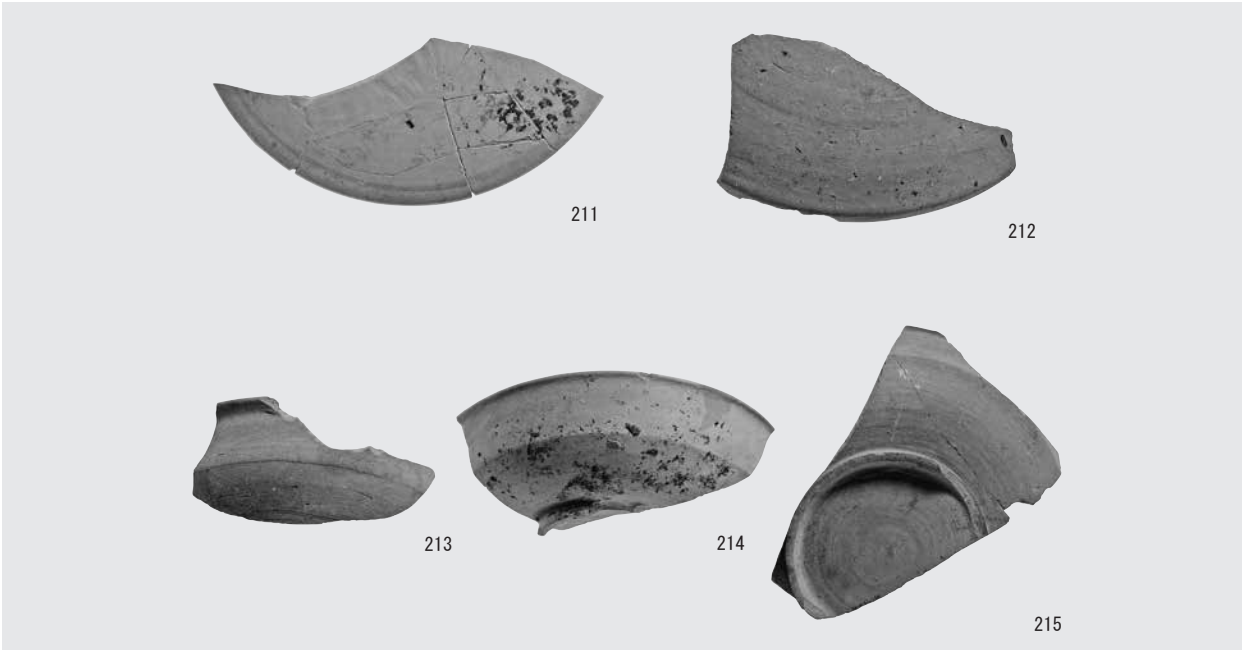
221

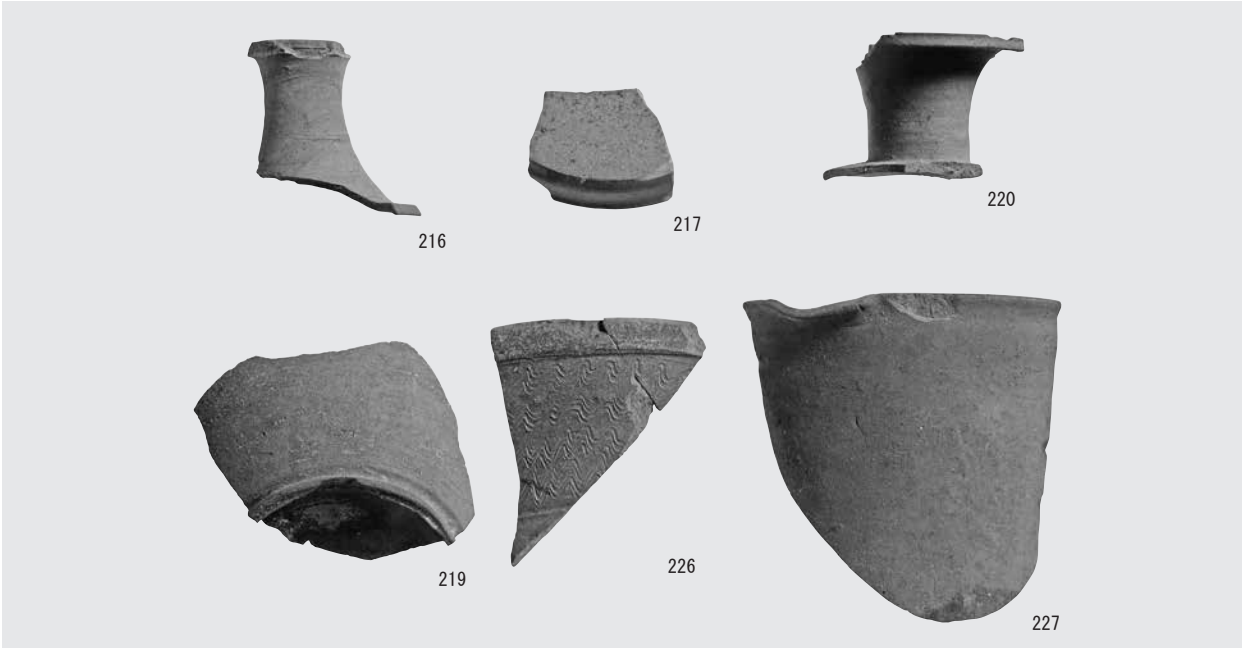
粘土採掘坑群出土土器２

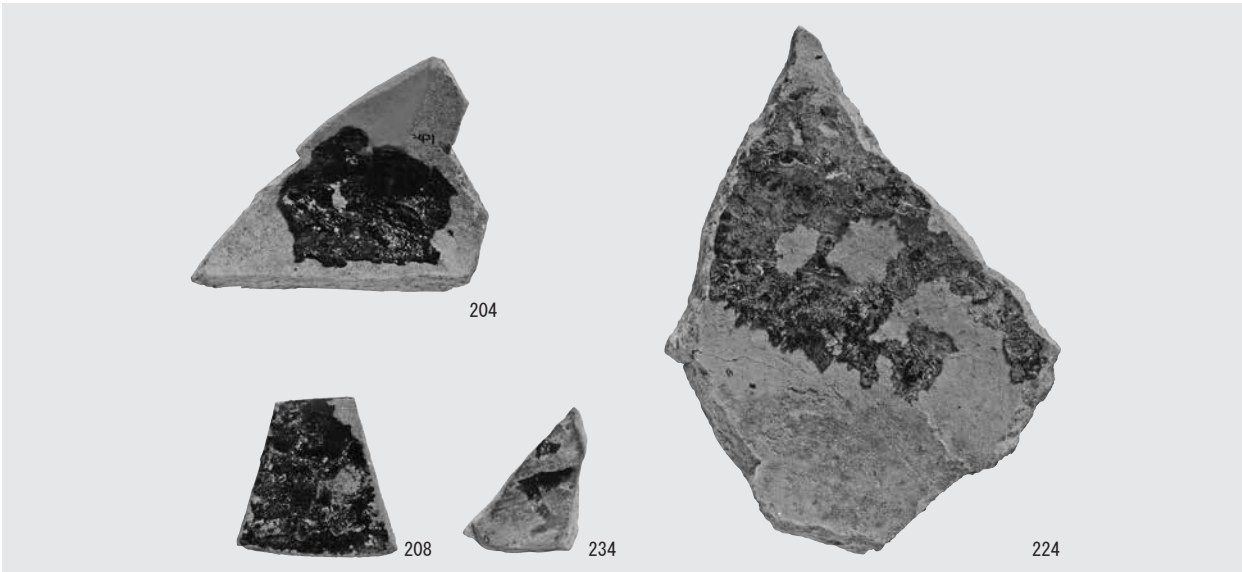




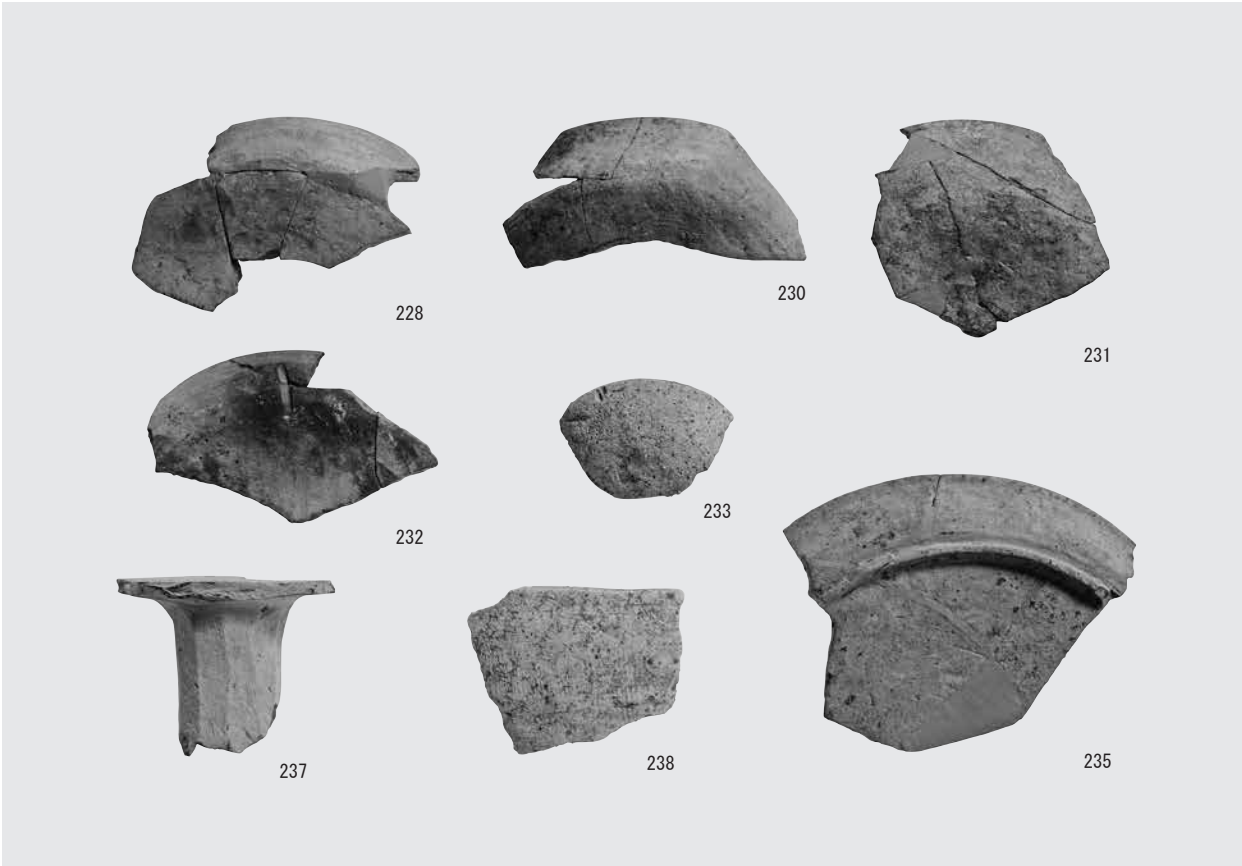
粘土採掘坑群出土土器３



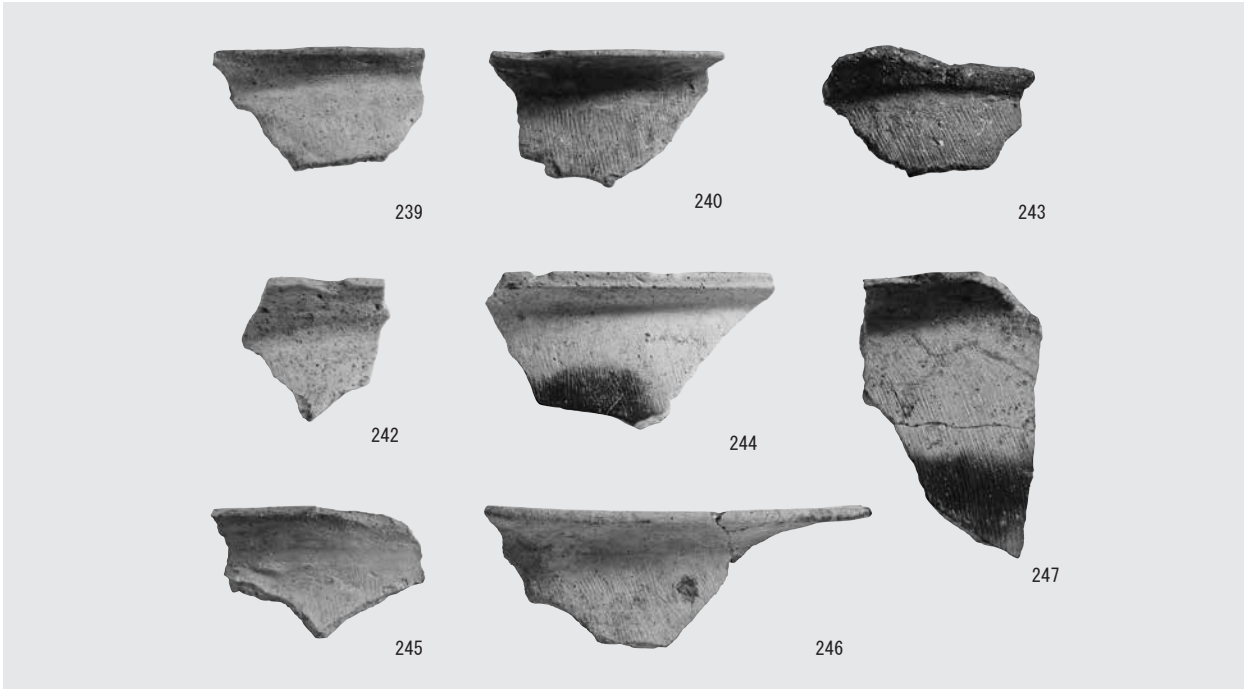


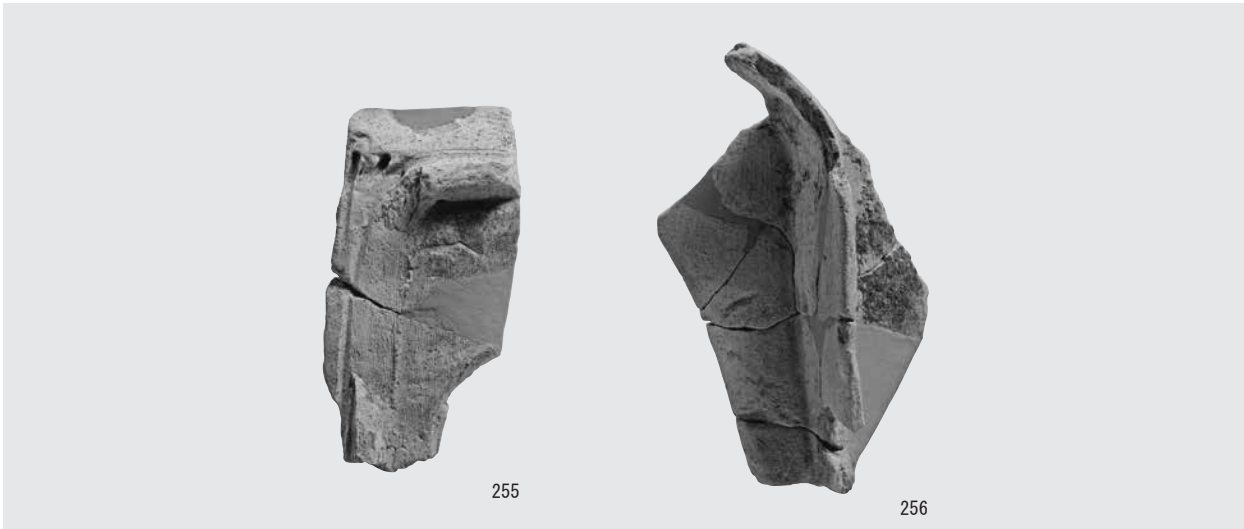


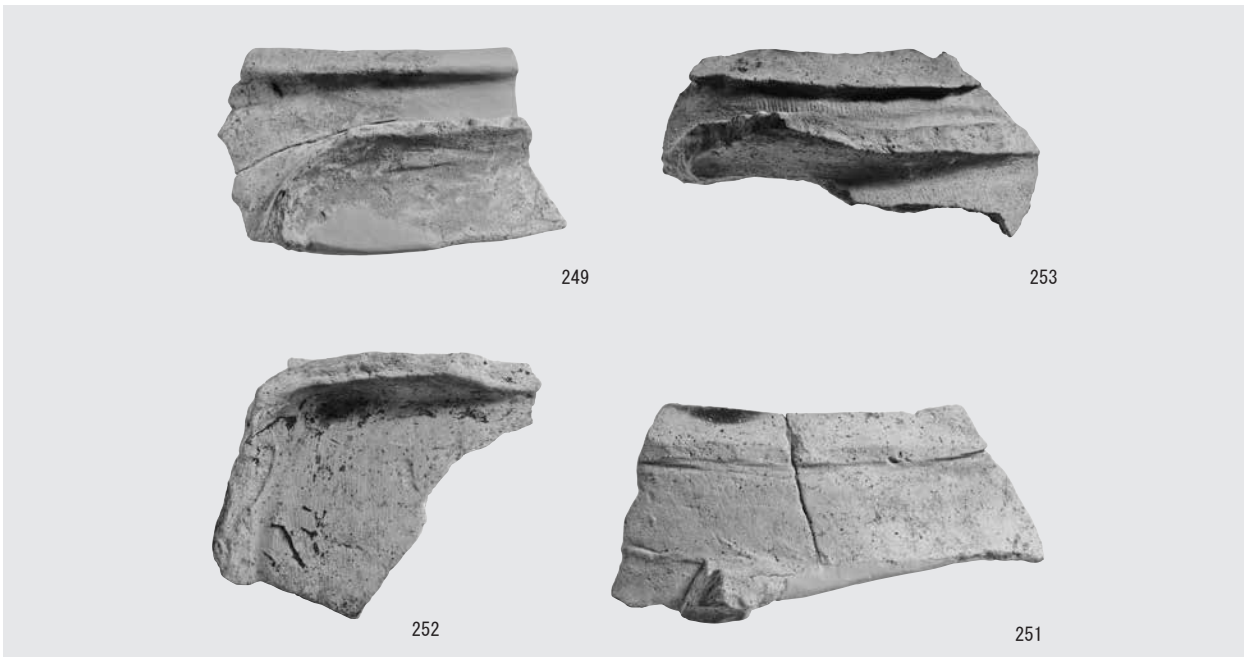
粘土採掘坑群出土土器 4



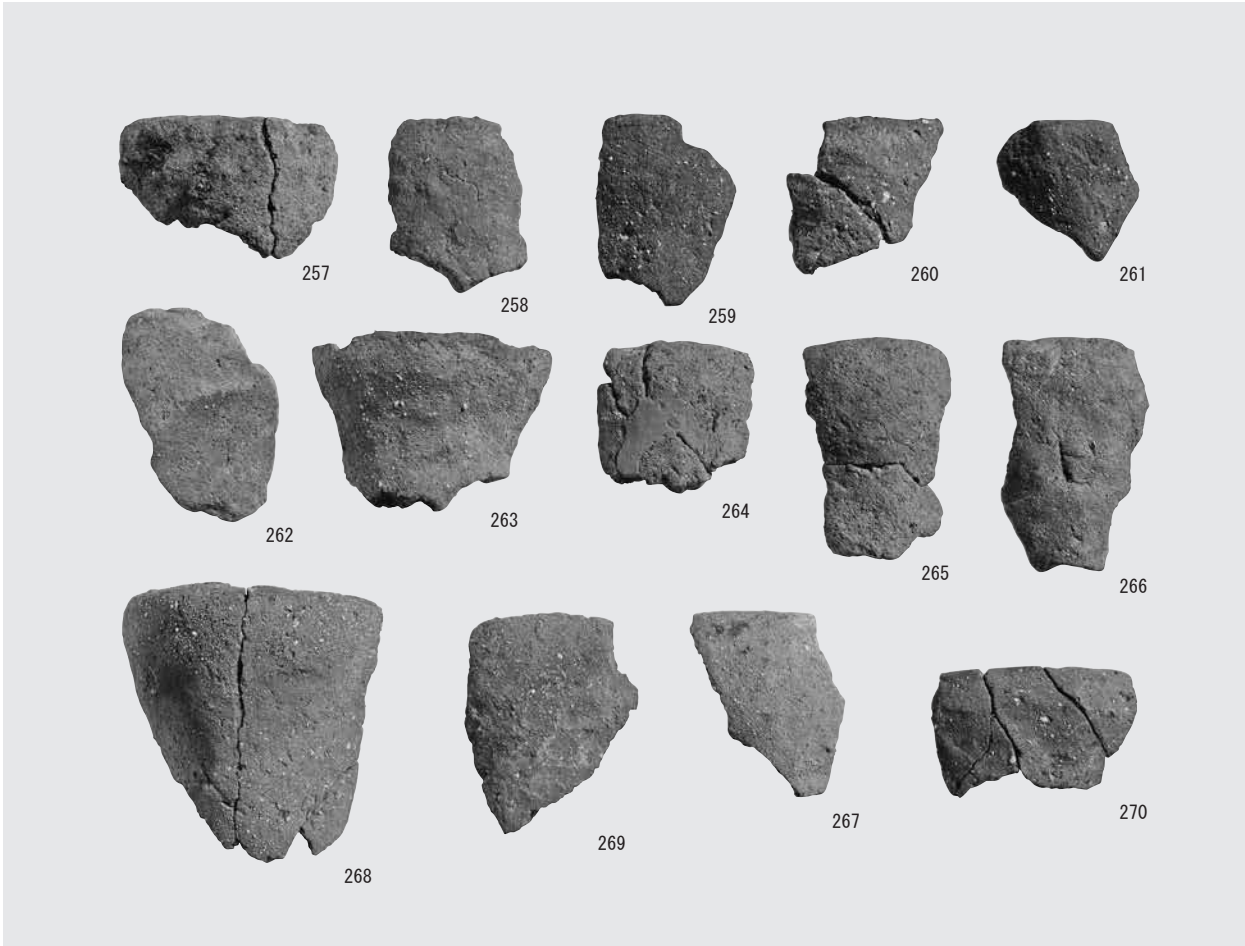
粘土採掘坑群出土土器５







粘土採掘坑群出土土器６



粘土採掘坑群出土土器 7

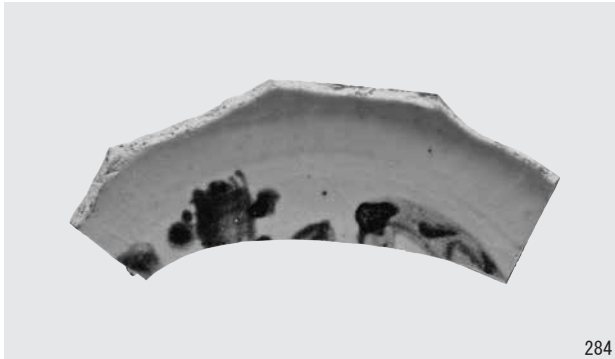
275

279

280

281

282


284

285

287

290

291

SE04 出土土器
SE11 出土瓦
SE12 出土土器

286

288

277　297

277　297

278

276

283

289

SE06 出土土器
SE10 出土土器
SE04 出土土器

294

299

298

296

300

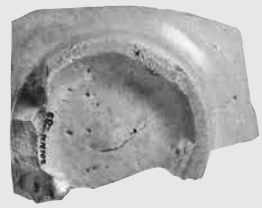
307

304 305 306

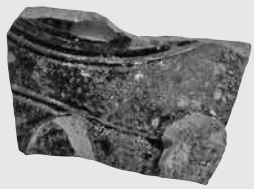
309

粘土採掘坑群出土土器１・土製品

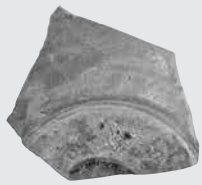
295



301



293



292

308

303

302

粘土採掘坑群出土土器２

310

311

粘土採掘坑群出土土器３

W1・W2 接合状況

W1

W2

W3

W4

SE03 出土井戸枠 1

W5

W6

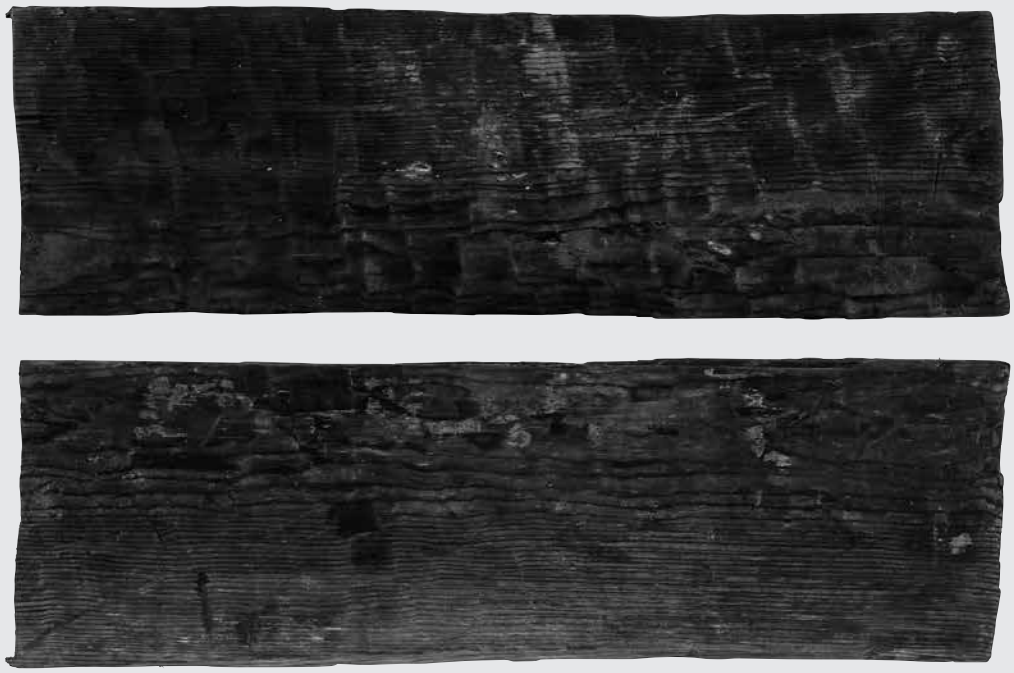
W5 アップ

W6・W7 組合せ状況

W7

SE03 出土井戸枠２

W8



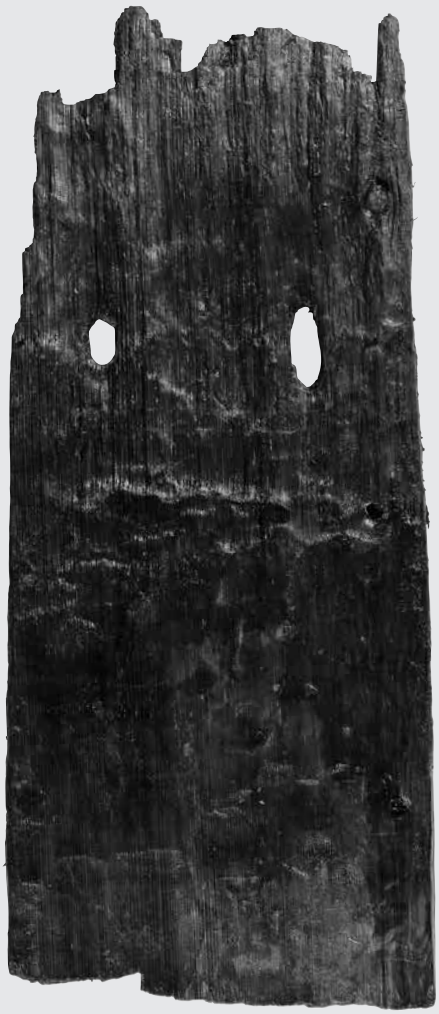
W9

W10

W11

W12

SE03 出土井戸枠３・木製品
SE05 出土木器



W22

W22・W23・W24 組合せ状況

W23

W24

W25

SE07 出土井戸枠 1

W26

W27

W28

SE07 出土井戸枠２

W44

W46

W45

W47

W31

SE07 出土木器
SE08 出土井戸枠 1

W29・W30　組合せ状況

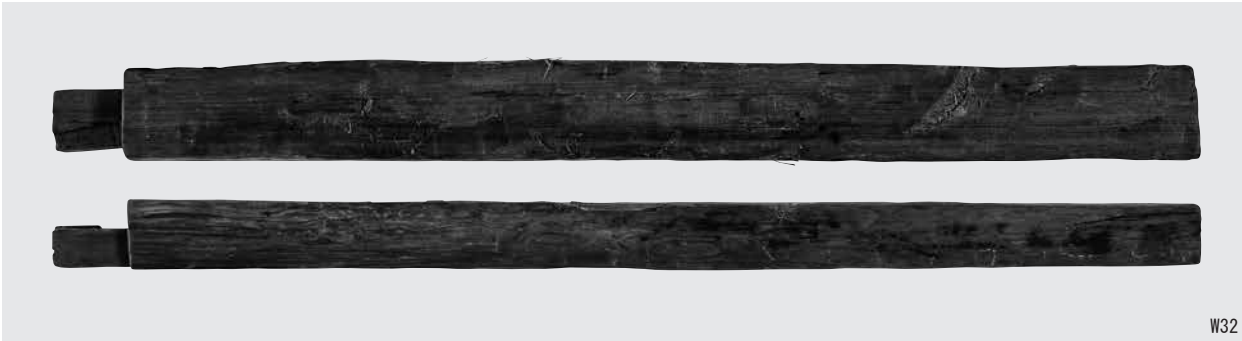
W29

W29・W30
組合せ状況（拡大）

W30

W29・W30
組合せ状況（拡大）

SE08 出土井戸枠２


W32

W32（拡大）

W34（拡大）

W33

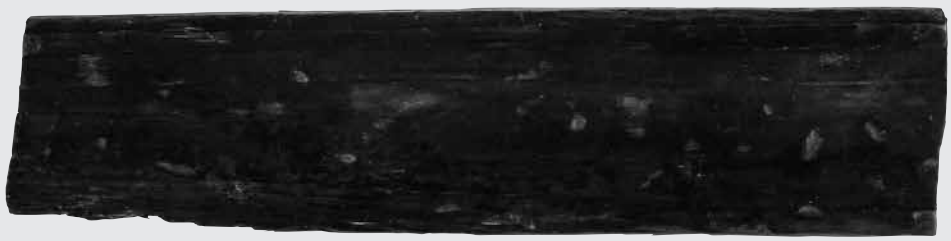
W34

W35

SE08 出土井戸枠３

W36

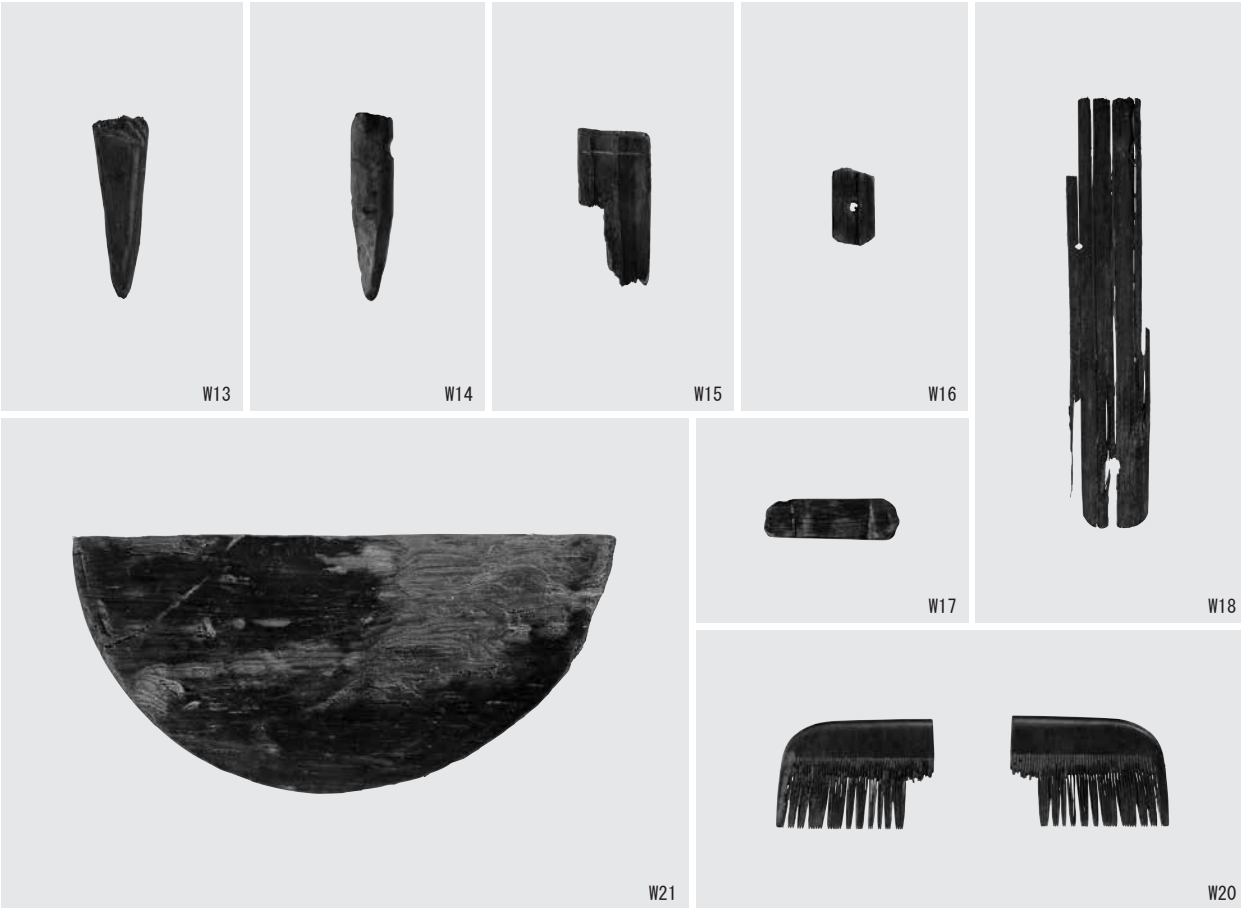
W37



W38

W43

SE08 出土井戸枠４



SE09 出土木器

SK12-2 出土木器

SX65 出土木器

W49

W50

W52

W51

W53

W55

W54

W56

SE04 出土木器 1

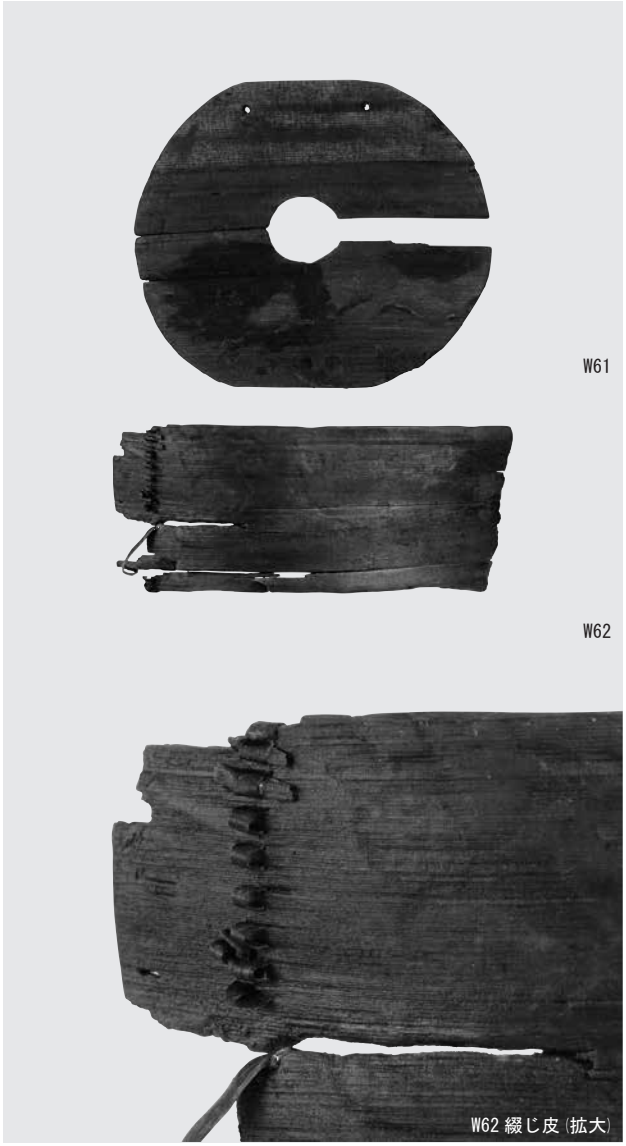
W58

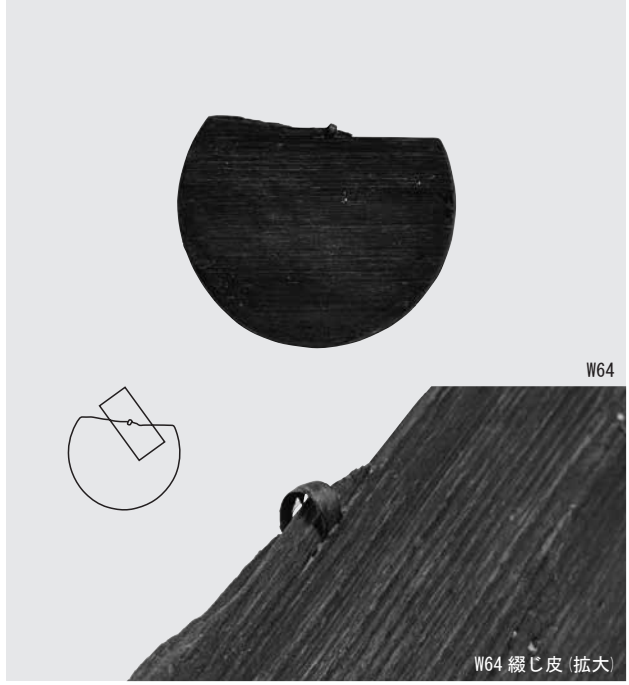
W57

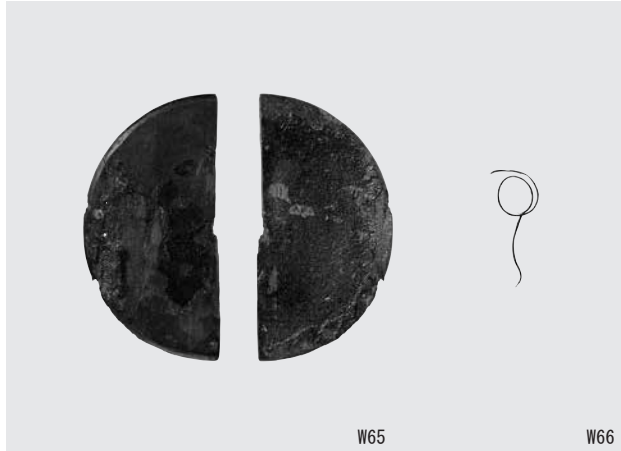
W59

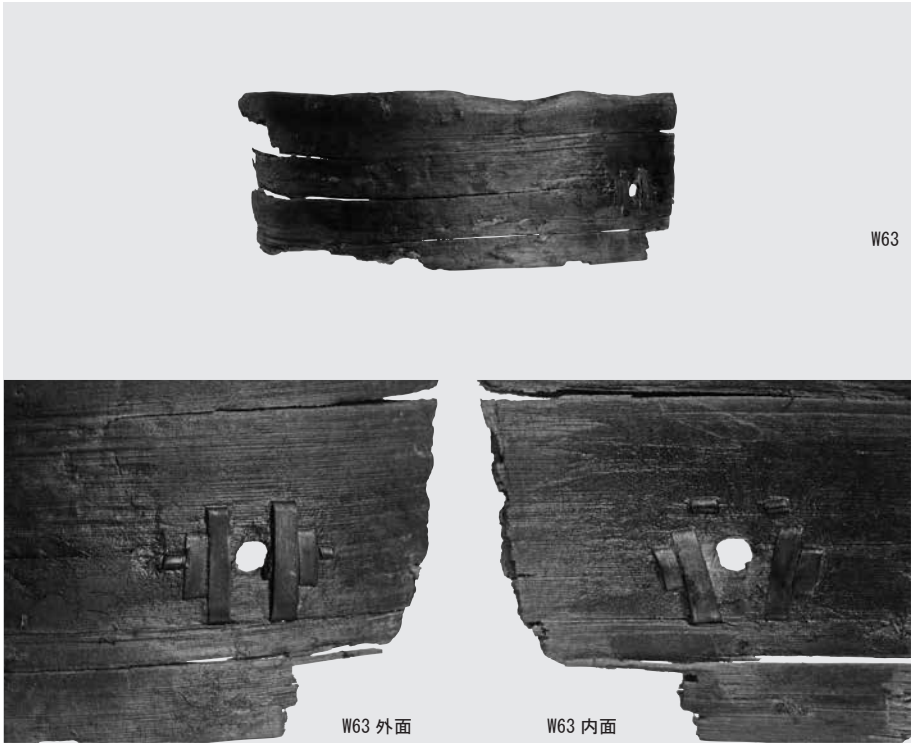
W60

SE04 出土木器２









SE04 出土木器３

W68

W68（拡大）

W67

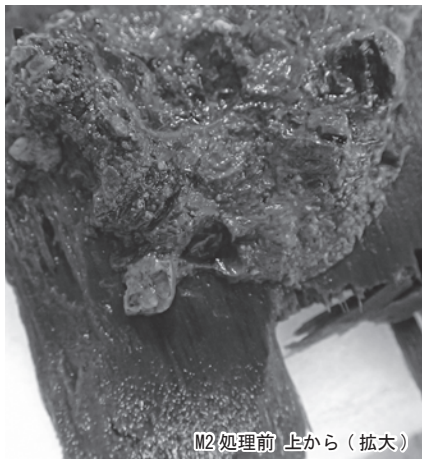
W69

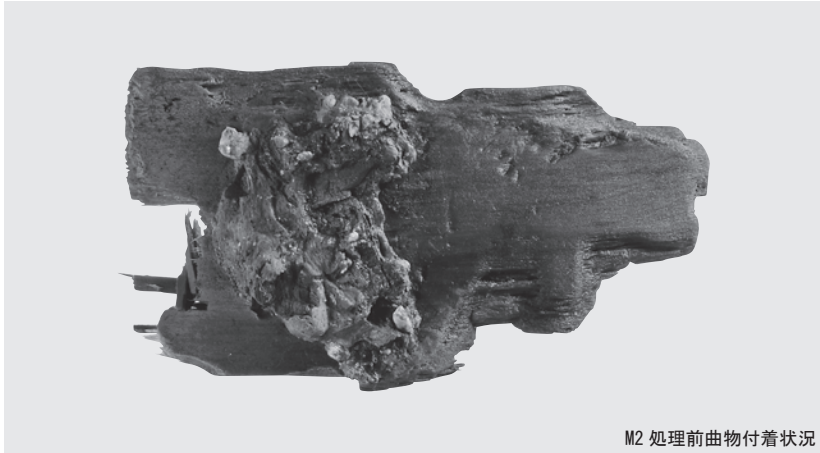
W70

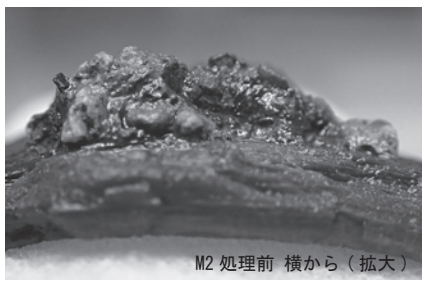
SE04 出土木器４

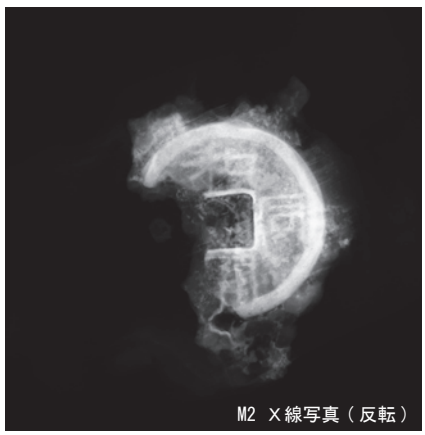
出土石製品

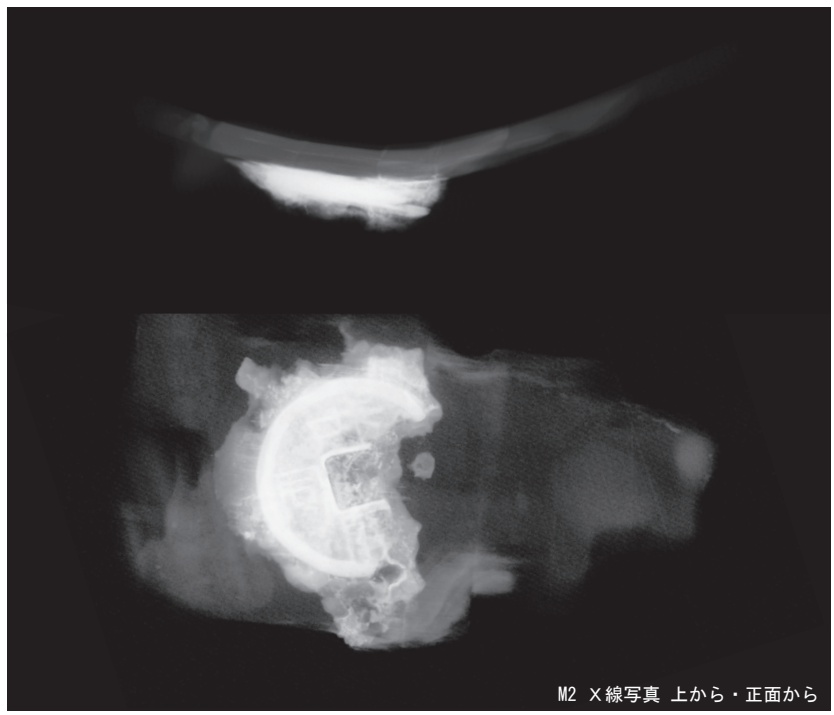
M1


M2 処理前 上から（拡大）


M2 処理前曲物付着状況


M2 処理前 横から（拡大）


M2 X線写真（反転）

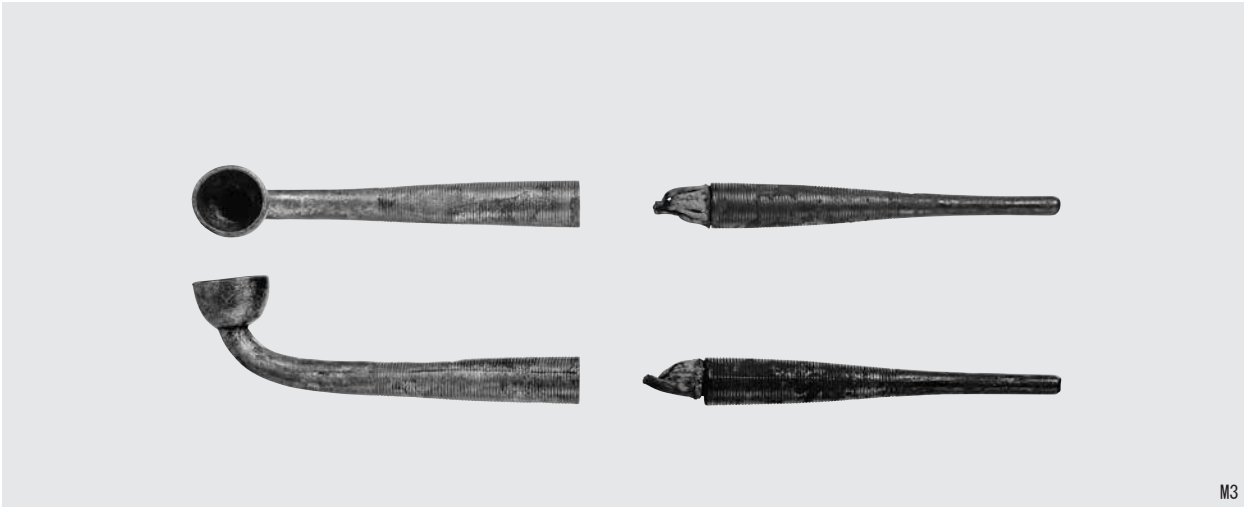

M2 X線写真 上から・正面から

M2 処理後

M2「門」反転圧痕（拡大）

M2「和」（拡大）

SE08 出土刀子
SE09 出土和同開珎処理前
SE09 出土和同開珎X線透過
SE09 出土和同開珎処理後

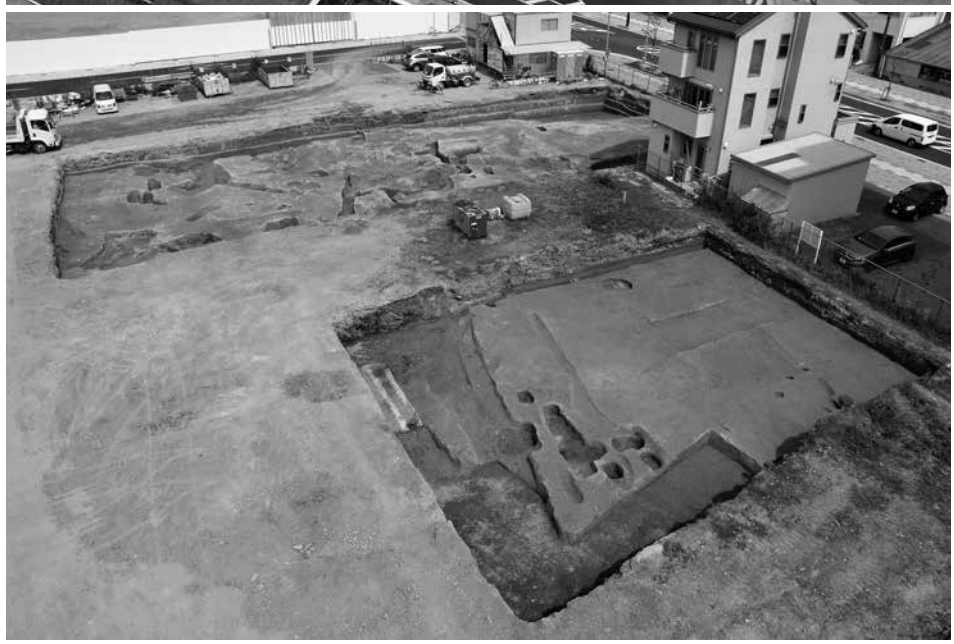


出土金属器（近世）

駅前町遺跡

調査地遠景（北上空から）

調査区近景
（北西上空から）



調査区近景（東から）

調査前状況（南から）

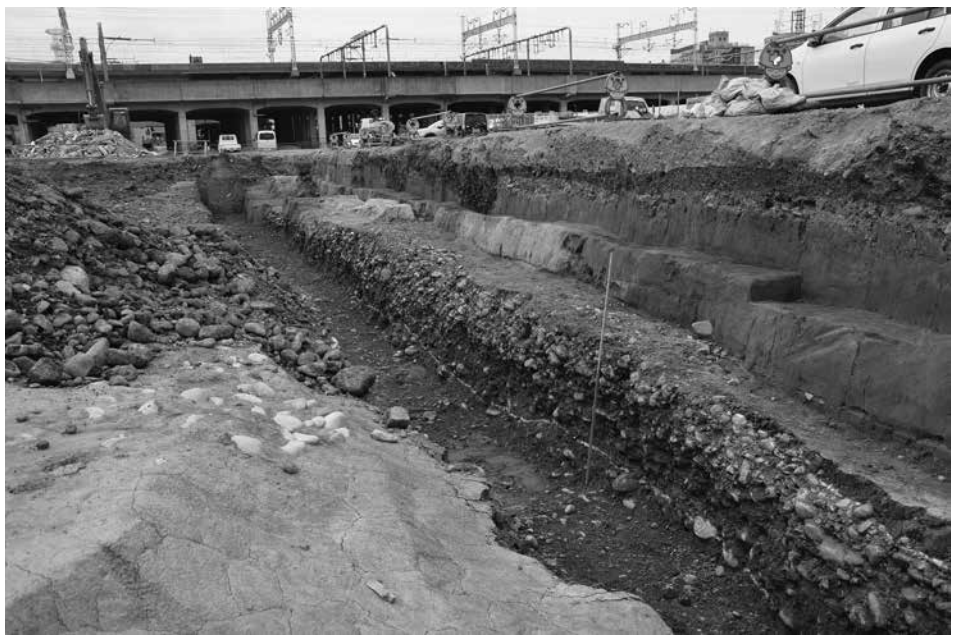
調査区全景（南から）

調査区北半全景
（南東から）

調査区南半全景
（東から）

調査区西壁土層断面
（南東から）

下層確認トレンチ土層断面
（南東から）



下層確認トレンチ土層断面
（北東から）

SD01 全景（南西から）

SD01 北側土層断面
（南から）

SD01 南側土層断面
（南から）

SD02 全景（南西から）

SD02 土層断面
（南西から）

SR01 全景（東から）

SR01 北端土層断面
（南から）

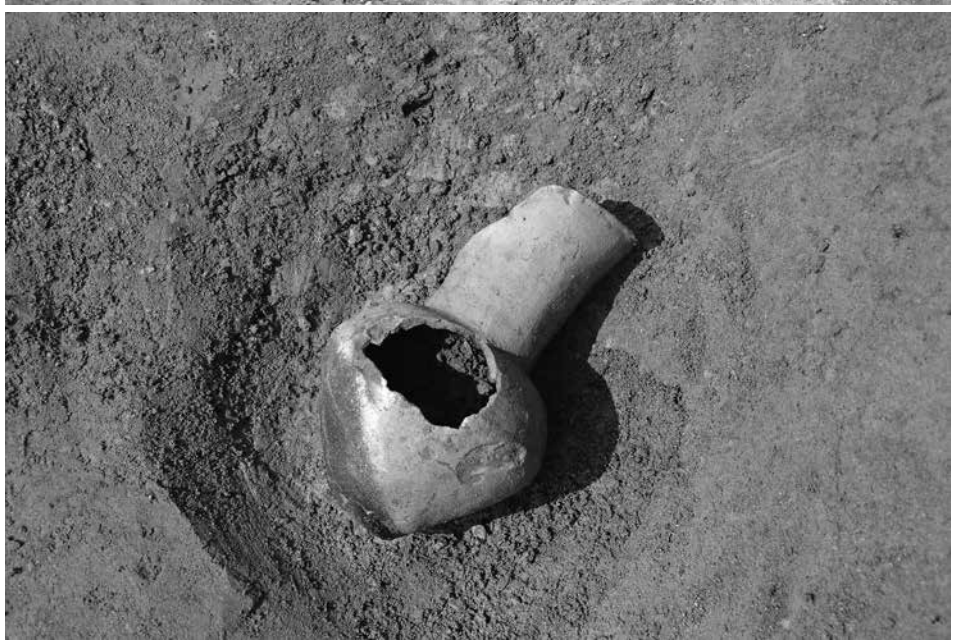
SR01 中央部西半
土層断面（南から）

SR01 中央部東半
土層断面（北から）

SR01 東側土層断面
（南東から）

SR01 西側土層断面
（西から）

SR01 西端部土層断面
（東から）



SR01 弥生土器出土状況
（南から）

SR01 土師器出土状況
（南から）

SR01 須恵器出土状況
（北から）

SR02 全景（南から）

SR02 土層断面（西から）

鋤溝２（南から）

鋤溝３（西から）

調査前状況（西から）

調査区全景（南から）

調査区全景（南西から）

調査区北壁土層断面
（南西から）

調査区西壁土層断面
（南東から）

調査区西壁土層断面詳細
（東から）

調査区周辺の状況
（東から）

機械掘削状況（北東から）

人力掘削状況（東から）

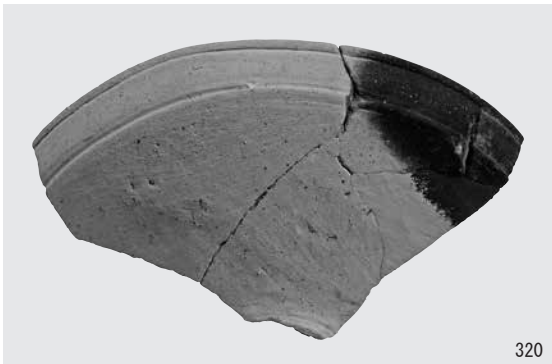
流路掘削状況（南から）

遺物検出状況（南から）

写真撮影状況（東から）

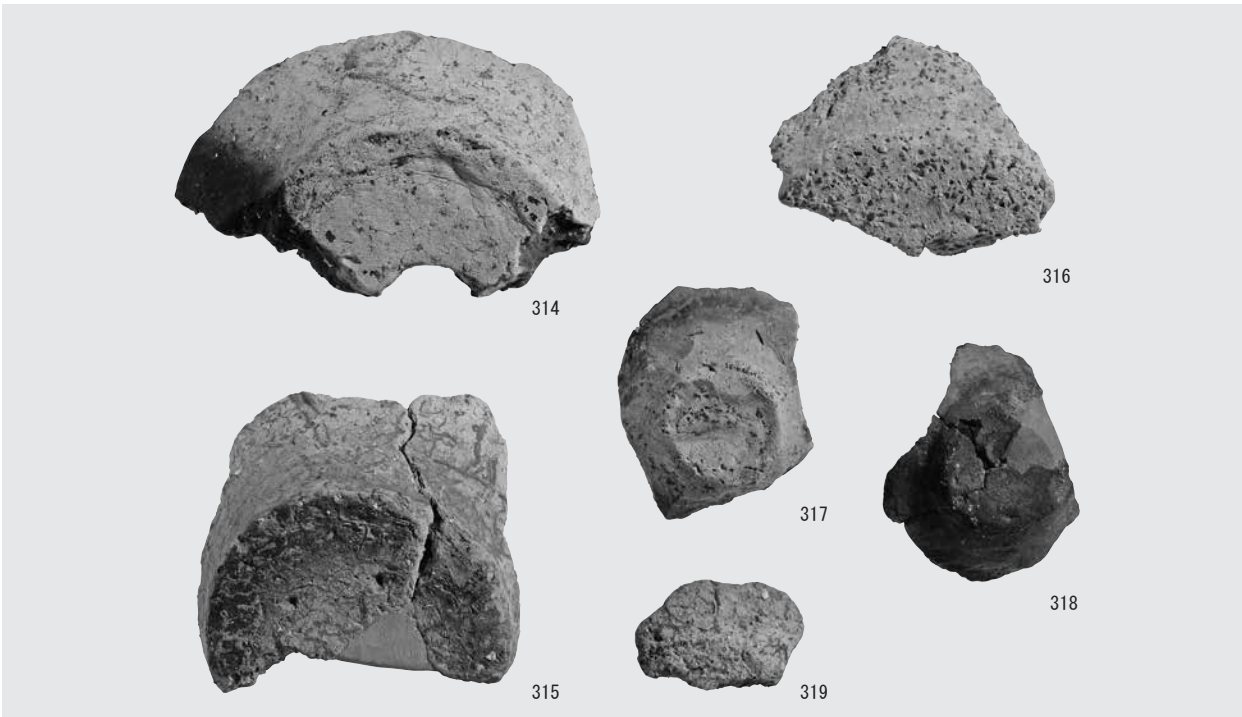
312

313


320

321

322


314

316

317

318

315

319

出土土器 1

323

326

324

325

327

328

329

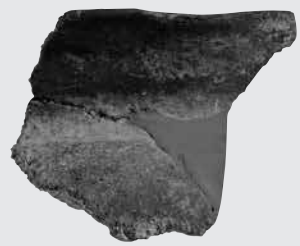
出土土器２

330

331

332

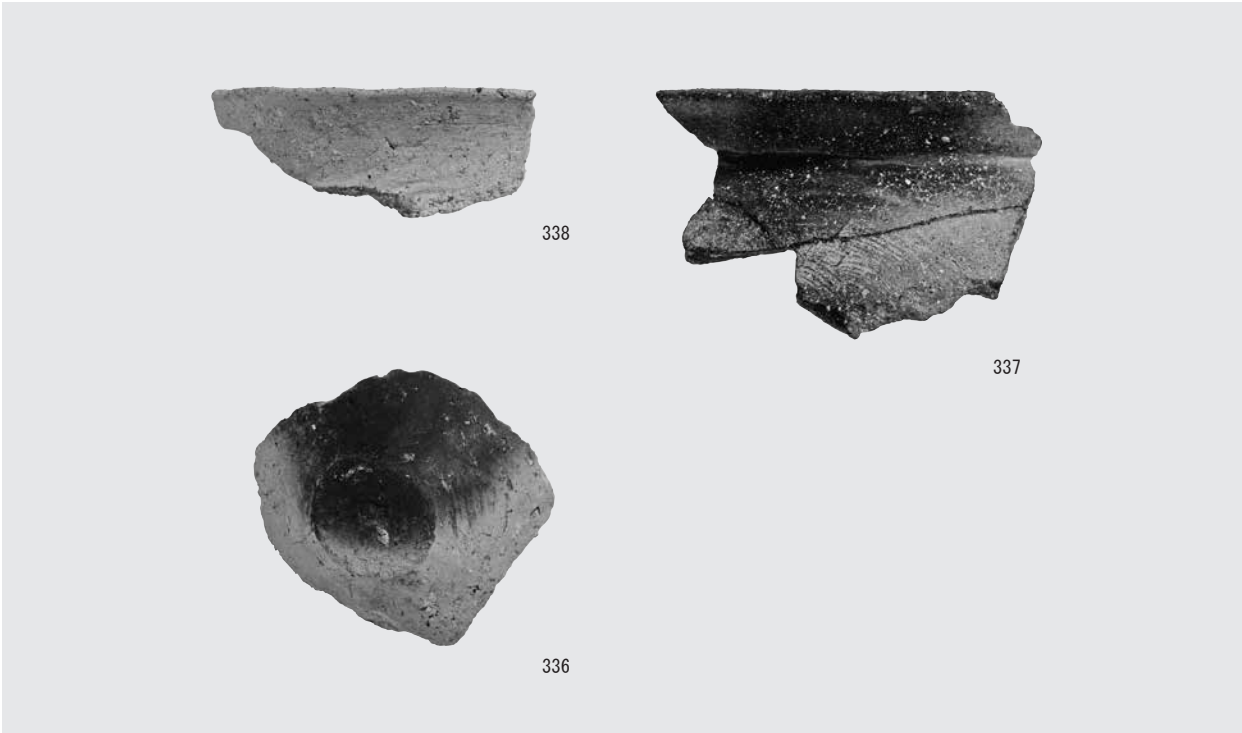
333

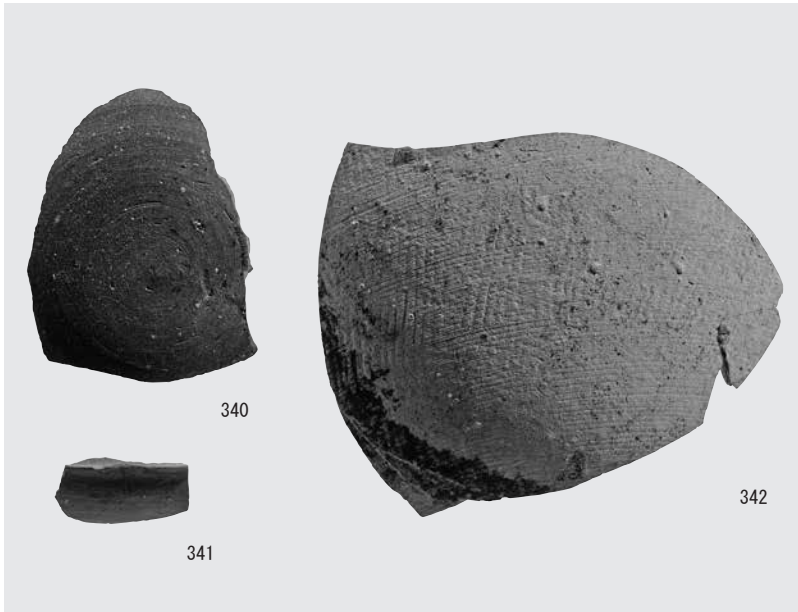


335

334

出土土器３





出土土器４

出土石器・金属製品

報 告 書 抄 録

ふ り が な	とうふまちいせき・えきまえちょういせき
書　　名	豆腐町遺跡Ⅲ・駅前町遺跡
副 書 名	姫路駅周辺地区総合整備事業（キャスティ21）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第507冊
編 著 者 名	大本朋弥・菱田淳子・渡瀬健太・中川　渉
編 集 機 関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所 在 地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号（兵庫県立考古博物館内）　TEL079-437-5561
発 行 機 関	兵庫県教育委員会
所 在 地	〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号　TEL078-362-3784
発行年月日	平成31（2019）年3月25日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所 在 地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号　TEL079-437-5589

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間（遺跡調査番号）	調査面積（㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
豆腐町遺跡・駅前町遺跡	姫路市豆腐町・南駅前町	28201	020459・020464	34°49′38″	134°41′33″	平成25年11月5日～平成26年2月28日（2013121） 平成26年6月2日～平成26年9月1日（2014009・010）	豆腐町 8893㎡ 駅前町 931㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
豆腐町遺跡	集落跡	奈良時代・近世	井戸・土坑 井戸・粘土採掘坑	須恵器・土師器・漆付着土器・墨書土器・和同開珎・木製品	
駅前町遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代	溝・流路跡	弥生土器・須恵器・土師器	

要　　約

豆腐町遺跡

8世紀の井戸8基、土坑及び柱穴を調査した。井戸は素掘り・木組み・曲物積の3種類があり、井戸からは多数の須恵器・土師器・製塩土器・竈と、墨書土器・漆付着土器などの土器、和同開珎・刀子などの金属製品と斎串・横櫛といった木製品が出土している。また、井戸からは昆虫遺体・動物遺体（マダイ亜科）・種実遺体も出土しており、周囲の環境および食性を理解するうえでも重要な資料が得られた。

これらの井戸は、西側隣接地点で調査された道路跡の推定ラインに並行して直線的に配列されていることも明らかになった。

近世の遺構には井戸と粘土採掘坑があり、粘土採掘坑は調査区の広い範囲に見られ、その形状から2期に分かれる。

駅前町遺跡

弥生時代後期～古墳時代中期の自然流路と古墳時代中期の溝2条が検出された。また、近世の遺構としては、条里ライン（N21°W）の鋤溝を若干検出しており、当地が畑地として利用されていたという隣接調査を裏付ける内容となった。

兵庫県文化財調査報告　第507冊

姫路市

豆腐町遺跡Ⅲ・駅前町遺跡

― 姫路駅周辺地区総合整備事業（キャスティ21）に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

平成31（2019）年3月25日　発行

編　集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
（兵庫県立考古博物館内）
発　行：兵庫県教育委員会
〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目10番１号
印　刷：株式会社　北星社
〒668-0061　兵庫県豊岡市上佐野1620